

「講師が優秀ですから」
毎度サンキュー。簪。

「それがどうしたんですか？」

「そのシステムがボーデヴィツヒのISに積まれていた」

「それが発動し、このような状態に……」

俺はいまだ起きないボーデヴィツヒに視線を向けた。

「ああ。私はこの後、ドイツ軍に問い合わせるつもりだ」

「そうですか……」

「ボーデヴィツヒが起きたら、話し相手にでもなつてやれ」

「分かりました」

「それから、ボーデヴィツヒに一つだけ訊いて欲しいことがある。
後の報告はいらん」

織斑先生の伝言を聞いた俺。その後すぐに、織斑先生は保健室から出てった。

「う、あ……」

手を医師に診てもらい、結果はヒビが入っていたみたいで全治二週間。医師が出てって間もなく、ボーデヴィツヒが目覚ました。

「やっと起きたか」

「此处、は……？」

随分と弱々しい声だった。相当疲れたのか、怪我をしたのだろうか。
多分後者だ。

「保健室だ。あ、全身に無理な負担が掛かったことで、筋肉疲労と打撲が有るから暫く動けないって医師が言ってたぞ」

「そうか……。それで、何故貴様が居る？」

お、口調が元に戻ってきてるのみたいだ。

「怪我人が保健室に居るのは当たり前だろう」

そう言つて、ボーデヴィツヒに手を見せた？

「随分とぐるぐる巻きたな」

「全治二週間だつてよ」

「貴様、私との試合で殆ど攻撃なんて受けてないだろ。それに、ISを装備していて何故そのような怪我をしたんだ？」

「ISが原因じゃねえよ。お前との試合後、自分を責めてたんだよ」
「何だ、貴様はマゾなのか？」

「ちげえよっ！」

俺にそんな性癖はない！

「まあ俺のことなんてどうでも良い。お前の方が重傷だしな」

「一体、何があつたんだ……？」

ボーデヴィツヒがシーツを握り締めた。

「VTシステムを知ってるか？」

「ああ。……正式名称は――」

ボーデヴィツヒはスラとVTシステムについて説明していた。やっぱり代表候補生は凄いな。しっかり覚えてんだから。

「そのVTシステムがお前の機体に積まれてたんだ。因みに、VTシステムの発動条件は操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして操縦者の願望だ……。今織斑先生がドイツ軍に問い合わせてる。もしかしたら近くに委員会が強制捜査に入るだろうな」

「私が……望んだからだな。教官になることを……」

ボーデヴィツヒの視線は外に向いていた。

今、訊くべきだな。

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「……何だ？」

「お前は、誰なんだ？」

「わ、私は……。私……は、……」

「誰でもないんなら、ちょうど良いや。お前はこれから、ラウラ・ボーデヴィツヒだ。織斑一夏の前ではただの十五歳の女子、ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「あ……」

頬を赤く染めたボーデヴィツヒ。これと、もう一つ言うことがあったな。

「最後に、織斑先生から伝言だ」

「な、何だ？」

「『お前は私にはなれないぞ。アイツの姉は、こう見えて心労が絶えないのさ』。だって」

俺はベッドから離れ、保健室を出ようとした。

「三年間はこの学園に在籍しなきゃいけないから時間なら山のように有る。せいぜい楽しもうぜ、ボーデヴィツヒ」

俺は最後の一言を言い終え、保健室から出た。

Episode・32（後書き）

千冬さん。場所を取ってすみませんm（――）m

文、キャラの指摘、質問、感想などお待ちしております

Episode・33

保健室から部屋に戻る途中、一年寮の前で山田先生に出くわした。
「あ、櫻井くん。大会惜しかったですね。もう少しでボーデヴィツヒさんたちに勝てる所でしたのに……」

山田先生が俺を見つけたと同時に駆け寄ってきた。取り敢えず、走らないでください。その豊満な胸が揺れて目のやり場に困ります。
「ありがとうございます」

なんとか胸を凝視しないように山田先生の目を見た。

「準決勝まで勝ち上がったからお疲れでしょう？」

「まあ、かなり疲れましたね」

「湯舟に浸かって休みたいでしょう？」

「そうですね。……て、まさか……？」

「そのまさかです。今日から男子の大浴場が解禁です！」

「マジすかっ!？」

「はい。えらくマジです」

やっと湯舟に浸かれる時が来たか。今までシャワーオンリーだったからちよつと物足りなかつたんだよな。

「櫻井くんは先に大浴場の前で待っていてください。私は織斑くんとデユノアくんに声を掛けに行きますので」

「分かりましたー!」

山田先生は寮に入った。

早く部屋に戻って着替えを取りに行かなくては。
というわけで俺も寮に入った。

「……………」

……………何じゃこりゃ!?

殆どの女子が落ち込んでやがる。

「織斑くんたち、強すぎ……………」

「櫻井くん、速過ぎ……………」

「勝てるわけないじゃん……」

『『『……うわああああんっ！』』』

一斉に泣き出しやがった。

「『『『俊！』』』」

「へっ？」

瑞穂、ローラ、マーシャル、明音の四人が近づいてきた。

「組む相手って、簪だったの？」

「貴様、同じクラスなら私でも良かっただろ？」

「クラス代表同士で組めば優勝出来たのに……」

「俊、アイドルと組むのがそんなに嫌？」

明音、言ってる意味が分からん。

「と、取り敢えず落ち着けよ。な……？」

「『『『これが落ち着いてられるか！』』』」

「うわああっ！？」

こいつらにしては珍しく息が合ったな。

「優勝してれば、俊と付き合えたのに……」

「これ以上に悔しいことはないだろう……」

「デートとかして俊くんの好感度上げたかったのに……」

「俊と行きたいところが有ったのに……」

瑞穂、ローラ、マーシャル、明音が何やらぶつぶつと小声で呟き

はじめた。

「取り敢えず疲れたから、また今度な……」

こいつらの意識が俺から逸れた隙にこっそりその場を去った。

女子の考えることは分かんねえな。

「さて、着替えて着替え……」

部屋に戻った俺は訳の分からないことを言っていた。久々の湯舟だからきつとテンションも上がってるんだろう。

「はい」

「サンキュー」

姉貴から着替えを受け取った。

さて、早速大浴場に……………って。

「何で居るんだよ？」

「気分転換よ」

使っていない方のベッドでゴロゴロし始めた姉貴。今度は、かりんとう饅頭を頬張りながらマンガを読んでいた。

スカートの中から見える純白の下着が目に入ってしまった。しかし下着で興奮してしまう程俺は純粹じゃないのだ。

「毎回思うんだが、鍵を掛けた筈なのに何で居るんだ？」

シャワールームに入って、バスタオルを取り出した。

「会長権限で合い鍵を作ったのだ」

ジャラジャラと金属同士がぶつかり合う音が聞こえた。

「はあ…………」

此処で抵抗してもどうせ勝てない。俺の勘がそう告げている。

「これから大浴場に行くから出ててくれるか？」

「ちよつと待つて。もうすぐで清●が生き返るから」

読んでたのはガッ●ユか。

「速くしてくれよ。湯舟に浸かりたいんだから」

「だったら私と入る？」

出た。姉貴の冗談。此処で俺が恥ずかしがって断ったらからかうこと間違いない。だから俺はその裏をかいいた。

「別に良いぜ」

姉貴だってこういう反応に絶対戸惑うだろ。勝った……………今回は俺が勝った！

「じゃあ早速、シャワールームへゴー」

姉貴は俺をシャワールームに押し入れた。

こっから脱ぐんだろうが姉貴だって一人の女。恥ずかしがって途中で止めるだろうしみだりに服なんて脱ぐわけがない。

そう願いたかったが…………。

姉貴は躊躇いもせず上着を脱いで、ワイシャツ姿となった。

「……………っ！」

堪える……堪えるんだ、俺。

お構いなくワイシャツを脱いだ姉貴。ついに純白の下着が姿を現した。その下着に包まれた丰满な胸が窮屈そうだ。

姉貴が後ろに手を回し下着のホックを外そうとした――

「やっぱり大浴場に行くから出る時部屋の鍵を掛けといってくれっ！」
上半身裸でバスタオルと着替え、部屋の鍵を持って全力で部屋を出た。

負けた……俺の完敗だ……。

「さっさと行く――」

『『『きゃあああああああつ！！』』』

女子が突然叫びだした。

どうしたんだ？ 俺は周りを確認した。

ラフな格好の女子たちと、上半身裸の俺……。

「すみませんでしたっ！」

ダッシュで大浴場に向かった。

「はあ……はあ……はあ……」

なんとか到着。たく、何でも負の連鎖が――

「さささ、櫻井くんっ!？」

――続くんだよ……。

大浴場の出入り口前で顔を真っ赤にした山田先生が居た。

「どど、どうして上半身ははは裸でハアハアしてるんですか!？」

どうしよう。何を言っても駄目な気がする。

「いやあ……そのお……ですなあ……」

必死に言い訳を考える俺。考えろ、きっと答えは有るはずだ。

「……………」

あれ？ 山田先生がボーっとし始めた。言い訳できないかもしれ
ないが、これはチャンスだ。

俺はそーと大浴場に侵入した。

「ふう……………」

これで一安――

「しゅ、俊っ!？」

——心……。

脱衣所には、一糸まとわぬ姿のシャルロットが居た。

Episode・33（後書き）

多分次で二巻終了だと思います

そして、いよいよ三巻の内容に

一応頭の中で話はまとまっています

問題は……水着だ……

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Episode・34

一系まとわぬ姿をしたシャルロットはポカーンとしていた。
上半身裸の俺もポカーンとしていて、どう対処しようか考えていた。

「……………はっ!」

俺はすぐに百八十度回って、後ろを向いた。

「しゃ、シャルロットは、なっ、何で、そんな格好を?」

風呂に入るからに決まってるだろ!

自分で言って自分でつつこむなんて…………それはかなり寂しいことだ。

「そっ、そりゃ勿論、お、お風呂に入るからだよ…………」
ですよねー。

「そっ、そういう俊も、何でそんな格好なの?」
やっぱり訊きますか…………。しかし此处は大浴場。導き出せる答えはいくらでも有る筈。

「お、俺も、風呂に入ろうかと思ったからさ」

「上半身裸のまま此处まで来たの?」

「ああ。マジで楽しみだったからな!」

駄目だ。ただの変態だ。

「そ、そっだったんだ…………」

「……………」

そっからしばしの沈黙。

「で、でも…………お前が入るなら、シャワーにするか。たぶん一夏も
そうしてるだろうし」

「う、うん。そうしてくれると、嬉しいな…………」

「じゃ、じゃあな」

仕方なく着替えの上着を着て大浴場を出ようとした。

「ま、待って」

シャルロットに止められた。

「何だ？」

「ぼ、僕ね……此処に残ろうと思うんだ」

「そうか……それは良かった。お前が居なくなったら寂しいからな」
「な、何で？」

「仲間が一人でも居なくなったら寂しくなるのは当たり前だろ。お前が居なくなったら誰だって悲しいさ」

「そうなんだ……」

「まだ卒業まで長い。目一杯学園生活を楽しもうぜ、シャルロット」
大浴場を出た。

「あれ、櫻井くん。お風呂はどうしたんですか？」

「よくよく考えたら、俺怪我してるんで入るの辞めました。今日は部屋のシャワーで我慢します」

そう言つて大浴場から離れた。

カラカラカラ……。

俺こと、織斑一夏はドアの開く音が聞こえたので半ば沈みかけた顔を上げ、ドアの方に向いた。恐らく俊が来たのだらう。

「遅かったな、しゅ——」

「お、お邪魔します……」

「！？」

そこに居たのは俊ではなく、一糸まとわぬ姿のシャルルが居た。その体には当然タオルを当てているが、所詮薄手のスポーツタオル。その向こう側の肌色がうつすらと見える。

「な、何故だ！？ 何故シャルルが入ってきたんだ！？」

「な、なっ、なあっ！？」

「……あ、あんまり見ないで。一夏のえっち……」

「す、すまん！」

俺は回れ右をして後ろを向いた。

「ど、ど、どうした？ どうして此処に？ いや確かに俺も入浴を勧めたけど、それは俺が入らない場合であってだな——何故にどうしてやって来たよシャルルさん？」

その間シャルルが湯船に入る音がした。

「ぼ、僕が一緒だと、イヤ……？」

「いやけしてそういうわけではないが！」

反論すべく後ろを向いてシャルルを見てしまった。シャルルはスポーツタオルで前を隠したまま入っていた。

「やっぱり、その、お風呂に入ってみようかなって。——め、迷惑なら上がるよ？」

「い、いやいや、上がるなら俺が上がる。もう堪能したし、それに——」

頭に乗せていたタオルで前を隠し俺は湯船から出ようとした。

「ま、待って！」

湯船から出る寸前、シャルルに呼び止められた。

「そ、その、話があるんだ。大事なことから、一夏にも聞いて欲しい……」

「わ、分かった……」

仕方なく俺は再び湯船に浸かった。俺はシャルルと背中合わせで入った。

「その……前に言っていたこと、なんだけど」

「前って言う……もしかして、学園に残るって話か？」

「そ、そう、それ。僕ね、此処に居ようと思う。僕はまだ此処だっ
て思える居場所を見つけれてないし、それに……」

「そ、それに？」

「一夏たちが、此処に居ろって言うてくれたから。そんな一夏たちが居るから、僕は此処に居たいと思えるんだよ」

次の瞬間、俺の背中にシャルルの手が触り、そのまま手を俺の後ろから抱き締める。背中に華奢な体が密着して、俺は口から心臓が

飛び出しそうなくらいに跳ね上がりそうだったが、なんとかこらえた。

「そ、そうか……」

「それに、ね。もう一つ決めたんだ」

「もう一つ……？」

「そう。僕のあり方。一夏が教えてくれたんだよ？」

「そ、そうだったか？」

「そうだよ。ふふつ、一夏って自分に関することは何処までも鈍感だね。憎たらしいくらい」

「そ、それは……すまん」

「良いよ。許してあげる。ただし、僕のことはこれからシャルロットって呼んでくれる？ 二人きりの時か、俊と一緒にの時だけで良いから」

「そいや、俊がお前のことをそう呼んでたな。それが本当の……？」

「そう、僕の名前。お母さんがくれた、本当の名前」

「分かった——シャルロット」

「ん」

そのままシャルル——もといシャルロットはギュッと強く体を押し付けてきた。

「そいやシャルロットは？」

翌日の朝。俺は一夏と登校して、シャルロットが居ないことに気づいたので一夏に訊いた。

「先に行っててって言われたきり会ってねえよ」

「そうか……」

一組前で分かれた俺は四組に向かった。

「おはよー」

教室に入り皆に挨拶した。

「お、おはよ。櫻井くん……」

「お、おはよ……」

「おはよ……はぁ……」

なんだこの空気？

「皆さ〜ん。席についてくださ〜い」

小川先生のまったりとした言葉に従った俺たちは席に着いた。

「え〜。今日の連絡ですが――」

ズドドドオンツ！

急に大きな音がした。

「な、何々！？」

「何の音！？」

「一組から聞こえたわよ！」

皆教室を出てった。その流れに乗った俺も外に出た。

廊下には――特に一組前にはすでにギャラリーが居て、特に目立
ったのが『甲龍』を展開してた鳳だった。

一体何があった――

「……………」

『……………』

俺を含めた全員がその場面を見て唖然としていた。

一夏が『シュヴァルツェア・レーゲン』を展開しているボーデヴ
イツヒとキスしていた。

「お、お前は私の嫁にする！ 決定事項だ！ 異論は認めん！」

嫁？ 婿の間違いじゃないのか？

「……嫁？ 婿じゃなくて？」

一夏も俺と同じ疑問を抱いていたみたいだ。

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わ
しだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

「あ、あつ、あ……！」

鳳が口をパクパクさせていた。

「アンタねえええっ！！！」

ジャキン！ 次の瞬間、キレた鳳は衝撃砲を開いた。

「待て！ 俺は悪くない！ どちらかと言うと被害者サイドだ！」

「アンタが悪いに決まってるでしょうが！ 全部！ 絶対！ アンタが悪い！！！」

そうだぞ一夏。例え女子からせまってこようと今この時代、全部男子が悪いことになるんだぞ。

ビシュンッ——！

一夏の鼻先をレーザーがかすめた。

「一夏さん？ 何処かにお出かけですか？ 実はどうしてもお話しなくてはならないことが有りました。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほ……」

ゆらりと立ちあがったオルコットが握り締めていたのは《スターライトmk?》。背中にはビットが形成され、ISアーマーが全身を包み込んだ。

それを見た一夏は窓に向かった。廊下からの脱出を諦めたか。ダンッ！

それを阻止したのは日本刀を突き立てた篠ノ之だった。

「一夏、貴様どういふつもりか説明してもらおうか？」

「待て待て待て！ 説明を求めたいのは俺の方で——おわあっ！」

篠ノ之の鋭い斬撃を躲した一夏。あれ、真剣じゃないよな？

「ほへ？」

誰かとぶつかったらしい一夏はそんな声をだした。

「……………」

一夏の目線の先に居たのは、女子制服を着ていたシャルロットだった。

「にこっ」

「に、にこっ」

シャルロットの笑顔を見た一夏は笑顔を返した。

「一夏って他の女の子の前でキスしちゃうんだね。僕、びっくりしたな」

なるほど。あの笑顔は天使の笑顔ではなく悪魔の笑顔だったか。

「あのー……シャルロット？ 俺はされたんであって、したわけではないし、そして何故ISを起動させているのか」

「なんでだろうね」

「は、はは、ははは……」

ドガアアアアンツ！！

すごい轟音と爆音がした。

「さらば一夏。安らかに眠れ……」

俺は右手を握り締め左胸に当てた。

「俊、貴様が言える立場ではないぞ」

急に右肩に手を置かれた。恐る恐る隣を見るとローラが居た。

「昨日は男子の大浴場の日……」

真後ろからマーシャルの声が聞こえた。

「まさか……一緒に入ったとか？」

目の前には瑞穂が。

「へえ……そうなんだ……」

病んだ目をした明音がその隣に。

「……………」

いつの間にか俺の左隣に居た簪が俺を睨んでいた。

「は、はは、ははは……」

隙が開いているのは左斜め後ろ。大丈夫。此处は廊下だ。一夏の時とは違って逃げ道がたくさん有る。

ダッ！ すぐに走り去った。

後ろから何かを叫びながら追いかけてくる五人。必死に逃げたので何て叫んでいたのか分からなかった。

その日の朝は、織斑先生に捕まるまで校内を走り回っていた。

あと後気付いた。此处は「怪我をしていたから大浴場には行かず部屋のシャワールームで我慢した」と言っておけば良かったと。

「むーん……」

そこは奇妙な部屋であつた。

部屋の至る所には機械の備品が散りばめられ、ケーブルが樹海のように広がっている。

その金属の根を歩くのは、機械仕掛けのリスだ。時折床に転がっているボルトを、ドングリよろしくかじっている。

カリカリカリカリ……と響くその音は、一般的に使われていた磁気式記憶装置の書き込み音に良く似ていた。

不要な部品を識別、その抗生物質を分析して吸収、別の形状へと再構成するリスなど、世界中を探しても此処にしか居ない。

そう、此処は——篠ノ之束、その秘密ラボである。

「おー、おー」

ちきり、ちきり……。

ちきちきちきち……。

「お……」

篠ノ之束、その姿はこれまた異色そのものであつた。

空のように真つ青なブルーのワンピース。それはさながら童話『不思議の国のアリス』のアリスである。エプロンと背中のかなりボンが目を引く。

顔立ちは、やはり筈の実姉ということ似通っている。ただし、大きくかけ離れているのは、筈は剣術鍛錬から来る厳しくも凜々しいツリ目なのに対して、束は寝不足からくる不健康に淀んだツリ目である。その目の下には、もう何年もずっとクマがついたままだ。

曰く、『天才は思考から解放されない』ということらしい。夢の中はそれまでの理論を試行する場であり、安らぎのある眠りはもうずっと経験がない。眠りというのがはたして本来どのようなものであつたか、それすら束は思い出せない。

妹と違い剣術はおろか殆どスポーツなどしない、したこともない束であるが、その体はすらっと伸び、均等が取れたしなやかな曲線

を描いている。

そして何より目立つのが、その豊満な胸の膨らみであった。サイズが合っていないのか、バストを留めるボタンはギリギリまで引つ張られ、その白いブラウスの隙間からは妖艶な大人の肌色が覗いている。

それに加えて頭のカチューシャも問題と言えば問題だろう。なにせ、それには白ウサギの耳が付いている。言うなれば一人『不思議の国のアリス』状態だ。

アルスも白ウサギも同居している、そのミスマツチな格好。しかしそれこそが束の趣味であり、また好きな格好である。先月は一人『ヘンゼルとグレーテル』だった。意味不明な格好であったことは言うまでもない。

そしてそんな束は、奇妙は椅子の中に居た。

椅子の中に居るの——という表現は奇天烈きまわりないが、現にそうとしか言いようがないので仕方がない。

シルバーの輝きを放つ、銀色の椅子。それはぐにやりと大きく歪んで広がり、束の体をさながら檻のように取り囲んでいた。その見た目は、まるで恐竜の骨格に見えなくもない。

そして束が指先を動かす度に、繋がれた意図が作動してカラクリを動かす。

ちきり、ちきり……。

ちきちきちきちき……。

指先の僅かな動きは椅子の各パーツをまるで生きているかのように働かせ、その先の小さなハンドツールへと伝わる。動きを受け取ったハンドツールはすぐさまピンセットで何やら小さなパーツを組み合わせ始めた。

それはさらなる小さな椅子、そしてハンドパーツへと繋がっている。

それが十数回繰り返されて、やっと動作が終わりへとたどり着く。そこでは、ナノ単位のISのプラモデルが組み立てられていた。

異常なまでの無駄。そして、馬鹿馬鹿しいほどぶっ飛んだ——
『暇潰し』であった。

「あー、終わっちゃった」

出来てしまった。それも塗装から表面保護、磨きだしと完璧である。束はつまらなそうに言って、椅子から出た。

がっちりと組み合って、全く外れる様子のない椅子だったが、束がある一部を触っただけで一瞬にして瓦礫、がらくたの山へと変わった。

「んー……、暇、暇あ」

ぱらりるぱらりるぺろっ」

ゴッド・ファーザーのテーマが流れる。新世紀を迎えてもヤンキー御用達の名曲である。しかし悠極東の地でこのような愛され方をしているとは、作曲家も流石に思っまい。

知って、喜ぶのか嘆くのか、そこを正直に見てみたい気がする。

「こ、この着信音はあ！ トウッ！」

大ジャンプ。もとい、ケータイにダイブである。ガッシャーんとマグカップにツールキットが激しく散らばるが、束にとってはどうでもいい。すぐさまケータイを耳に当てる。

「も、もすもす？ 終日？^{ひねもす}」

『……………』

ぶつつ。——切れた。二重の意味で。

「わー、待つて待つて！」

束の願いが通じたのかはたまた神様の悪戯か、ケータイは再度なり始めた。ぱらりるぱらりるぺろっ」

「はい、皆のアイドル・篠ノ之東此处に——待つて待つてえ！
ちーちゃん！」

『その名で呼ぶな』

「おっけい、ちーちゃん！」

『……はあ。まあ良い。今日は聞きたいことが有る』

「何かしらん？」

『お前は今回の件に一枚噛んでいるのか？』

「今回、今回——はて？」

束は首をひねる。とぼけているのではなく、本当に分からない。

『VTシステムだ』

「ああ。あれ？ うふふ、ちーちゃん。あんな不細工なシロモノ、この私が作ると思うかな？ 私は完璧にして十全な篠ノ之束だよ？ 即ち、作るものも完璧において十全でなければ意味がない」

『……………』

「ていうか、忘れていたけど、つい二時間程前にあれを作った研究所はもう地上から消えてもらったよ。……ああ、言わなくても分かってると思うけど、死亡者はゼロね。赤子の手をひねるより簡単——ていうかちーちゃん、赤子の手をひねるって結構大変じゃない？ 私だけ？ あれ、可笑しいな？」

うふふふ、と笑いを付け加えて、束はつらつらと話す言葉を一度区切る。

『そうか。では、邪魔したな』

「いやいや、邪魔だなんてとんでもない。私の時間はちーちゃんの為なら何時でも何処でも二十四時間フルオープン、コンビ二なんか目じゃないね。五十六十喜んで！」

『……では、またな』

ぶつつと電話が切れる。今度はもう一度掛かってくるということもない。束は名残惜しそうに一度ケータイを眺めたが、二秒後にはけるつとしてそれを放り出した。

「やあ、久しぶりに声を聞けて束さんうれしかったねえ。ちーちゃんは相変わらず素敵ングだよ。夕日の向こうには行かないでね」腕を組んで頷きながら、うふふふと笑みを添える。

織斑千冬と篠ノ之束。その出会いは小学生の頃から始まる。以来ずっと同じ学校同じクラス。勿論それは束がそうなるようにしていたからで、それは千冬も知っていた。

しかし、二人の関係はそれだけではない。

千冬が高校生の時にISが発表され、以降数年間千冬はIS開発に操縦者として協力していた。

つまり、千冬は元々知識ベースからして他の操縦者より一枚も二枚も上手、その理解のそのレベルがハナから違うのだ。

その上あれだけの訓練と独自の戦術。IS世界大会『モンド・グロツソ』で第一回優勝者に輝いたのは不思議でもなんでもない。当然の結果である。——少なくとも束はそう思っている。

「しかし、ちーちゃんは何で引退したんだろーね」

それが未だに分からない。年齢からしても実力からしても、今すぐ現役に戻っても第一線で通用するだろう。それどころか、早速次のモンド・グロツソの優勝候補になるのは間違いない。

けれど、人の心は複雑怪奇にして摩訶不思議。天才の頭脳を持つとしても、その深さの全てを知ることとは出来ない。

——だからこそ、知りたいと思う。世界で四人だけの束の興味の対象なのだから。

ちゃららら♪ ちゃららら♪ あんたら全員、覚悟しいや。バキ
ユーンバキユーン！ ぐあああつ！ ああつ、兄貴つ兄貴い” お
っだらあ、タマあつつたらんかあ！

突然のケータイの着信——しかし、もの凄い着信音である。『極
●の妻たち』の劇中会話を含めた部分までも着信音に設定してい
るのは、全国百万人のファンの中でも束くらいのもだろう。因み
にファンの人数は推定である為、実際の数字とは異なります。ご注
意下さい。ついでに言う束は別にと作品のファンではない——に、
千冬の時以上の反応を見せる束。

折れたウサ耳までもがビーンと真っ直ぐに立ち、その反応の大き
さを雄弁に物語っていた。なにせこの電話が鳴るのは、初めてなの
だ。相手は出る前から分かっている。

「やあやあやあ！ 久しぶりだねえ！ ずっとずーーっ」と待つ

てたよ！」

「……。姉さん」

「うんうん。用件は分かっているよ。欲しいんだよね？ 君だけの
オンリーワン、代用無きもの、オルタナティブ・ゼロ 第の専用機が。モチロン用意してあ
るよ。ハイエンド 最高性能にして規格外仕様。オーバースペック そして、白と並び立つもの。そ
の機体の名前は

『紅椿』——」

Episode・34（後書き）

今回で二巻の内容は終了です

前に言った通り、今回は閑話なしですぐ三巻に移ります

文中で束の興味対象の人数が違いますが、これは間違いではありません

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Episode・35

朝っぱら。俺は先日、織斑先生から校庭でのISの使用許可をもらったのでISを展開し、PICと補助動作無しで校庭を一周した後、寮と校舎を繋ぐ約八百メートルの一本道をメジャーでキツチリ百メートル計り、生身で百メートルダッシュをしていた。この時間なら人なんてあまり通らないから迷惑にならない。

中学の時毎朝部活の朝練をしていたからすっかり習慣になってしまった。ただ、中学の時と違うのがISを使つての五キロランニングだ。PICと補助動作無しでのランニングは良い体力作りになっている。

練習を終えた俺は部屋に戻りシャワーを浴び、夏用制服に着替え、一年寮食堂に向かった。

見た目は前まで着ていた冬用制服に見えるがしつかりとした夏用だ。

んー。今日の朝飯は何にしよう？

『チエストオオオオオオ！！！！！！』

朝食を考えていると、一夏の部屋から篠ノ之の叫び声がしたが、むやみやたら無闇矢鱈に入らないようにしよう。きっとボーデヴィツヒの裸を拝んでしまつたろう。

何故知ってるかは、以前一夏と風呂に入りボーデヴィツヒのことで相談が有ると言った直後、ボーデヴィツヒが山田先生の監視を抜け、入って来たからだ。その時俺はボーデヴィツヒに問答無用で追い出された。

嫌な記憶を掘り起こしてる間に食堂に着いた。……よし、今日は焼き魚定食にしよう。

食券を手に入れ、食堂のおばちゃんに渡した。商品がすぐに出て来てお盆を受け取った俺は席を探していた。探していると明音とマーシャルがテーブル席に座っていた。

「この席良いか？」

「おはようございます、俊くん。隣にどうぞ」

「いやいや、私の隣に！」

明音とマーシャルによる、俺が何処に座るかの討論が始まった。

「明音、どいてくれ。俺がお前らの間に座るから」

がみがみうるさかったので、俺が溜息混じりに答えを出した。

テーブル席は、テーブルが円の形をしているし、それを囲むように椅子も円になっている。

「そ、それもそうですね……」

「た、確かに……」

明音が一回席を離れ、俺が座った後明音も座った。

明音とマーシャルは似たような朝食で、トースト二枚と付属のジャムとマーガリン。サラダが一皿と飲み物というメニューだ。違うのが苺ジャムかブルーベリージャムかってのと紅茶かミルクティーかだ。苺ジャムと紅茶が明音で、ブルーベリージャムとミルクティーがマーシャルだ。

「お前たちって、そんな少ない量で半日もつのか？」

「女性は男性と消化量がちがうの」

そう言った明音は紅茶を飲んだ。

「そんなもんか」

俺は焼き魚の鮭を食った。

「訊きますが、俊くんは何故そんなに食べられるんですか？」

マーシャルがトーストにジャムを塗って食べていた。

「朝に走り込んでるからどうしても腹が減るんだよ」

ご飯を掻き込んで、麦茶を飲んだ。

「走り込み？」

「中学の時陸上部で毎朝練習してたからさ、習慣になったのか毎日

やらないと落ち着かなくなてな……」

明音の質問に答えた後、みそ汁を飲んだ。今日の具は豆腐と油揚げか。

「ごちそうさん」

「「はやっ!？」」

ほぼ二人と同じくらいに朝食を終えた。

さて、教室に行くか。

席を離れ、返却口に食器を置いて出ようとしたら見慣れた人たちに出くわした。

「一夏。今頃飯か？」

「ま、まあな……」

一夏の両隣には篠ノ之とボーデヴィツヒが居た。

「早くしないと遅刻しちまうぜ」

「分かってる……」

一夏は販売機に向かった。……お気の毒に。

あらかじめバッグを持って来ていたから部屋に戻る必要もないので、すぐに寮を出ようとした。

「ちっ、遅刻……遅刻する……!」

向こう側から慌てて走って来るシャルロットに出くわした。

「シャルロット、急がないと遅刻しちゃうぜー」

「わっ、分かってるよー!」

走りながら受け答えをしたシャルロット。あいつが寝坊なんて珍しいな、何時も俺が食堂に入った時には半分くらい食事が終わっているのに。

ま、いつか。

寮を出て校舎に向かった。

「えゝ。来週から校外特別実習期間ですので皆さん忘れ物などしな

いようにしてください。期間は三日間。自由時間では羽目を外しすぎないようにしてください」

小川先生のまったりとした口調にもすっかり慣れてしまった今日の頃。

小川先生の言ってる校外特別実習期間のことだが、即ち臨海学校だ。三日間の日程のうち、初日は丸々自由時間。勿論そこは海。咲き乱れる十代女子は、先週からテンションが上がりっぱなしだ。

普通女子だけだったらそこまで気合いを入れないと思うが、今年は異例の男子が二人も入学したんだ。そりゃ気合いも入るだろう。そいや海なんて小五以来だな。今週末に水着でも買いに行くか。

「それでは皆さん、期末試験に向けて頑張ってください」

ショートホームルーム

SHRが終わり小川先生は教室を出て、教材を取りに行った。

IS学園には中間試験はない。ISの勉強プラス普通の高校生の勉強の二つを行わなくてはならないので試験は年に三回しかない。

そのことで弘樹が羨ましがっていたが、正直難しい。

授業数自体は少ないが四ヶ月前に習ったことを掘り起こさなくてはいけないので、どちらかと言えば中間・期末の二回の方が楽だと俺は思う。

因みに、赤点を取ってしまったら夏休みに連日補習が有るのでそれだけは避けたい。

俺は机の中から化学の教科書とノートを取り出した。

Episode・35（後書き）

前回と比べればかなり短いが、このくらいが自分としてはちょうど良いと思うんです

そいや、前の文を読み返したらかなりの誤字が…… orz
いくつか直しましたがまだ見つけてない部分があるかも……

それと、ISのOVAの初回特典の内容が変わってちょっとがっかりしました

弓弦先生、やっぱり体調が優れないのかな？
新刊の情報もないし……

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Episode・36

午前の授業が終了し、更識簪は櫻井俊と食堂で昼食を取っていた。簪のメニューは冷し中華。俊は炒飯と、両者とも中華料理を食していた。

食べてる最中、俊と簪はアニメ・特撮の話で盛り上がっていた。

（どうしようかな……）

会話の最中、簪は悩んでいた。

何で悩んでいたかと言うと、臨海学校に行くかどうかを悩んでいた。

日本の代表候補生で専用機持ちの簪。しかし簪の専用機『打鉄式』の製造場所である倉持技研で世界初のISが動かせる男性、織斑一夏の専用機『白式』の製造依頼を受けた倉持技研の人たちは全員白式の方に回され、打鉄式式の完成が先送りされた。

以来、簪は一人で打鉄式式を作っている。

他の人たちに頼んで一緒に作れば良いのだがそうはいかない。姉の更識楯無だつて一人で自身の専用機『ミステリアス・レイディ』を一人で作り上げた。偉大である姉に追い付くにはこれくらいしないと影すら踏めないと思っている。

前は五割くらい完成していた打鉄式式だったが先日行われた学年別トーナメントに無理して参加した簪。その試合中に接触不良で打鉄式式は動かなくなり敵のラウラ・ボーデヴィツヒの的になってしまい、打鉄式式は大破。また一から作り直している。

前とは違って、今回は簪の専属メイドをしている布仏本音に手伝ってもらっているため前よりは作業のスピードが上がっている。

未だ完成していない専用機。一応専用機持ちの部類に入っている簪だが、持っていないことの恥ずかしさにより今回の臨海学校に行かないと考えている簪。

しかし、簪にも気になる人が居る。それが一緒に食事をしている

俊だ。俊と一緒に臨海学校に行きたい簪。しかし専用機を持っていない恥ずかしさが有る。でも行きたい。でも恥ずかしい。その二つの思いの戦いが簪の頭の中で繰り広げられている。

「そいや簪」

会話が一段落ついたところで話を変えた俊。

「何……？」

「来週の臨海学校だけどさ、どうするんだ？」

「まだ考えてる……」

「そうか……。行くななら一緒に水着買いに行こうと思ったんだけどなあ」

「ぶっ……」

「お、おい！ 大丈夫か？」

一瞬噎せた簪を心配して背中を摩る俊。

「だ、大丈夫、夫……」

「本当か？」

心配していた俊だったが簪のことを信じ、自分の席に戻った。

（水着かぁ。行くななら買いに行かなくちゃな）

俊と同じく小五以来海に行っていない簪。学校のプールの授業でなら泳いだことは何度か有るがその時は学校指定の水着だった。

買いに行くならさっきの誘いをOKすれば良かったのだが、恥ずかしさに負けてしまった簪。

それから黙々と冷し中華の麺を啜っていた。

一日の授業が終了し、俺は寮に戻っていた。

何時もなら簪についてつていたが今は本音も居て専用機作りがはかどっている為、俺が居ては邪魔になるに違いない。だからたまにしか顔を出さないようにしている。

「えっと……来週の荷物は……」

念入りにチェックして気付いたのが、やっぱり水着がないことだ。
「しゃーない。日曜に買いに行こう」

バッグに着替えを詰め、部屋を出た。

時間はちょうど夕飯時。晩飯に納豆を加えよう。

「ふふ、ふふふ……」

シャルロットが超満面の笑みで寮内を歩いていた——と言うよりスキップに近いな。

「シャルロット、何か良いことでも有ったのか？」

「俊、実はね、ふふふ……」

よっぽど嬉しいことだったんだろう。

「まあ良いや。一緒に食事でもして話そうぜ」

「うん」

シャルロットと食堂に向かった。

「ほう。一夏が……」

「うん。そう言ってくれたんだ」

満面の笑みでシャルロットが言った。

あの一夏が……。風呂場で話した時「今は恋愛に興味はないとか」枯れたジジイみたいなこと言ってたのにな。

俺は納豆に卵と納豆に付いてたカラシとタレを掻き混ぜたものをご飯に掛けた。

シャルロットは箸の練習ということで和食に挑戦中だ。もう十分使いこなせてんじゃん。

「あんまり期待しない方が楽だぞ」

「一夏からなんて……ふふふ……」

駄目だ、聞いちゃいない。

「俊くん。隣良い？」

突然声を掛けられたので、声のする方に顔を向けた。声の主はマ

「シャルだった。」

「おう。良いぜ」

シャルロットが目の前に居るが今はかなり浮いてるから周りのことなんて気にしないだろう。

「マーシャルが隣に座った。」

「やっぱり夜もたくさん食べるんですね」

「まあな。寝る前に腹減っちゃうし」

「そいや、俊く——」

「じゃあね、俊」

「マーシャルの言葉を遮ったのはシャルロットだった。かなりふわふわした感じで席を立ち、食器を片付けに行った。期待した分の倍の絶望が来るな、ありや。」

「で、何だ？」

「あ、はい。今週の日曜は暇ですか？」

「水着買いに行くから暇じゃないな」

「それは良かったです。実は私も水着を買いに行こうと思ってたので、一緒してもよろしいですか？」

「別に良いぜ」

「マーシャルとの買い物が決まった。」

Episode・36（後書き）

ISD V D五巻の第九話の作画が改善されてテンションがめっちゃ上がってしまいました

後は六巻とイベントのDVDとOVAの三つ

早く発売日来ないかな……

そいやオリキャラの容姿ですが……

ローラ：けんぷファー『美嶋紅音（変身後）』

リリー：CLANNAD『藤林棕』

瑞穂：けいおん！『中野梓（髪形ツインテールからサイドポニーテールに変えた）』

明音：アイドルマスター『三浦あずさ（髪を切った後）』

のキャラを参考にしています

突然ですがオリキャラ四人にどんな水着が似合うかの案を読者の皆さんに出して欲しいんです

理由は、自分にはセンスがないと自覚してるからです

応募先は感想、もしくはユーザーメッセージの方をお願いします

一人でも多くの案をお待ちしております

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Episode・37

時間が過ぎ週末の日曜。

一夏とシャルロットは懸垂式モノレールに乗って街に向かっていった。

「はぁ……。酷い目に遭ったぜ……」

一夏は疲れた顔をして言った。

今朝も一夏のベッドに裸で侵入したラウラ。起きて早々一夏はラウラに十字固めをやられ、途中『朝稽古をするぞ』と言って剣道着を着て一夏の部屋に入って来た箒に惨劇を見られた。

その時のラウラが一言。

『不作法な奴だな。また夫婦の寝室に入って来るとは』

夫婦という単語に反応した箒。

箒は落とした竹刀を拾い上げ、一夏に天誅。

「あ、あのさ……。どうして僕のことを？」

モジモジしながら訊いたシャルロット。

「今度臨海学校が有るだろ。でもお前、水着持ってないって言うってただろ。俺も水着を買うから、ついでにと思つて」

「……………ついでに……………」

シャルロットのテンションが一気に水深二千メートルぐらいにまで下がった。

「まあ、どうせそんなところだろうと思っただけだね……………」

「うん？ 何か言ったか？ シャルル」

「シャルロット！ 二人きりの時はそう呼んでって言ったでしょ！」

「ああ、そうだったな悪い、シャルロット」

二人きりの時、もしくは俊と一緒にの時に本当の名前を呼んで欲しいという約束をすっかり忘れていた一夏。

「乙女の純情を弄ぶ男は馬に蹴られて死ぬと良いよ！」

いろんな意味で怒ったシャルロットは一夏に向かって言った。

「な、何だよいきなり？　まあ、確かにそんなやつは死んだ方が良
いかもな」

「はあ……。一夏、鏡を見なよ」

（寝癖でもついてたかな？　そりゃ格好悪いな）

その純情を弄んでる男が自分だとは気付いていない一夏。

シャルロットは何故こんな男を好きになったか分からなくなつて
いた。

そんなこんなでショッピングモール『レゾナンス』内の駅に着い
た二人。

このショッピングモールは食べ物・欧・中・和を問わずに完備、
衣服も量販店から海外の一流ブランドまで網羅している。その他に
も各種レジャーはぬかりなく老若男女対応可能なショッピングモ
ールである。

「待てよ。何怒ってんだ？」

「はい！」

怒っていたシャルロットは一夏に手を差し出した。

「て、手を繋いでくれたら、許してあげる！」

「ああ、そんなことか。はい」

一夏はシャルロットの手を取った。

「知らない街ではぐれたりしたら、大変だもんな。しっかり掴まっ
てるんだぞ」

「唐変木……」

シャルロットは溜息交じりに言った。

「……ねえ」

「……何ですか？」

一夏とシャルロットがエスカレーターで降りている時、自動販売
機の陰に隠れてセシリアと鈴音が尾行していた。

「……あれって、手握ってない？」

「……握ってますわね」

二人の目はすっかり病んでいた。

「そつか。見間違いでも白昼夢でもなく、やっぱりそつか。――よし、殺そう！」

ISを部分展開した鈴音。その目には言葉通り殺意しかなかった。
「ほう、楽しそうだな」

「「!？」」

いきなり背後から声を掛けられ、驚いて振り返る二人。

そこに立っていたのは、忘れもしない先月セシリアと鈴音が敗北を喫した人物――ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

「なっ!？ あ、あんた何時の間に!」

「そう警戒するな。今のところ、お前たちに危害を加えるつもりはないぞ」

「し、信じられるものですか！ 再戦というのなら、受けて立ちますわよ!？」

二対一で負けたということがセシリアと鈴音の懐疑心を強くしていた。しかし、それに対してラウラはしれっと言葉を返した。

「あのことは、まあ許せ」

さらりとそう言われて、二人は一瞬何を言われたのか分からずに呆けてしまったが、すぐさま持ち直した。

「ゆ、許せつて、あんたねえ……!」

「はい、そうですかと言えるわけが……!」

「そつか。では私は一夏を追うので、これで失礼するでしょう」

そう言つて本当にすたすたと歩き始めたので、今度はセシリアと鈴音が慌てて止めた。

「ちよっ、ちよっお待ちなさいよ!」

「そ、そうですわ! 追つてどうしようといひますの!？」

「決まっているだろう。私も交ざる。それだけだ」

あっさりと言われて、逆に怯んでしまう二人。こうまでストレートに言われると、なんだかもう悔しいのか羨ましいのか分からない。

「ま、待ちなさい。待ちなさいよ。未知数の敵と戦うにはまず情報収集が先決。そうでしょう?」

「ふむ、一理あるな。ではどうする？」

「此処は追跡の後、二人の関係がどのような状態にあるのかを見極めるべきですわね」

「なるほどな。では、そうしよう」

かくして、何が何だか良く分からないうちに可笑しな追跡トリオが結成されたのであった。

「何やってんだ？ あいつら？」

一夏たちとは一本遅れて駅に降りた俊とリリー。俊は偶然三人の行動を見て呟いていた。物陰に隠れては一夏たちを観察し、その場を離れては違う場所の物陰に隠れて観察を繰り返していた。

「尾行でしょうか？」

「何を尾行してんだよ？ ま、いつか。早く行こうぜ、マーシャル」
「俊くん。前から疑問に思っていたんですが……」

「何だ？」

「どうして私のことをファーストネームで呼ばないんですか？」

「へ？」

「他の四人はファーストネームで呼んでるのに何で私だけ呼んでくれないんですか？」

「じゃあ、リリーって呼べばいいのか」

「ま、まあ……そうですけど……」

さらっとリリーの名前を呼んだ俊。此処にも一夏ほどの鈍感野郎が居た。

「早く行こうぜ、リリー」

「はあ……」

リリーは溜息をつきながら俊の手を掴んだ。

「どうしたんだ」

「べ、別に、なんでもありません」

「そうか。はぐれたら困るから掴んだのか。それならそうと言ってくれれば良かったのに」

「はあ……」

リリーは再び溜息をついた。

リリーの気持ちも知らずに俊はリリーの手を引いてショッピングモールの中を歩いた。

Episode・37（後書き）

夏休みもあと少しか……

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Episode・38

寮の近くの駅に向かう簪。

やっぱり臨海学校に行くことを決めた簪は、水着を買いに行こうと街に向かうところだった。

本当は俊と一緒にきたかった簪だったが、俊を呼びに部屋に行ったが生憎の留守。一人で行くことにした。

「あ……」

駅に向かう途中、簪は俊を発見した。

「しゅ……え……？」

声を掛けようとしたがあることに気付いた簪。俊の隣にリリーが居たのだ。

そのまま二人は駅構内に入った。

「どうした簪？」

後から声を掛けられ一瞬驚いた簪。振り返るとそこにはローラが居た。

「ローラ……」

「さっき駅に入ってたのは、俊とリリーか？」

簪とローラは二人の後を追い、その姿をはつきりと確認した。

「まさかの抜け駆けか……。面白い、尾行するか。行くよな、簪」

「え、ええ……」

「何やってんのよあんたら？」

冷静に振り返るローラ。そこには瑞穂が立っていた。

「瑞穂か。これから俊とリリーを尾行するところなんだが、一緒に行くか？」

「え？ 俊が……。部屋に居ないと思ってたらリリーと一緒に居たのね……」

「その様子だと私たちに付いてく気だな」

「当たり前よ」

「なら急ごう。俊たちが乗った車両の一つ後に乗るぞ」
ローラの指示に従い、懸垂型モノレールに乗った。
此処でも可笑しな追跡トリオが結成されたのだった。

「水着売場は確か此処だったな」

俺らはショッピングモールの二階に居た。

「じゃありりー。一旦此処でお別れだ」

男と女は売場が違うので、俺はりりーの手を離れた。

「あつ……」

何故かりりーは心残りが有るような声を漏らした。

「どうした？」

「い、いえ。何でもありません」

「じゃあ二、三十分後に此処で待ち合わせな」

「はい」

俺は水着を選んですぐに手に取った。

シンプルな黒色のトランクスタイルの水着だ。

所用時間五分未満。

さっきの場所に戻ったが当然りりーは居なかった。

辺りを見渡すと……居た。

「やっぱり女子は悩むんだな」

りりーに近づいて声を掛けた。

「あ、俊くん。もう終わったんですか？」

「ああ。男の水着なんて似たようなもんしかないからな」

水着を凝視するりりー。うつ……。今思ったが、早くこの場から去りたい。

「そこのあなた」

りりーが移動したので付いていくことに。

「聞いているの？」

再び水着を凝視するリリー。やっぱり選ぶ量が多過ぎるんだな。

急に肩に手を掛けられ、体の向きを変えられた。

「何か用ですか？」

目の前に二十代後半くらいのババアが居た。

「これ買ってきて」

完全にパシリじゃん。

「いや、俺金ないんで」

「私だつてないのよ。だから買ってきて」

無茶苦茶だろ。

こうなつたら無視が一番だ。

リリーと回つてる間、何度もババアの声が聞こえた。

リリーが選り終わつてもまだ居た。仕方がない……。

「あー、あんなところに世界で唯一男でISが使える織斑一夏が居るじゃないか」

適当に指差し適当に喋った。

「えっ！？ 何処何処？」

ババアは俺が指差した方に向いた。

「リリー。さつさと行くぞ」

リリーの手を掴んで、さつさとその場を去った。

「ん？ 一瞬俊の声が聞こえたような……」

「き、気のせいじゃない？」

水着売場の試着室に一夏とシャルロットと一緒に入っていた。

「す、すぐ着替えるから待ってて」

「えーと、それなら一回外に――」

「だ、ダメ！」

（いや、ダメって言われても……）

「だ、大丈夫。時間はかからないから」

「おわあっ!？」

言うなりシャルロットはいきなり上着を脱ぎ出し、一夏は慌ててシャルに背中を向けた。

(ううっ、勢いでこんなことしちゃったけど、どうしよう……)

シャルロットはワイシャツを脱ぐ寸前で止まっていた。

(何だ？ シャルは何がしたいんだ？ 分からん、全く分からん!?)

何故シャルロットがこんな大胆な行動に出たかというところ、追跡トリオの存在に気付いたからである。

全てのISには『コア・ネットワーク』と呼ばれる特殊な情報網で繋がっている。元々宇宙開発用のISには互いの位置を恒星間距離においても正確に把握する必要があったため、それぞれが互いの位置を認識しあえるという特徴があったのだ。

勿論、正確な位置座標を割り出すにはお互いの許可登録が必要なのだが、それがなくても大体の位置は分かるようになっていた。

しかし、そうしたコア・ネットワーク情報によって位置の特定を避ける場合、^{ステルス}潜伏モードというものを使用する。

事実、追跡トリオは三人が三人とも専用機を潜伏モードにしているのだが、シャルロットは逆にそれで分かったのだ。

『三人ともが潜伏モードで現在位置が分からない』、ということはつまり『分かられてたくない状況にある』ということ、『びこっている』と分かったわけである。流石に軍隊経験者であるラウラも居るので直接視認されるような愚を犯してはいないが、そもそも洞察力に優れたシャルロットにとってはこれくらいの推理は造作もない。

(ん……。三人とも諦めて帰ってくれないかなあ)

事情はどうであれ、今は一課と二人きりでの外出——つまり、デートである。一夏自身がどう思っているかはこの際置いておいて、シャルロットは心の底からそうだと主張したのであった。

流石は花萌ゆる十代少女の行動力。その影響は頭の中でも十二分

な活躍を見せている。

（で、でも、流石に同じ個室で着替えるのはやりすぎたかなあ……）
ぽつと顔を赤くしながら、背中越しに一夏の姿を確認する。向こうも大概対応に困っているようで、さつきから意味もなく天井の隅を眺めていた。

（ううっ……。へ、変な子だっと思ってわれてないよね……？）

いくらなんでも異性と同一個室で仕切り無く着替えているのである。しかも一度完全に裸になってるのだから、恥ずかしくないわけがない。

ぎゅっと、胸元のアクセサリ——IS『リヴァイヴ』の待機形態で、十字マークのついたネックレス・トップ——を握り締める。

（で、でも、一夏って超弩級の唐変木だし、これくらいいしないと……ああもうつ、勢いでしちゃえ！）

決意したシャルロットはリボンを外した。

（ええっ！？）

その時に出了た衣擦れの音で一夏は脱ぎ始めたの判断し、さらに驚いた。

（本当に脱ぎ出した。いかん、想像しちゃいかん！）

下着姿になったシャルロットはブラを脱いだ。

（何か別のことを考える。ええ……っと、円周率は……）

以前シャルロットの裸を見た一夏はその姿を思い出さないよう必死に円周率を思い出そうとしていた。

その間シャルロットは下着を脱いで脚から抜き取り、服の上に重ね、裸の体に水着をまとっていた。

「もう、いいよ……」

円周率を二十八桁まで思い出していた時、シャルロットに声を掛けられた。

「えっ？」

振り返る一夏。

「……………」

セパレートとワンピースの中間のような水着で、上下に分かれているそれを背中クロスして繋げるという構造になっている。色は夏を意識した鮮やかなイエローで、正面のデザインはバランス良く膨らんだ胸のその谷間を強調するように出来ているのだった。

感想を今か今かと待ちわびていたシャルロット。肝心の一夏は、流石にこんな密室空間で女子と二人きり＆生着替え＆水着お披露目の三連コンボに困っていた。——というより、照れていた。

「変、かな？」

「いや、そんなことはないぞ！ 凄く良いと思う！」

「じゃあ、これにするね」

「お客様？」

「あ？」

大声を出していたことに今気付いた一夏は口を抑えた。

「今の声、もしや……」

突試着室のカーテンが開けられた。

「えっ!？」

一夏たちの前に居たのは店員と千冬、真耶の三人が居た。

「おおお織斑くん、デュノアさん！」

真耶は軽くパニックになっていた。

「何をしている、馬鹿者が……」

「俊め、何処に行った？」

ショッピングモール内で俊たちを見失った三人。

「わ、私、水着買いたいんだけど……」

「水着か……私も買おうかな？」

「仕方がない。休憩と言うことで水着を買いに行くか。私も買いたかったしな」

三人は一時休憩ということで水着売場に向かった。

「一旦休憩入りまーす!」

撮影スタッフの指示で休憩する明音。

「お疲れ、明音」

マネージャーの藤河恭子からペットボトルを貰った明音はお礼を言って中身を飲んだ。

「恭子さん。明日からなんですけど……」

「知ってるわ。臨海学校でしょ。予定空けといたから、しっかり学んで来なさい」

「ありがとうございます」

明音は満面の笑みでお礼を言って、再び中身を飲む。

「……ん?」

見渡すと、明音の知っている人が走っていた。

（あれって、俊じゃない?）

「ちよっと、お手洗い行ってきます」

「早くしてね」

恭子に伝え、明音はその場を去った。

Episode・38（後書き）

最近ネタが尽きてきた気がする

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Episode・39

「はぁ……はぁ……」

リリーの息が上がってきたみたいだ。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫……です……」

どう見ても大丈夫じゃないだろ。

「悪かったな。急にこんなことして」

「いえ、お構いなく……」

どっか喫茶店で休憩するか。俺は辺りを見渡し喫茶店を探した。

「あそこに入るか」

俺たちは近くにあった喫茶店『@クルーズ』に入った。

「いらっしやいませ。何名様ですか？」

メイド服を着た店員が現れた。「二人です」

「二名様ですね。では、テーブル席にご案内致します」

席に案内され、向かい合うように座った。

メニューを渡され中を確認。パフェでも食いたいなあ……よし、

メニューは決まった。

「俺はアイスコーヒーで良いや」

だってどれも高かったんだもん。一番安いパフェで千五百円。詐欺だ、これは詐欺に近い。

「いらっしやいませ。何名様ですか？」

「いえ、連れが先に着たんですけど……」

店の入口で聞き覚えのある声が聞こえた。

「私はアイスティーにミルフィーユを」

「じゃあ私はアイスティーに苺パフェをください」

「かしこまりました」

店員が去ってった。

「ちょっと待て」

「ちょっと待て」

俺は突然現れたグラサン少女に声を掛けた。彼女の服装は、デニムベストの下にプリントされた半袖Ｔシャツ。ミニスカートを履いていてすらっと伸びた脚に魅了してしまいそうだった。それに小さなリボンが付いた茶色いハットを被っていた。

サンングラスにハット。まるで顔を隠してるみたいだ。

「顔ぐらい見せるよ」

「しょうがないわねえ……」

彼女はサンングラスを少し下にずらして俺に目を見せた。

それだけで正体が分かった。

「お、お前。何でこんなところに？」

「仕事の休憩中に俊を見掛けたから追ってきた」

グラサン少女の正体は明音だった。

『明音さんは何処に行ったんだ！？』

『ここら辺なのは間違いないぞ！』

『是非ともあの姿をカメラに収めなければ！』

店の外ではカメラを片手に怪しい人たちがうようよ居た。

「何だ、あいつら？」

「一応私のファンみたい何だけどね……」

「あれがファンなのか？ 見るからに怪しいじゃないか」

「でしょ？」

さつき店員から貰った水を飲む明音。俺もつられて飲んだ。

「明音が来るなんて……」

「ん？ 何か言ったか？」

「べ、別に……」

少し焦ったようにリリーが両手でコップを覆うように持って水を飲んだ。本当に何て言っただんだ？

「お待たせいたしました。アイスコーヒーのお客様は？」

「あ、俺です」

「アイスティーとミルフィーユのお客様は」

「わ、私です」

「アイステイーと苺パフェのお客様は？」

「私です」

店員が一つ一つ丁寧に商品を置いた。

「それでは、また何かありましたら何なりとお呼び出してください」

店員はぺこりとお辞儀をしてその場を去った。

「俊はデザート頼まなかったの？」

「ま、まあ……」

高かったから頼まなかったなんて言えねえよな。

「良かったら……私の食べる？」

「お、良いのか？」

「別に良いよ」

明音はスプーンで苺パフェをすくった。

「はい、あーん」

「……………へ？」

「それは、やんなきゃダメなのか？」

「嫌ならあげないよ」

まあ別に良いか。

「あーん……」

俺は口を開け、パフェを頬張った。

「流石、高いだけあって美味しいな……」

「そうでしょ」

何故か誇らしげに言った明音はスプーンの柄の方を俺に向けた。

「俊もやって」

「やんなきゃダメなのか？」

「やんなかったら苺パフェの代金払ってもらうから」

えげつねえ！

「じゃあない……」

明音からスプーンを受け取り苺パフェをすくう。

「ほい、あーん」

そう言ってスプーンの先を明音の口元に近付けた。

「あーん……」

明音がパフェを食った。

「やっぱり美味しいわねえ」

「だろ」

「何で俊が誇らしげに言ってるの？」

「なんとなくだ」

にゅっと俺の左側からミルフィーユの破片が刺さったフォークが現れた。

スプーンを明音に返し左側を見るといつの間にかリリーが席を移動していた。

「しゅ、俊くん……あーん」

この流れはやらなくてはいけないのか？

「あーん……」

リリーから差し出されたミルフィーユを頬張った。

「これも美味しい——」

……何だ、この寒気は？

恐る恐る明音の後ろにある窓を見た。

そこには簪、瑞穂、ローラの三人が睨んでいた。

……何故だろう。俺の頭の中にある警報が鳴り響いている。

三人は店内に入ってきて睨んだだけで店員を怯えさせていた。

「俊……どうということ？」

「私をおいて随分楽しそうなことをしているな……」

「分かってるでしょうね……？」

「……」

何故だろう？ 今すぐ逃げなきゃいけないのに足がすくんで動けないのは何故だろう？

「……パフェ、食うか？」

その日で俺の財布の中身が随分寂しくなったのは言うまでもない。

Episode・39（後書き）

み、短いのは、ネタが尽きそうだからじゃないんだからね！
すんません自重します……

ついに新学期だ……

新学期そうそう台風とか、鬱以外のなにものでもない……

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Episode・40

臨海学校初日。天候が崩れることもなく快晴。陽光を反射させる海面。その景色は綺麗で、誰が見てもテンション上がるに違いない。「海だー！」

バスの中でクラスの女子が大声を出して言った。どうやら早速テンションが上がったみたいだ。その女子につられ、クラス全員が海が見える方の窓に寄った。

全員が窓を全開に開け、潮風が入ってきた。海ってこんな匂いだっけ？ 久しぶりだから良く覚えてねえや。

「……………」

俺の右隣りに居る簪は海を見ていた。無表情のように見えたが、目が喜んでいた。

「楽しみか？」

「うん」

何時もと変わらないように思える口調だが、若干何時もより強かった。

「俊よ。私の水着姿を見て興奮するなよ」

後ろに居るローラが自信満々に言った。

「期待してるぜ」

適当に返事した。

「もうそろそろ旅館に着きますから席に着いてくださーい。座らなかったら此処で降ろさせまーす」

小川先生の声で全員即効で席に着いた。誰も歩きたくないもんな。バスは目的地の旅館前に到着。四台のバスから生徒がわらわらと出てきてクラス別に整列した。

「それでは、此処が今日から三日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

『『『よろしくお願いしまーす』』』

織斑先生の言葉の後、全員で挨拶した。この旅館には毎年お世話になってるらしく、着物姿の女将さんが丁寧にお辞儀した。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があってよろしいですね」
遠くて良く見えないが、しっかりとした大人の雰囲気は漂っていた。

「あら、こちらが噂の……？」

「ええ、まあ。今年は二人男子が居る所為で浴場分けが難しくなつて申し訳ありません」

「二人……？」

「ええ、二人です。櫻井、こっちに来い」

急に織斑先生に呼ばれ、俺は織斑先生の元に向かった。着いてそうそう何か悪いことでもしたか俺？

「こちらが、もう一人の男子ですか？」

「櫻井俊です。よろしくお願いします」

女将さんと目が合い、すぐに自己紹介をした。

女将さんは「ご丁寧にも」と言ってお辞儀をした。

「お前も挨拶をしる、馬鹿者」

織斑先生は隣に居た一夏の頭をぐいつと押さえた。

「お、織斑一夏です。よろしくお願いします」

「うふふ、清洲景子です。こちらこそ、よろしくお願いします」

そう言つて女将さんはまたお辞儀をした。

「不出来な弟でご迷惑をおかけします」

「何で俺だけなんだよ？」

「良いから黙つとけよ」

「あらあら。織斑先生つたら、弟さんには随分厳しいんですね」

「何時も手を焼かされていますので」

「それじゃあ皆さん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所が分かなければ何時でも従業員に訊いてくださいまし」

女子一同は「はい」と返事をするすぐさま旅館の中へと向かった。取り敢えず荷物を置いてから海に行くんだろっ。

臨海学校初日は丸一日自由時間。食事は旅館の食堂で各自取るようにと言われている。

「ね、ね、ねー。おりむーとしゅーくん」

「どうしたんだ？」

後ろから声を掛けられたので振り返ると、眠たそうな顔をしている本音が居た。昔からこんな顔してるよな、お前。

「おりむーたちって部屋何処？ 一覽に書いてなかったー。遊びに行くから教えて」

本音の言葉を聞いていた女子が一斉に聞き耳を立てていた。男の部屋に来てもつまらないだけだと思っただが。

「いや、俺も知らない」

「どうせ廊下だろ？」

「それは有り得るな……」

夏だから廊下の床は冷たくて気持ちいいだろうが、風邪でも引いちまうな。そんなわけ無いか。

「織斑、櫻井。お前たちの部屋はこっちだ。ついて来い」

織斑先生に呼ばれた。俺と一夏は本音に「またあとで」と言っただけで別れた。

「えーっと、織斑先生。俺たちの部屋って何処になるんでしょうか？」

「黙ってついて来い」

一夏は言論封殺されていた。学習能力ねえなこいつ。

旅館内はかなり広く綺麗だった。一学年丸々収容出来る大きな旅館で純和風の二階建て。露天風呂や木造の渡り廊下など風情がある佇まいだ。

「お前たちの部屋は此处だ」

廊下の端の部屋に案内された。その一つ隣には『教員室』と書かれた紙が襖に貼られていた。

「此処なら私たち教員の前を通らなければいけないから、就寝時間を無視した女子が押しかけて来ることもないと考えた」

なるほど、無難な考えだ。

襖を開け、俺と一夏は中に入った。

「おおー、すげー」

「こりゃ立派だ」

中は四人部屋の和室で、広縁が設けられており、その壁一面窓になっていた。そこから見える風景が素晴らしく、海がばっちり見渡せた。

「露天風呂だが、男のお前たちは時間交代だ。本来なら男女別になっているが、何せ一学年全員だからな。お前たち二人の為に残りの全員が窮屈な思いをするのは可哀しいだろう。よって、一部の時間のみ使用可だ」

「「分かりました」」

俺らは荷物を置いた。

「さて、今日は一日自由時間だ。荷物も置いたし、好きにしろ」

「えっと、織斑先生は？」

「私は他の先生との連絡なり確認なり色々とある。しかしまあ――」

織斑先生は軽く咳払いをした。

「軽く泳ぐくらいはするでしょう。何処かの弟がわざわざ選んでくれた水着もあるしな」

「そうですか」

一夏が選んだのか。どんな水着だろ？

「じゃあ俊。早速海に行こうぜ！」

織斑姉弟の会話が終わり、一夏が即効軽めのリュックサックに荷物を詰めていた。

「そうだな！」

俺も水着とタオルを持った。

「羽目を外し過ぎんようにな」

織斑先生の注意にもう一度返事をした俺たち。

久々の海だ、思いつ切り泳ぐぞ！

Episode・40（後書き）

原作とアニメじゃ旅館と部屋の構造が全然違いましたので、アニメの方にしました

次回からは水着回です

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

Episode・41

男子更衣室は一番奥にあり、そこに入るには女子更衣室の前を横切らなければならない。普通逆だと思っただが。俺はすたすたと横切ったが、一夏は止まっていた。

「どうした一夏？」

「いや……その……」

「わ、ミカってば胸おつきー。また育ったんじゃないの？」

「きゃあっ！ も、揉まないでよあっ！」

「ティナって水着だったーん。すごいいね」

「そう？ アメリカでは普通だと思うけど」

女子更衣室からそんな会話が聞こえた。まさか、これが原因なのか？

一夏は早足で女子更衣室を横切った。

「そんなに恥ずかしいのか？」

「俊は恥ずかしくないのか？」

「だって見えてるんじゃないんだから恥ずかしくないだろ」

そう言いながら男子更衣室で水着に着替えた。

別館から直接浜辺に出られるらしく、俺らは着替えてすぐ浜辺に向かった。

「あ、織斑くんだ！」

「櫻井くんも居る！」

「う、嘘！ わ、私の水着変じゃないよね！？ 大丈夫だよね！？」

「二人とも、後でビーチバレーしようよ」

「オーケー」

「時間があれば良いぜ——のわっ！？」

鳳が一夏に飛びつき、そのまま一夏の体をしゅるりと駆け上り肩車体勢になった。猫みたいだな。

因みに鳳の水着はスポーティーなタンキニタイプ。オレンジと白

のストライプでへそが出ているやつだった。

「おー。遠くまで良く見えるわー」

「降りろよ鈴！ お前は猫か！？」

一夏が鳳を下ろそうとしたがしがみついていた。鳳は下りなかった。

「わー、楽しそー！」

「私もやりたーい！」

一夏の周りに女子が群がった。

「櫻井くんはやらないの！？」

「櫻井くん、私も肩車されたいな！」

俺のところにも女子が群がってきた。

「何をしてますの！？」

後ろからパラソルとシートを持ったオルコットが現れた。

オルcottの水着は鮮やかなブルーのビキニで腰に巻かれたパレ

オが優雅だった。

「決まってるでしょ。移動監視塔ごっこ」

そう言って落ちそうになった鳳は一夏の頭にしがみついた。

「一夏さん……バスでのわたくしとの約束を忘れましたの！」

オルcottはパラソルを思いつ切り砂浜に刺した。そのままパラソルのしたにシートを敷き、サンオイルを出した。

「あんで、何してもらうつもりなのよ？」

「サンオイルを塗ってもらうんですのよ」

「なっ——！」

鳳が驚いていた。

そんな白い肌なのに焼いちゃうのか？ もったいない。

パラソルとシートを持った明音が現れた。

明音の水着はフリルが付いた黒いワイヤービキニで胸元にはコサージュが付いていた。強調された胸がとても扇情的だった。

明音は俺の近くでパラソルを砂浜に刺し、シートを敷いた。

「俊」

「何だ？」

「背中に手が届かないから日焼け止め塗って」

明音はバックの中から日焼け止めを出した。

「なっ——！？」

女子の肌に触れると……？ 恥ずかしくて出来るか！

「男子二人が塗ってくれるの！？」

「織斑くんがサンオイルで櫻井くんが日焼け止めクリームを……」

「じゃあ私、サンオイル持ってくる！」

「私は日焼け止めを！」

「パラソルとシートを！」

「塗っちゃったから落としてくる！」

塗ったなら落とすなよ！ ああ……全員が海に入って日焼け止めやサンオイルを落とし始めたよ……。

「むう……」

オルコットは明音の胸と自分の胸を見比べて落ち込んでいた。何で落ち込むんだ？

「女の子と付き合うとしたらこのくらいのこともしなくちゃいけないんだよ」

「そ、そうなのか……？」

俺は疑問に思いながら、何故か日焼け止めクリームを受け取ってしまった。

「じゃあお願いね」

明音はブラの紐を外し水着の上から胸を押さえ、シーツの上に寝そべった。

「さあ、早く」

「お、おう……」

「一夏さん。私もお願いしますわね」

オルコットはしゅるりとパレオを取って、ブラの紐を外し水着の上から胸を押さえながらシーツに寝そべった。

一夏はオルコットからサンオイルを受け取った。

「俊、早く」

明音が無防備な背中をさらしながら言った。体に潰され形を歪めた胸は明音の脇の下から見え、かなりセクシーだった。

「わ、分かった……」

日焼け止めクリームを自分の手に垂らし、軽く馴染ませた。

今気付いたが、下の方の水着は露出が多いんだな。

「じゃあ塗るぞ」

そう言っ明音の背中に触れた。

「ひゃっ!？」

隣で寝そべってるオルコットが声を上げた。

「い、一夏さん。サンオイルは少し手で温めてから塗ってくださいな」

「そ、そうか……わるい。なにせこういうことをするのは初めてなんで……すまん」

「そ、そう。初めてですの。それでは、し、仕方がないですわね」
オルコットの顔は何故か嬉しそうだった。

「あれ？ 明音」

「何？」

「前は塗ったのか？」

「俊が塗りたいなら塗っても良いよ」

「そんな恥ずかしいこと出来るかっ!」

クリームを手に垂らしては馴染ませて背中に塗るって作業を繰り返した。

「背中だけで良いんだよな？」

「俊がやりたいなら好きなのこ——」

「ああもうっ！ 好い加減に——」

さっきから鳳にサンオイルを塗ると言う名のくすぐりにオルコットは怒り、急に起き上がった。そして、ブラが落ちた。

あぶねえ！ オルコットの後ろ側に居て良かった。

「あ、ごめん」

そう言っ一番の犯人である鳳は海に逃げた。

「きやあつ！？」

オルコットは部分展開で右腕を出し、目の前に居た一夏を殴った。そのまま一夏は海へダイブ。……お気の毒。

「俊、あんた何やってんのよ！？」

急に瑞穂が現れた。

瑞穂は赤いホルターネックのデザインと、胸元の開き具合が可愛いセパレート水着を着用していた。生地と同系色の花がプリントされている。

「見ての通り、俊に日焼け止めクリームを塗ってもらってるの」
ブラを付けた明音が起き上がり、俺の代わりに言った。

「しゅ、俊じゃなくても、他の女子に頼めば良いじゃない！」

「近くに俊が居たから頼んじやった」

「そんな理由だったのかよ……」

かなり恥ずかしかったのに。

「終わったなら俊！一緒に遊ぼっ！」

瑞穂が俺の手を掴んだ。引っ張られたので立ち上がり瑞穂についてった。

「お、おい。離してくれよ。一人で歩けるから」

「別に良いじゃない……」

ん？　なんか怒ってる気がする。

「お、俊じゃないか」

「おー。ローラ……へ？」

……その水着、大胆過ぎませんか？

ローラの水着は黒紐ビキニで生地の面積が少なく露出度が半端ない。アメリカではこんな水着が当たり前なのか？

「どうだ、驚いただろ？」

「ま、まあ……」

正直驚かされた。

「お二人さん、随分仲が良いんですね……」
リリーが俺と瑞穂を見て言った。

リリーの水着はパレオ付きのライトグリーンのビキニでパレオには白の波線があった。

「ホントよねえ……」

どうやら明音が追い掛けて来たみたいだ。

「……………」

リリーの隣には恥ずかしそうに麦わら帽子を被った簪が居た。着ている水着は全体的に白い水着で黒いラインが入ったAラインワンピース。砂浜が熱いからだろうか、水玉模様のビーチサンダルを履いていた。

「どうしたんだ簪？」

「べ、別に……」

麦わら帽子をさらに深く被った。

「瑞穂、どうして俊と手を繋いでいる？」

「べ、別に良いじゃない！」

「抜け駆けではないのですか？」

抜け駆けって、何のことだ？

「俊、一緒にビーチバレーやろうぜ」

後ろからバレーボールを持った一夏が現れた。

まずい、これはまずい気がする。

簪を見ると、麦わら帽子で隠れて目が見えなかったが恐らく一夏を睨んでいるだろう。『打鉄式』の人員を奪われ完成しなかったんだ。怒りたいだろうが――

「簪、落ち着け」

俺は瑞穂の手を離し簪の手を掴んだ。

「俊……」

「一夏は望んで白式を手に入れたんじゃない。それは分かるだろ」

「……うん」

「だから、睨んだり恨んだりするのは止める。分かったな」

簪は不満そうに頷いた。

「俊、こちらの方たちは？」

一夏の後ろから声が聞こえた。一夏の後ろにはシャルロットとボーデヴィツヒが居た。

シャルロットはセパレートとワンピースの中間のような水着で夏を意識した黄色い水着だ。

ボーデヴィツヒは黒の水着でレースをふんだんにあしらっていて、一見して大人の水着に見える。髪をツインテールにしているので一瞬鳳と被った。

「ああ。二人が俺と同じクラスの奴でもう三人が隣のクラスの奴だ」「更識簪です……」

「ローラ・マルティネスだ」

「リリー・マーシャルです」

「茂木瑞穂よ」

「暁明音です」

五人が軽く自己紹介をした。

「皆よろしく。俺は織斑一夏だ」

「シャルロット・デュノアです。よろしく」

「私が可愛い……私が……」

ボーデヴィツヒがなんか可笑しいぞ。

「ラウラ、しっかりして」

シャルロットがボーデヴィツヒの肩を掴んで揺らした。

「一夏、何があつたんだ？」

「俺にも分からん……」

シャルロットが揺らしてもボーデヴィツヒが正気に戻ることはなかった。

「こ、こちら、ラウラ・ボーデヴィツヒっていうんです」

本人に代わってシャルロットがボーデヴィツヒを紹介した。

「そいや俊……」

「何だ？」

「どうして更識さんは睨んでいるんだ？」

後ろを見ると簪が睨んでいた。

「ちょっとここに来い。皆、暫くそこに居てくれ」
俺は一夏を連れてその場を離れた。

Episode・41（後書き）

今回は一夏と俊ラバーズを会わせました
正直無謀な挑戦だと思っています

簪とオリキャラの水着を考えてくださった空牙刹那さん
本当にありがとうございます

何時も小説の案を提示してくださりありがとうございます
自分の文ではオリキャラがどんな水着を着ているか分からないとい
う方、感想ページで空牙さんが詳細画像のURLをのつけてくれま
したのでそちらを見てください

文、キャラの指摘、質問、感想等おまちしております

今後ともこの作品をよろしくお願いします!!

Episode・42

「で、何で更識さんは俺を睨んでたんだ？」

「ああ、実はだな——」

俺は一夏に簪のことをおおまかに説明した。

長つたらしく説明したが、簡単にまとめれば『一夏の白式の所為で簪の打鉄式式の完成が見送られたから怒ってる』ってことだ。

「そうか、俺の所為で……」

「一夏が責任を感じる必要は無い。悪いのは倉持技研の人員不足なんだからな」

「いや、でもな……」

「だからお前が気にすることはないって。簪が気にしすぎてるだけなんだから。ま、簪が睨んでた理由はそんなもんだ」

俺は一夏に背を向け、皆のところに戻った。

「何の話をしてたの？」

着いたと同時にシャルロットが訊いてきた。

「まあ、色々だ」

「？」

「それよりビーチバレーだろ。早くチーム分けしようぜ」

一夏が戻ってきたと同時にチーム分けが行われた。

当然の男子二人は別々のチームに分かれ、簪、瑞穂、ローラ、リリー、明音、シャルロット、ボーデヴィツヒの七人と後から来たオルコットと鳳の九人でチーム分けをもらった。決める最中、ボーデヴィツヒが正気に戻っていない為外し、八人で決めてもらった。チーム分けが決まり俺、瑞穂、ローラ、リリー、鳳のチームと一夏、簪、明音、シャルロット、オルコットのチーム。

ルールは先に二十点先取した方の勝ち。チームから三人選び、点を取った人が一旦抜け、余りってる人から一人選ぶ。

これは一人がバカスカ決めてしまわないようにする為に設けたル

「ルだ。」

俺らはバラバラに分かれ、作戦会議を行った。

~~~~~ 俊チーム ~~~~~

初っ端は結構肝心だ。しっかり選ばなくては。

「どうすんのよ俊？」

鳳が訊いてきた。

「取り敢えず最初は俺、ローラ、鳳の三人にしようと思う」

「私は構わないが、選んだ理由を教えてくれ」

「最初は背の高い人だけにしようかと思ったんだが、鳳の跳躍力を活かそうと考えている」

「そうですか」

リリーが納得したように言った。

「点を取ったら誰を呼ぶのよ？」

瑞穂が訊いてきた。今思ったが、瑞穂と鳳って似てるよな。特に口調が。

「まずは俺が点を取る。そしたら瑞穂に頼む」

「了解」

「じゃあ行くか！」

~~~~~ 一夏チーム ~~~~~

「一夏、どうする？」

メンバーを考えてる最中、シャルロットが訊いてきた。

「どうすっかなあ……」

背が高い人を入れたいんだけどなあ……。

「まず俺が入るとして……。暁さん、頼めるか？」

「オッケー。任せて」

「よし。じゃあもう一人は……」 次に背が高いのはセシリアなんだが……。

「シャル、頼む」

「任せて。最初に変わる人は誰？」

「更識さんにしようと思っている」

「……………」

その更識さんはずっと俺を睨んでいる。

「更識さん。頼んだぜ」

「……………」

無言のまま頷く更識さん。

うう……。仲良くしたいんだけどなあ……。

「よし、じゃあ行くか！」

気持ちを切り替えた。

~~~~~作戦会議終了~~~~~

先攻を決める為、俺と一夏は浜辺に寝そべった。

「位置について、よい……」

周りに居る女子がスタート合図を出そうとしている。

勝てば最初のサーブを得られる。負ければコート場所を決めることが出来る。

現在太陽はコートな側面に垂直の位置にある。つまり、眩しくてどちらかが不利ってことはない。

なら……。

「ドンッ！」

勝たせてもらう！

素早く立ち上がり、後ろに突き刺さっている目標に向かって全力で走った。

種目はビーチフラッグ。三十メートルぐらい先にあるフラッグを先に取れば最初のサーブ権が得られる。

砂の所為で少し走りにくいが想定範囲内だ。

一夏は俺の少し後ろで走っていた。

悪いな一夏、俺の勝ちだ。

フラッグの目前で飛び込むことはせずフラッグを取った。

「ちつくしょー！」

一夏は悔しそうに膝をついてうなだれ、地面を叩いた。

「悪いな一夏。サーブ権はもらったぜ」

ボールを受け取り、コートに入った。

## Episode・42（後書き）

今回短めですみません

次は俊チームと一夏チームのビーチバレー対決です

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

## Episode・43

サーブ権を得た俺はボールを左手に乗つけてサーブをする準備をしている。

敵は一夏とシャルロットと明音か……。明音が厄介だな。

ゆっくり息を吐き、ボールを上に乗げた。

「ま、まさかの……」

『『ジャンピングサーブ！』』

周りの女子が声を上げた。

思いつ切りサーブし、ボールは勢いよく敵コートの端に向かっていった。

「本気だな。シャル！」

「任せて！ 暁さん！」

「了解！」

一夏がレシーブを上げ、シャルがトス。明音がスパイク。ボールはあっさり返され、狙い良くコートの端にボールが付いた。得点係の女子が何処から持ってきたか分からない得点板をめぐった。

01:00

一点先制された。

「ドンマイ、俊」

鳳が声を掛けてきた。

「ああ」

明音が変わり、簪が入ってきた。あいつ、大丈夫か？

一夏がボールを持って後ろに下がった。

そのままボールを上げ、サーブをした。

「任せろ、鈴！」

「俊！」

「オッケー！」

スパイクを決め、ボールを返した。

「更識さん！」

シャルロットが飛び込みレシーブ。ボールは簪の真上に上がった。

「……………」

簪がトスをしたが、高さが足りなかった。

「くっ——！」

アンダーで返す一夏。ネットに引っ掛かりボールはこっちに来ることはなかった。

01:01

この場合、点を取ったチームで最後にボールを触った人が抜けることになっている。

「ごめんね、更識さん」

「大丈夫……………」

……………」

「瑞穂、頼んだ」

「まかせて！」

瑞穂とハイタッチ。俺はコートから出た。

「お疲れ様です」

コートの外で横座りをしていたリリーが声を掛けて来た。

「疲れるほど動いてないし」

俺はその隣に座って試合を見学した。

シャルロットが決めオルコットと変わり、鳳が決めリリーと変わった。

「ねえ、俊」

「何だ？」

「あの娘、更識だっけ？」

「ああ」

「あれ、やる気あるの？」

「多分、いや、絶対ないだろな」

「何で？」

「一夏が居るからだろ」

「何で一夏を嫌ってるのよ？」

鳳が隣に座った。

「専用機を取られたからだ」

「取られた？」

一夏が決め明音と変わった。

「白式と簪の専用機の作ってる場所が一緒なんだ。本当は打鉄式式だけだったんだが、異例の男子が現れ、その専用機の開発の為、倉持技研の人員全員がそっちに行ってしまった為、打鉄式式の完成は見送りになった」

「それ、別に一夏が悪いわけじゃないじゃん」

「俺もそう言ったんだけど——」

瑞穂が決め俺と変わる。

「やっぱり、悔しいんだろ。色々と……」

03:03

「簪」

ボールを持って声を掛けた。

「何？」

「何時まで根に持ってたんだよ」

「別に……」

「お前だって分かってんだろ、一夏には悪意がないって」

「そうだけど……」

「なら、根に持つな……」

今度はアンダーサーブで簪に向かって打った。

簪は難無くレシーブをし、明音がトス。オルコットが決めシャルロットと変わった。

05:04

俊チームは俊、リリー、鈴音になり一夏チームはセシリア、シャルロット、明音になった。

一夏と簪はコートの外で待機していた。

一夏は簪に近付いた。

「更識さん」

「……何？」

「いや、その……すまなかったな。俺の所為で更識さんの専用機が見送りになっちまって……」

「……………」

一夏は頭を掻きながら言った。

「そりゃ、怒るよな。いきなり現れたISを使える男の為の専用機を作るから見送りになったって聞かされたらさ」

無言で一夏の話聞く簪。

実際は聞いていないんじゃないのか？ 一夏はそんな疑問を抱きながらも話を続けた。

「更識さんは、俺が憎いか？」

「……………」

「嫌ってないなら良きさ。手伝いたいことがあるしさ」

「え……」

簪が初めて声を出した。

「更識さんの専用機って俺の白式と同じ倉持技研で作られる予定だったんだろ？」

「……うん」

「なら、白式のデータを参考に出来ないかな？ 俺、更識さんの専用機を奪っちまったみたいだしさ。上手く言えないと思うけどさ…  
…謝罪の意と俺の本心で言う。専用機作りを手伝わせて欲しい」

その間にシャルロットが点を取り、一夏と交代する。

「返事は何時でも良いからさ」

一夏はコートに入った。

数多の攻防が続き、明音が決め簪と交代。

さっきの一夏の言葉。簪はそれ程不快にはならなかった。

セシリアがレシーブ、一夏がトス。

「決める、更識さん！」

一夏の声に応えるかのようにジャンプする簪。そのままボールをたたき付け、点を取った。

「上手くいったみたいだな、一夏」

俊は、簪がチームメイトとハイタッチをしてるところを見て笑った。簪が他の人と仲良くなれた。俊はそのことが嬉しくてたまらなかった。

（後は……）

楯無と仲良くさせるだけ。そうすれば簪の見える世界が変わるかもしれない。

俊はどうすれば仲良くなるかを考えながら、一夏の強烈なサーブを打ち返した。

## Episode・43（後書き）

続けて短くて本当にすみません

バレーボールの描写と、一夏と簪の会話でかなり詰まっていました  
だからグダってるか、本当にこんなので心変わるのかよという疑問  
が多々あるでしょう

本当にすみません

感想等お待ちしております

## Episode・44

時間が過ぎ現在午後七時半。

大広間を三つ繋げた大宴会場で、一学年生徒全員が夕飯をとっていた。

席は部屋に入った人から自由にとのことだったので、俺は一番端っこに座ろうとしたが簀が座ってしまった為、端っこを諦めた俺は簀の隣に座った。その隣に全速力でローラが座ってきた。

座ったローラは何故か小さくガツポーズをし、他の女子はうなだれていた。

「何であんなうなだれているんだ？」

「俊よ、女には戦わなければならぬ時があるのだよ」

ローラが胸を張って言った。

因みに皆の服装は旅館で用意された浴衣である。普通、食事時は汚れると困るから着ないところが多いんだが何故か『食事時は浴衣着用』とのこと。良く分らん決まりだ

「ローラ」

「何だ？」

「俺の隣に座るのは構わないが、正座は大丈夫なのか？」

「……………」

ローラが『しまった』って顔をした。

座敷なので当然正座で食事をする。一人一人膳が置かれている。メニューは刺身と小鍋、山菜の和え物が二種類。赤だしみそ汁とお新香。刺身だが、なんとキモつきカワハギなのだ。

「無理ならテーブル席に移動した方が良いんじゃないか？」

IS学園は世界中から入学希望者がやって来るため多国籍や多民族・多宗教というのを考慮して、正座が出来ない生徒の為に、隣の部屋でテーブル席が設けられている。

膳もお盆と台が分離出来るタイプになっているので、テーブル利

用者は自分の分の食事を運べばオツケーなのだ。

「こ、このくらい、どうってことはないっ！」

言い張るローラだったが、本当に大丈夫か？

刺身の皿に乗っている本ワサビを小皿に垂らしておいた醤油で溶かした。

カワハギを醤油に浸け一口。独特の歯ごたえと、クセのない味がなんともいえない。キモも、臭みや苦味がなく深い味わいがあった。

「簀、これ美味しいな」

「うん」

左隣りに居る簀も楽しそうに食っていた。

右隣りに居るローラは……。

「くっ……この……！」

正座の苦痛と使い慣れていない箸に悪戦苦闘していた。

「本当に大丈夫かよ？」

「だ、大丈夫だ……このくらい……」

ローラの奮闘をみそ汁を飲みながら観戦していた。

イライライライラ……。

見てるこっちがイライラしてきた。

「ローラ、箸貸せ」

「え？」

ローラから箸を取り、刺身を醤油に浸けた。

「ほら、口を開ける」

「え、これは……もしかして」

「早くしろ」

じゃないと醤油が垂れるだろ。

「わ、分かった。その……あーん……」

刺身をローラの口元に寄せた。

「あああーっ！ セシリアずるい！ 織斑くんを食べさせてもらってる！」

「ローラも櫻井くんを食べさせてもらってる！」

他の女子に見つかった。一夏も同じことやってたのかよ!?

「ず、ずるくありませんわ。席が隣の特権です」

「ず、ずるくはない。これは席が隣の特権だ」

ローラとオルコットが同時に言った。米国と英国のユニゾンだ。

「それがずるいって言うてんの!」

「織斑くん、私も私も!」

「櫻井くん、私にもやって!」

女子の群れが俺と一夏の二つに分かれた。待てお前ら、さっきまで普通に食事してただろ!

「早く早く!」

「あーん!」

「お前たちは静かに食事をする事が出来んのか」  
大宴会場に織斑先生が入ってきた。

「お、織斑先生……」

「織斑、櫻井、あまり騒動を起こすな。鎮めるのが面倒だ」

「わ、分かりました……」

俺らの所為なのか?

「すまんローラ。悪いが頑張ってくれ」

「……………」

ローラが俺を睨んだ。

うつ……。マジで怖い。

「本当に、悪かった……」

俺は食事に戻った。

ってローラさん。普通に箸使ってませんか? 苦しそうに正座していたが。

「最高の眺めだったな」

食後、一夏と風呂に入り、首にバスタオルを掛けた一夏が言った。

「ああ。海を一望出来る露天風呂なんて俺初めてだぜ」

バスタオルで髪を拭きながら言った。

館内を二人で歩き、部屋に戻った。

部屋に入って暫くすると織斑先生が襖を開けた。

「ん？ お前ら二人だけか？ 女の一人も連れ込まんとは、詰まらんやつらだ」

織斑先生はビールが大量に入っているビニール袋を片手に部屋に入ってきた。

「織斑先生、何持ってきてんですか？」

「見て分からのか。酒だ」

そう言ってビールを出し、冷蔵庫に入れる。

「俺らの部屋じゃなくて自分の部屋の冷蔵庫に入れたら良いじゃないですか」

「仕事中に酒は飲めないだろ。だから此処で隠れて飲ませてもらうと思つてな」

俺はそれ以上訊かなかった。

「あ、千冬姉」

ゴスツ。鋭いチョップが一夏の頭に向かって飛んできた。

「織斑先生と呼べ」

「まあ、それは良いじゃん。風呂上がりだし、久しぶりに――」

「くっ」

食後に風呂を一回、シャワーを一回浴びたセシリアは、鼻歌を歌いながら着替えていた。

身に纏うのは旅館の浴衣だが、素肌につけているのはさっきまでとは違う下着である。

（ああっ、もしかしたら……もしかしたらと、用意していた甲斐がありましたわ）

何故これ程までに上機嫌かというと、夕食の時一夏に部屋に誘われたからだ。

これから一夏（と俊）の部屋に行くと考えると、つついほわんと表情が緩んでしまう。

その妙にウキウキとした様子から、不思議に思ったクラスメイトが声を掛けてきた。

「セシリア、何か良いことあったの？」

「いえ、何も」

「……。何もって顔じゃないじゃない」

「あら、そうですの？ うふふ」

「はあ……。まあいいわ。あーあ、折角織斑くんたちと遊ぼうと思って色々用意してきたのに、織斑先生の部屋の隣じゃあねえ……。ワイワイと遊べないよ……」

その言葉に他の女子もうんうんと頷く。

因みに、用意したものはトランプにウノに花札、人生ゲーム、そして男子の（あるいは女子の）憧れことツイスターゲームである。二十一世紀になってもなお不動の地位とは素晴らしい。

（うふふ、今のわたくしはゲームに頼る必要などありませんもの）鼻歌交じりにコロンを吹くセシリア。ふわっと揺れた髪は、何時もより豪華さ二割増しである。

「あ……。せつしーがえっちい下着つけてる」

何時も半開きの目だが、何故か観察力と洞察力に長けた本音がそう告げる。その言葉を聞いて、流星のセシリアもギクリとしてしまった。何故なら……。

「なにっ！？ 脱がせ脱がせえっ！」

「剥け。身ぐるみ置いてけっ！」

「きゃあああっ！？ や、やめっ……。引っ張らないでっ！」

「わ。本当にエロい下着をつけてる……」

「えろっ、えろっ」

「何々、勝負下着？ 織斑くんのところに行けないのにそんなの着

ちゃって」

「まあまあ。セシリアったらおませさん」

「セシリアはエロいなあ」

口々に好きなことを言いながら、最後に声を揃える女子一同。

「え、エロくありません！ こ、これは、その、身だしなみ……そう、身だしなみですわ！」

セシリアはもみくちやにされて乱れた浴衣を直しながら、真っ赤になって反論した。

「うつ、うつ……酷い目に遭いましたわ……」

あの後ももみくちやにされたセシリアは、未だに傷跡癒えずの様相で廊下を歩いていた。

（でも、これでやっと——！！）

一夏（と俊）の部屋に行ける！ そう思うと、今までの疲れもダメージも吹き飛び、乱れた服装も、わずか十数秒で元に戻した。

（の、喉の調子も整えておきませんと。ん、んっ）

浮かれているのが歩調にも表れている。今にもスキップしそうな足取りは、だんだんと早足になって目的の場所へと向かった。

——ところが。

『……………』

一夏と俊の部屋の前で一夏ラバーズと俊ラバーズのメンツが居た。

「何してらっしゃいますの？」

「シッ……」

鈴音がそう言うなりセシリアは黙った。

そして、ドアの向こうから声が聞こえた。

## Episode・44（後書き）

次回はついにアレです

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております！！

## Episode・45

『結構固くなってるな』

『そ、そうなのか？』

部屋から一夏と俊の声が聞こえた。

『じゃあ、行くぞ』

『おう。……いつつ』

『ああ、すまん。もう少し優しくする』

『た、頼む……』

（な、中で一体何が……！？）

襖に耳を当てていた十人が皆同じことを思っていた。

『これでどうだ？』

『ああ。このくらいなら……』

暫く俊の気持ち良さそうな声が聞こえてきた。

（え、えっ！？）

その場に居た全員が『一夏×俊』の構図を思い浮かべていた。

『もう良いか？』

『ああ。自分でやるよりも気持ち良かったぜ』

俊は少し息が荒かった。

『だろ。じゃあ次は千冬姉だ。此処に寝てくれ』

『ああ』

（織斑先生っ！？）

まさに見境なし。全員が思った。

『千冬姉。久しぶりだからちよっとし緊張してる？』

『そんな訳あるか、馬鹿者。——んっ！ す、少しは加減をしろ…』

…』

『はいはい。んじゃあ、此処は……』と』

『くあっ！ そ、そこは……やてっ、つうっ！—』

『すぐに良くなるって』

『あああつ!』

.....。

全員が襖に強く寄り掛かり、外れた。

『へぶつ!』』』

倒れ込み、全員が顔を上げた。

そこでは広縁のイスに腰掛けている俊と、布団に俯せなっている千冬。そして、その背中を指で押していた一夏が居た。

部屋に来た女子十人が正座させられていた。

「全く、何をしているか、馬鹿者」

織斑先生がイスに腰掛けた。

「マッサージだったんですか」

「良かった、俊がソツチ方面じゃなくて……」

「ああ、本当に良かった」

簪とシャルロットとボーデヴィツヒが安堵したような声を出した。

「てつきり……」

「何やってると思ったんだよ?」

ボーデヴィツヒが何かを言う前に一夏が訊いた。俺もそれは知りたい。

「それは勿論——」

ボーデヴィツヒが口にする前に全員でボーデヴィツヒの口を押さえた。

「べ、別に……」

「特に何というわけでは」

「?」

全員が笑ってごまかした。何か気味が悪い。

「こつ見えてこいつはマッサージが上手い」

織斑先生が敷布団の側に座っている一夏に目をやった。

「順番にお前たちもやってもらえ」

『『『え？』』』』

「よし、じゃあ最初はセシリアからだ」

「わ、わたくしから？」

「そのつもりで呼んだんだ。此処に寝てくれ」

オルコットは嬉しそうな顔をする。一瞬で敷布団の元に行き、俯せになった。

「いたたっ、いたっ！」

指圧をするとオルコットが痛そうな顔をした。

「すまん、優しくする」

一夏は力を緩め、ぐっ、ぐっ、と背骨の付け根、その左右両端を指圧した。

「それにしても、腰の凝りが酷いな。セシリアって何かやってるのか？」

「んっ。ええ、たしなむ程度にバイオリンを。そ、そこは、ちょっと苦しいです……」

「おお、悪い。じゃ、此処は指圧じゃない方が良いな」

親指を離し、手の平の下部で静かに圧をかけていく。

「はああ……。なんだか眠くなって来ましたわ……。わたくし——っ！？」

織斑先生が突然オルコットの尻を鷲掴みし、浴衣を捲っていた。何やってんだよ教師！？

俺はすぐに後ろを向いた。大丈夫だ。豪奢なレースを編み込んであり、面積が少なく両サイドを紐で縛つてある黒い下着なんて見えないからな！

「しかし、歳不相応の下着だな。そのうえ黒か」

「せ、せつ、先生！ 離してください！」

「やれやれ。男子に呼ばれたからって、淫行を期待するなよ、十五歳」

「い、い、い、インコっ……！？」

「冗談だ。一夏、櫻井、飲み物を買ってこい」

パスツ、と音がしたので元の向きに戻した。どうやらオルコットの浴衣の裾を元に戻したみたいだ。

「ああ。分かった」

「分かりました」

織斑先生の命令でサイフを持って部屋から出た。

## Episode・45（後書き）

どうやら自分はBLEシーンが苦手なようです  
上手く書けなかったorz

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております!!

## Episode・46

「おいおい。何時ものバカ騒ぎはどうした？」

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、初めてですし……」

「まったく、しょうがないな。後で櫻井がジュースを奢るからそれまで我慢しろ」

昼間に行われたビーチバレー。途中まで接戦だったんだが、千冬と真耶が入ってきて千冬が一夏チーム。真耶が俊チームに入り再開。千冬の圧倒的な活躍により俊チームは惨敗。罰ゲームとしてチームリーダーの俊が何かを奢るという理不尽な命令が下された。

千冬は冷蔵庫から冷やしておいた缶ビールを一本取り出し蓋を開け、それをゴクゴクと喉を鳴らしながら飲んだ。

何時もの規則と規律に正しく、全面厳戒態勢の『織斑先生』と目の前の人物とが一致せず、女子全員がポカンとしている。特にラウラは、さっきから何度も何度もまばたきをしている。どうやら目の前の光景が信じられないようだ。

「可笑しな顔をするなよ。私だって人間だ。酒くらいは飲むさ。それとも、私は作業オイルを飲む物体に見えるか？」

「そ、そういうわけではないんですけど……」

「でも、その……」

「今は仕事中なんじゃ……？」

簪、ローラ、明音が言った。

「堅いことを言うな。それに、口止め料なら払うぞ、櫻井が」

そう言っただけの残りのビールを飲み干した千冬はラウラに二本目のビールを取ってくるよう言った。

「され、そろそろ肝心な話をするか」

ビールを受け取り、蓋を開ける千冬。再び喉を鳴らしながら飲ん

だ。

「お前ら、あいつらの何処が良いんだ？」

あいつら、と言っているが全員が誰を指しているか分かっていた。  
一夏と俊しか居ない。

「一夏ラバーズから言ってみろ」

「ら、ラバーズって……」

頬を赤らめたシャルロット。

「何だ、違うのか」

「ち、違わないですけど……」

「なら構わないだろ。で、どうなんだ？」

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけです」

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

箒、鈴音、セシリアの順に言った。

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」

「「言わなくて良いです！」」

ぎょっとした表情で一斉に千冬に詰め寄る三人。その様子を見て  
千冬ははっはっはっと笑い声で一蹴。またビールを飲む。

「僕——あの、私は……優しいところ、です……」

ぼつりとそう言ったのはシャルロットで、声の小ささとは裏腹に  
そこには真摯な響きがあった。

「ほう。しかしなあ、あいつは誰にでも優しいぞ」

「そ、そうですね……。そこがちよっと、悔しいかなあ」

照れ笑いをしながら、熱くなった頬をパタパタと扇ぐシャルロッ  
ト。

「で、お前は？」

話を振られたラウラはびくつと身をすくませながらも言った。

「つ、強いところが、でしょうか……」

「いや弱いだろ」

何でもないことのように言う千冬に、珍しくラウラは食ってかかった。

「つ、強いです。少なくとも、私よりも」

「そうかねえ……」

千冬は二本目のビールを飲み干した。

「まあ、強いかは別にしてだ。あいつは役に立つぞ。家事も料理もなかなかだし、マッサージだって上手い。そうだろ、オルコット？」話を振られたセシリアは、顔を赤くして俯く・頷く。

「というわけで、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

それを聞いた一夏ラバーズが顔を上げた。

「……く、くれるんですか？」「……」

「やるかバカ」

「……ええ」「……」

「女ならな、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする」

グビツ残りを飲み干した千冬。

「で、櫻井ラバーズの方はどうなんだ？」

ラウラに三本目を取りに行くと言った千冬は、俊ラバーズに訊いた。

「や、優しいところ、です……」

「私は、自分と共感できる部分があるというか……」

「昔なにかと助けてもらって、その……格好良かった、から……」

「強いところですね。力だけじゃなくて、他のことも……」

「格好良いところですね、色々な意味で……」

簪、ローラ、瑞穂、リリー、明音の順に俯き加減に言った。

「あいつも一夏と同じで鈍感な奴なんだなあ……」

ビールを受け取り、蓋を開けた。

千冬の言葉に頷く俊ラバーズ。

「私はあいつの身内じゃないから良く分からないが、まあ悪くはないんじゃないか。女たらしでなければな……」

缶ビールを傾げる千冬

「取り敢えず言えることは、自分を磨けってことだ、ガキども。そして、奪うつもりで男を取りに行け」

実に楽しそうな表情で千冬は言った。

「まさか、ちょうど人数分しか売ってなかったとはな……」

館内の売店でジュースを買った俺は半分一夏に持ってもらった。

ビーチバレーで負けた俺。原因は絶対途中から入ってきた織斑先生と山田先生の所為だ。

十対十と同点のなか、織斑先生たちが来て参戦。チームを上手く操作していた織斑先生はチームメイトに決めさせ、自分は一回もコートを抜けなかった。あの人は強すぎる。

それにあの水着は反則だった。メツシュ状にクロスした部分がセクシーさを演出させていた黒のビキニ。しかもモデルみたいにスタイルが良かったから思わず目がいった隙をつかれた。織斑千冬、侮れない。

「種類がバラバラだけど、大丈夫かな？」

一夏が心配そうにビニールの中身を見た。

売っていたのはコ・コラー、ペ・シコーラ、ラムネ、オレンジジュース、ぶどうジュース、スポーツドリンク、コーヒー、紅茶、リップ・ンのミルクティー、ジン・ヤーエール、カ・ピス、ド・ターペッパーだ。

自分でも大丈夫か心配だ。

「ジュース買ってきましたー」

部屋に入ると何故か空気が重かった。

「種類がバラバラだったが、まあ気にしないでくれ」

そう言ってビニール袋を置くと女子全員は体を重そうに動かした。ローラ、リリー、篠ノ之、シャルロット、鳳、ボーデヴィツヒ、オルコット、明音、瑞穂がジン・ヤーエールとド・ターペッパー以

外を取って、部屋を去ろうとした。

「もう良いのか？」

「ああ……もう十分だった」

篠ノ之が元気なさそうに言った。

「また明日……」

簪が言うつと、つられて皆「また明日」と言って去った。

「何があつたんだ？」

「さあ」

そう言つて織斑先生を見ると、嬉しそうにビールを飲んでいた。

織斑先生の周りには六本の空き缶が置いてあつた。この短時間でどれだけ飲んだんだ？

「一夏」

「おう」

お互い右手を出した。

「「最初はグー。じゃんけんポンっ！」」

俺、グー。一夏、パー。

「いただき」

ジン・ヤーエールを取る一夏。俺は仕方なくド・ターペツパーを取って飲んだ。

この味を好きになるにはかなりの時間があるだろうな。

## Episode・46（後書き）

最近、自分の周りでもドクペームなんだが、そんなに美味いか…？

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております！！

## Episode・47

「……………」

合宿二日目の朝。朝飯を食いに行く為大宴会場に向かう途中、渡り廊下で篠ノ之を見つけた。篠ノ之は渡り廊下の外――地面を凝視していた。

「どうしたんだ篤？」

「何かあるの……か……」

篠ノ之の視線を辿ると、ウサミミが生えていた。しかも『引つ張ってください』って看板が突き刺さっていた。

「なあ、これって――」

「知らん。私に訊くな」

一夏が言い切る前に篠ノ之は否定。

「おい、ほつといて良いのか？」

一夏の言葉を無視し、その場を去った。一体どうしたんだ？

「何してらっしゃいますの？」

篠ノ之と入れ違いにオルコットが来た。

「いや、ちよつとな……」

一夏が怠そうにウサミミの元に向かった。

「本当に何なんだ、これ？」

「抜けば分かるさっ！」

そう言って一夏はウサミミを引っこ抜くが、何も起こらなかった。

「……？」

俺とオルコットが不思議そうな顔を見ると……。  
キイイインッ……。

突然高速で何かが飛んでくる音がして――

ドカ——ン！

謎の飛行物体が盛大に地面に突き刺さった。その謎の飛行物体の見た目は……。

「……に、にんじん……？」「」

俺らは一緒に呟いた。しかもそのにんじんはイラストチックなデフォルメにんじんだった。

「あつはつはつ！ 引っ掛かったね、いっくん！」

突然にんじんから声がしてにんじんが真つ二つに割れ、人が現れた。

「やー、前はほら、ミサイルで飛んでたら危つく何処かの偵察機に撃墜されそうになったからね。私は学習する生き物なんだよ。ぶいぶい」

その謎の人物の格好は、不思議の国のアリスが着ているような青

と白のワンピース。一夏の手からウサミミを受け取り装着。何だろあの格好？ 一人不思議の国のアリスか？

「あ、お久しぶりです、束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー。ところでいつくん。篝ちゃんは何処かな？ さつきまで一緒だったよね？ トイレ？」

「えーと……」

俺とオルコットがポカーンとしている間、二人の会話は続いていた。

「まあ、この私が開発した篝ちゃん探知機ですぐ見つかるよ。じゃあねいつくん。また後でね！」

変質者（？）は走り去った。てかはやつ！？

「い、一夏？ さつきの人は一体……」

「束さん。篝の姉さんだ」

「え……？」

「「ええええっ！？」」

俺とオルコットは声を揃えて驚いた。

「い、今の方が、あの篠ノ之博士ですか！？ 現在、行方不明で各国が探し続けている、あの！？」

「そう、その篠ノ之束さん」

篠ノ之束と言えばISをたった一人で作成、完成させた稀代の天才だ。

現在世界中にあるIS四百六十七機、その全てのコアは篠ノ之博士が作成したもので、これらは完全なブラックボックスと化しており、未だ篠ノ之博士以外はコアを作れない。しかし何故か篠ノ之博士はコアを一定数以上作るのを拒絶している。実に訳の分からない人間だ。

「まあ、良いや。篝に用があるみたいだったし、今のところ関係なさげだし。早く朝飯食いに行こうぜ」

俺は未だにあの変質者みたいな人が篠ノ之博士だと信じられないまま、一夏の後をついてった。

今日は午前中から夜まで丸一日ISの各種装備試験運用とデータ取りに追われる。特に専用機持ちは大量の装備が待っているから大変だ。

「漸く全員集まったか。——おい、遅刻者」

「は、はいっ」

織斑先生に呼ばれて身をすくませたのは、ボーデヴィツヒだった。そうだな、ISのコア・ネットワークについて説明してみる」

「は、はい。ISのコアはそれぞれが相互情報交換の為の——」

ボーデヴィツヒは教科書を読んでいるかのようにすらすると説明し出した。……正直分かん。

「流石に優秀だな。遅刻の件はこれで許してやろう」

どうやら話していたことは合っているみたいだ。ボーデヴィツヒはふうっと息を吐いた。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員迅速に行え」

はい、と一同が返事をした。流石に一学年全員がずらりと並んでいるので、かなりの人数だ。

因みに現在位置はIS試験用ビーチで、四方を切り立った崖に囲まれている。ちょっとした秘密のビーチみたいだ。ドーム状なのが、どこか学園のアーリーナを連想させる。大海原に出るには一度水面下に潜って、水中トンネルから行くらしい。

今回の臨海学校の主題は『ISの非限定空間における稼動試験』である。その為に各国から代表候補生宛に新型装備が山ほど送られてくる。一応部外者は参加できない決まりになっている為、揚陸艇で装備だけがどかと送られてくるらしい。

当然ISの稼動を行うので、全員がISスーツを着用している。

「ああ、篠ノ之。お前はちょっとこっちに来い」

「はい」

打鉄の装備を運んでいた篠ノ之は、織斑先生に呼ばれてこちらへと向かってきた。

「お前には今日から専用——」

「ちーちゃ~~~~~ん!!!」

ずどどどど……！ と砂埃を上げながら人影が走ってきた。無茶

苦茶はやっ！？

「……束」

その人物は、先ほど会った変質者もとい、篠ノ之博士だった。部外者立入禁止なのに思いつ切り規則無視してやがる。

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！ さあ、ハグハグしよう！ 愛を確かめ——ぶへっ」

飛び掛かってきた篠ノ之博士を片手で掴む織斑先生。しかも顔面思いっ切り指が食い込んでいた。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

その拘束から抜け出した篠ノ之博士は、今度は篠ノ之の方を向いた。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなつたね、篝ちゃん。特におっぱいが」

がんっ！ 何処から取り出した木刀で篠ノ之博士を殴った篠ノ之。

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ……。酷い！ 篝ちゃん酷い！」

頭を押さえながら涙目になって訴える篠ノ之博士。そんな二人のやり取りを、一同はぽかんとして眺めた。

「え、えっと、この合宿では関係者以外——」

「んん？ 珍妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者というなら、一番はこの私をおいて他には居ないよ」

「えっ、あつ、はいっ。そ、そうですよね……」

山田先生が見事に轟沈した。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

そう言ってくるりと回ってみせる。ぽかんとしていた一同も、やっとそこでこの目の前の人物がISの開発者にして天才科学者・篠ノ之束だと気付いたらしく、女子の間がにわかに騒がしくなる。

「はあ……。もう少しまともに出来んのか、お前は。そら一年、手

が止まっているぞ。こいつのことは無視してテストを続ける」

「こいつは酷いなあ、らぶりい束さんと呼んでよ？」

「うるさい、黙れ」

その二人のやり取りに、おずおずと割り込んだのは山田先生だった。

「え、えつと、あの、こういう場合はどうしたら……」

「ああ、こいつはさつきも言ったように無視して構わない。山田先生は各班のサポートをお願いします」

「わ、分かりました」

「むむ、ちーちゃんが優しい……。束さんは激しくじらしい。このおっぱい魔神め、たぶらかしたな〜！」

言うなり、山田先生に飛び掛かる束さん。その手は豊満な胸を鷲掴みにしていた。

「きやああつ！？ な、なんつ、なんなんですかあつ！」

「ええい、よいではないかよいではないかー」

見たかんじ、山田先生と篠ノ之博士の胸の大きさは同じくらい。

巨乳二人が組んずぼぐれつな光景は、なかなかどうして来るものがあった。

「やめるバカ。大体胸ならお前も十分あるだろうが」

「てへへ、ちーちゃんのえつち」

「死ね」

どかつと蹴りを喰らって砂浜に顔から突っ込む篠ノ之博士。本当にこの人があの篠ノ之博士なのか？

「それで、頼んでおいたものは……？」

やや躊躇いがちに篠ノ之が訊いた。それを聞いた篠ノ之博士の目がキラーンと光った。

「うつふつふつ。それは既に準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ！」

びしつと直上を指す篠ノ之博士。その言葉に従って全員が空を見上げた。

## Episode・47（後書き）

実は書き終えたのは今朝です

だから余裕があっただんでもう一話あげました

一日に二話投稿なんて久々です

ついに束さん登場です

そして今回はスペシャルゲストの登場です

その人物は次回の後書きで発表します

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

## Episode・48

ズズーンッ！

「うわっ！？」

「のわっ！？」

俺と一夏は同時に声を上げた。

いきなり金属の塊が砂浜に落下してきたんだ。ビビらないわけがない。

銀色をしたそれは、次の瞬間正面らしき壁がバタリと倒れてその中身を俺たちに見せる。

「じゃじゃーん！ これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』！ 全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

真紅の装甲に身を包んだその機体は、篠ノ之博士の言葉に応えるかのように動作アームによって外へと出た。

……さて。全スペックが現行ISを上回ってるだって。それって最高性能の機体じゃないか。

「さあ！ 箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか！ 私が補佐するからすぐに終わるよん♪」

「……それでは、頼みます」

「堅いよ」。実の姉妹なんだし、こうもつとキャッチーな呼び方で――

「はやく、始めましょう」

「ん」。まあ、そうだね。じゃあ始めようか」

篠ノ之博士がリモコンのボタンを押すと、紅椿の装甲が割れて、操縦者を受け入れる状態に移った。しかも自動で膝を落とし、乗り込みやすい姿勢に変わった。

「箒ちゃんのデータはある程度先行して入れてあるから、後は最新のデータに更新するだけだね。さて、ぴ、ぽ、ぱ」

コンソールを開いて指を滑らせる篠ノ之博士。空中投影ディスプレイ

レイを六枚ほど呼びだすと、膨大なデータに目配りをしていく。それと同時に進行で、同じく六枚呼び出した空中投影のキーボードを叩いていた。

「すごい……」

いつの間にか隣に居た簪が篠ノ之博士の働きっぷりを見て感心していた。

「近接戦闘を基礎に万能型に調整してあるから、すぐに馴染むと思うよ。後は自動支援装備も付けておいたからね！ お姉ちゃんが！」

「それは、どうも」

「んゝ、ふ、ふ、ふゝゝ 箒ちゃん、また剣の腕前が上がったねえ。筋肉の付き方を見れば分かるよ。やあやあ、お姉ちゃんは鼻が高いなあ」

「……………」

「えへへ、無視されちった。——はい、フィッティング終了。超速いね。流石私」

無駄話をしながらも篠ノ之博士の手が休むことはなかった。

「しかも速い……」

「ああ。感心するな、あの技術は」

しかも数秒単位で切り替わる画面にも全部目を通していった。天才というのは伊達じゃないな。

「あの専用機って篠ノ之さんがもらえるの……？ 身内ってだけで」

「だよねえ。なんかずるいよねえ」

ふと、群衆からそんな声が聞こえた。

「おやおや、歴史の勉強をしたことがないのかな？ 有史以来、世界が平等であったことなど一度もないよ」

それに素早く反応したのは篠ノ之博士だった。ピンポイントに指摘を受けた女子は気まずそうに作業に戻る。指摘している最中にも篠ノ之博士の手は止まらなかった。

「後は自動処理に任せておけばパーソナライズも終わるね。あ、いつくん、白式見せて。東さんは興味津々なのだよ」

「え、あ。はい」

全部のディスプレイとキーボードを片付けて、篠ノ之博士は一夏の方を向いた。

一夏はすぐに白式を展開した。

「データ見せてね。うりゃ」

白式の装甲にコードを刺す篠ノ之博士。さつきと同じようにディスプレイが空中へと浮かび上がった。

「ん……不思議なフラグメントマップを構築してるね。何だろ？見たことないパターン。いっくんが男の子だからかな？」

フラグメントマップとは、各ISがパーソナライズによって独自に発展していくその道筋のことらしい。

「束さん、そのことなんだけど、どうして男の俺がISを使えるんですか？」

「ん？ ん……どうしてだろうね。私にもさっぱりだよ。ナノ単位まで分解すれば分かる気がするんだけど、して良い？」

「良い訳ないでしょ……」

「じゃあ、あそこのガキでも良い？」

篠ノ之博士は興味なさそうな目で俺を見ていた。

「良くねえよ……」

「うわあ……。口悪い。いっくん、無視しよ」

それに答えは俺。どうやら嫌われたようだ。

「そ、そいや、後付装備が出来ないのは何ですか？」

一夏が話を変えてくれた。

「そりゃ、私がそうやっていしたからだよん」

さつきの俺に向けていた目とは違い、生き生きとしていた。

「え……ええっ！？ 白式って束さんが作ったんですか！？」

「うん、そーだよ。っていつても欠陥機としてポイされてたのをもらって動くようにいじっただけだねー。でもそのおかげで第一形態から単一仕様能力ワンオフ・アビリティが使えるでしょ？ 超便利、やったぜブイ。

でねー、なんかねー、元々そいう機体らしいよ？ 日本が開発し

てたのは」

「馬鹿たれ。機密事項をべらべらバラすな」

べしん！ 織斑先生が手加減無しの打撃を篠ノ之博士の頭にヒツトさせた。

「いたた。は、ちーちゃんの愛情表現は今も昔も過激だね」

「やかましい」

さらにもう一発。相変わらず痛そうだ。

「あ、あのっ！ 篠ノ之博士のご高名はかねがね承っておりますつ。もしよければ私のISを見ていただけないでしょうか！？」

そんなやり取りの中、オルコットが篠ノ之博士に声を掛けた。

「はあ？ 誰だよ君は。金髪は私の知り合いに居ないんだよ。そもそも今は篝ちゃんとちーちゃんといっくんと数年ぶりの再会なんだよ。そういうシーンなんだよ。どういう了見で君はしゃしゃり出て来てるのか理解不能だよ。っていうか誰だよ君は」

誰だよ君はって二回言わなかったか？ というか冷たすぎません言葉といい視線といい口調といい……。

「え、あの……」

「うるさいなあ。あっちいきなよ」

「う……」

ぼろくそ言われたオルコットは目尻に涙を溜めていた。いくらなんでも酷過ぎだ。

「ふー、変な金髪だった。外国人は凶々しくて嫌いだよ。やっぱり日本人だよな。日本人さいこー。まあ、日本人でもどうでもいいんだけどね。篝ちゃんとちーちゃんといっくんときーちゃん以外は」

どうやら篠ノ之博士はその四人以外興味ないみたいだ。

「あと、おじさんとおばさんもでしょ？」

「ん？ んー……まあ、そうだね」

妙な答え方だな。もしかして両親も興味がないのか？

「そいや、前から思ってたんですけど、きーちゃんって誰なんですか？」

「ん、知りたい？ きーちゃんの本名はね——」

「束。その名前を言うな」

織斑先生の手加減無用の攻撃が再び篠ノ之博士の頭に直撃した。

「いたた……」

「あいつの本名を無闇にばらすな。お前みたく指名手配犯のように狙われてしまう」

「うう……。それじゃ言うのやーめよ。それじゃあさあ、いつくんさー、白式改造してあげようか？」

「え。えーと……ちなみにどんな改造ですか？」

「うむ。執事の格好になるってどうかな。いつくん前々から燕尾服が似合うと思っていたんだよ。あるいはメイド服」

「いいです」

「いいです！ おお、許可が下りたよ！ じゃあ早速——」

「だあつ！ わざと意味を間違えないでくださいよ！ ノーです、

ノー！ ノーサンキュー！」

「む！ じゃあ私はノーザンライツだ！」

ノーしか合っていないが……ノーザンライツって何だ？

「じゃあじゃあ、女の子の姿になるってどうかな！ いつくんが！」

「なんなんですか、それは！」

「ん？ 最近損だマンガにそういうのがあったんだよー」

「マンガの話を俺で試そうとしなくてください！」

「ちえー。いつくんきけずー」

「あー……ごほんごほん」

「こっちはまだ終わらないのですか？」

「んー、もう終わるよー。はい三分経った。あ、今の時間でカップラーメンが出来たね、惜しい」

いや、別に惜しくはないな。それと四分や五分で出来るカップラーメンもあるぜ。

「んじゃ、試運転もかねて飛んでみてよ。篝ちゃんのイメージ通りに動くはずだよ」

「ええ。それでは試してみます」

プシュツ、プシュツ、つと音を立てて紅椿に連結されたケーブル類が外れていく。それから篠ノ之がまぶたを閉じて意識を集中させると、次の瞬間に紅椿はもの凄い速度で飛翔した。

「おわっ！？」

「くっ！」

急加速の余波で発生した衝撃波で砂が舞い上がった。俺はすぐに閃迅を展開し、紅椿を追った。二百メートル上空で滑空する紅椿を閃迅のハイパーセンサーが捉えた。

「どうどう？ 箒ちゃんが思った以上に動くでしょ？」

「え、ええ、まあ……」

オープン・チャンネルでの会話がこちらに飛び込んできた。篠ノ之博士もISを装備しているのか？

「じゃあ刀使ってみてよー。右のが『あまつぎ雨月』で左のが『からわれ空裂』ね。武器特性のデータ送るよん」

篠ノ之博士から武器データをもらった篠ノ之は、二本同時に刀を抜き取った。

「親切丁寧な束おねーちゃんの解説付き〜」 雨月は対単一仕様の武装で打突に合わせて刃部分からエネルギー刃を放出、連続して敵を蜂の巣に！ する武器だよ〜。射程距離は、まあアサルトライフルくらいだね。スナイパーライフルの間合いでは届かないけど、紅椿の機動性なら大丈夫」

篠ノ之は試しとばかりに右手に持っていた雨月を突き放つ。同時に、周囲の空間に赤色のレーザー光がいくつもの球体として現れ、光の弾丸となって漂っていた雲を穴だらけにした。

「次は空裂ねー。こっちは対集団仕様の武器だよん。斬撃に合わせて帯状の功性エネルギーをぶつけるんだよー。振った範囲に自動で展開するから超便利。そいじゃこれ打ち落としてみてね、ほーい」と

篠ノ之博士の近くから十六連装ミサイルポッドが現れ、一斉射撃

を行った。

「第！」

「——やれる！ この紅椿なら！」

篠ノ之は左手に持つている空裂を一回転するように振った。さつきみたいな赤いレーザーが今度は帯状になって広がり、十六発のミサイルを全弾撃墜した。

「すげえ……」

「やりすぎじゃね……？」

爆煙がゆつくりと収まり、紅椿と篠ノ之の威風堂々たる姿を確認した。

全員がその圧倒的なスペックに驚愕し、魅了され、言葉を失っていた。そんな光景を篠ノ之博士は満足そうに眺めて頷いた。

「……………」

けれど、織斑先生だけ篠ノ之博士を厳しく見つめていた。

「たっ、た、大変です！ お、おお、織斑先生っ！」

山田先生の声に鋭い視線をやめた織斑先生は、山田先生の方に向き直った。

「どうした？」

「こ、こっ、これをつ！」

小型端末の、その画面を見て織斑先生の表情が曇った。

「特務任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働していた——」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」

「す、すみませんっ……」

「専用機持ちは？」

「ひ、一人は完成していませんが、それ以外は」

きかれちゃまずいと思った二人は話すのをやめ、手話で会話し始めた。

「そ、そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ」

「了解した。——全員、注目！」

山田先生が走り去った後、織斑先生が手を二回叩き、生徒全員を注目させた。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へと移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自で室内待機すること。以上だ！」

「え……？」

「ちゅ、中止？ 何で？ 特殊任務行動って……」

「状況が全然分かんないんだけど……」

不測の事態に生徒全員がざわめき始めた。

「とつと戻れ！ 以後、許可無く室外にでたものは我々で身柄を拘束する！ いいな！！」

織斑先生の一喝により生徒全員が黙った。

『はっ、はいっ！』』』

全員が慌てて動き始め、接続していたテスト装備を解除、ISを起動終了させカートに乗せた。

「専用機持ちは全員集合しろ！ 織斑、オルコット、デュノア、ボ―デヴィツヒ、鳳、<sup>ファン</sup>櫻井！ ——それと、篠ノ之も来い」

「はい！」

一番張り切っていたのは篠ノ之だった。

「俊……」

簪、瑞穂、ローラ、リリー、明音が寄って来た。

「すぐに戻るから心配するなよ」

そう言って織斑先生の後についてった。

二時間ほど前。とある場所とあるハプニングが起こっていた。

「なんだっ！？」

「外部から不正アクセスをされてます！」

「すぐに喰い止める！」

「今やってますっ！ くっ——。速い、速すぎる！！」

「くそっ！ 何でこんなことに……！！？」

「間に合いません！ 速すぎます！」

「ナターシャ！ テストは中止だ！ すぐに解除しろ！」

「『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルが制御不能！ 空域から離脱しました」

「ナタル！ 聞こえるかナタル！」

その人たちが焦っている中、不法侵入していた人物が冷静にそれを見ていた。

「ふーん……。大変なことになってるなあー」

彼は皆が騒いでいる部屋の外——ドア近くでその光景を眺めていた。

彼の姿は異様なものだった。東洋人系の顔に首元まで伸び、外側に跳ねてる後ろ髪。白と黒のモノトーン柄の長袖シャツとジーンズを着て、手荷物に白銀フルメタルジャケットのキャリアバックを持っていた。

此処までは普通だ。しかし彼の裾から見える左手と右目は包帯でぐるぐる巻きであった。

「このハッキングの仕方は……東さんか？」

彼はキャリアバックからパソコンを出し、施設のアクセス履歴を確認。すぐに誰がハッキングしたのか分かった。

彼は確認し終わるとパソコンをキャリアバックにしまい、部屋から離れた。

## Episode・48（後書き）

というわけで……話の最後にスペシャルゲストが登場しました

その人物は……曲流さんの作品に出てくるキャラです

曲流さんの作品を見れば彼がどんな人物か分かります

取り敢えずユーザー検索で『曲流』さんを探そう  
読み方は『まがる』です

曲流さんは自分みたいにさつさと書かずに、じっくりと書くタイプ  
ですので奥が深い話になっていて面白いです

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております!!

## Episode・49

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷・風花の間で、俺たち専用機持ち全員と教師陳が集められた。

証明を落とした薄暗い室内に、大型の空中投影ディスプレイが浮かんでいる。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼動にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『シルバー・リオ・ゴスヘル銀の福音』が制御下を離れ暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

なるほど。それで俺たちが呼ばれたのか。

「……………」

俺を含め、代表候補生は厳しい顔付きになっていた。

一夏はキヨロキヨロしていたがこの際無視だ。

「その後、衛星による追跡の結果、福音は此处から二キロ先の空域を通過することが分かった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった。教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう」

だろうな。

訓練機じゃ軍用ISに太刀打ちなんて出来ない。出来るとしたら織斑先生だけだろうが、そしたら指揮を取る人が居なくなる。

訓練機よりも優れ、軍用ISに太刀打ち出来るとしたら専用機しかないだろうから俺らが呼ばれたのか。

「それでは作戦会議を始める。意見があるものは挙手するように」

「はい」

早速、手を挙げたのはオルコットだった。

「目標ISの詳細なスペックデータを要求します」

「分かった。ただし、これらは二カ国の最重要軍事機密だ。けして

口外はするな。情報が漏洩した場合、諸君らには査問委員会による裁判と最低でも二年の監視がつけられる」

「了解しました」

大型投影ディスプレイに福音のスペックデータが表示された。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上ではあたしの甲龍を上回ってるから、向こうが有利……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァイヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルも分からん」

「偵察したいとこだが……無理だろな。ハワイ沖から此処まで約三時間。時速二千キロは優に越えてる」

「櫻井の言う通り、偵察は無理だな。福音は現在も超音速飛行を続けている。最高速度は時速二千四百五十キロを越えるとある。アップローチは一回が限界だろう」

「一回きりのチャンス……ということやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に、全員一夏を見た。

「え……？」

一夏は『何で俺を見るんですか？』的な顔をしていた。

「あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は——」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね」

「エネルギーは全部零落白夜に回さないと一発で落とせないだろうからな」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけない。超高度度ハイパーセンサーも必要だろう必要がある」

「ちよつ、ちよつと待ってくれ！ お、俺が行くのか！？」

「……「当然」……」

一夏と篠ノ之以外の専用機持ちの声が重なった。

「ユニゾンで言うな！」

「織斑、これは訓練ではない。実戦だ。もし覚悟がないなら、無理強いはいしない」

織斑先生の言葉を聞いた一夏は右手を強く握り締めた。

「やります。俺が、やってみせます」

一夏の顔色が変わった。覚悟を決めた顔だ。

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、この専用機持ちの中で最高速度が出せるのは――櫻井。お前しか居ないな」

「そうね。学年別トーナメントの試合見たけど、俊が一番速いわね」

「悔しいですけど……わたくしのブルー・ティーズでは、あの速さには敵いませんわ」

「俊の閃迅の速さは一級品だからね。多分、全ISの中で最高速度が出せる機体だと思う」

「戦った時は、肉眼では追いつけなかった。ハイパーセンサーを使ってやっと捉えられたからな」

「櫻井。どうだ？」

「勿論やりますよ。無傷で一夏を送ります」

「よし……？それじゃ――」

「待った待った。その作戦はちよつと待ったなんだよ」

天井から篠ノ之博士が現れた。長い髪が重力に従いダランと下がっている。

「……山田先生、室外へ強制退却を」

「えっ！？ は、はいっ。あの、篠ノ之博士、取り敢えず降りてきてください」

「とうっ」

空中で一回転して着地。流れるように織斑先生の元に寄った。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もつと良い作戦が私の頭の中にナウ・

プリンティング！」

「……出て行け」

頭を押さえる織斑先生。山田先生は言われた通り篠ノ之博士を追いだそうとするが、するりと躲されてしまった。

「聞いて聞いて！ 此処は断・絶！ 紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

「紅椿のスペックデータ見てみて！」

数枚のディスプレイが織斑先生を囲むようにして現れた。

「紅椿の展開装甲を調整して、ほいほいほいと。ホラ！ これでスピードはばっちり！」

篠ノ之博士はメインディスプレイを乗っ取り、画面が福音のスペックデータから紅椿のスペックデータに変わった。

「説明しましよーそうしましよー。展開装甲というのはだね、この天才の束さんが作った第四世代型ISの装備なんだよー」

は……？ 第四世代？ 各国でやっと第三世代のトライアル機が完成した段階なんだぞ。

「はい、此処で心優しい束さんの解説開始。いっくんのためにね。へへん、嬉しいかい？ まず、第一世代というのは『ISの完成』を目標とした機体だね。次が、『後付武装による多様化』——これが第二世代。そして第三世代が『操縦者のイメージ・インターフェイスを利用した特殊兵器の実装』。空間圧作用兵器にBT兵器あとはAICとか色々だね。……で、第四世代というのが『パツケージ換装を必要としない万能機』という、現在絶賛机上の空論中のもの。はい、いっくん理解できました？ 先生は優秀な子が大好きです」

「は、はあ……。え、いや、えーと……？」

「具体的には白式の《雪片式型》に私用されてまーす。試しに私が突っ込んだ」

『『えっ！？』』

雪片式型。そしたら一夏のISも第四世代ってことになるぞ。

「それで、上手くいったのでなんと紅椿は全身アーマーを展開装甲にしてあります。システム最大稼働時にはスペックデータはさらに倍プッシュだ」

「ちよつ、ちよつと、ちよつと待ってください。え？ 全身？ 全身が、雪片式型と同じ？ それって……」

「うん、無茶苦茶強いね。一言で言うとな最強だね」

最強というより、チートじゃないか。

「ちなみに紅椿の展開装甲はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替えが可能。これぞ第四世代型の目標である即時万能対応機<sup>リアルタイム・マルチロール・アクトレス</sup>つてやつだね。にやはは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶい——って、はにゃ？ あれ？ 何で皆お通夜みたいな顔してるの？ 誰か死んだ？ 変なの」

こんな馬鹿な話があるか。

各国が多額の資金、膨大な時間、優秀な人材の全てをつぎ込んで第三世代型のISの開発をしてるんだぞ。今この瞬間、それが全部無意味だということになっちゃったじゃないか。

「——束、言っただろ。やりすぎるな、と」

「そうだった？ えへへ、ついつい熱中したっただよ」

織斑先生に言われて、篠ノ之博士は俺たちが黙り込んだ理由を理解したようだ。

「あ、でもほら、紅椿はまだ完全体じゃないし、そんな顔しないでよ、いっくん。いっくんが暗いと束さんはイタズラしたくなっちゃうよん」

ウインクしてもどう対処すれば良いか分からねえよ。

「まー、あれだね。今の話は紅椿のスペックをフルに引き出したら、って話だからね。でもまあ、今回の作戦をこなすくらいは夕飯前だよ！」

三時のおやつ前の次は夕飯前ですか。どういう頭してたこの人？ 「それにしてもアレだねー。海で暴走っていうと、十年前の白騎士事件を思い出すねー」

篠ノ之博士は突然そんなことを言った。

『白騎士事件』――。

この事件を知らない者は世界で誰も居ないだろう。

十年前、篠ノ之博士がISを発表して一カ月。各国のミサイル、二千三百四十一発が一斉にハッキングされ、日本に向けて発射された。

世界が混乱する中、現れたのが、白銀のISを纏った一人の女性だった。

後に白騎士と呼ばれるようになったそのISは、全てのミサイルを撃墜し、幻であったかのように日没とともに忽然と姿を消した。

「ウフフフ。白騎士って誰だったんだろぅねー？　ね？　ね、ちーちゃん」

「知らん」

「うむん。私の予想ではバスト八十八センチの――」

「ごすつ。鈍い音がした。織斑先生は出席簿くらいの大きさの情報端末で篠ノ之博士の頭を叩いた。

「ひ、酷い、ちーちゃん。東さんの脳は左右に割れたよ！？」

「そうか、良かったな。これからは左右で交代に考え事が出来るぞ」

「おお！　そつかあ！　ちーちゃん頭良い〜！」

織斑先生に抱きつく篠ノ之博士。

「話を戻すぞ！」

自分と篠ノ之博士の間にさきほど叩いた情報端末を割り込ませ体を離れた。

「東、紅椿の調整にはどれくらいの時間が掛かる？」

「七分あれば余裕だね」

「よし。では本作戦では織斑・篠ノ之の両名による目標の追跡及び撃墜を目的とする。作戦開始は三十分後。各員、ただちに準備に掛かれ」

「ぱん、と織斑先生が手を叩いた。

「織斑、櫻井。こっちに来い」

織斑先生に呼ばれた俺たちは織斑先生の元に駆け寄った。

「織斑、櫻井と閃迅に雪片式型の使用許諾を発行しろ」

「え？」

「さっさとやれ」

「は、はい！」

「織斑の用はそれだけだ。やることがないならオルコットから高速戦闘のレクチャーを受けておけ」

「りよ、了解！」

一夏はその場を去った。

「で、俺は何なんですか？」

「ああ。織斑と篠ノ之の後を追え」

「え……？」

「必要に応じては、お前が福音を撃墜しろ」

「わ、分かりました」

「よし。おい、束」

「何、ちーちゃん？」

紅椿の調整をしながら織斑先生の声に反応する篠ノ之博士。

「こいつのISも調整してやれ」

「えゝ。めんどくさーい」

織斑先生、何無謀なことやってんですか？

「まあやってみろ。懐かしい人物に出会えるかも知れないぞ」

「ええゝ。しょうがないなあ……。おい、ガキンちょ」

口調が急に変わった。

「早くISを展開しな」

言われるがままに閃迅を展開。篠ノ之博士はめんどくさそうに閃迅にコードを刺した。そのまま適当に画面をスクロールしていた。

「そいや織斑先生」

「何だ？」

「さっき一夏が訊きそびれてましたけど、篠ノ之博士が言う『きーちゃん』って誰なんですか？」

「あいつも狙われてるからな、本名は言えないが二つ名なら教えてやる」

織斑先生は頭を掻きながらその名前を言った。

「『ヘカトンケイル』。と言えば分かるか？」

『『ヘカトンケイル！？』』

その名を聞いて、その場に居た俺、一夏、篠ノ以外の専用機持ちが驚いた。

俺も声に出さなかったが正直驚いている。

『ヘカトンケイル』――。

本名不明。性別は男。世界で有名なIS整備師だ。

その技術は篠ノ之博士と同等と言われており、もしかしたらコアが作れるかもしれないと篠ノ之博士と同じく世界中で追っている人物だ。

「そのヘカトンケイルと篠ノ之博士はどういう関係なんですか？」

「師弟――と言っておこうか」

「そうすか……」

そんなことをしている間に篠ノ之博士は無言でコードを抜いた。後で見たがどうやら何処も弄ってないみたいだった。というか、絶対画面見てなかったよな。

## Episode・49（後書き）

今回は簡単に今作でのスペシャルゲストの設定を書いたつもりです

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

## Episode・50

時刻は十一時半。

ISスーツを身に纏った一夏と箒の二人が砂浜に立っていた。

二人は目を合わせ、一夏が頷くと箒も頷いた。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

全身が光に包まれ、ISアーマーが構成された。

純白の機体の所々に青と黄色の箇所がある一夏の専用機『白式』。

真紅の機体の所々に白と黒と黄色の箇所がある箒の専用機『紅椿』

。

二人はPICで浮き、一夏は箒のそばに寄った。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

「いいか、箒。これは訓練じゃない。十分に注意をして——」

「むろん分かっているさ。ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいれば良いさ」

「何だか楽しそうだな。やっとな専用機が持てたからか？」

「えっ？ 私は何時も通りだ。一夏こそ、作戦には冷静であたることだ」

「分かっているよ」

「織斑、篠ノ之、聞こえるか？」

ISのオープン・チャンネルから千冬の声が聞こえ、一夏と箒は頷いて返事をした。

ワンアフローチ・ワンダウン

「今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心掛ける。討つ

シルバリオ・ゴスベル

べきは銀の福音——以降福音と呼称する」

「了解！」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいで

すか？」

「そうだな。だが、無理はするな。お前のその専用機を使い始めてからの実戦経験は皆無だ。突然、何かしらの問題が出るとも限らない」

「分かりました。ですが、出来る範囲で支援をします」

箒の声は弾んでいた。

「あの子、声が弾んでない？」

「ええ……。そう聞こえましたわね」

「分からなくもないけど」

ISスーツから制服に着替えたセシリア、鈴音、シャルロット、ラウラは箒の心配をしていた。

さきほど作戦会議に使用していた部屋、大座敷・風花の間で待機している残りの専用機持ちと学園教師。誰もが箒は浮かれていると確信していた。

「山田先生、織斑へのプライベートチャンネルを」

「はい」

『織斑』

プライベート・チャンネルに切り替わったことを確認した千冬は一夏に声を掛けた。

『は……。はい！』

『これはプライベート・チャンネルだ。篠ノ之には聞かれない』

一夏はホッとして肩を落とした。

『どうも篠ノ之は浮かれているな。あんな状態では何かを仕損じるやもしれん。いざという時はサポートしてやれ』

『分かりました。意識しておきます』

『頼むぞ』

「オープン・チャンネルに切り替えます。スタンバイ、どうぞ！」

二人の会話が終了したことを確認した真耶はオープン・チャンネルに切り替えた。

「だは、始め！」

一夏は箒の肩をしつかり掴んだ。そのままものの数秒で上空五百メートルまで上昇した。

「暫時衛星リンク確率……情報照合完了。目標の現在地を確認。――一夏、一気に行くぞ」

「お、おう！」

紅椿の全身の展開装甲が開き、エネルギーを噴出させた。

「凄い。瞬間加速の比じゃないよ」  
イクニッション・ブースト

「驚異的な速さだ」

シャルロットとラウラが驚いていた。

「さて……山田先生。プライベート・チャンネルを」

「はい」

千冬は漆黒の機体に所々白と黄色の箇所があるISを身に纏った人物と会話し始めた。

「ふーん……」

閃迅で紅椿の機動力を見ていた俺。

「櫻井、聞こえるか」

「聞こえまーす」

「その返事はやめろ」

「別に良いじゃないですか。こうしてないと、緊張で吐きそうなんです……」

結構ガチだ。さっきから体の震えが止まらない。

「……お前にはもしもの場合を考えての駒だ」

「分かってます」

「織斑には、櫻井と閃迅に雪片式型の使用許諾を発行してもらっている」

「でも、俺には《光切》がありますよ」

「お前の武器は確かに雪片と同じ能力があるが、成功確率が低いの

は分かってるだろ』

「あ、だからか……」

『そうだ、もしもの時は雪片式型を使い。私が許可する』

「了解しました」

『そろそろ準備しておけ』

「ラジャー」

エネルギーを確認。大丈夫、満タンだ。

作戦が決行される前に言われた織斑先生の言葉がさっきから離れない。

『もしもの時は、お前が福音を撃墜しろ』

「見えたぞ、一夏！」

「――！！」

ハイパーセンサーの視覚情報が自分の感覚のように目標を映し出す。

シルバリオ・「スベル  
『銀の福音』はその名に相応しく全身が銀色をしていた。

何より異質なのが、頭部から生えた一対の巨大な翼。本体同様銀色に輝くそれは、資料によると大型スラスターと広域射撃武器を融合させた新型システムだそうだ。

「加速するぞ！ 目標に接触するのは十秒後だ！」

「ああ！」

スラスターと展開装甲の出力を上げた筈。その速度は凄まじく、高速で飛翔する福音との距離をぐんぐんと縮めていく。

五、六、七、八、九……十！

「うおおおおっ！」

零落白夜を発動。それと同時に<sup>イグニッション・ブースト</sup>瞬時加速を行って間合いを一気に詰めた。

（行ける――！！）

光の刃が福音に触れる瞬間。

「なっ!？」

福音は高速移動したままこちらに反転、後退の姿となって身構えた。

一度体勢を立て直して——いや、このまま押し切る!

どちらにしてもこの間合いだ。それなら、相手が反撃してくる前にケリをつけた方が良い。

「敵機確認。迎撃モードへ移行。《銀の鐘》シルバー・ベル、稼働開始」

「!？」

オープン・チャンネルから聞こえたのは抑揚のない機械音声だった。そこに明らかな『敵意』を感じた。

——嫌な予感がする。

その予感は数秒と経たずに現実となった。

ぐりん、と。いきなり福音が体を一回転させ、零落白夜の刃をわずか数ミリの精度で避けた。それは慣性制御機能を標準搭載しているISでもかなり難度の高い操縦だ。

「くっ……! あマルチスラスタの翼が急加速をしているのか!？」

高出力の多方向推進装置というのは他にも多く存在するが、此処まで精密な急加速というのは見たことがない。

「箒! 援護を頼む!」

「任せろ!」

時間が掛かればこちらが圧倒的に不利だ。俺は箒に背中を預け、再度福音に斬りかかる。

「くっ! このっ……!」

しかし、またひらりひらりと紙一重の回避をされてしまう。

零落白夜の残り時間が迫っている。焦った俺は大振りの一太刀を浴びせようとしてしまった。

「!」

その隙を見逃すことのなかった福音。銀色の翼。スラスタでもあるものの、装甲の一部がまるで翼を広げるかのように開く。

しまった！ こいつは——砲口、だ。

「ぐうっ！？」

発射された弾丸は、高密度に圧縮されたエネルギーで、ちょうど羽のような形をしている。それがISアーマーに突き刺さったかと思うと、刹那、一斉に爆発した。

爆発するエネルギー弾丸。それが福音の主装備らしい。そして問題は——その数度速度——即ち連射が無茶苦茶速い。

狙いはそれほどでもないが、爆発弾だ。少しでも触れれば、そこを爆発でえぐられる。

「箒、左右から同時に攻めるぞ。左は頼んだ！」

「了解した！」

俺と箒は複雑な回避運動を行いながらも連射の手を休めない福音へと、二面攻撃を仕掛ける。

けれど、俺と箒の攻撃はかすりもしない。福音はとにかく回避に特化した動きで、その上同時に反撃までしてくる。この特殊型ウィングスラスターは、その奇抜な外見とは裏腹に実用レベルが異常に高い代物だった。

「一夏！ 私が動きを止める！」

「分かった！」

言うなり箒は二刀流で突撃と斬撃を交互に繰り返す。しかも、腕部展開装甲が開き、そこから発生したエネルギー刃が合わせて自動で射出、福音を狙う。

さらに箒は紅椿の機動力と展開装甲による自在の方向転換、急加速を使って福音との間合いを詰めていく。この猛功には、流石の福音も防御を使いはじめた。

「はあああっ！！」

いける！

そう思って刀を握り締める俺だったが、そこに福音の全面攻撃が待っていた。

「La……………」

甲高いマシンボイス。刹那、ウイングスラスタはその砲門全てを開いた。その数、三十六。しかも全方位に向けての一斉射撃。

「やるなっ……！　だが、押し切る……！」

箒が光弾の雨を紙一重で躲し、迫撃する。——隙が、出来た。

「！」

けれど俺は福音とは真逆の、直下海面へと全力で向かった。

「一夏……？」

「うおおおっ……！」

イグニッション・ブースト

瞬時加速と零落白夜。その両方を最大出力で行い、一発の光弾に追いついた俺はそれをかき消した。

「何をしている……？　せつかくのチャンスに——」

「船が居るんだ！　海上は先生が封鎖したはずなのに——ああくそっ、密漁船か！」

だからといって見殺しには出来ない。

キュウウウン……。

俺の手の中の《雪片式型》の光の刃が消え、展開装甲が閉じる。

……エネルギー切れだった。最大にして唯一のチャンスを失い、そして作戦の要もたつた今無くした。

「馬鹿者！　犯罪者になどかばって……。そんなやつらは——！」

「箒……！」

「っ——！？」

「箒、そんな——そんな寂しいことは言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱いヤツのことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ」

「わ、私は、は……」

箒は明らかな動揺のその顔に浮かべ、それを隠すかのように手で覆う。その時に落とした刀が空中で光の粒子へと消えたのを見て、俺はぎくりとした。

イン・ア・タ・メン

具現維持限界だ……！　まずい——！

具現維持限界——つまりそれは、エネルギー切れということだ。

そして今は、IS学園のアリーナだはない。実践だ。

「箒いいっ！！」

俺は刀を捨て一直線に箒へと向かう。最後のエネルギー全てを使  
って瞬間加速。  
イグニッション・ブースト

頼む！ 間に合ってくれ！！

視線の先では福音が再び一斉射撃モードへと入っていた。しかも、  
今度は箒に照準を絞っている。

エネルギー切れのISアーマーは恐ろしくもろい。それは第四  
世代型とはいえ変わりないはずだ。絶対防御分のエネルギーは確保  
していたとしても、あの連射攻撃を一度受けたらひとたまりもない。

頼む！ 頼む、白式！ 頼むっ！！

スローモーションの世界で、俺は、光弾が放たれるのを確実に視  
界で捉え、そして次の瞬間に福音と箒の間に割って入った。

「ぐああああっ！」

箒をかばうように抱きしめた瞬間、あの爆発光弾が一斉に背中に  
降り注いだ。

エネルギーシールドで相殺し切れないほどの衝撃が何十発と続き、  
みしみしと骨があげる軋みが聞こえる。同様に悲鳴を上げる筋肉、  
アーマーが破壊され、熱波で肌が焼けていく。

気が狂うほどの激痛が無限のように続き中で、俺は一度だけ箒を  
見た。

ああ……無事か……。良かった……。はは、何泣きそうな顔をし  
てるんだよ……。たしくねえなあ。あ、リボンが焼き切られちまっ  
てるな……。ふーん、髪を下ろしたのも悪くねえじゃん……。

「一夏っ、一夏っ、一夏あっ！！」

「う……あ……」

ぐらりと世界が傾く。——ああ、違うのか。傾いているのは俺か。  
海へと真っ逆さま。そんな中、俺は最後の力を振り絞って箒の頭  
を守るように抱きしめた。

「うおおおお——っ！！」

俊の叫び声が聞こえた気がした。

大きな水音と全身を伝播する衝撃。俺は海面越しに福音と閃迅を見つめながら、気を失った。

## Episode・50（後書き）

ほぼ原作まる写しです

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

## Episode・51

篠ノ之が具現維持限界になった。

「さて、行くか……」

崖から飛び降り、一気に加速した。

「速いつ！」

「こ、この速さは……!!」

「紅椿と同等かつ!？」

「展開装甲もないのに!？」

織斑先生のマイクから声を拾ったのだろう、部屋に残っている専用機持ちの声が聞こえた。

—— 暫時衛星リンク確率。情報照合完了。目標の現在位置確認。

「目標を確認。『銀の福音』シルバリオ・ゴスヘルと十秒後に接触します！」

ハイパーセンサーで福音であろう銀色のISの姿を確認した。

頭部に付いている一对の翼。あれから放たれる三十六発の光弾に注意しなくてはな。

「うおおお——っ!!」

福音の腰を掴み、一旦その場所から離れた。

下にはエネルギーが切れた一夏と篠ノ之、あとは密漁船か。

雪片は……諦めよう。取りに行つてたら二人が危ない。

すぐに《光切》と《天草》を呼び出す。コール福音に斬りかかった。

しかし福音は紙一重で躲す。

「くそっ——!!」

これほどか。

福音が高速で移動し俺もその速度に合わせた。

光弾を放つ福音。俺はそれを躲し——

「ぐっ——!!」

きれず光弾が腕に刺さり、爆発した。

熱くならず、福音を追った。

斬りかかり躲され、光弾が放たれ被弾。さつきからこれの繰り返しだ。

ダメだ。これじゃあ俺のエネルギーが減る一方だ。集中しろ。奴の光弾を躲しながら斬りかかるんだ。

一遍には無理だ。まずは躲すことを意識しろ。

奴から放たれた三十六発の光弾。その隙間をかい潜れるほどの技術は今身につけるんだ。

俺は光弾に飛び込んだ。躲しきれないのは剣で掻き消せ。全弾躲す必要はない。まずは被害を最小限に抑えろ。自分に言い聞かせるように心の中で言った。

「ぐっ……あつ……」

被弾しながらも福音に向かう。その数八発。目前で蹴りを入れられ振り出しに戻った。

こんな喰らってたらエネルギーが持たない。集中だ集中。光弾の間をすり抜けるんだ。

再び光弾が放たれた。躲せ。すり抜けるんだ。

集中しろ。出来ないことはないはずだ。再び光弾に飛び込んだ。

一回目成功。行ける——っ！

「そこだあああつ！」

さつきよりも随分減り、被弾した数は二発。俺は福音に近づき、斬りかかった。

しかし、福音は難無く避けた。

だけど、勝機は見えた！

福音が高速で移動した。俺は天草をしまい《陰吸》を呼び出す。陰吸を逆手に持ち、福音を追いつけた。

「何ですか？ この戦いは……？」

大座敷・風花の間で俊の行動を見ていたオルコットはそう呟いた。

福音の速度に追いつきながら戦闘。光弾が放たれたら陰吸で弾くか体を捻らせて躲していた。しかも減速することなく福音の攻撃を避けている。

「こんな超音速下での戦闘が出来るのか……？ 訓練なしで」

「化け物ね……」

超音速。俊と福音はそんな状況下で戦闘を繰り広げていた。

「織斑先生」

「ああ、分かっている。櫻井、そろそろ空域を出る。すぐに引き返せ」

しかし俊からの返答はなかった。

「聞こえるか櫻井。引き返せ」

返答はなかった。俊は集中し過ぎて周りの声が聞こえていなかったのだ。

「教師部隊に連絡。空域を出そうになったら櫻井を捕らえろ」

『『『了解』』』

「本当に来るのかしらね？」

「織斑先生が言ってたのよ。冗談は無いはず」

「でも此処までかなりの距離がありますよ」

連絡を受けた教師たちはオープン・チャネルで愚痴っていた。

「そんな速い速度で動ける——」

何かが一瞬通った。

「はず……が……」

『何をしている！ 櫻井はとっくに空域を出たぞ！』

「え？」

さきほど通った何か。それが俊と福音だったことに気づいたのは一秒くらいだった。

「ま、待ちなさい！」

急いで俊を追い掛ける教師部隊だったが。

『どうあっても間に合わないな……半分は戻って織斑と篠ノ之の救出を。残り半分は追い掛ける』

「っっりよ、了解！」「」

あれからどのくらいの時間が過ぎたのだろう。どのくらい攻撃を受けたのだろう。どのくらい攻撃を与えたのだろう。今何処に居るのだろう。

そんなことが分からなくなるくらい集中していた。

速く帰らなきゃ。

簪が、瑞穂が、ローラが、リリーが、明音が待っているに違いない。

だから、速く帰らなきゃ。

「はあああつ——！！」

福音に接近。光切にエネルギーを送り斬りかかる。

ガシッ。福音が光切を掴んだ。

「え……」

光切が光の粒子となって消えた。

「嘘……だろ……」

リミット・ダウン  
具現維持限界。

「こんな、時に……」

慌てるな。まだ、動くことは出来るはずだ。

「畜生……畜生畜生畜生畜生！ 何でだよ！ 何でこんな時に！！」

頭では分かっている。でも、体は理解していない。

「——っ！！」

福音の砲門が開いた。

その時体が動き、急いで海面へ急降下。

しかし――

間に合わなかった。

「ぐあつ――あ……」

三発だろうか、背中に当たり、そのまま海に落ちた。  
ゴメン、皆。帰りが遅くなりそうだ……。

## Episode・51（後書き）

というわけで、俊の敗北

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております

## Episode・52

それは一夏がまだ小学二年だった頃のことだ。

千冬に付き合わされる形で始めた剣道も一年が経ち、それなりに様になっていた。

（つつくよー。あいつはー……）

道場の娘で同い年の女子とは、どうにも馬が合わない。今朝も朝練で衝突して試合に発展、胴薙ぎ一本で負けた日だった。

（あーくそ……。勝てねえかなあ……。勝ちてえなあ……。）

そんなことを考えながら、一夏はぶすつとした顔で教室の掃除をしていた。放課後の夕焼けが眩しい。自分以外のクラスメイトはサボって遊びに行っているのを知ってはいたが、別にどうとも思わない。誰かがやらなければいけないなら、自分がやるだけだ、と。

「おい、男女」。今日は木刀持っていないのかよ」

「……竹刀だ」

「へっへ、お前みたいな男女には武器がお似合いなんだよな」

「……………」

「喋り方も変だもんな」

女子は、答えない。

三人の男子が取り囲んで一人の女子をからかっている。

そんな状況の中で、けれど女子は凜とした眼差しで相手を睨み、一歩も引こうとはしない。——その女子の名前は、箒といった。

「やーいやーい、男女」

「……うつせーなあ。てめーら暇なら帰れよ。それか手伝えよ。ああ？」

好い加減、無意味な攻撃に苛立ちを覚えていた一夏は、クラスの男子に向かってそう言い放つ。

「何だよ織斑。お前はこいつの味方かよ」

「へっへっ、この男女が好きなのか？」

古今東西、子供のからかいというのは度し難い。そしてそれは、例え同い年であろうとも一夏には不快きまわりなかった。

「邪魔なんだよ。掃除の邪魔。どっか行けよ。うぜえ」

「へっ。真面目に掃除なんかしてよー、バツカじゃねーの——おわっ！？」

いきなり、箒が男子の胸倉を掴んだ。その手は小学二年生とは言え、日々の鍛錬で鋭く鍛えられている。本気で殴り合いをしたら、恐らく男子三人でも負けはしない。

けれど、何を言われても手を出さなかった箒が、その言葉にだけは反応した。

「真面目にすることの何がバカだ？ お前らのような輩よりははるかにマシだ」

「な、何だよ……何ムキになってんだよ。離せっ、離せよっ」

強靱な腕で締め上げられてもがく男子とは別に、残り二人はまだニヤニヤと笑いを浮かべている。

「あー、やっぱりそうなんだぜー。こいつら、夫婦なんだよ。知ってるんだぜ、俺。お前ら朝からイチャイチャしてるんだろ」

（うわ、出た。夫婦夫婦って、こいつらそういうの好きだなー。飽きたっつうの）

箒の道場に通うようになってから、そう言われたのは別に一度や二度ではない。そもそも両親が居ない——つまり夫婦の概念が希薄な一夏にとっては痛くも痒くもない。

「だよなー。この間なんか、こいつりボンしてたもんな！ 男女のくせによー。笑っちま——ふごっ！ー」

今度は、一夏が怒りをあらわにした。それだけでは済まず、顔面に拳を叩き込む。ぽかんとしている男子をよそに、一夏は倒れた相手を片腕で立たせ締め上げた。

「笑う？ 何が面白かったって？ あいつがりボンしてたら可笑しいかよ。すげえ似合ってただろうが。ああ？ なんとか言えよボケナス」

「お、お前つ——！！ 先生に言うからな！」

「勝手に言えよクソ野郎。その前にお前ら全員ぶん殴る」

それは三人相手に大立ち回りをした一夏が、騒ぎを聞き付けてやってきた教師に取り押さえられて終わった。

普段から剣道だけでなく千冬に体術を習っている所為もあって、

三人相手でも一夏は引けを取らないどころか圧勝だった。

しかし、それがまずかった。

馬鹿な子供の親は馬鹿というのは昔からの定説らしく、やれ警察だのやれ裁判だのと騒ぎ立てる馬鹿な生き物が三匹居た。

一夏は気にも止めなかったが、その所為で無意味に千冬が頭を下げさせられているのが許せなかった。

『問題を起こせば千冬姉の迷惑になる』

そのことを学んだ一夏は、以後暫くは穏便な方法で馬鹿な男子を撃退した。

「……お前は馬鹿だな」

「あん？ 何がだよ。馬鹿じゃねえよ馬鹿」

数日後、放課後の修業を終えて顔を洗う一夏に、珍しく筭が声をかけてきた。

「あんなことをすれば、後で面倒になると考えないのか」

「ん？ ああ、あのことが。そうだな、考えねーな。許せねえやつはぶん殴る」

それで一度、千冬から酷くお叱りを受けたことがあったが、けれどこれは曲げられないことだった。それが幼い一夏にただ一つある譲れないことだった。

「大体、複数でっていうのが気に入らねえ。群れて囲んで陰険なんざ、男のクズだ」

「……………」

「だから、お前も気にすんなよ。前にしてたりボン、似合ってたぞ。またしろよ」

「ふ、ふん。私は誰の指図も受けない」

腕を組んでそっぽを向く箒に、そーかと返事をしてまた顔を洗う一夏。この冷たく心地好い井戸水で練習の汗を流すのが、たまらなく好きだった。

「じゃあ、帰るわ。またな篠ノ之」

「——だ」

「うん？」

「私の名前は箒だ。好い加減、覚えろ。大体、この道場は父も母も姉も篠ノ之なのだから、紛らわしいだろう。次からは名前で呼べ。良いな」

「分かった。俺は割と、身近なやつ指図は受ける。——じゃあ、一夏な」

「な、何？」

「だから、名前だよ。織斑は二人居るから、俺のことも一夏って呼べよな」

「う……む」

「分かったか、箒」

「わ、分かっている！ い、い、一夏！ これで良いのだろう！？」

「おう、それで良いぜ。……指図じゃなくて頼みならちゃんと聞いてくれるんだな」

「ふ、ふん！」

最後に強がりを残して立ち去る箒を、一夏はおかしなやつだなあと思いながら見送った。

季節は六月。もう夏はすぐそこまで来ていた。

「何だあれは……？」

アメリカの代表操縦者、イリス・コーリング。彼女は外に出て福音の心配をしていると、海に何かが漂っているのを発見した。

すぐに専用機の『フアング・クエイク』を展開し、漂流物の元に

向かった。

「人か……？」

見た感じ、東洋系人の顔で茶髪。

「男……」

なのにISスーツを着ている。

『イリース。無断でISを展開するな』

「人を発見したんだ」

『人？ 何でこんなところに？』

「遭難者かも知れない。とにかく船に乘せても良いか？ 男だがI

Sスーツを着ている」

『関連者が……。構わない。その男から何か聞き出せるかも知れないからな』

許可をもらったイリースは遭難者を空母に乗せた。

## Episode・52（後書き）

何故か昨日はテンションが上がって一日に三話も投稿してた……  
今日模試なのに……

昨日やっと劇場版ハヤテを見に行けました  
かなり空いてたけどね……

そいや、イリースってあんな感じで合ってたっけ？  
原作だと六巻冒頭だけしか出てないから情報が少ないんだよねあ……

文、キャラの指摘、質問、感想等お待ちしております！！

## Episode・53

教員に救助され浜辺まで戻ってきた篤。

福音の攻撃を受けてから気を失ったままの一夏。

千冬と救護班、専用機持ち四人はすぐに浜辺に向かった。

専用機持ち四人は一夏の元に駆け寄り、心配そうに顔を覗いた。

その間、救護班により一夏は担架に乘せられた。

篤は一夏の元に駆け寄らず、皆から離れて俯いていた。

「作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば招集する。それまで各自現状待機しろ」

千冬から放たれた言葉がそれだった。その後、一夏の手当ての指示をしてすぐに旅館に戻ろうとした。

「ま、待つてください」

「何だ」

シャルロットが千冬を引き止めた。

「俊は……俊はどうしたんですか？」

その場に俊は居なかった。

「櫻井は福音の攻撃を受けてから行方不明。教師部隊が全力で搜索している。発見次第連絡する」

そう言って千冬は再び足を進めた。

「……………」

各自室内待機と命令され、部屋で待機していた簪、ローラ、リリィ、瑞穂、明音。本当は違う部屋だが、何故かこの五人で集まって俊の帰りを待つことにしていた。

外からバタバタと足音が聞こえた。

——俊が戻ってきた！

そう思った五人。真っ先に行動に移ったのは簪だった。襖に手を掛け、勢いよく開けた。

「待機と命令したはずだ！ 今すぐ部屋に戻れ！」

そこに居たのは千冬と救護班と担架に乗せられた一夏。そして、専用機持ち五人だった。

「しゅ、俊は……櫻井俊はどうしたんですか！？」

千冬に一喝されビビりそうになった簪だったが、なんとか堪え、俊のことを訊いた。

「……………」

千冬は答えない。そして、専用機持ち五人も答えることはなく足を進めた。

「ま、待てっ！」

ローラは部屋から出て専用機持ちたちの行く手を阻んだ。

「教えてくれ。俊はどうしたんだ？ 戻ってきたのか？ それだけで良いんだ。教えてくれ」

「速く部屋に戻れ。身柄を拘束されたいのか」

ラウラの目を見て一歩引いたローラ。その目は冗談ではなく、本気の目だった。

「本来なら部屋から出た時点で身柄を拘束するつもりだったが、今なら見逃してやる。速く部屋に戻れ」

そう言いつと、専用機持ちは再び足を進めた。

「……くそっ！」

ローラは柱をたたき付けた。

「私も……私にも、専用機があれば……」

本来ローラは専用機をもらえるはずだった。それはアメリカの第二世代型ISを大幅にカスタマイズした機体。しかし、その機体は何者かに盗まれ見送りとなった。

今更悔やんでも仕方がない。ローラは部屋に戻った。

あれから三時間以上が経過し、大座敷・風花の間で千冬は現状の確認をしていた。

「停滞してますね。本部はまだ、私たちに作戦の継続を？」

「解除命令が出てない以上、継続だ」

真耶の問いに、千冬は冷静に応えた。

「ですが、これからどのような手を……」

一夏が気を失っており、零落白夜は使えない。俊が行方不明になり光切による攻撃も不可。状況は最悪だった。

突然ノックの音がした。

「失礼します」

「誰だ？」

「デユノアです」

「待機と言ったはずだ！ 入室は許可できない」

入室拒否され、シャルロットは心配そうな顔をした。

「教官の言う通りにするべきだ」

「でも……先生だって一夏と俊のことが心配なはずだよ」

「一夏さんは目が覚めず、櫻井さんは行方不明……」

「手当の指示を出してから、一度も様子を見に行っていないなんて……」

千冬は指示を出してから三時間。一切一夏の様子を見に行こうとはしなかった。

「だからどうしろと？」

「箒さんにも声を掛けませんでしたわ。いくら作戦失敗とはいえ、冷た過ぎるのではなくて？」

「今は福音の捕捉に集中する。教官はやるべきことをやっているに過ぎない」

最優先事項は福音の撃破。だから、千冬は自分の職務に全うしている。

「教官だって苦しいはずだ。苦しいからこそ作戦室にこもっている」

本当は一夏の側に居たい千冬。俊が生きているか心配している千冬。しかし、心配するだけで、福音は撃破出来ない。

「それよりも問題は……」

ラウラは作戦室の隣の部屋に目を送った。その部屋では一夏が寝ている。

ISの防御機能を貫通して人体に届いた熱波に焼かれ、一夏の体の至る所に包帯が巻かれていた。

そんな一夏の側に三時間以上居る箒。リボンを失い垂れた髪は今の気持ちを表現しているようだった。

箒はぎゅゅつとスカートを握り締めた。

（私は……）

箒は最後に一夏が言ったことを思い出していた。

『そんな寂しいことは言うな。言うなよ。力を手にしたら、弱い奴のことが見えなくなるなんて……どうしたんだよ、箒。らしくない。全然らしくないぜ』

（違う、違うんだ！ 見えなくなったわけじゃない。奴らが弱い奴だとしても言うのか！？ 守るべき存在だと！？）

箒は一夏の考えてることが分からなかった。

奴らは秩序を乱している。なのに何故、一夏は奴らを許せるのか？

（それが……お前の強さなのか？ だから、お前は強いのか。お前に比べて、私は……）

「力の赴くままに、暴力を振るっていたのだろうか？」

何時も、力を手に入れるとそれに流されてしまう。それを使いたくて仕方がない。

（お前にとって、密漁船も私も等しく守るべきものだったと言うのに……）

「私は……」

入口からノックの音が聞こえた。

「篠ノ之さん……」

ノックの主は真耶だった。

「あなたも少し休んでください。根を詰めて、あなたまで倒れてしまつては皆心配しますよ」

「此処に、居たいんです……」

「いけません。休みなさい。これは、織斑先生からの要請でもあるんです」

その言葉には強みがあつた。

「いいですね？」

「分かりました……」

箒は真耶の指示に従い、部屋から出た。

箒は暫く歩き、いつの間にか浜辺に居た。

「あー、あー、分かりやすいわねえ」

声のした方向に顔を向ける箒。声の主は鈴音だつた。

「……………」

「あのさあ。一夏と俊がこうなつたのつて、あんたの所為なんですよ？」

「……………」

「で、落ち込んでますつてポーズ？——っざけんじゃないわよ！」

突然鈴音は箒の胸倉を掴んだ。

「やるべきことがあるでしょうが！ 今！ 戦わなくて、どうすんのよー！」

「わ、私……は、もうISは……使わない……」

「ッ——！！」

頬を叩かれ、支えを失つた箒は地面に倒れる。

そんな箒を再度鈴音は締め上げるように振り向かせた。

「甘つたれてんじゃないわよ……。専用機持ちつつーのはね、そんな我儘が許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは——」

鈴音の瞳が、箒の瞳を直視する。

そこにあるのは真つ直ぐな闘志。怒りにも似た赤い、感情。

「戦つべきに戦えない、臆病者か」

その言葉で箒の瞳に、その奥底に闘志に火がついた。

「——ど……」

口から漏れたか細い言葉は、すぐさま怒りを纏って強く大きく変わる。

「どうしろと言っんだ！　もう敵の居場所も分からない！　戦えるなら、私だって戦う！」

やっと自分の意思で立ち上がった箒を見て、鈴音はふうつと溜息をついた。

「やっとやる気になったわね。……あーあ、めんどくさかった」

「な、何？」

「場所なら分かるわ。今ラウラが——」

ISのプライベート・チャンネルでドイツ軍特殊部隊と連絡を取っていたラウラ。そのまま箒たちの元に寄った。

「出たぞ」

ISを部分展開し、ディスプレイを表示した。

「ここから三十キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ」

「流石ドイツ軍特殊部隊。やるわね。それより俊はどうだったの？」

「すまん。まだ探している。どうやら衛星でも通信でも見つけられないところに居るみたいだ」

「案外使えないわねえ……」

「それより、お前の方はどうなんだ。準備は出来ているのか？」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方こそどうなのよ」

「ああ、それなら——」

ラウラの視線の先には、セシリアとシャルロットが歩み寄ってくる姿があった。

「たった今完了しましたわ」

「僕も準備オツケーだよ。何時でも行ける」

専用機持ちが全員揃うと、それぞれが箒へと視線を向けた。

「で、あんたはどうするの？」

「私……私は――」

ぎゅうつと拳を握り締める筈。それはさっきまでの後悔とは違い、決意の表れだった。

「戦う……戦って、勝つ！ 今度こそ、負けはしない！」

「決まりね」

ふふんと腕を組み、鈴音は不敵に笑った。

「作戦は福音を墜として俊を搜索。良いわね」

鈴音の簡潔な作戦に四人が返事をした。

この五人が行動に移す三時間の間、とある場所とある出来事があつた。



## Episode・53（後書き）

なんか俊が付け足されたみたいな台詞だったな……

感想よろしくお願いします！！

## Episode・54

「う……」

「起きたか？」

目を開けると、目の前には見知らぬ女性が何故か添い寝していた。

「うわああああ——っ！！」

横に転がり、ベッドから落ちた。

「っ——！！」

その時全身から強烈な痛みが訪れた。

「添い寝したぐらいで驚くとは、案外初心な奴なんだな、キミは」

「初心とか関係なく見知らぬ人に添い寝されたら誰でも驚くわっ！」  
立ち上がり女性につっこんだ。

まさか見知らぬ女性にいきなりツッコミをする日が来るなんて思いもよらなかった。

「案外キミは丈夫なんだな」

「何が？」

「自分の姿が分からないのか？」

そう言って女性は俺に向かって指差した。

「？」

女性の指差した先を追うと、俺の体に包帯が巻かれていることに気付いた。

「漂流してきた時は正直死んでると思ってたさ」

漂流。

「ああ、そうか……」

「負けたんだ、俺」

「腹減ってるだろ。飯持ってきてやるよ」

「いや、俺は……」

「遠慮すんなって」

そう言って女性は部屋から去った。

「……………」

何もすることが無かったのでベッドに腰掛けることに。

「何処なんだ、此処は？」

見たところ花月荘じゃない。それに揺れている。

まるで――

「船の中みたいだ」

「そのとーり！」

？　どっから声がしたんだ？

ガコンッ！

「っ――！」

いきなりエアダクトの蓋が外れた。――というより蹴り破られた。中から右足らしきものだけが出ていて不気味だった。

右足が引っ込み、銀色のフルメタルジャケットのキャリアバッグが落ちてきた。

「とうっ！」

通気口の縁に手を掛けた謎の人物はそのまま降りて、片膝を付いて着地した。

そいつは白と黒のモトーン柄の長袖シャツを着ていて下はジーンズ。襟足が首元にまで伸びており外に跳ねていた。

立ち上がり、服に付いた埃を払っていた。裾から見える左手と右目には包帯が巻かれていて異様な姿だった。

「誰すか？」

「誰かって？　ふっふっふっ、教えてあげよう。だがしかし！」

右の人差し指を俺に向けてきた。

「人の名前を訊く前に、自分の名前を先に名乗るってのが礼儀じゃないかなあー？」

確かに、この人の言うことも一理ある。

「悪かった。櫻井俊だ」

「うん、知ってる」

「何で知ってんだよ！？」

「だって、俊くんのISは僕が作ったんだから、名前ぐらいは覚えてるよ」

「……………え？」

俺のISを、この人が作った……？

何でそんな人がこんなところに居るんだ？

「さ、名乗ったぞ。あんたの名前は？」

冷静に振る舞っているように見えるが実際はかなり動揺している。

「プライバシーの侵害になるから教えな―い」

「ずるっ！」

何だこいつ。名乗れ言われたから名乗ったら知ってるって言っし、プライバシーの侵害だから自分は名乗らないとか言っし、喋り方が篠ノ之博士に似てるし。

「まあ、それは冗談なんだけど……教えると色々と厄介だからあだ名なら教えてあげる」

そいつはキャリアバッグの中を確認していた。さっき落としてたから中味ぐちゃぐちゃになってるだろうな。

「で、あだ名って？」

「『ヘカトンケイル』。こんなあだ名考えた奴って絶対に厨二病患者だと思わない？」

「確かに。そんなあだ名を考えた奴は厨二……………」

……………え？」

ヘカトン、ケイル……？

ギリシャ神話の三人の巨人のうちの一人のヘカトンケイルが、世界で有名なIS整備師のヘカトンケイルか？

ヘカトンケイルと名乗った人物はキャリアバッグから『ワルサーPPK』を取り出し整備し始めた。

「いやあね。ISの関係者たちが『あいつならきつとコアを作れるに違いない』って幻想抱いちゃってさー。何故か世界から狙われているから本名なんて無闇に明かせないんだよ。ゴメンネー」

そう言いながら弾倉に『9mmマカロフ弾』を装填。残り二つの

弾倉にも詰め込んだ。

一つの弾倉をワルサーにセット。残り二つは左後ろポケットにしまった。

「取り敢えずよろしく。あ、好きな物はISと日本料理と酢豚。あと剣道とかなー。見る方ね。得意な事はIS整備と射撃と家事。嫌いな物は雨と甘過ぎるもの、苦過ぎるもの。苦手なことは……なんだろー？ 特にこれといったことは無いかなー。あ、因みにこの右目の包帯は昨日猫に引つ搔かれたから巻いただけだよー」

「なげえよっ！ 名前だけで良かったわ！」

「ナイスツツコミ！」

なんだこいつ。ボケ狙いであんな長い自己紹介をしたのか？

「まあ良いや……。で、何であんたは此处に居るんだ？」

「アメリカとイスラエルの共同開発のISの実験があるって言うから乗り込んだんだよー」

「どうやって知ったんだよ？ あれは極秘情報だぞ」

「最初は『ハ』で始まって最後は『グ』で終わるハッキングで知ったんだよー」

「答え言っちゃったよ！ しかも違法行為だし！」

「バレなきゃ大丈夫大丈夫ー」

ワルサーを右後ろポケットにしまったヘカトンケイル。

本当にこいつが俺のISを作ったのか？

「飯持つて来たぞ」

ドアが開いた。

「つ——！」

女性はお盆を片手で持って空いた方の腕を突き出した。その腕から虎模様のISを部分展開した。  
タイガー・ストライプ

「あ、どうも」

ヘカトンケイルは平然と挨拶した。

「誰だ、お前は？」

「んー。ヘカトンケイル」

「証拠は？」

「君に言っても分からないでしょ。本当に僕がヘカトンケイルだと知りたければ――」

ヘカトンケイルは本名不明。つい最近に男だって分かったばかりだ。本当にヘカトンケイルだと知りたければ……。

「ISをいじくらせるしかない」

「そう。俊くん頭良いねー」

ヘカトンケイルが何故か俺の頭を撫で始めた。無視だ無視。

「お前にISをいじくらせない。その所為でナタルが危ない目に遭っているんだ」

「あれは僕がやったんじゃないよ」

「その証拠はあるのか」

「僕は整備師。ISを使えるような状態に整えておくことが仕事だ。

そんな、暴走するように整備なんかしない。ましてや、僕は『銀の福音』・ゴスベルに指一本触れてすらいらない。整備するにはISに触れなきゃ

いけないから福音を改造するのは不可能だ」

「――貴様」

「お、落ち着いてください」

俺は女性の目の前に立った。

「退け」

「取り敢えず落ち着いてください。熱くなっただって何も解決はしませんよ」

ISを部分展開し、女性の腕を掴んだ。

「……分かった」

女性はISを解除した。

「よかった……」

俺もISを解除した。

「え、と……すみませんが、お名前は？」

「ああ、言っただけだったな。イリス・コーリング。アメリカの代表操縦者だ」

「アメリカ……。ローラと一緒だ」

確かあいつはアメリカの代表候補生だったしな。

「ローラを知っているのか？」

「ええ。同じクラスですし」

「だとしたら君が、櫻井俊か」

「ええ。何で知ってんですか？」

「ローラから話を聞いているからさ」

「へー。因みにどんなことを話しているんですか？」

「それは言えないな」

コーリングさんはお盆を差し出してきたので受け取った。

「何ですか？」

「女の秘密ってやつだ」

「……そうですか」

メツチャ気になる。

「ねえ、俊くん」

ヘカトンケイルが声を掛けてきた。

「何だ？」

「一瞬見たただけけどさー。俊くんのISボロボロだったね」

「……………」

「見てあげるよ。ちょうど彼女に僕がヘカトンケイルってことも証明出来るから一石二鳥だよー」

「本当に、お前が福音をいじくったわけじゃないんだな？」

「だからやってないって」

「そうか……」

「それに、僕の作ったISがどうなっているか気になるから早く見たいんだよね」

ヘカトンケイルは両手をワキワキしていた。

「別に良いぜ」

「本当に！？　ありがとー！」

こうして、ヘカトンケイルの整備が始まった。

## Episode・54（後書き）

次回はついにヘカトンケイルの整備描写が入ります  
上手く書けるかな……

文、キャラの指摘、質問、感想等ありましたらお願いします!!

## Episode・55

「~~~~」

鼻歌をしながら俺のISを整備するヘカトンケイル。右手にはマイクロナニピュレーターグローブを装着し、ディスプレイを複数展開していた。篠ノ之博士と同じ六枚。その六枚とももの凄いスピードでスクロールされ、ヘカトンケイルは全部目を通してはキーボードをカタカタと叩いていた。

「すげえ……」

本当に篠ノ之博士と同等の技術を持つてやがるのか？

「そいや、あんたが俺のISを作ったんだよな？」

「うん。そーだよー」

「何でそんなことしたんだ？」

「楯無さんに頼まれたからだよー」

「はっ？」

「いやねー。世間が冬休み目前って時に電話があってね、『私のISのコアをあげるから俊くんはISを作って』ってお願いされてねー。即効オツケーしたよー」

「待て待て待て。は、姉貴？ 何で姉貴が出て来るんだよ？」

「んー。知り合いだから」

「何で知り合いなんだよ？」

「そこは言えないなー。ハッキリ言っちゃうと、僕の本名を知ってるのって東さんと千冬さん、そして楯無さんの三人だけなんだよねー」

俺は少し、同情した。

世界の人口は約六十億人。その中でたった三人しかこいつの本名を知らない。

全ては幻想を抱いたIS関係者の所為。その所為で世界から狙われてしまい、逃げ続ける日々を送っているんだ。

「話を戻すね。それで、楯無さんから『モスクワの深い霧』<sup>グストイ・トゥマン・モスクヴェ</sup>のコアをもらったんだよ。勿論初期化したのをね」

話ながらも仕事をしているヘカトンケイル。

「……………」

その手が急に止まった。

「どうしたんだ？」

「いや、ちよつとね……………」

キーボードから手を離れたヘカトンケイル。少し考え事をしてるみたいだ。

「まさか、ねえ……………」

ヘカトンケイルが目を閉じた後、ディスプレイの枚数が増えた。その数約五十枚。

「二人とも、今から面白いのを見せてあげるよ」

俊とイリースは頭の上に『？』が浮かんでいた。

ヘカトンケイルはそれを面白そうに見た後、行動に移った。

「っっ——！！」

二人はヘカトンケイルの行動を見て驚いた。

手が、増えている。

その数は全部で左右それぞれ五十本で計百本の手。

「確かに、ヘカトンケイルの名に相応しいな……」

イリースは呟いた。

「褒め言葉と受け取っておくよ」

ヘカトンケイルは右目を作動させ、全部の腕を使ってISの調整を始めた。

ヘカトンケイルの左腕に付けられている『擬似ISアーム』、作業用疑似IS義手『ワンハンドレット・カントレット百手機甲』と右目に埋め込まれている『擬似ISハイパーセンサー』。その二つをフルに使っていた。

右目に埋め込まれた『擬似ISハイパーセンサー』は文字通りハイパーセンサーを似せたもの。しかしその機能は本物さながら。ヘカトンケイルはその右目で囲むように出したディスプレイを見て、そのたった一つの脳で処理していた。

（誰が入れたのか知らないけど、取り除けないことはないね）

ヘカトンケイルは閃迅にあつたバグを取り除いていた。

そのバグとは、ヘカトンケイルが開発した対IS用ウイルスプログラム。その発展型だった。

そのバグは閃迅の武器の《光切》と《名称不明》の二つと閃迅のワンオフ・アビリティ むしは単一仕様能力を蝕んでいた。

「何か問題でもあつたのか？」

「いや、大丈夫。こんなの蚊に刺されるよりも痛くないから」

俊の質問に答えながらも、その手は休まることはなかった。

ヘカトンケイルが作業をして二時間。

「ふう……」

ヘカトンケイルが息を吐いた。その後、ディスプレイと腕をしまった。

「終わったのか？」

「うん、まあね……」

ヘカトンケイルは疲れたような顔をしていた。

実際人間はどんなに頑張っても十五分しか集中出来ない。しかしヘカトンケイルは休むことなく二時間ぶっ続けで集中していた。脳が疲れないわけがない。

「さ、試運転といこうか」

「何の？」

「閃迅の新たな武器と、ワンオフ・アビリティー単一仕様能力の試運転だよ」

## Episode・55（後書き）

期待していた読者、本当にすみません  
自分にはあれが限界です

ついに次回は名称不明のあの武器が登場

感想、よろしくお願いします

## Episode・56

空母の滑走路——甲板の上に立っていた俺。その隣にはヘカトンケイルがついていた。

「俊くん、新たな武器を展開してみな—」

俺はヘカトンケイルの指示に従い武器リストから新たな武器を呼び出す。

新たな武器の名前は《百雷》<sup>ひゃくらい</sup>。全距離対応の武器だった。

その右腕に百雷が現れた。見た感じスナイパーライフルだ。

「じゃあ、これ撃ち落としてみて」

ヘカトンケイルは黒いターゲットを五枚浮遊させた。

百雷とハイパーセンサーを接続。スコープを覗き、五百メートル先にあるターゲットを一機撃ち落とす。その調子で五枚打ち抜いた。「上手い上手い。あつという間に五枚打ち抜いちゃったね—。じゃあ次は、近・中距離モードに切り替えよ—」

言われるがままに選択。

——百雷、近・中距離モードに切り替え。

百雷の形が変わり、リボルバーにナイフを付けたような武器になった。

「じゃあまた撃ち落としてね—」

再び黒いターゲットを五枚浮遊させるヘカトンケイル。

「だいぶ慣れたみたいだね—」

試運転をして数分。ヘカトンケイルがそんなことを言った。

「百雷の遠距離モードの射程範囲は広いから、此处から福音まではギリギリで射程圏内だから」

「は？」

ちよい待て、六千キロ先だぞ。そんなのが可能なのか？

「そろそろこの場を離れなくちゃいけないからこの辺で……」

ヘカトンケイルはキャリーバッグを持ち、空母から飛び降りた。

「お、おい！？」

「じゃーねー」

そのまま義手を足場にして、歩いていた。まるで空を歩いているみたいだった。

「何だったんだ、一体……」

百雷を遠距離モードに切り替え、福音に照準を合わせた。

元々ISは宇宙空間での稼働を想定したもの。何万キロと離れた星の光で自分の位置を確認するためだから、この程度は当たり前なのか？

福音は胎児のように丸まっており、膝を抱くように丸めた体を守るように頭部から伸びた翼が包んでいた。

俺は福音に銃口を向け、引き金を引いた。

不意に福音が顔を上げる。

次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こした。

「初弾命中。続けて砲撃を行う！」

福音から五キロ離れた場所に浮かんでいるIS『シュヴァルツェア・レーゲン』とラウラは、福音が反撃に移るよりも早く次弾を发射した。

（敵機接近まで……四千……三千——くっ！ 予想よりも速い！）

あっという間に距離が千メートルを切り、福音がラウラへと迫る。その間もずっと砲撃を行っているものの、福音は翼から放たれるエネルギー弾によって半数以上を撃ち落としながらラウラへと接近していた。

「ちいっ！」

三百メートル地点からさらに急加速を行い、ラウラへと右手を伸ばす福音。

ビュンッ——！

何処からともなく飛んできたレーザーが、福音の体に当たった。

福音は動きを止め、辺りを見渡した。

その隙を狙ってセシリアがステルスモードからの強襲を行った。

セシリアは手にしている大型B Tレーザーライフル《スターダスト・シューター》で福音を捉えて撃った。

『敵機Bを確認。排除行動へと移る』

「遅いよ」

セシリアの射撃を避ける福音を、真後ろからシャルロットが襲った。

ショットガン二丁による近接射撃を背中に浴び、福音は姿勢を崩した。

けれどもそれも一瞬のことで、すぐさまシャルロットに対して《シルバー・ベル銀の鐘》による反撃を開始した。

「くっ。このくらいじゃ落とせないよ！」

福音に当たるまで二十秒か。以外と速いな。

手にしている百雷を見て思った。ヘカトンケイルが言う通りこいつの射程範囲は広いみたいだ。それに、六千キロも離れていても威力はそれほど落ちなかった。

再びスコープを覗き、福音を狙う。その付近には両肩の衝撃砲をファン開く鳳が居た。

ヘカトンケイルの配慮なのだろうか、この百雷の遠距離モードは敵をロックして自動で照準を合わせてくれるみたいだ。

俺は練習がてら福音をロック。照準を合わせ、一瞬止まったところ

ろを狙い撃った。

ざあ……。ざああん……。

此処は……？

遠くから聞こえる波の音に誘われるまま、俺は何処ともつかぬ砂浜の上を一人歩いていった。

足を進めるたび、さく、さく、と足元の白砂が澄んだ音を立てた。足の裏に直接感じる砂の感触と熱気。海から届く潮の匂いと波の音。それに心地好い涼風と、じりじりと照り付ける太陽。

夏……。なのか？ 今は……。

此処が何処で、今が何時なのか分からない。

俺は何故か制服を着ていて、そのズボンの裾を折り返した状態で素足のまま砂浜を歩いていた。手には、何時脱いだのか靴がある。

「――。――。――。」

ふと、歌声が聞こえた。

とても綺麗で、とても元気な、その歌声。

俺はなんだか無性に気になって、声の方へと足を進める。

さくさく。

さくさくと。

足元の砂が軽快に鳴る。

「ラ、ラ、ラ、ラララ」

少女は、そこに居た。

波打際、わずかにつま先を濡らしながら、その子は踊るように歌い、謡うように踊る。

その度に揺れる白い髪。輝き、眩いほどの白色。

それと同じワンピースが、風に撫でられて時折ふわりと膨らんでは舞った。

ふむ……。

俺は何故だか声を掛けようとは思わず、近くにあった流木へと腰を下ろす。その木は随分前に打ち上げられたのか、樹皮ははげ落ち、色も真っ白になっていた。

白いいびつなソファ―に座って、俺はぼーっと少女を見つめた。ざあざあと波の音が聞こえる。

時折吹く風は心地好くて、俺はただただぼんやりと目の前の光景を眺めた。

## Episode・56（後書き）

福音と一夏ラバーズの戦闘、会話はアニメの方を参考にしています  
原作だと紅椿以外の機体はパッケージによりパワーアップしていて  
色々な説明がありました但那れも殆どカットです

感想よろしくお願いします

## Episode・57

「畜生っ！」

さつきから百雷で福音を狙い撃っているが全然当たらない。  
最初に当たったのはマグレなのか？

オートロックにより福音は見失うことはないが、撃った先にはもう福音は居ない。オートロックをやめ先を読んで撃とうと考えたが、早過ぎて見失う可能性がある。

ただがむしやりに撃っているだけ。皆に当たる可能性があるし、邪魔になるだけだ。

そのうち俺は、撃つのを躊躇った。

「ちよっ、何なのよ！ このビーム！？」

福音に襲い掛かる鈴音。しかし俊が放つ攻撃が邪魔となり、近付けない。

「出力はわたくしと同じくらいですわね」

ビットで攻撃するセシリアはすぐに熱量を計算した。

「ドイツ軍から連絡だ。六千キロ先に櫻井が居るとのことだ」

「俊が生きてたの！ くっ——！」

ラウラの声に反応するシャルロット。福音の攻撃をなんとか防いだ。

「はああああっ！」

福音の懐に入った筈。天月と空裂で福音を攻撃した。

（獲った——！！）

そう思った刹那、福音は左右両方の刃を手の平で握り締めた。

「なっ——！！？」

刀に引っ張られ、筈が両手を広げた無防備な状態を晒す。そして

そこに、福音の翼が砲口を開放して待っていた。

「箒！ 武器を捨てて離脱しろ！」

しかし、箒は武器を手放さない。

（……此処で引いて、何のための……何のための力かっ！！）

エネルギー弾が放たれる寸前、紅椿のつま先の展開装甲が箒の意志に応えるように開き、エネルギー刃を発生させる。

「たあああっ！！」

踵落しのような格好で、エネルギー刃の斬撃が決まり、福音の左の翼が切れた。

それと同時に、俊が最後に放ったレーザーが偶然福音の右の翼を撃破。

両方の翼を失った福音は、崩れるように海面へと堕ちた。

「はっ、はあっ、はあっ……！！」

「無事か！？」

珍しくラウラの慌てた声を聞きながら、箒は乱れた呼吸をゆっくりと落ち着けていく。

「私は……大丈夫だ。それより福音は——」

「私たちの勝ちだ」と誰かが言おうとした瞬間、海面が強烈な光の球によって吹き飛んだ。

「！？」

球状に蒸発した海は、まるでそこだけ時間が止まっているかのようにへこんだままだった。その中心、青い雷を纏った『銀の福音』シルバリオ・「スベル

が自らを抱くかのようにうずくまっていた。

「！？ まずい！ これは——『セカンド・シフト第二形態移行』だ！」

ざあ、ざあん……。

さざ波の音を聞きながら、俺は飽きもせず女の子を眺めていた。その歌は、その踊りは、何故だか俺をひどく懐かしい気持ちにさ

せる。

……あれ？

ところが、ふと気が付くと少女の歌は終わっていた。  
踊りもやめて、少女はじいっと空を見つめている。

俺は不思議に思っ、座っていた木から離れて少女の隣へと向かう。

「ざあ、ざあ、と。」

波打際までやってきた俺を、涼しい水の調べが濡らす。

「どうかしたのか？」

声を掛けるが、少女はまだじいっと空を見つめたまま動かない。

俺もなんとなく空を眺めると、ふと少女の声が耳に届いた。

「呼んでる……行かなきゃ」

「え？」

隣に視線を戻すと、もうそこに少女の姿はなかった。

——あれ？

きよろきよろと左右を見るが、もう人影は見当たらない。歌も、聞こえない。

「ざあざあ、ざあざあと。波の音だけが。」

「うーん……」

俺は仕方なく木のソファアに戻ろうと体を反転させる。

「力を欲しますか……？」

すると——背中に声を投げ掛けられた。

「え……」

急いで振り向くと、波の中——膝下までを海に沈めた女性が立っていた。

その姿は、白く輝く甲冑を身に纏った騎士さながらの格好だった。  
大きな剣を自らの前に立て、そね上に両手を預けている。

その顔は目を覆うガードに隠されて、下半分しか見えない。

「力を欲しますか……？ 何のために……」

「ん？ んー……難しいことを訊くなあ」

「ざあ、ざあんと。」

波だけが俺と女性の間にある。

「……そうだな。友達を——いや、仲間を守るためかな」

「仲間を……」

「仲間をな。なんていうか、世の中って結構色々戦わないといけないだろ？ 単純な腕力だけじゃなくて、色んなことでさ」

俺は、いま自分の中でもまとまっていけないことなのに、妙に饒舌に喋っていた。

話ながら、「ああ、俺ってそう思っていたのか」と自分に驚きつつ、言葉は続いていく。

「そういう時に、ほら、不条理なことってあるだろ。道理のない暴力って結構多いぜ。そういうのから、出来るだけ仲間を助けたいと思う。この世界で一緒に戦う——仲間を」

「そう……」

女性は、静かに答えて頷いた。

「だったら、行かなきゃね」

「えっ？」

また後ろから声を掛けられる。

振り向くと、白いワンピースの女の子が立っていた。

人懐っこい笑み。無邪気そうな顔で、じいっと俺を見つめている。

「ほら、ね？」

手を取られて、にこりと微笑み掛けられる。

俺はひどく照れくさい気持ちになりながら、

「ああ」

と頷いた。

「な、なんだ？」

すると、いきなり変化が訪れた。

——空が、世界が、眩いほどに輝きを放ち始める。

その真っ白な光に抱かれて、目の前の光景が徐々に遠くぼやけていく。

夢の終わり、なんて言葉が不意に浮かんだ。  
ああ、そういえば……。  
あの女性は誰かに似ていた。

白い——騎士の女性。

「……そうだよ」

何で遠距離で戦ってたんだよ、俺。普段から近距離で戦ってたんだから急に遠距離で戦うなんて馬鹿な話じゃないか。

新しい武器で浮かれてたんだ。今まで通り戦えば、あいつらにも迷惑が掛からない。早く皆の元に帰れる。

早く気付かなかった俺は、相当浮かっていたんだ。

「コーリングさん」

「何だ？」

「ケータイ貸して下さい。皆心配してるだろうから、声だけでも聞かせてやらないと」

「分かった……」

ケータイを借り、ボタンを打った。

## Episode・57（後書き）

次回で白式セカンド・シフト、閃迅のワンオフ・アビリティが出る予定です

感想、誤字の報告等ありましたらよろしくお願いします

## Episode・58

「!? まずい! これは——」セカンド・シフト『第二形態移行』だ!」

ラウラが叫んだ瞬間、まるでその声に反応したかのように福音が顔を向ける。

無機質なバイザーに覆われた顔からは何の表情も読み取れない。

けれど、そこに確かな敵意を感じて、各I.Sは操縦者へと警鐘を鳴らす。

しかし——遅かった。

『キアアアアア……!!』

まるで獣の咆哮のような声を発し、福音はラウラへと飛び掛かる。  
「なにっ!？」

あまりの速さにその動きに反応できず、ラウラは脚を掴まれる。

そして、切断された頭部から、ゆっくり、ゆっくりと、まるで蝶がサナギからかえ孵るかのようにエネルギーの翼が生えた。

「ラウラを離せえっ!」

シャルロットはすぐさま武器を切り替えて近接ブレードによる突撃を行う。

けれど、その刃は空いた方の手で受け止められてしまった。

「よせ! 逃げろ! こいつは——」

その言葉は最後まで続かず、ラウラはその眩いほどの輝きと美しさを合わせ持ったエネルギーの翼に抱かれる。

刹那、あのエネルギー弾雨を零距离で喰らい、ラウラは海へと墜ちた。

「ラウラ! よくもっ……!」

ブレードを捨て、シャルロットはショットガンコイルを呼び出す。福音の顔面へと銃口を当て、引き金を引いた。

ドンッ!

しかし、その爆音はショットガンのもではなかった。

胸部から、腹部から、背部から、装甲がまるで卵の殻のようにひび割れ、小型のエネルギー翼が生えてくる。それによるエネルギー弾の迎撃がショットガンを吹き飛ばし、シャルロットの体も吹き飛ばした。

「な、何ですの！？ この性能……軍用とはいえ、あまりに異常な——」

再び高機動による射撃を行おうとしていたセシリアの、その眼前に福音が迫る。『瞬間加速<sup>イグニッション・ブースト</sup>』——それも、両手両足の計四ヶ所同時着火による爆発加速だった。

「くっ！？」

長大な銃は接近されると弱い。距離を置いて銃口を上げようとするが、その砲身を真横に蹴られてしまう。

そして、次の瞬間には両翼からの一斉射撃。反撃らしい反撃も出ず、セシリアは蒼海のへと沈められた。

「私の仲間を——よくも！」

急加速によって接近した箒は、続けざまに斬撃を放ち続ける。

展開装甲を局所的に用いたアクロバットで敵機の攻撃を回避、それと同時に不安定な格好からの斬撃をブーストによって加速させる。「うおおおおっ！」

互いに回避と攻撃を繰り返しながらの格闘戦。徐々に出力を上げていく紅椿に、わずかに福音が押され始める。

（いける！ これならっ——）

必殺の確信を持って、雨月の打突を放つ。しかし——  
キュウウウン……。

「なっ！ また、エネルギー切れたと！？ ——ぐあっ！」

その隙を見逃さず、福音の右腕が箒の首を捕まえる。

そして、ゆっくりとその翼が箒を包み込んでいた。

「ぐっ、うっ……！」

ギリギリと締め上げられ、圧迫された喉から苦しげな声が漏れる。福音の手は硬く箒の首を掴んで離さず、さらにはエネルギー状へ

と進化した『銀の鐘<sup>シルバー・ベル</sup>』が紅椿の全身を包み込んでいた。

（これまでか……。情けない……）

ぽうつと光の翼が輝きを増していく。一斉射撃への秒読みが始まる中、箒の頭の中にはただ一つのことだけが浮かんでいた。

——会いたい。

——一夏に、会いたい。

——すぐに会いたい。今会いたい。

——ああ、ああ、会いたい。

「いち、か……」

知らず知らず、その口からは一夏の名前を呼ぶ声が出ていた。

「一夏……」

さらに輝きを増す翼に、箒は覚悟を決めてまぶたを閉じる。

イイイインツ……！！

『！？』

突然、福音は箒を掴んでいた手を離す。

いきなりの出来ごとに混乱している箒が、瞳を空けた時に見たのは強力な荷電粒子砲による狙撃を受けて吹き飛ぶ福音の姿だった

（な、何が起きて——）

戸惑う箒のつ身に届いたのは、さつきからずっと願い思つて止まない声だった。

「俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ！」

箒の視線の先には、白く、輝きを放つその機体がある。

「あ……あ、あつ……」

じわりと目尻に涙が浮かぶ。

わずかに潤んだ視線に見えるのは、白式第二形態・雪羅を纏った一夏だった。

「一夏っ、一夏なのだな！？ 体は、傷はっ……！」

慌てて声を詰まらせる箒の元へと飛んで、一夏は答える。

「おう。待たせたな」

「よかつ……良かった……本当に」

「何だよ、泣いてるのか？」

「な、泣いてなどいないっ！」

ぐしぐしと目元をぬぐう箒に、一夏は優しく頭を撫でてやる。

「心配掛けたな。もう大丈夫だ」

「し、心配してなどっ……」

一夏は箒の頭を撫でながら、ポニーテールではないその髪型が気になっていた。

「ちょうど良かったかもな。これ、やるよ」

「え……？」

一夏は持つて来たものを箒に渡した。

「り、リボン……？」

「誕生日、おめでとうな」

「あっ……」

七月七日。今日が箒の誕生日。

「それ、せつかくだし使えよ」

「あ、ああ……」

「じゃあ、行ってくる。——まだ、終わってないからな」

言うなり、一夏は福音へと急加速、正面からぶつかった。

「再戦と行くか！」

《雪片二型》を右手だけで構え、斬りかかった。

部屋の空気が重い中、突然簪のケータイが震えた。

簪はケータイを取り、開いた。ディスプレイに写っているのは非通知の文字。

簪は電話に出た。

「はい……」

『なんつう暗い声だしてんだよ、お前……』

「俊！？」

俊の名前を聞いた瞬間、周りの人が驚いたような顔をした。

『悪いな、心配掛けて』

「……ホント、心配した」

『今から帰る。だから、もう少し待っていてくれ』

「うん……待ってる」

電話は切れた。

「逃がさねえ！」

一メートル以上に伸びたクロウが福音の装甲を斬る。シールドエネルギーに阻まれはしたが、その一撃は確実に福音を捉えていた。

『敵機の情報を更新。攻撃レベルAで対処する』

エネルギーの翼を大きく広げ、さらに胴体から生えた翼を伸ばす。そして次の回避の後、福音の掃射反撃が始まった。

「そう何度も喰らうかよ！」

俺は避けようとせず、左手を構えて前へと飛ぶ。

——雪羅、シールドモードへ切り替え。相殺防御開始。

キンッ！ という甲高い音を鳴らして、左腕の雪羅が変形する。

それから光の膜が広がって、福音の弾雨を消していく。

そう、これはつまり、エネルギーを無効化する零落白夜のシールド。

当然エネルギーの消耗は激しいが、完全に攻撃を無効化できる以上、圧倒的にこちらが有利になった。福音に実弾兵器はないのは、スペックカタログで確認済みだ。

「すまん。回復に手間取った」

「さあ、反撃のお時間ですわよ」

回復したラウラとセシリアがこちらに飛んで向かってきた。

「ラウラ、セシリア！」

「一夏、さっさと片付けちゃおうよ」

「エネルギーは十分。僕たちの心配はいらないよ」

「鈴、シャル！」

四人の状態は万全。

それを確認した俺は福音の元に向かった。

（私は、ともに戦いたい。あの背中を守りたい！）

箒は強く、強く願った。

そして、その願いに応えるように、紅椿の展開装甲から赤い光に混じって黄金の粒子が溢れ出す。

「これは……？」

ハイパーセンサーからの情報で、機体のエネルギーが急激に回復していくのが分かる。

——『絢爛舞踏』、発動。展開装甲とのエネルギーバイパス構築……完了。

項目に書かれているのはワンオフ・アビリティの文字だった。

（まだ、戦えるのだな？ ならば——）

一夏から渡されたりボンで髪を縛り、気を引き締める箒。

（ならば、行くぞ！ 紅椿！）

赤い光に黄金の輝きを得た真紅の機体は、夕暮の空を裂くように駆けた。

——エネルギー残量二十パーセント。予測稼働時間、三分。

（やばい、エネルギーが……！）

福音の連続射撃を受けている一夏。徐々に白式のエネルギーが削られていく。

すると、紅椿のビットが福音の気をそらし、その隙を逃さなかつ

たシャルロットとラウラの砲撃が始まった。

「一夏、これを受け取れ！」

その間に篝の——紅椿の手が、一夏の白式へと触れる。

その瞬間、一夏の全身に電流のような衝撃と炎のような熱が走った。

「な、何だ……？ エネルギーが——回復！？」

「一夏、奴を倒すんだ！」

「おう、行くぞ」

一夏の言葉に従い、全員が福音に奇襲をかけた。

「ありがとうございます、コーリングさん」

イリースにケータイを返す俊。

「それ、呼びにくいだろ。だからファーストネームで良いぜ」  
受け取ったイリースは言った。

「なら、イリースさん」

「よし。それで、行くんだな、仲間の元に」

「はい」

俊は百雷をしまった。

「今から戦いますよ、あいつらと」

「そうか……。ナタルを頼む。絶対に助けてくれ」

「絶対に助けますよ」

——『疾風迅雷』、発動。展開装甲、オープン。

「そっか。それなら、必ず成功するおまじないをしてやろう」

突然イリースの唇が俊の頬に触れた。

「頑張れよ、黒いナイトくん」

「へ？」

「じゃあな」

イリースはその場を離れた。

わけが分からないまま、俊は単一仕様能力を発動。一気に加速した。  
ワンオフ・アビリティー

その姿は閃迅の名に相応しく、『光の如き速さ』だった。

福音と紅椿の長い攻防が続いていた。

「一夏、今だ！」

二刀で福音を捉えた筈。

「うおおおおっ！」

その隙を狙って一夏が突撃する。

しかし、福音は両翼から筈を攻撃。最後に蹴りを入れその場から離れた。

今度は白式との攻防。福音の弾雨を躲す一夏。

「ラウラ、頼む」

「任せろ！」

ラウラが装備している八十口径レールカノン《ブリッツ》。それが火を拭き福音に向かって攻撃した。

気を取られ福音はラウラに顔を向ける。その隙に一夏が再び斬りかかるが、紙一重で回避。その後、ラウラに向かって攻撃した。

その間にセシリアのビットが福音に襲い掛かる。背中に一発喰らった福音。

「わたくしが此処におりましてよ！」

セシリアの方に向いていた福音は鈴音の衝撃砲を喰らった。

「一夏、もう一回よ！」

福音は一回転し、全方向にエネルギー弾の雨を降らせた。

「鈴！」

反応に遅れた鈴音を助けるため、『イグニッション・ブースト瞬時加速』で鈴音の元に急いだシャルロット。

「一夏急いで、もう持たない！」

リヴァイヴ専用防御パッケージ『ガーデン・カーテン』でエネルギー弾を防ぐがそれも長くは持たない。

（畜生。今行つて間に合うのか？）

一夏と福音との距離はかなりある。『イケニッション・ブースト瞬時加速』で向かつても気付かれて逃げられるだけだ。

「一夏！」

その時、オープン・チャンネルから行方不明者の声が聞こえた。

「しゅ——！？」

名前を全部言う前に、一夏の背中を掴む俊。

「この速さなら大丈夫だろ」

「ああ、サンキュー！」

俊は一夏を前に突き出した。

「今度は逃がさなえっ！」

一夏は左手に装備している《雪羅》を突き出し、福音を捉えた。海面を滑るように直進し、一瞬で浜辺に押し付けられた福音。慣性の法則に逆らえなかった俊はそのまま崖に激突した。

なんとか堪えた一夏は《雪片似型》を福音に突き刺していた。福音は雪片式型の刃を片手で掴み、空いてる方の手の指先が一夏の喉笛に食い込んだ。喉を圧迫されながらも一夏は雪片に力を入れ、エネルギーをゼロにした。やっと銀色のISは動きを停止した。

「終わったのか……」

ワンオフ・アビリティ

閃迅の単一仕様能力『疾風迅雷』。その速さは異常でハワイ沖にあった空母から此処までの時間は十秒。秒速六百キロだった。それだけの速さを出す為のエネルギーはかなり必要で、閃迅のエネルギーはゼロ。俊の体にもう閃迅は纏っていなかった。

「終わったな」

一夏の元に寄った皆。筈がそんなことを呟いた。

「ああ……。やっと、な」

その言葉に反応した一夏。

シルバリオ・ゴスベル

エネルギーがゼロになった銀の福音の装甲はなくなり、一人の女

性の姿だけになった。

## Episode・58（後書き）

最後の戦闘はアニメの方にしました

多分あと二、三話でぐらいで三巻の内容も終わるのかな……？  
長かった……

余談ですが、三巻の内容は二番目に書きたかったお話です  
一番目は……簪好きなら分かりますね

四巻ですが、これじゃ絶対に大学に合格しないので、四巻からは  
ペースダウンで……

三巻までは毎日投稿しますが、四巻からは不定期で……

感想よろしくお願いします！！

「作戦完了——と言いたところだが、櫻井は命令無視、他の者は独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」  
「……はい」

俺たちは帰還。とくに俺は行方不明者扱いだったらしく、歓迎されるかとおもいきやそれは冷たいものだった。

腕組で待っていた織斑先生に俺たちはきつく言われ、今は大広間で全員正座。この状態でもう三十分は過ぎただろう。オルコットの顔色が真っ赤から真っ青になりはじめた。

「あ、あの、織斑先生。もうそろそろそのへんで……。け、怪我人も居ますし、ね？」

「ふん……」

怒り心頭の織斑先生に対して、山田先生はおろおろわたわたししている。さっきから救急箱を持ってきたり、水分補給パックを持ってきたりと忙しい。

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全員見せてくださいな。——あっ！　だ、男女別ですよ！　分かってますか、織斑くん、櫻井くん!？」

……分かってるし、当たり前だろ。

なんか『脱いで』の辺りで女子が自分の体を隠したのが軽く傷ついた。そんなジロジロ見ねえよ。

「それじゃ、皆さんまずは水分補給をしてください。夏はそのあたりも意識しないと、急に気分が悪くなりますよ」

返事をして、俺たちはスポーツドリンクのパックを受け取った。

「ってて……。うあ、口の中切れてるな」

「大丈夫かよ？」

俺は一気にスポーツドリンクを飲んだ。

「……………」

「な、何ですか？ 織斑先生」

じーっと一夏を睨む織斑先生。また怒られるのか？

「……しかしまあ、よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな」

「え？ あ……」

予想外の言葉を聞いた。なんか照れくさそうな顔をしていたように見えたが、すぐに背中を向けられてちゃんと表情が見えなかった。

「……………」

俺は女子一同の視線に気付き、大広間の出口に向かった。三十分正座は流石に効いたらしく、立った時ふらついてしまった。

「あの、織斑くん？ みんなの診察をしますから、ええと——」

「……………」

俺が出た後一夏が慌てて出てきた。

「ふう……………」

一夏は閉じた襖に背中を預けて深く息を吐いた。

診断が終わり部屋に向かう途中、簪に会った。

「……………」

会ったは良いが、俺らは黙ったままだった。

「……………」

「え……………」

「帰ってきたんだから、こう言うのは当たり前でしょ」

「あ、ああ……………」

目を逸らし頭を掻いた。掻いた後、再び簪の目を見た。

「ただいま」

「お帰り」

微笑んだ簪。

やっと戦いが終わった。そう実感した。

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めても四十二パーセントかあ。まあ、こんなところかな？」

空中投影ディスプレイに浮かび上がった各種パラメーターを眺めながら、その女性は無邪気に微笑む。

子供のように。天使のように。

月明かりが照らすその顔は、何時もと変わらない。

何時だってどこか退屈そうな顔の、篠ノ之束その人だった。

「んー……ん、ん」

鼻歌を奏でながら、別のディスプレイを二枚呼び出す。そこでは白式第二形態の戦闘映像が流れているディスプレイと閃迅のデータが映っているディスプレイだった。

それを眺めながら、束は岬の柵に腰掛けた状態でぶらぶらと足を揺らす。

目の前にはただの海が広がり、高さは三十メートル近い。落ちれば無事では済まないその場所でも、束の表情はけして変わることはない。

「は。それにしても白式には驚くなあ。まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで――」

「――まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー001にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

森から音もなく千冬が姿を現す。漆黒のスーツに身を包んだその姿は、夜の闇全てを引きつれているかのような静かな威厳に満ちていた。

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

二人は互いの方を向かない。背中を向けたまま、束はさっきまでと同じようにぶらぶらと足を揺らし、千冬はその身を木に預ける。

どんな顔をしているのか、別に見なくても分かる――。

そんな確かな信頼が、二人の間にはあった。

「ところでちーちゃん、問題です。白騎士は何処に行ったんでしょうか？」

「……白式を『しろしき』と呼ばば、それが答えなんだろう？」

「ぴんぽーん。流石はちーちゃん。白騎士を乗りこなしたただけのことはあるね」

かつて『白騎士』と呼ばれた機体は、そのコアを残して解体され、第一世代作成に大きく貢献した。そのコアは、とある研究所襲撃事件を境に行方が分からなくなり、いつしか『白式』と呼ばれる機体に組み込まれていた。

「それで、うふふ。例えばの話、コア・ネットワークスで情報をやりとりしていたとするよね。ちーちゃんが一番最初の機体『白騎士』と二番目の機体『暮桜』が。そうしたら、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティを開発したとしても不思議じゃないよねえ」

「……………」

千冬は、答えない。

しかしそんな反応はお構いなしに、束は続ける。

「それにしても、不思議だよねえ。あの機体のコアは分解前に初期化したのに、何でなんだろうねー。私がしたから、確実にあのコアは初期化されたはずんだけどね」

「不思議なこともあるものだね」

確かにそれについては、わからないというのが本当のところである。

それは、束にとっても同じ。

「……そうだな。私も一つ例え話をしてやろう」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいねえ」

「例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違わせることが出来るとする。そこで使われているISを、その時だけ動けるようにする。そうすると、本来男が使えないはずのISが

使える、ということになるな」

「ん〜？ でも、それだと継続的に動かないよねえ」

「そうだな。お前はそこまで長い間同じものに手を加えることはないからな」

「えへへ。飽きるからね」

「……で、どうなんだ？ とある天才」

「どうなんだろうねー。うふふ、実のところ、白式がどうして動くのか、私にも分からないんだよねえ。いっくんはIS開発に関わってないはずなのにね」

「ふん……。まあいい。次の例え話だ」

「多いねえ」

「嬉しいだろう？」

「違うないね」

「とある天才が、大事な妹の晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、そして何処かのIS暴走事件だ」

東は答えない。そして、千冬は言葉を続ける。

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ」

「へえ、不思議な例え話だねえ。凄い天才が居たものだね」

「ああ、凄い天才が居たものだ。しかし、その天才でも恐れているものが居た」

「なに？」

「とある天才の弟子だ」

「……………」

「その弟子は、天才が作った高性能機よりも先に全身に展開装甲を付けたISを開発。天才は、弟子にとあるウイルスを作らせ、それを元に発展型を作り、弟子の作ったISに投入。それで弟子が作った展開装甲の機能を停止させ、天才が開発した高性能機が世界初の全身に展開装甲と付けたISとして世に出た」

「ふーん。本当に凄い天才だね。その弟子には何年も会っていない

のにどうやって入れたんだろうね」

「ああ、本当に凄い天才だ。かつて、十二カ国の軍事コンピュータを同時にハッキングするという歴史的な事件を自作した、天才がな」

東は答えない。千冬は、言葉を続けない。

「ねえ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「そうなんだ」

岬に吹き上がる風が、一度強くうなりを上げた。

その風の中、何かを呟いて……東は消えた。

「……………」  
千冬は息を吐き出して、後頭部を押し付けるように木に寄り掛かる。

その口元から漏れる声は、潮風に流れて消えた。

「で、結局何だったんだ？」

「教えてくれたって良いじゃない」

場所は大宴会場。瑞穂と明音が座敷、他の者はテーブル席で食事していた。

事件についてローラと瑞穂が訊いた。

「……ダメ。機密だから」

「大体、私たちだって詳しいこと聞いてないんだし」  
シャルロットと鈴音が答えた。

「そうですか……」

リリーが残念そうな顔をして、箸を置いた。

「それに、詳細な情報を知ればお前たちにも行動の制限がつくぞ。良いのか？」

「それはやだなあ。仕事に影響が出そう……」

それ以降事件のことには触れないことにした四人。

「あら？　一夏さんと篤さんは……？」

「そう言えば、俊と簪も居ないな……」

一夏と篤、俊と簪が居ないことに気が付いたセシリアとローラ。

八人が心配している中、四人は……。

## Episode・59（後書き）

多分次で三巻も終わりかな……

感想よろしくおねがいします!!

## Episode・60

海から上がって近くの岩場で一休みしている俺。  
仲間を守れたよな、俺は……。

「い、一夏……?」

「うん?」

突然名前を呼ばれて俺は振り向いた。

そこに居たのは、月明かりに照らされた、水着姿の箒だった。

「箒、お前も泳ぎに来たのか?」

「少し頭を冷やしたくてな。そうか、お前も来ていたのか……」

「あ……」

俺は箒の水着姿に見入ってしまった。

白い水着——それも、ほ気にしては珍しいというか、絶対に着な  
そうなビキニタイプ。

縁の方に黒いラインが入っていたそれは、かなり肌の露出面積が  
広く——なんというか、その、セクシー……そう、セクシーだった。

「あ、あんまり、見ないでほしい……」

「すつ、すまん」

慌てて向きを元に戻した。

数秒だったがはつきりと見えた箒の水着姿は鮮烈で、脳裏に焼き  
付いてしまった。

箒は俺と一メートルほど間を開けて隣に座った。どうしても気に  
なってしまうって意識はますます乱れていった。

「あ……。えーと……だな」

「う、うん……」

何故だかドキドキと高鳴ってしまう胸を極力意識しないようにし  
ながら、俺はどんな話をしようか考えた。

「そいや髪大丈夫かな? そうだ——」

「髪大丈夫だったか? ちょっと焼けただろ?」

「あ、ああ。リボンがなくなっただけで、大事ない。そ、それに、リボンも……その、新しいのをもらったしな」

「どうやら気に入ってくれたようだ。それは嬉しいことこの上ない。何にしても良かった。みんな無事に戻れたし。俺の怪我也大したことなかったし」

「本当に大丈夫なのか？ あれほどの怪我也、簡単に回復するとは思えないが……」

「見た目ほどの大怪我也じゃなかったんだろ。だからお前も気にしないでいい」

俺は自分の腹を擦って確認。跡などは全くなく、何にもなかったかのように傷一つなかった。

「よくない！」

「えっ？」

箒は急に大声を出した。

「よくない！ 私の所為で、お前は怪我也をしたんだぞ！ 一歩間違えれば命を落としていたかもしれない！」

言うてから、自分の大声に気付いてはつとする箒。

「だから、簡単に許されると、困るのだ……」

その声が酷くしょんぼりとしていて、俺はどうしたものかと考えた。

どうも責任を感じてるらしいな。

仕方がない……。

「じゃあ箒、今から罰をやる」

「罰？」

「ああ、罰だ。目を閉じる」

「分かった。望むところだ」

箒はぎゅつとまぶたを閉じた。

おれは、その額をびしりと指で弾いた。

「っ……！？」

「ほい、終わり」

「バカにしているのか!？」

「まあ落ち着け。興奮するな」

「だ、黙れ! 私は武士だ! 誇りを汚されて落ち着いてなど――」

「箒……。当たってるんだけど……」

胸が。

「あつ……」

かなり密着していたことに気付いた箒が、俺から離れた。

「その、何だ……。い、意識するのか……?」

自分の胸を隠すように腕を抱きながら俺に訊いてきた。

「はい?」

「だ、だからだな!」

いきなり腕を掴まれてそのまま胸の谷間に引っ張られてしまった。

……。あの、箒……。さん?

「私を、い、異性として意識するのか、訊いているのだ……」

さっきまでの威勢の良さとは打って変わって、ぼそぼそ声で言ってくる箒。その顔は耳まで真っ赤になっていて、恥ずかしそうにしている。

「うん……。まあな……」

勢いに押された訳ではないが、ついつい肯定してしまう。

けれど、近くに遠くに聞こえる波の音、目の前にはセクシーな水着姿の幼馴染み、空から降り注ぐ月明かりとくれば、雰囲気にくらりと来てしまっても可笑しくはない。

それに……。なんていうか、その……。箒は、正直可愛いと思う。

「そうか」

箒は急に目を閉じて唇をやや上向きに突きだした。

え、何やってるんですか、箒さん!?

「……………」

静かに待っている箒の顔は、やっぱり綺麗だった。

まずい……。まずい、まずい……。これは引き込まれる……。

俺が肩に触れると、びくと箒が一度震えた。

それから改めて身を預けてくる筈に、俺はゆっくりと顔を近づけて――

ごつつ。

「ん？」

何だ？

改めて顔を近づけて――

ごつつ。

ああもう、さっきから何だよ！ 何が額にぶつかってんだよ！？  
そう思っただけ目を開けた。

待っていたのはフィン状の浮遊物体。その先端が四角いスリット  
になっている。

「……ブルー・ティアーズ……」

そのビット。――開けなきゃ良かった。

そのビットが俺の額に砲口を押し付けている。

キュイイイ……。

「ぬあああつ！？」

ズバシュツ！

間一髪、Bトレザーがのけぞった俺の髪を焼き切る。

「姿が見えないと思えば……」

「一夏、何をしてるのかな……？」

「――よし、殺そう」

「ふふっ、うふふふふっ」

回避行動で振り向いた俺を待っていたのは、四人の突き刺さるような視線。

因みに順番はラウラ、シャルロット、鈴、セシリア。

「ほ、箒っ！ 逃げるぞ！」

「えっ、あつ。きゃあつ!?!」

いきなり抱きかかえられて悲鳴を漏らす筈だが、ええい構っては  
いられない!

おれは脱兎の如く、専用機持ち四人から逃げた。

「待てっ!」

「お待ちなさい!」

「殺す!」

待つてられるか! 止まったら俺の人生が終わるのは間違いない。

簀と海に向かった俺。初日にあんまり入れなかったから入りたい  
とのことだった。

海に着いた俺らは近くの岩場に腰掛けた。

簀は足だけ海に入れた。俺も足だけ海に入れた。

「そいや、昨日は足すら海に入れてなかったな」

「そうね……」

なんか、この二日間が凄く長く感じたな。皆と遊んで、突然事件  
が起こって、意識を失って目を覚ましたらいつの間にかハワイ沖に  
居たし。

「心配させて悪かったな」

「ホント、心配だった」

水着姿で岩場に腰掛け、足だけ入れる。泳ぎたいが福音に背中を  
やられ、今腰が悲鳴を上げる寸前。当然泳げるわけがない。

「そろそろ戻るか?」

十数分くらい足を入れた俺ら。簀は黙って頷き、一緒に立ち上が  
った。

「きゃっ——!」

「危なっ!」

足を滑らした簪。俺は簪の手を掴んでなんとか止めた――

「うわっ！」

と思ったがそのまま俺は前に転んだ。

「い、っ……」

俺は岩と簪の頭の間で腕を入れ、なんとか簪の頭を守った。

「大丈夫か？」

「大丈夫だけど、その……俊」

俺は何時の間にか簪に覆いかぶさるような格好になっていた。

「わ、悪い――っ」

そのまま腕立ての要領で体を上げ、四つん這いになった。

「「あっ……」」

俺と簪の目が会った。

月明かりに照らされる簪は、何て言うか……その……可愛かった。

「「……………」」

放心状態の俺ら。そんな状況で簪は突然目を閉じた。

こ、これは……雰囲気的に、アレ……ですね。

俺も目を閉じ、顔を近づけた。

ガチャッ！

ん……？ 嫌な予感がして、目を開けて顔を上げた。

俺の目の前に居たのは何故か学園の打鉄を装備した瑞穂と明音とリヴァイヴを装備したローラとリリー。

さっきからサイレンが鳴り響いている。早く逃げなきゃ殺される

……。

黙ったままだったのが恐さを増していた。

『待ちなさい一夏！』

『心配したのに！』

『もう勘弁できませんわ！』

『私の嫁としての自覚が足りん！』

『ひいっ！』

遠くから一夏たちの声が聞こえた。

そんなことは関係ない。俺は簪を抱きかかえ、脱兎の如く逃げた。  
「一夏！」

何故か篠ノ之を抱きかかえて走っている一夏と合流した。

「俊！」

「お前何やってんだよ！？」

「決まってんだろ！ 逃げてんだよ！」

「奇遇だな！ 俺もだよ！」

後ろを見ると八機のISが……。捕まったら死は免れない。

「というか、お前らどうやって訓練機を手に入れたんだよ！？」

簪を抱きかかえ、全速力で砂浜を走りながら訊いた。

「……パクった」

瑞穂がボソツと言った。

やべえ！ 恐い、恐すぎる！

足に力を入れる度に腰が悲鳴を上げていた。

今此处で痛いなんて言ってる暇は無い！ 止まったら死ぬ。

「一夏、俺らもISを展開するぞ」

「わ、分かった！」

オルコットのレーザーが飛び交い、リヴァイヴ三機によるマシンガンの雨の中、俺ら二人はISを展開した。

どうなったかは、言わなくても分かるだろ。

翌日、臨海学校最終日。

朝食を終え、すぐにIS及び専用装備の撤収作業に当たった。

十時を過ぎたところで作業は終了。全員がクラス別にバスに乗り込む最中だった。昼食は、帰り道のサービスエリアで取るらしい。

「あゝ……」

「死ぬ……」

荷物を持って一夏と一緒にバスに向かった。

昨日は一時間近く追い回されたあげく、旅館を抜けたのがばれ織斑先生に大目玉。睡眠時間は三時間程度。それである重労働……死ぬる。

「君が、織斑一夏くん？」

突然二十歳くらいの女性が俺たちの前に現れた。鮮やかな金髪が夏の日差しで輝いて眩しい。

格好は、格好良いブルーのカジュアルなサマースーツを着ている。開いた胸元から大人の女性特有の整った膨らみがわずかに覗いている。

掛けていたサングラスを外し、胸の谷間に預けた。

「え、ええ。そうですけど……」

「君がそうなんだ。へえ」

女性は一夏に近づいて興味深そうに眺めていた。

「あ、あの、あなた——」

「ナターシャ！？ ナターシャじゃないか！」

一夏の言葉を遮り、ローラがバッグを地面に置いて、女性に抱き着いた。

「四ヶ月ぶりね、ローラ」

女性はローラの頭を撫でた。その行動が嬉しかったのか、ローラはにこやかな顔をしていた。

「ナターシャって……もしかして、ナタルさんですか？」

「そう。ナターシャ・ファイルス。『シルバリオ・ゴスヘル銀の福音』の操縦者よ」

「え——」

ローラを退かすナタルさん。いきなり、ナタルさんの唇が一夏の頬に触れた。

「これはお礼。ありがとう、白いナイトさん」

「え、あ、う……？」

一夏が困惑している中、ナタルさんは俺を見た。

「君が、櫻井俊くん？」

「え、あ、はい……」

「イーリから電話で聞いたわ」

今度は俺の顔を興味深そうに眺めるナタルさん。わずかに香る柑橘系のコロンが、ひどく女を意識させて、俺は途端に落ち着かなくなつた。

「あ、そうなんですか」

なんとか平常心を保つた俺。

「イーリは普段あんなことしないから、私のキスより価値があるわよ」

「へ……？」

突然ウインクをしてわけの分からないことを言つたナタルさん。

「じゃあ、またね。バイ」

「は、はあ……」

ひらひらと手を振つてその場を去るナタルさん。無意識に俺も軽く手を振つて見送つた。

「っ——」

後ろから寒気がした。

恐る恐る振り返ると、簪、瑞穂、ローラ、リリー、明音、シャルロット、篠ノ之、オルコット、鳳<sup>フエン</sup>、ボーデヴィツヒが五百ミリリットルのペットボトルを持っていた。

「俊、喉渴いてない……？」

「ま、まあ……」

「一夏、貴様も喉が渴いていないか……？」

「お、おう……」

簪と篠ノ之が突然訊いてきた。

「じゃあ……」

二人の声が揃い、無言で十人がすたすたと歩み寄つてきた。

『はい、どうぞ！』

突然ペットボトルを投げつけられた。内容量は五百ミリリットル。それが五本、俺の体に直撃した。正直、死ぬる……。

## Episode・60（後書き）

というわけで三巻終了!!  
長かった……

次回からは四巻の内容、夏休み編です

そして、前にも言ったと思いますが、四巻からは不定期更新になります

まあ、風邪引いたんで休むにはちょうど良いかなと思いつつ……

あ、協力者にお礼を言わなくては……

曲流さん、空牙刹那さん、こんな小説の手助けをしてくださりありがとうございます!!

曲流さんのヘカトンケイルの出演許可が下りなかったらつまらない作品が更につまらなくなるところでした

空牙刹那さんは水着の案、ありがとうございます!!

ファッションセンスゼロの自分が考えてたら皆ダサイ水着を着るはめになるところでした

お二方の協力があったからこそ、三巻は無事、完結を迎えられたと言っても過言ではありません  
本当にありがとうございます!!

そして読者の皆様

読者が読んでくれたからこそ毎日書き続けることが出来ました  
皆さまのおかげで連載して2ヵ月で30万PVを越しました  
正直ビックリですΣ（。。）

これからもこんな駄作を読み続けてください！！

あと、感想を書いてくださった方々、返信出来なくて申し訳ございません

後日、徐々に返信しますのでお待ちください  
えっ、そんなの待ってないって……

……  
こんな、読みもしないであろう後書きで長々と書いてしまいまして  
申し訳ございません

感想よろしく願います！！

## Episode・61

八月。IS学園は遅めの夏休みに入った。その所為で、世界中からやってきた学園生は現在ほぼ半分が帰省中。俺も八月の下旬には両親の墓参りのため三日間は帰る予定だ。

テストでなんとか赤点を回避した俺は短期バイトをすることにした。

両親が残してくれた金はまだ余っているが、何時までもそれを使うわけにはいかない。だからバイトを始めた。

場所は今月出来たばかりのウォーターワールド。先月末に面接をしたら採用された。

その時の面接官が一言。

『ISが使える男がうちでバイトしてくれるなんて大歓迎よ!』  
だった。

何故面接官が俺がISを使えることを知っているかというところ、六月末にあった学年別トーナメントでISの関係者が見に来たことにより、俺がISを使えることが徐々に広まり、臨海学校の翌日からテレビで大々的に発表されたからだ。

なるべく皆に知られなくなっただけだな……。

バイト初出勤の前日の金曜日。エアコンが入っていない廊下を歩き、食堂に向かった。暑いしな……冷し中華にするか。

食券を買い、おばちゃんに渡した。すぐに商品が出てきたので受け取った。

確かローラとリリーは帰省したんだっけ。

食堂のカウンターに座って夕食を取っていた。

あいつらが居ると何時も騒がしいが、居ないとそれはそれで寂しいものだな。

「ふう。やっと一段落つきました」

私、山田真耶は職員室の自分の席で熱いお茶をすすっていた。真夏に冷房の効いた部屋で熱いお茶——というのは、やっぱり贅沢ですよね。

しかも、この学園は運営資金の一部を税金でまかなっているので、多少なりとも胸が痛む思いだった。

でも、今だけは許してください。やっと……やっと溜まりに溜まった一学期の総まとめが終わったんです……。

というのも今年はイレギュラーが多すぎた。

『ISを扱える男子』に始まり、異常な数の専用機持ち、頻発する謎の事件、さらには国際IS委員会からの説明要求と織斑一夏、櫻井俊の身柄引き渡し命令、等々……。

考えるだけでも頭が痛い。

それらの仕事やっと半分以上片付いたのだから、少しくらいの休息は許して欲しい。

それにしても、困りました……。

私は目の前の三枚の書類を交互に見ながら、また溜息を漏らす。その書類というのは生徒の個人票なのだが、問題はそこに書かれている人物である。

織斑一夏、篠ノ之箒、櫻井俊。

この三名は、『代表候補生でないのに専用機持ち』という困った事態だ。しかも、織斑くんの方はともかく、篠ノ之さんと櫻井くんのISに至っては帰属する国家——つまり登録国籍がない。

これは、実は非常にまずい。

つまり『全ての国が自らの専属操縦者として招くことが出来る上に、ISもおまけで付いてしまう』ということ。

どの国もISは喉から手が出るほど欲しい。それが一機であろうとも、存在するだけで国家の軍事力を大きく変えてしまうのだから、当然だ。

さらにISの制作者である篠ノ之東博士と世界で有名なIS整備師であるヘカトンケイル（織斑先生から櫻井くんのISの事情を聞いてから判明）のお手製——それも第四世代相当の技術が使われているとなると、力尽くでも手に入れようとする国は山ほどあるだろう。

「はあ……」

なんでこう、私のクラスに色々と集中しちゃうんでしょうか……。櫻井くんは小川先生のクラスの子なのに小川先生は私に押し付けて北海道に行っちゃったし……。

特に途中編入の転校生組は明らかに可笑しい。普通、あれだけの数の専用機持ちを同じクラスに集めたりはしないはずだ。

——何かしらの根回しがあったってことでしょうね。

どの国にも属さないIS学園ではあるが、各国からの影響力を完全に遮断することはやはり難しい。

まあ、そのあたりはあまり考えずにおきましょう。どうせ、考えたってどうしようもないのだし。

さて、残りの書類も一気に終わらせましょうか。

お茶でつかの間の休息を得た私は、再度書類の山へと向き直る。そして、そこから一枚の書類を取ると——、はらり。

はらり……？

一枚。一枚の書類が二枚に分裂した。

——ではなく、どうも元々二枚がくっついていたようで、下の一枚が剥がれ落ちただけのようだった。

「ああ、びっくりしました。それにしても一体何の書類——」

ぴしり。自分の思考が凍り付く。

「こ、こ、これは……」

こんなことがないように、全ての書類には目を通しておいた——はずなのに。

まさか、こんなところに一枚隠れていたとはつゆほども知らず、他の書類を優先的に片付けてしまった。

「まずい……ですね。これは非常にまずいです……」  
冷房がよく聞いている職員室で、私はだらだらと汗を流して狼狽する。

その汗はとても冷たかった。……別の意味で。

「んっ！ 今日超良い天気！ これぞまさしく——」  
デート日和ってやつね！

グッと、鈴音は両手の拳を握り締める。カ一杯のガッツポーズだった。

何故こんなやる気になっているかと言うと、昨日一夏を（本人は自覚していないが）デートに誘ったからである。場所はウォーターワールド。前売り券は今月分が完売。当日券も二時間並ばないと手に入らないほどの人気だ。

何時も料金を取っているが今回はその前売り券をタダで一夏に上げようとした鈴音だったが、それだと一夏に勘ぐられると考え二千五百円で売り付けた。

場所はまだ自室だったが、服装はすでに準備万端の一張羅。この日のためにわざわざ新しく買った服である。

（ふ、ふ、ふ。あの箒もシャルロットも出し抜いてやったわ！ あたしの完全勝利！）

同居組に勝ったということは鈴音の中でかなり大きなことだった。そもそも、転校してきた時に一夏が女子と同居していると聞いて、気が気ではなかったのだから。

（ふふん、同じ水着でもこの前の臨海学校とは意味が違うのよ、意味が。これはれっきとしたデート！ 男女の付き合いなんだから！）  
男女、というところを強調して考えていると、いきなり鈴音がほんのりとピンク色に染まる。

（う、うん、今日はとっておきの可愛い下着を選んだし、勿論替え

の下着も用意したし、うん……)

夏は何が起こるか分からないから油断するな、と昔の歌も言っている。

(た、例えば、帰り道とかでさあ……)

……………

『今日は楽しかったわね』

『そうだな。鈴と一緒にだったからな』

『そうそう。やっとあんたもあたしのありがたみに気付いたってわけね。うんうん』

『——鈴』

『え？ な、何よ？ 急に手なんか握ったりして……』

『俺、分かったんだ。鈴のと離れて、それから再開して……どれだけ大事な存在だったかってことに』

『い、一夏……？』

『鈴、好きだ』

『え、あっ——だ、ダメ、こんなところで……』

『俺のこと、嫌いか？』

『き、嫌いじゃないけど……』

『じゃあ、いいな？』

『ば、ばか……。強引……。んっ』

——なんちゃって、なんちゃって！

『ねえ、ティナ！ ねえ！』

『……はいはい、そーね』

カップアイスを食べながら、ティナは鈴音の方を見ずに答える。

まともに相手をするのは馬鹿らしい。昨日のやり取りで、十分鈴が浮かれていることは分かった。……その理由までは知るよしもなかった。

『じゃああたし出かけてくるから！』

『いつてらっしゃーい』

『よ、夜遅くなるかしんないから！』

「ふーん、あつそ」

「じゃあね！」

「じゃーねー」

ボタン、と後ろでドアが閉じる。再度、鈴音はガッツポーズをして意気揚々と歩き出した。

「ん？」

「あら？」

ウォーターワールドのゲート前にて、見知った顔を見つけた。

鈴音とセシリアは、お互いにぱちくりと瞬きをした後、妙によそよそしい挨拶を始める。

「これは、どうも。鈴さん」

「う、うん？ セシリア、こんにちは」

二人は『どうして此处に？』という疑問を抱きながら、少し離れた場所でそれぞれ人を待った。

お互い、妙に気合の入った私服を不思議に思いながら――。

（セシリア、友達と来てんのかしら？ —— まあ、あたしは一夏とですけどね！）

くふふふ……と一人で漏れだす笑みをこらえきれず、鈴音はニヤニヤとニコニコの入り交じった顔で一夏を待った。

……。

……。

……。

（だあっ！ 遅い！ 何やってんのよ、あいつは！）

「どうかしたのかしら……」

鈴音が地団駄を踏みそうになったタイミングで、セシリアも弦きを漏らした。左手首の腕時計を何回も見ているので、どうやらあちらの待ち人もなかなか来ないようだった。

鈴音は、少しセシリアの様子が気になったがそれよりとにかく一夏である。すでに約束の十時を過ぎて、もう二十分近い。

（あいつは昔っから、ここぞって時に遅れてくるんだから……）

イライラとケータイを取りだした瞬間、それが鳴り響いた。表示された番号は、勿論一夏である。

「もしもし！？ あんた何してんのよ！ 今何処！？」

『今、学校だ』

「はぁ！？」

『あー、いや、そのだな、なんか山田先生から言われてな、今日白式の元々の開発室から研究員が来るんだと。それで、データ取りをしないといけないんだと。ほら、先月第二形態になったから、データを改めて欲しいんだとさ』

「……何？」

『えーと……すまん。今日は行けそうにない』

「なあっ！？」

沸点を一瞬で突破した鈴音は、怒りを通り越して真っ白になってしまう。そこに、一夏の声が続いた。

『いや、あのな？ 本当は昨日連絡しようとしたんだ。でもお前電話に出ないし、部屋に行ったら寝てるって言われたし、なあ？』

「……………」

確かに、昨日は今日に備えて八時に寝た。しかも、睡眠を邪魔されなかったためにケータイの電源も切っておいた。ティナには緊急時以外は起こさないようにと釘を刺した。

（——って、バカあああ！ こ、こっ、これが、緊急時でしょうが……！）

『というわけでだ』

「はい」

思わず間抜けな返事が出る。

『セシリアにチケットをやったから、一緒に楽しんできてくれ』

——はい？

「はい？ セシリア……って、え？ ちょっと、何？」

『あれ？ セシリアそこに居ないか？ ゲート前で待ち合わせって言っただけど』

「――」

「こ、こ……。」

「コイツを殺して良いかしら……」

『うわ、おい何物騒なこと言ってるんだ、鈴。大丈夫か？』

呑気な一夏の返しに、いよいよ鈴音の（今まで麻痺していた）堪忍袋の緒が――切れた。

「だ、大丈夫なわけないでしょうが！ はあ！？ な、なんてことしてくれてたのよ、あんたは！」

『うおっ。いきなり怒鳴るなよ。――あ、はい。えっと、すぐにですか？』

電話の向こうで誰かに呼ばれたらしい一夏は、いったん鈴音との会話を中断した。

『わりい、鈴。すぐに行かないといけなくなった。悪いんだけどセシリアにも説明しておいてくれ、じゃあ』

ぶっつ。

無情にも、電話はノイズを残して切れてしまった。

「く、く、く……」

わなわなとケータイを握り締める鈴音。みしみしと軋みをあげるそれを、セシリアが声を掛けるのがあと一秒遅かったら間違いない地面に叩き付けていただろう。

「あの、鈴さん？ どうなさったの？」

「ふ、ふ、ふ、セシリア……良く聞きなさいよ……。一夏は来ないわ」

「――」

瞬間、セシリアがフリーズした。

何を言われたのか分からないといった様子のセシリアに、鈴音は繰り返した。

「一夏は来ないわ」

「はい？ ええと……何故？ というか、どうして鈴さんが……？」  
「今日、あたしとあんたがデートすんのよ！」

「え……ええ！？ わ、わたくしは一夏さんに誘われて此処に——」  
「だから！ そのチケットは元々あたしが用意したの！ 分かる！  
？」

ぱちくり、ぱちくりと、二回まばたきをしてから、セシリアはゆつくりと切り出した。

「……鈴さん」

「何よ！？」

「取り敢えず、中に入って何か飲みましょう。わたくしも、よく状況が掴めませんし、それに——」

笑顔に血管を浮かべて、セシリアはにこりと微笑んだ。

「どうということなのか、説明していただきたいですし」

ウォーターワールド、ゲート前。そこでは二人の修羅の周りが、夏の熱気ではない何かによってぐにやりと歪んでいるように見えた。

**E p i s o d e ・ 6 1 ( 後 書 き )**

ついに四巻突入!!

感想よろしく願います!!

「ようこそ、ウォーターワールドへ！」

背中に『STAFF』と印刷されたＴシャツを来て、下は水着。そんな格好で俺はフロントで接客をしていた。

本当は館内にある売店にしようかと思ったんだが、『取り敢えずフロントやって』と先輩の命令で受付をやらされた。

まあ、履歴書を渡してないんだから希望する場所なんて知らないか。

「あ、櫻井俊だ！」

「そんなわけ——って、本物じゃない！」

「うわー、初めて見た。写メ撮ろ写メ！」

「あ、握手してください！」

さつきからこんな感じで非情に困っている。

テレビで発表されてから元中の友達からメール、電話が殺到して疲れてるつてのに、此処でもこんなんじゃないやらさらに疲れるだろ。

しかしそんなことを言っている場合じゃない。

「ようこそ、ウォーターワールドへ！」

営業スマイルで客を迎え、券を受け取り中に案内。案外慣れてきたな。

「ようこそ、ウォーター——」

「「あつ……」」

「ワールドへ……」

まさかのオルコットと鳳<sup>ファン</sup>に出くわした。

二人からはわけのわからないオーラが満ち溢れており、夏の熱気ではない何かによってぐにやりと歪んでいるように見えた。

「ち、チケットを……」

無言で差し出された。めちゃくちゃこええっ！

ミシン目にそって切り、半券を渡した。

「そ、それではごゆっくりとお楽しみください」  
俺の言葉など聞かずに二人は中に入ってた。  
何だ、何で二人はあんなに怒ってるんだ？  
そんな疑問しか浮かんで来なかった。

「つまり、一夏さんは自分の代わりに『此处に行かないか』と行つたんですね」

「そーねー」

「はあ……。可笑しいと思いましたわ。ええ、最初から何か怪しいと思っていました」

「嘘つけ。私服、めっちゃ気合い入ってるくせに」

「なっ！？ こ、これは、その……礼儀として、そう！ 礼儀としてですわ！」

「あー、はいはい」

セシリアの話を適当に聞き流しながら、鈴音はナプキンで折った紙飛行機を飛ばす。

柔らかい紙で折ったそれは案の定、全く飛ぶことなく墜落した。

……そう、まるで今の鈴音のように。

「ふう……」

「はあ……」

ウォーターワールド内の喫茶店にて、二人の溜息が重なった。

「で？」

「で、とは？」

「帰んの？」

「そうですね。泳ぐ気分でもありませんし……」

「はあ……。あたしも帰るかなあ……」

二人がそう決めて立ち上がるうとした瞬間、園内放送が響き渡った。

『では！ 本日のメインイベント！ 水上ペアタッグ障害物レースは午後一時より開始いたします！ 参加希望の方は十二時までにフロントへとお届け下さい！』

特に興味もない二人だったが、その後の言葉にぴーんと耳を立てた。

『優勝商品はなんと沖縄五泊六日の旅をペアでご招待！』

（——これだ！）

（——これですわ！）

景品の沖縄旅行。今日のことをダシに使えば一夏はイヤとは言えないはず。そうと決まれば――

「セシリア！」

「鈴さん！」

「目指せ優勝！」

ガシッと腕を交わした鈴音とセシリア。こうして、第一回大会にして歴代最強のコンビが結成されたのだった。

「俊！」

「櫻井さん！」

バンッ！

鳳とオルコットは同時にフロントのカウンターに思いっきり手を付いた。

「な、何でしょう。お客様」

一応客人だ。敬語を使わなくては。

「大会に参加するから早く――」

「エントリーしてくださいな！」

「わ、分かりました」

カウンターの下からエントリー用紙とボールペンを取り出した。

「では、こちらにお名前――」

「早くしなさいよ！」

鳳に紙とボールペンを奪われた。

「ほら、書いたわよ」

「鈴さん。早く着替えに行きましょう！」

「分かってるわよ！」

「あ、ありがとうございます……」

二人はさつさと更衣室に向かった。

用紙を見ると、殴り書きだったため全然読めなかった。

「はあ……」

溜息をついた俺は新たな紙を取り出し、丁寧に書き直した。

「お疲れ、櫻井くん」

「あ、先輩。お疲れ様です」

先輩に声を掛けられたので振り向いた。

「櫻井くん。一つ頼まれてほしいんだけど……」

「何でしょうか？」

「この後のイベントの司会、一緒にやってほしいんだけど……お願い！」

何故か先輩が頭を下げた。

「な、な、何やってるんですか！？ 勿論やりますから、頭を上げてください！」

「ホント！？ ありがとう！」

手を握り、ブンブンと上下に振る先輩。正直、腕が痛い。

イベントの司会はテンションが高くなければ勤まらない。俊は先輩からマイクを受け取った後ふと思った。

（……仕方ない）

意を決した俊はマイクを握り締めた。

「ただいまより——」

「第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レースの――」

「開催です！」

俊は学校では見せないであろうテンションで腕を強く突き上げ、隣に居る先輩は叫ぶと同時に大きくジャンプした。その動きで大胆なビキニから豊満な胸が思わずこぼれそうになった。

その所為なのか、はたまた単純にレース開始を喜んでか、わあああ……！ と、会場からは歓声と拍手が入り乱れる。

俊が居ることにより会場に居る女性は盛り上がり、先輩の豊満な胸がこぼれそうになったことにより男性はその倍盛り上がった。

「さあ、皆さん！ 参加者の女性陣に今一度大きな拍手を！」

再度巻き起こる拍手の嵐に、レース参加者は手を振ったりお辞儀をしたりとそれぞれ答える。

そんな中、特にどういう反応をするでもないペアが居た。――鈴音とセシリアである。

二人とも念入りに準備体操をしながら、それぞれ体をほぐしていた。

「ん、しゅと。そういえばセシリア、この前と水着違うわね」

「え、ええ。なんと言いますか、そう、気分の問題でして」

「嘘つけ。どうせ、新しい水着で一夏を悩殺！ とか考えてたんでしょうが。あーあー、派手な選んじゃってまあ」

「う、うるさいですわ！ それより鈴さんこそ、どうして先月の臨海学校の時より体が引き締まっているのかしら？」

「あ、あたしはアレよ！ 規則正しい生活を心掛けてんのよ！」

「そうですかそうですか。夜更かしが趣味の鈴さんにしては随分殊勝なことだ」

ペア同士でありながら、妙な牽制をしている。しかし、それでも柔軟には十二分に気合いが入っていて、二人がこのレースにいかにか賭けているかがうかがい知れた。

「優勝賞品は楽園・沖縄五泊六日の旅！」

「皆さん、頑張ってください！」

そう、この商品こそが目標なのだ。

二人はそれぞれに勝手な妄想を思い描いて、むふふと笑みを漏らした。

（いくら唐変木の一夏でも、若い男女が二人で南国の島に行けば……）

（夏は人を変えと言いますし、夏休み最後の思い出ということですから……）

ふと、二人の視線が合う。

「えへっ」

「あはっ」

（セシリアからは、なんか考えて奪いましょう）

（鈴さんからは、何か代わりの物で譲っていただきましょう）

「では！ 再度ルールの説明です！ この五十×五十メートルの巨大プール！ その中央の島へと渡り、フラッグを取ったペアが優勝です！」

「なお、コースはご覧の通り円を描くようにして中央の島へと続いています。その途中途中に設置された障害は、基本的にペアでなければ抜けられないようになっていきます！」

「ペアの協力が必須な以上、二人の相性と友情が試されるということですよ！」

鈴音とセシリアはアナウンスを聞きながら、再度コースを下見した。

中央の島というのがなかなか厄介で、空に浮いているのである。

……いや、勿論強力なワイヤーで宙吊りになっているだけなのだが、問題はそこではない。

（ん……泳いで渡るのは無理ね。ショートカットは——）

（上手く近道出来ないようになっていきますわね。そして、プールに落ちたら再度一からやり直し、と）

なるほど、なかなか良く出来ている。二人はそう納得しながら、そしてこうも考えた。

（（参加者が一般人なら——ね））

二人は、専用のISを持つ国家代表候補生であり、その能力は旧世紀の一軍隊にも匹敵する。そして当然、それらを扱うに当たってあらゆる訓練を積んできた。

おそらく、単純な格闘能力だけなら、一般男性など相手にならない。軍人であっても、対等な条件であれば限りなく互角に近いだろう。

ISとはそれだけのものであり、そしてそれを扱う者も人材価値として非常に高い。

「さあ！ いよいよレース開始です！」

「位置について、よい……」

俊が競技用のピストルを真上に向け、引き金を引いた。

パァンッ！ と乾いた競技用ピストルの音が響き、二十四名十二組の水着の妖精たちが一斉に駆け出す。

## Episode・62（後書き）

明日の八時に次話を投稿します

感想よろしく願います！！

「セシリア！」

「分かっていますわ！」

開始直後、足払いを仕掛けてきた横のペアをジャンプで躲し、一番目の島に着地する。

このレースは、なんと『妨害OK』なのである。――が、しかし、本物の軍隊と同じ訓練を受けた国家代表候補生にとっては、そのルールはぶつちやけ有利なだけである。

「さあ、行くわよ！」

「ええ！」

向かってきたペアを軽く躲し、ついでに足を引つ掛けて水面へと落とす。

レースは先行逃げ切りの真面目組と、妨害上等の過激組と完全に分かれていた。

しかし、そこに問題が発生してしまう。

なにせ最年少に近い二人が、いきなり大立ち回りである。会場全ての注目を一手に集めてしまった所為で、以後の妨害はとにかく鈴音とセシリアに集中した。

「ああもう、うっとうしい！」

「邪魔ですわ！」

向かってくる度に水面に落としてはいるものの、きりが無い。どうやら先行した真面目組とグルの過激組が居るようだった。落とされては即復活し、とにかく妨害行為を仕掛けてくる。

「くっ……このままじゃ置いてかれる！」

第一グループが二番目の島に渡っていることに焦りを感じた鈴音は、ちらりとセシリアに目配せをする。

『早速だけど、奥の手よ』

『はあ……。どうなっても知りませんわよ』

『勝つためよ!』

『そ、そうですね! 勝つためなら!』

ついでにプライベート・チャネルで通信をして、鈴音とセシリアはしつこい妨害ペアに向き直った。

「「うりやあああつ!」」

がつつりと組み合った腕でラリアットを仕掛けてくる妨害ペア。

何がそうまでさせるのか、鈴音とセシリアは一度溜息を漏らした後、風を裂くような素早い動きで一閃した。

どぼーん! とプールに落ちる妨害ペア、しかしそれはもはや慣れっこのようだった。

「何度でも蘇るわよ! 私たちは!」

水面へと浮上した二人組。しかし、その体にはあるべきものがない。

「ふっ……。人は水着無くして生きてはいけない……」

「マリー・アントワネットの言葉通り、水着がないのなら全裸でどろぞろ」

「「きゃああああつ!」」

素早く水着のブラを奪った鈴音とセシリアは、パニックに陥る妨害組を一瞥した後手元のそれを丸めて反対側の客席へと放り投げた。期待通り———というかそれ以上のアクシデントに、会場の男性陣はおおいに沸いた。

「さて、邪魔者は去ったし」

「追撃しましょう」

一番目の島ではロープで繋がれた小島を一人が固定して渡り、それから向こう岸で支えてもう一人も渡るといったものだったが——

「ま、時間食った分一気に行くわ」

「ええ。これ以上の差は許しませんわ」

鈴音とセシリア、二人同時に小島へと飛び移る。ただでさえ小さな島——それも、女性一人分しか支えられないはずのそれを、二人は大道芸もかくやという動きで渡っていく。

小島一つ飛ばしで前転側転織り交ぜた鈴音が軽やかに飛んでいく。その後を、揺れを見切ったセシリアが素早くついて行く。

さっきまでは水着ポロリに沸いていた会場だったが、今度は二人の活躍に歓声が巻き起こった。

「こ、これは凄い！ 二人は高校生ということですが、何か特別な練習でもしているのでしょうか!？」

先輩が驚いてるなか俊は二人を心配していた。

（事件でも起こらなきゃ良いんだが……）

続く第二の島も、障害そっちのけで二人は突き進む。

一人が放水を止めてその間に通り抜けるという障害だったが、同じく二人とも同時に走って突っ切った。

「ははん！ 余裕！」

「地雷原に比べれば何とも簡単ですわね」

そんなこんなで続く第三の島、第四の島とクリアをしていき、ついに最後の第五の島なのだが――問題が起きた。

「此处で決着をつけるわよ！」

まともに走ったのでは負けると踏んだのか、トップのペアが反転して鈴音とセシリアに向かってきた。

「あつはつはつ。一般人があたしたち候補生に勝てるでも――」

「おおっと、トップの木崎・岸本ペア！ 此处で得意の格闘戦に持ち込むようです！」

「――はい？ 得意の……なんですって！」

『俊！ 分かるように説明しなさいよ！』

「ご存じ、二人は先のオリンピックでレスリング金メダル、柔道銀メダルの格闘派ペアです！」

鈴音はプライベート・チャンネルで俊に訊くと、俊は二人のプロフイルを見ながら説明する。

「仲が良いというのは聞いていましたが、競技が違えど息はピッタリですね！」

「ですね！」

「はあっ！？　金メダル？　てっ、良く見たら体がこの二人だけ違うんだけど！？」

マツチヨ・ウーマンという単語がピッタリと合うそのペアは、合い十分の怒号とともに鈴音とセシリアに向かってきた。

（まずい！　こっちはさつきから全力疾走で疲れてんのに、此処でこんな筋肉バカとやり合ったら——）

（さ、流石に押し切られますわね……）

疲労から流石に敗色が濃いと見た二人は、思わず足を止める。しかし、それがまずかった。

「もらったああああっ！」

「くっ……！」

鈴音とセシリアは後ろ跳びに距離を取るが、そこは浮島。もはや逃げ道はない。

「こうなったら……セシリア！」

「な、なんですの！？」

「あたしに策がある！　突っ込んで！」

「は！？　わたくしが、前衛！？」

「そうよ！　迷ってる暇はないから！」

「ああもう！」

再度距離を詰めにかかってきたメダリスト・ペアに向かってセシリアは単機特効する。

（片方だけでも気を逸らせられれば……！　……信じましたわよ、

鈴さん！）

「セシリア、そこで反転！」

「え？」

大声に呼ばれて振り向くセシリア。そして見たのは、眼前に迫る鈴の足——の裏。

「は……？　——ぶべっ……！」

思いつきり。

思いつきり、顔を踏まれた。

「よしっ！」

セシリアを踏み台にした鈴音はその身軽さで一気にゴールへ跳躍。フラッグを手に取る。

「勝ったぁ！」

その後ろ、数秒前まで鈴音が居た島では、踏まれてバランスを崩したセシリアがさらにメダリスト・ペアのタックルを受けて一緒に数メートル下の水面へと落ちていった。

どっぼーん。

高く伸びた水柱を、鈴は眩しそうに見つめる。

「ありがとう、セシリア。あんたのおかげよ」

きらり、青空にセシリアの笑顔が浮かぶ。……完全に故人扱いだった。

「ふ、ふ、ふ……」

地の底から響くような絶対零度の笑い声。そして、さっきの倍ほどの水柱が立つ。

「今日という今日は許しませんわ！ わ、わたくしの顔を！ 足で

！——鈴さん！」

ブルー・ティアーズを展開した水着姿のセシリアが、激しく怒った表情で鈴音へと向かう。

「はっ、やろうつての？——甲龍！」

対する鈴音もすぐさま甲龍を展開し、即応態勢へと移る。

「な、なっ、なあっ！？ ふ、二人はまさか——IS学園の生徒なのでしょうか！ この大会でまさか二機のISを見られるとは思いませんでした！ え、でも、あれ？ ルール的にどうなんでしょう……？」

困惑と興奮の入り交じった声で、先輩はまくし立てる。大きな手振りに、またしても豊満な胸が弾んだ。

「はぁ……」

二人の行動を見て俊は、頭をおさえながら溜息をついた。

「ぜらぁあっ！」

「はあああつ！」

ガギンッ！

互いのブレードがぶつかり合い、火花を散らす。

「ティアーズ！」

「甘いつての！」

すぐさまビットを射出するセシリアに対し、鈴音は両足のスラスタを巧みに扱って距離を離しては寄せ、近づいては下がるを繰り返す。

「くっ！ 耐狙撃制動とは……相変わらずやりますわね」

標準を絞りきれず、セシリアはゆらゆらと銃口を泳がせる。

その隙を逃す鈴音ではなかった。

「衝撃砲はあんたのと違って早いのよ！ ほらほらあ！」

逆さまの体勢から三連射、その後一気に距離を詰めての袈裟斬り。しかし、それはセシリアも承知の上で、あえてライフルで刃を受けた。

「動きが止まればこちらの領域デトリリーですわ！」

ビットをさらに二つ射出し、鈴音の背後を狙う。

「この距離なら衝撃砲の方が早い！」

二人は手を伸ばせば届くほどの近距離で、互いの武装をフルに展開する。

「はあ……。好い加減にしろよ、お前ら……」

大惨事が起きる前に、水着姿の俊が閃迅を展開し、二人の間に入って腕を掴んだ。

「ちよつ、なによ……！」

「は、離してください……」

「そんなに暴れたきや、学園で暴れてこい！」

そのまま二人をプールに放り込む俊。その後、二人をプールから引き上げワイヤーで拘束した。

「とにかく！ こういったことは！ 金輪際！ しないでください  
ね！」

「はい……」

さつきまで水着を着ていた先輩に事務室でこつてりと絞られて、  
私服に着替えたオルコットと鳳はしゅんと小さくなった。

幸にして怪我人はゼロ。しかし、レース会場のプールは半壊、天  
窓も一部割れるといった物損被害が発生した。

「はあ、まったく……！」

「あ、あのう……」

「何か！？」

「い、いえ、あの、優勝はどうなっのかなと思ひまして……」

「お前ら、自分たちがやったこと分かつてるのか？」

俺と先輩は二人を睨んだ。

「す、すみません……何でもありません……」

オルコットと鳳がISで暴れたため、当然大会は中止。優勝者な  
ど居るわけがない。

「とにかく、学園の方からあなたたちの身柄引き取り人が来るらし  
いから、あと少し大人しくしてなさいよ」

「はあ……」

時刻はすでに五時を回って、窓からはオレンジ色の陽光が差し込  
んでいる。

ピリリリ。部屋の備え付け電話が鳴ったので、近くに居た俺が  
電話に出た。

「はい、事務室。……ああ、はい。分かりました」

がちやり。俺は受話器を置いて二人の方を見た。

「迎えが来たってさ」

「さつさと帰んなさい」

先輩はしつしつと手を振った。

「失礼しました……」

ばたん、とドアが閉まった。

「さて、プールの後片付けしなくちゃいけませんね……」

「そうね……」

伸びをした俺らは会場に向かった。

「高いところはよろしくね、櫻井くん」

「ですよー」

翌月にもらった給料が少なかったのは、バイト初日のこの事件の所為に違いないと俺は思う。

## Episode・63（後書き）

次回は瑞穂メインのお話です

感想よろしくお願いします!!

## Episode・64

「う……」

IS学園一年生寮。その一室では一人の少女が寝込んでいた。

「ごほつ、ごほつ……。これは……。完全に夏風邪ね……」

少女の名前は茂木瑞穂。IS学園一年三組所属で五月に聖<sup>セント</sup>マリアンヌ女学園から転校してきた生徒である。

（何がいけなかったわけ……？ やっぱり一昨日のアイスの食べ過ぎ？ それとも暑いからって薄着で寝たこと？ それかエアコンのいれっぱなしが原因？）

あれこれと考えるが、思考が一向にまとまらない。

ぐわんぐわんとひどく頭痛がする。

意識はぼんやりとして、天井がぐるぐると回っているように見えた。

しかも体は熱っぽくて気怠い。テレビを点ける気にもなれない。食欲は全くないのに空腹感だけは残っていて、落ち着いて眠れもしない。

（あ……。これは……。まずいわ……）

ルームメイトは祖国に帰っているの、現在部屋には瑞穂しか居ない。

もしかして、このまま死んじゃったりするのだろうか。

そう考えると、病気の所為で弱気になっているのか、ひどい恐怖が襲ってきた。

（うう、嫌だ……。嫌だよう……）

意識はさらに朦朧<sup>もうろう</sup>として、だんだん天井が遠くなっていく。

本当にこのまま死んでしまうのだろうか。

そんなことを思っていると、瑞穂の口からは自然とある名前がこぼれた。

「しゅん……」

「何だ？」

「え……？」

最初は幻覚かと思った。

けれど、自分の前にひょいっと顔を出してきた俊を、二回瞬きして現実だと理解した。

「な、な、ななっ、何で此処に居んのよ！？」

突然の事態に対応出来ず、瑞穂は熱があることを忘れてがばっと体を起こす。

しかし、そんな勢いが出たのは一瞬だけで、すぐにへろへろと布団の上に俯せで倒れた。

「大丈夫かよ？」

前のめりで倒れた瑞穂を、俊はそっと抱き起こしてベッドに寝かせた。

「う、うるさい……。私はこのくらいのことじゃ——ごほっ、ごほっ！」

「咳だけか？ 熱もあるんじゃないか？」

そう言って俊は瑞穂の額に自分の額をくっつけた。

「~~~~~！」

「やっぱり熱があるな。ほら、これ飲んどけ」

俊は額を離し、スポードリンクを瑞穂に渡そうとした。

恥ずかしさのあまり瑞穂は布団で顔を隠していたため、手渡しは不可能。俊はスポードリンクを枕元に置いた。

「な、何で俊が私の部屋に居んのよ？」

顔を半分だけ出して俊に訊いた。

「はっ！？」

瑞穂はふと気がつく。

（も、も、もしかして、弱った私を好き放題するために——）

『何時もは強気な瑞穂が今じゃ俺のなすがままだぜ。げっへっへっ』

『や、やめなさいよ、バカ！』

『おいおい、強がってられるのも今のうちだぜ。おらー、脱げ脱げ』

！』

『いや〜〜！ 獣、果物、回し者〜！』

—— ひどい。これはひどい。

（私、熱で可笑しくなってるんだわ……）

間違いない。確実に、今の自分は頭が可笑的い。

大体、妄想にしたつてもう少し情緒があつてもいいものだ。想像したビジョンのレベルの低さに呆れてしまう。

（ああ、でも……）

『考えるな、感じるんだ』

（つて言う俊は良いかしんないわね……）

つて、ブース・リーか！

と、一応心の中で自己ツツコミをいれる。

「何でつて言われてもなあ、お前が来ないからだろ」

「え？」

来ない？ 私が？ —— も、もしかして！

『瑞穂が俺の部屋にこないから、こっちから来たぜマイ・エスペランザ』

『そうなの、スウィート』

『まったく困ったドラゴンちゃんだ。なあ、ベイビー』

ああ、やめよう。もうやめよう。

（これ以上は頭痛が痛くなってくるわね……）

正しくは『頭が痛くなる』か『頭痛がひどくなる』だが、訂正で  
きるだけの余裕はない。

というか、頭ならもう十二分に痛い。風邪と、別の理由で、イタイ。

「だから、お前、前の学校の友達と出掛ける約束してただろ」

「……あ」

「俺も出掛けようと思って外に出たら校門前で女子が三人うろつろしてたからさ。声を掛けたらお前が来ないって言ってたから心配して見に来たんだよ」

（う……。頭ぼーつとしている所為で忘れてた……）  
そういえばケータイが何度か鳴っていた気がする。  
参ったなあと思う反面、少し嬉しかった。

（俊、私の心配してくれたんだ……）  
そう考えると、急にドキドキとしてしまった。

「とにかく、今日は一日寝とけ。俺が看ててやるから」  
「う、うん……」

瑞穂は素直に頷いた。

今は俊と二人きり。

しかも自分のことを看病してくれる。自分のことだけを心配してくれる。

それが瑞穂にはたまらなく嬉しかった。

（ん……。役得かも……）

風邪で弱っているクセに、にへらつと笑みを浮かべた。

「おい。熱さまシートとアイスノン持ってきたぞー。あと、お前の友達に伝えておいたから」

いつの間にか部屋を出ていた俊。その手には熱さまシートとアイスノンを入れたビニール袋を持っていた。

「熱さまシート貼るから前髪上げるぞ」

俊の手が額に触れ、冷たい感覚が訪れた。

「ひゃっ!？」

「あ、悪い。冷たかったか？」

「う、ううん。驚いただけ……。気持ちいい……」

「そうか……」

俊は再び熱さまシートを瑞穂の額に付け、瑞穂の頭を持ち上げ、タオルに巻いたアイスノンを置いた。

瑞穂ははあっ……っと、熱っぽい溜息を漏らした。

それが妙に色っぽく聞こえ、俊はちよつとドキツとした。

「……………」

瑞穂も俊も気がつけば言葉を無くしていて、二人同時に黙ってし

まう。

しかし、それは気まずい沈黙というよりは、気を許しあったもの同士の穏やかな静寂というものだった。

（俊と二人きり……。俊と二人きり……）

ドキドキと高鳴る胸は次第にヒートアップしていく。

瑞穂は気づかれないようにちらっと俊を見ると、夏風邪の所為か恋心の所為か分からない熱に浮かされてぽーっと頬を紅潮させた。

（俊、高校生になって格好良くなったよね……）

「瑞穂」

——ドキッ！！

「な、何？」

努めて平静を装うが、その声は普段よりも半音ほど高くなっていた。

（う、うわ、今の気づかれてないわよね？　だ、大丈夫よね？）

「お前、今日何か食ったか？」

「何も食べてない……」

「お前なあ……風邪は寝てるだけじゃ治らないぞ。何か作ってやるから待ってろ」

「う、うん」

俊は瑞穂の返事を聞くと「冷蔵庫開けるぞ」と言って冷蔵庫の中身を確認した。

（——って、俊が料理！？）

「やっぱりお粥だよな……。でも夏だし、冷たい方が良いか……」

「俊、ホントに大丈夫？」

「良いから寝てろって」

ベッドから起き上がりそうになった瑞穂をベッドに戻した俊はケータイで麦茶がゆの作り方を調べた。

「えへへ……」

嬉しい。

俊が私のことを考えてくれる。

私のことだけ、見ててくれる。

それが瑞穂にはたまらなく嬉しかった。

俊は料理が出来ない。

中学時代も大体がインスタントかコンビ二弁当だった。

見兼ねた瑞穂は俊を自宅に呼んで料理を食べさせたり、俊の家に上がって料理を作っていたりしていた。

料理が出来ない俊が私のために作ってくれる。瑞穂はそれが一番嬉しかった。

「こんなもんかな……」

暫く時間が経ち、俊はケータイを閉じ、お盆に麦茶がゆが入ったお椀を乗つけた。

「瑞穂、出来たぞ」

「あ、ありがと……」

「ほい」

サイドテーブルにお盆を置いた俊は、イスを持ってそこに座る。

「ほ、本当に大丈夫でしょうね……」

「まあな。一応レシピを見ながら作ったから大丈夫だとは思っけど、それを聞いて一安心した瑞穂はもぞもぞと上半身を起こした。

「代えのアイスノン持ってくるから食べてくれ」

俊は席を外した。

「ま、待ってっ！」

「何だよ？」

出る寸前で俊は振り返った。

「……べさせてよ……」

「ん？」

聞き取れなかった俊は瑞穂に近づいた。

「だ、だからっ！ 食べさせてよ……」

「ああ。良いけど」

席に戻った俊はレンゲを取ると、麦茶がゆを一口分すくって左手

を添えた。

「ほい、あーん」

「あ、あーん……」

ぱくつ。……もぐもぐ。

「ど、どうだ？」

「ま、まあまあね……」

「良かったあ……」

「いいから、早く次ちょうだい」

「はいよ」

ぱく、もぐ。ぱく、もぐ。

そんなやりとりが続いて、お粥がほとんど無くなった。

「ご、ごちそうさま」

「おう。ほとんど全部食べれたな。あとはゆっくり休めば治るだろ」  
俊は食器を持って再びキッチンに向かった。

「……………」

ぽすつとアイスノンに頭を沈めて、瑞穂は布団で顔を隠した。

（始めてのわりには、美味しかったじゃない……）

瑞穂はだんだんと満腹感から来る睡魔に襲われた。

## Episode・64（後書き）

今回はBD／DVD三巻に付いてた書き下ろし小説をパクリました

続きは四日後に投稿する予定です

感想よろしくお願いします！！

## Episode・65（前書き）

早く出来てしまったので予定より早く投稿しました

今までのを見なおして、場面の切り替わりがあまりにも分かりにくかったので、今回から場面切り替えの時に間に  
を割り込ませました

## Episode・65

それは、二人の出会いだった。

「えーん……。うええーん……」

まだ二人が小学生になる前。俊が更識家の近くのマンションに越してきてすぐだった。

その近くの公園で一人の少女——瑞穂が泣いていた。

「どうしたの、キミ？」

声を掛ける俊。しかし、瑞穂は泣き止まなかった。

「これなめて泣き止んでよ」

そう言っ俊はポケットからアメを出した。それは俊が大好きな  
苺ミルク味のアメだ。

受け取った瑞穂は少し泣き止み、アメをなめた。

「……おいしい」

「だろ！ 俺のお気に入りなんだ！」

そう言っ俊は持つていたもう一つのアメをなめた。

「あと、これで拭きなよ」

ポケットから今度はハンカチを出した俊。出掛ける前に母親に何  
度も押し付けられたものだ。

「あ、ありがとう……」

それを受け取り涙を拭く瑞穂。アメ、ハンカチが出てきて、俊の  
ポケットはまるで未来から来たネコ型ロボットの腹に付いているポ  
ケットだと思った。

「せっかく可愛い顔してんだがら、涙で汚すなよ。勿体ないじゃん」  
「え……」

にいつと笑顔を見せる俊。

「あ、ありが、と……」

瑞穂は顔を真っ赤にして俯いた。

「で、何で泣いてたの？」

「う、うん。実は……」

泣いてる理由を聞いた俊。

内容は、砂で作ったお城を近所の悪ガキどもに壊されたからである。

「そうか……。それは残念だったね……」

「……………」

「もう一回、今度は俺と一緒に作ろうよ」

「え……」

「俺見てみてえんだ、砂のお城。な、良いだろ」

瑞穂の手を取る俊。

「ほら、早く行こうよ」

そのまま手を引いて公園に向かった。

「こ、公園……反対方向……」

「え……？ あ、ゴメンゴメン。引越してきたばかりだからこの辺りまだ知らないんだった」

頭を掻きながら笑う俊。

「そいやキミ、名前は？」

「み、瑞穂。茂木瑞穂」

「俺は櫻井俊。よろしくね、瑞穂ちゃん」

「よ、よろしく……俊くん」

「じゃあ、早く行こうよ、瑞穂ちゃん」

瑞穂に案内された俊は公園の砂場で、瑞穂に教えてもらいながら一緒に砂のお城を作っていた。

「なんだよ。また作っているのかぁ」

作っている最中、男子三人が現れた。

「しかも今度は男連れてるぜえ」

「お前。男なのに砂場で遊ぶのか？」

「笑っちゃうな」

男子三人はその場で笑い、瑞穂は目尻に涙を溜めた。

俊は立ち上がり、一番最初に笑った男子の顔を殴った。

「何が可笑しいんだよ！」

「——っ！　ってえな、テメエ！」

殴られた男子は俊に向かって攻撃する。俊はそれを躲し、腕を掴み、一本背負いをした。

「何が可笑しいんだって言うてんだよ！　女の子と遊んで何が可笑的い。男が砂場で遊んで何が可笑的い。別に良いじゃん。遊びに男も女も関係ない。お前らか？　お前らが瑞穂ちゃんを泣かせたのか

！」

すずきだ

「薄田、大丈夫か！　おい、クソガキ！」

「調子に乗んなよ！　入江、いりえそのガキ押さえる！」

「分かった！」

入江が羽交い締めをして俊の動きを止め、残っている高月が殴り掛かる。入江の方が背が高く、宙吊りになっていたが、俊はお構いなく後頭部で入江の顔を攻撃。攻撃されたことにより入江は自分の鼻を押さえるべく羽交い絞めを解き、俊は着地。高月は勢いが止まらず、そのまま入江の顔を殴った。

「あ、わりい——ぐあっ」

そのまま俊は高月の顔を殴った。

「っ、強いんだね……」

その光景を見ていた瑞穂は怯えながら俊に話し掛けた。

「正直、知り合いに鍛えてもらったおかげで力はずいと思うけど、全然強くないよ。全然強くない——て、やべっ」

俊は瑞穂の手を引いた。

「早く帰ろう。見つかったら面倒なことになる」

「え、ちよっと……」

「ごめんね、瑞穂ちゃん。また今度、一緒にお城作ろうよ」

俊は走りながら瑞穂の顔を見て笑った。

瑞穂はその顔がずっと忘れられなかった。

(ん……………)

目を覚ました瑞穂は壁の時計を見た。どうやら二時間ほど眠っていたらしい。

「俊……居る？」

「なんだ？」

瑞穂のベッドのそばでイスに腰掛けラノベを読んでいた俊は、本を閉じ、瑞穂の顔を見た。

(本当にずっと居てくれたんだ……)

胸がきゅゅつと苦しくなる。

けれどそれは、禁じられた蜜毒のように甘く、蠱惑的だった。

「あ、あのね、寝汗かいちゃったから、体を拭いてほしいんだけど

……」

——って、え？

自分の口から出たのは、信じられない言葉だった。

(な、何言ってるの、私。いや、可笑しくない？ 可笑しいでしょう)

ドクンドクンと心臓が暴れ出す。

頭の中を走り回る赤兎馬を乗りこなそうとするが、うまくいかない。

「だ、だから、体拭いて……」

「いや、それは——」

「な、なんでもするって言ったじゃない！」

「いや、なんでもとは——」

「う、うるさいうるさい！ あんたは私の看護ドレイなの！ 言うことを聞け！」

かーっと顔を真っ赤にしながら、瑞穂は威勢良く一方的に喋り続けた。

俊は困ったなあという顔で頭を掻きながら、渋々頷いた。

「ドレイっってお前なあ……。はあ、まあ、良いけど」

——え？ えっ？

自分が言い出したことにも驚いたが、俊が頷いたことにも驚いた。そうなると今度恥ずかしいのは瑞穂の方だ。

なにせ、体を拭くということはつまり脱ぐということで、素肌を晒すことになる。

（う、うわあ……。どうしよ、どうしよ。勢いで言っちゃったけど、こ、こ、これってつまり、この場で脱ぐってことよね……。しゅ、俊の前で脱ぐってことよね……）

考えれば考えるほど、恥ずかしいことだと気づき、みるみる耳まで真っ赤に染め上げながら、瑞穂は顔を布団で隠した。

「……………」

「どうした？」

「ど、どうもしてないわよ、バカー！ む、向こう向いてなさいよ！」

言うなり、体を起こして枕を投げる。

それを右手でキャッチしてから瑞穂の腰辺りに支えとして置いてやると、俊は濡れタオルを作り、洗面所へと向かった。

（なによ、優しいじゃない……）

またしてもにへらとなつてしまいそんな顔を、ぶんぶん左右に振って取り消す。

（何であんなこと言っちゃったんだろ……）

もう大胆とかそういう域を越えている。

（おかしなやつだっと思われたりしないわよね……）

俊は面食らったり驚いたりすることがあっても、それが理由で相手に変な評価はしない。それは皆承知だ。

けれど、此処ISS学園に女子は腐るほど居る。そんな中で俊の好

感度争奪戦でトップに立てるかというのは、なかなか難しい問題だ。

（で、でも、アレよね。もしかしたらこれで、俊も私のこと異性として意識するかもしれないし……）

そんな淡い期待と不安の入り交じった感情をツバと一緒に飲み込んで、瑞穂はパジャマに手を掛ける。

（うう……。せめて、もう少し胸があつたら良かったのに……）

いつものメンバーでは胸が一番小さい瑞穂。簪とそれほど変わらないように見えるが、簪より少し小さい。

ぷちっ、ぷちっ……とボタンを外していく。

元々下着は着けていなかったたので、ボタンを外しただけでその小さな胸が露わになった。

（う~~~~っ……）

自分の胸の小ささを改めて自覚しながら、なんだか情けないような腹立たしいような気持ちになった。

「色々試してるのに……」

「何を試してるんだ？」

「きゃあああっ!？」

いきなり俊の声が後ろから聞こえて、瑞穂は軽く飛び上がった。

「なんだよ、大声出すなよ」

「わ、わ、私の後ろに立つなあ!」

「どっかの殺し屋かよ」

「う、うるさいうるさいうるさい!」

「いや、うるさいのお前の方だから」

と言いながら俊は瑞穂の頭をぽんぽんと押さえた。気恥ずかしくなった瑞穂は押し黙った。

「じゃあ、背中拭くからな」

「う、うん……」

瑞穂は上半身を脱いだ状態で、自分の手で胸を隠しながら俊に背中を向ける。

その格好が妙にエロティックで、俊はドキドキとしてしまった。

「……………」  
「ごしごし……………」

俊も瑞穂も無言で、時間だけが過ぎていく。

さつきまでの静寂とは違い、どちらも明らかに動揺している沈黙だった。

（あ、背中……………気持ちいい……………）

冷たいタオルが心地よく肌を撫でる。

それが熱を持った体を優しく拭う度、瑞穂はくすぐったさと快感に小さく身をよじった。

「んっ……………あ……………」

「変な声出すなよ」

「ご、ごめん……………」

「別に謝ることじゃないと思うが……………」

「……………」

結局また沈黙が訪れ、それから三分後にやっと体が拭き終わった。

「お、終わったぞ」

瑞穂の予想外の行動に動揺している俊は、心なしか声のトーンが何時もより高かった。

「……………」

「瑞穂？」

「……………えも……………」

「は？」

「ま、前も……………その、拭いてよ……………」

「な、な、何言ってるんだよ!？」

「い、良いじゃない……………。それとも、胸の小さい女の子は嫌い……………?」

「そっいうわけじゃ……………」

瑞穂の声がわずかに震えているのを感じ、俊は困り果てた。

本当にどうしたんだ? と思いながらも、なんだか泣き出しそう

な瑞穂を放っておけなかった。

「ああもう、分かった分かった！」

「え？」

「やってやるよ！ その代わり、怒るなよ！ 殴るなよ！ 蹴るなよ！」

「そ、そんなことしないわよ……」

瑞穂は反論するが、その声は小さかった。

背中を向けたままの姿でちらつと後ろを見た瑞穂は、胸に当てて手をどかした。

勿論、俊は瑞穂の後ろに居るので直接見ているわけではないが、まるで自分の全てを晒しているかのような羞恥心に襲われて、瑞穂は真っ赤な顔で唇を噛んだ。

（ね、熱の所為……熱の所為……熱の所為……）

そんなことを懸命に考えていると、そつと俊の腕が自分の前に回ってきた。

（さ、触るんだ……。俊、私の胸、触っちゃうんだ……）

瑞穂の心の準備が出来る前に、俊がタオル越しに胸に触れた。

「っ……………」

「……………」

嫌な沈黙がまた訪れた。

その沈黙に耐えられなかった瑞穂が、口を開いてしまふ。

「や、やっぱり小さいかな……」

「そ、そんなことねえんじゃないね……。その……揉めるだけの大きさはあるし」

「すけべ……」

「う、うるせえ」

俊も瑞穂も真っ赤になりながらの体拭きは暫く続いた。

……。

……。

……。

「もう大丈夫そうだし、部屋に戻るから」

「う、うん。ありがと」

パジャマを着直した瑞穂は、布団に潜り込むと恥ずかしさからか俊と目を合わせられないでいた。

それは俊も同じことで、さっきから天井の隅を見つめていた。

「じゃ、じゃあな。お大事に」

俊は早足で部屋を出た。

（赤くなってるってことは、意識してるってことよね……）

——女の子として。

「……えへへ」

瑞穂はまた嬉しそうな笑みを浮かべると、とくん……とくん……と高鳴る胸に手を当てた。

（私は俊が好き……。誰にも負けない。負けないんだから）

そして、次第に穏やかな睡魔に誘われて眠りに落ちていった。

## Episode・65（後書き）

今回は明音メインで、原作の『二匹の子猫のラブソディー』を割り込ませます

感想よろしくお願いします！！

## Episode・66（前書き）

前回明音メインの話にしていると書いていましたが予定を変更して今回はローラメインです

## Episode・66

コミケ前。俺は軍資金を下ろすために街の銀行まで行くことにした。ATMないんだよな、IS<sup>二</sup>学園<sup>一</sup>つて。

「俊じゃないか」

部屋を出てクーラーが入っていない廊下を歩いていると聞き覚えのある声が聞こえた。

「お、ローラじゃん。帰ってきたのか？」

声の主の方に顔を向けると、アメリカ代表候補生がキャリーバッグを引きずり回していた。

「ああ。今日の朝な」

ローラの服装は黒のキャミソールに白のショートパンツだ。大胆だな。

因みに俺はキャンパスノートがプリントされた水色のTシャツにジーンズだ。

「俊は何処かに行くのか？」

「ああ。一人で街の方に行こうかと」

「一人で……」

突然ぶつぶつと小さな声で呟き始めたローラ。一体どうしたんだ？

「決めた。私も行く」

「そ、そうか……」

「待つてろ。すぐに荷物を置いてくる」

「わ、分かった……」

ダッシュでその場を去るローラ。俺はそれをただボー然と見ていただけだった。

それにしても、暑い……。

「待たせたな」

「はやっ!？」

「さ、早く行くぞ」

ローラに手を引っ張られ、寮の近くの駅に向かった。

「ちょっと待て」

「どうした？」

「ローラ。お前、その格好は恥ずかしくないのか？」

「全く」

「そうですか……」

溜息交じりに言うとローラはさらに手を引いた。

……………暑い。

街に着き、銀行に向かった。

「金でも下ろすのか？」

「まあな」

銀行に入りATMに直行。十万円下ろした。

「そんなに下ろすのか？」

「まあね」

諭吉十人を財布にしまった。あとはこれの半分を両替してもらおう。五百玉に。

「貯金はどのくらいあるんだ？」

「えっと、今は……」

通帳をローラに見せた。

「こんくらい」

「何々？ うゝん……。数字が九個並んでいるが、一体いくら残っているんだ？」

「ざっと一億五千万だ」

公にするとあれなので、ローラの耳元で小さな声で言った。

「日本円は良く分らないんだが……」

「一ドル九十円だとすると約百六十万ドルだ」

「なっ……!？」

やっと巨額なことに気付いた驚きを隠せなかったらしく通帳を落とし、一歩後ずさった。

「それ程の額を、一体何処で？ まさか、強だ――」

「それは違うからな」

言い切る前に言葉を遮り、通帳を拾った。

「両親が残してくれたんだ。俺のために」

通帳をしまい窓口に向かった。窓口隣に設置されてる券を取り、順番を待った。

「次の方―」

待たせないようさつさと窓口に向かった。

「どのようなご用件で？」

「両替してほしいんですけど」

「かしこまりました。因みに金額は？」

「五万です」

「……………は？」

「五万円全部を五百玉にしてください」

「か、かしこまりました……」

恐る恐ると受け取る窓口のお姉さんは両替してくれた。

「お待たせしました」

五百玉百枚を受け取った。

当然財布に入るわけがないので封筒をもらった。硬貨を全部封筒に入れ持っていたバッグにしまった。

「お待たせ」

待っていたローラの元に歩みより、一緒に外に出た。

「ローラはなんの用があるんだ？」

「え？」

「だって、街に来たってことは用があるんだろ？」

「そ、それは……その……」

何故かローラはおどおどしていた。

（別に用などないんだが……）

用はないが、ローラが帰国している間、他の連中はどうせ俊のそばにずっと居たに違いない。なので、一秒でも俊の好感度を上げたい。それがローラの答えだ。

しかし、そんなことは知らない鈍感野郎。

（どうすれば良いんだ。此处で用などないと言ったら変に思われるに違いない）

ローラは俊と街を歩きながら考えた。

「あ、あそこに用があつたんだ！」

ふと適当に指を指した。

「そうか、じゃあ俺は外で待つてるから」

「いや！ 一緒に入ろう！」

「え？ ちよつ……。この店はまずいつて」

「良いから、一緒に入るぞ！」

「し、しかし……。此处つて——」

ローラに腕を掴まれそのまま中に入る俊。入った瞬間女性特有のにおいが充満した。そのにおいを嗅いだ俊は一瞬顔を歪めた。

そして、二人が目にしたのは——

「ランジェリーショップじゃ……」

女物の下着だった。

そう、ローラが適当に指差した店はランジェリーショップだった。だから俊は中に入らないようにと外で待つと言ったのだ。

「しゅ、俊に選んでほしいんだ！」

もう後に引けないと思ったローラは勢いでそんなことを言った。

「はあっ！？ お前何言ってる——」

俊の言葉を無視してローラは店の奥の方に俊と一緒にいった。

そして適当に何着か取り試着室に向かった。

「こ、此处で待っていてくれ！」

そう言っただけで中に入るローラ。俊は言われた通りそこで待ったが、店内に居た客、店員が怪しいものを見るような目で俊を見ていた。

（い、勢いでこんなことをしてしまったが……どうしよう）

取ってきた下着を握り締めたローラは決心して服を脱いだ。

衣擦れの音がかすかに俊に聞こえたらしく、俊はドキドキしていた。

（早くしてくんねえかなあ……）

試着室の前で待っている俊は目の前を通る人の視線と衣擦れの音になんとか絶えていた。

「い、良いぞ……」

顔だけ出すローラ。次に手を出し招いた。それに従った俊は顔だけ中に入れた。

「ど、どうだ……？」

頬を赤くしながらローラは下着を披露した。

繊細な黒レースとクロスデザインで魅了するブラとショーツ。ホルターネックのブラトップとショーツは、幅広レースで仕上げた上質な大人のアイテム。ラグジュアリーな存在感のクロス部分がポイントになったセクシーランジェリーだった。

「い、良いんじゃないか。それ」

「そ、そうか。しかし、胸が苦しいな……」

最後の方は小さな声で言ったローラ。

「着替えるからまた待っててくれ」

「分かった」

そう言ってまた試着室の前で待つ俊。

「悪い俊。これのブラだけでもワンサイズのやつを取ってきてくれ。店員に言えば良いと思うから」

そう言っ腕だけ出してさっきのブラを渡すローラ。

「はあ!？」

「早くしてくれ」

思わずブラを握り締める俊。さっきまでローラが付けていたのでほんのり温かった。その温もりを知ってしまった俊はまたも緊張してしまった。

「そ、そんなの自分でやれ——」

俊は勢いよく試着室のカーテンを開けた。この時に気付くべきであつた、と俊は思った。

「……………」

俊は一糸纏わぬローラの背中を見てしまった。

俊は緊張のあまり今のローラの姿を考えていなかったのだ。

「~~~~~!」

顔が赤くなるローラ。

「あ、その……」

俊は記憶していないがローラはこれで二度、俊に裸を見られた。

「は、早く……出てけえええっ!!」

ローラの鉄拳を顔面に喰らった俊はそのまま勢いよく後ろに飛び、意識を失った。

その後目が覚めた俊はローラと洋服店、アクセサリーショップと色々回って、荷物持ちをしていた。ローラは「構わない」と言っていたが俊が「女の子に荷物持ちをさせるなんて男の名がすたる」と言ってローラの荷物を持ったのだ。因みに、さっきの下着は買っていない。

「それにしても、何であんなところで寝てたんだ、俺？」

殴られてからランジェリーショップの記憶がない俊。ローラは自分の裸を見た記憶がなくなって良かったと思う反面、ちょっと名残惜しいとも思っていた。

「きやつ……!!」

帰り道の途中、突然老婆の声が聞こえ、二人は声が聞こえた方を振り向いた。

「ちょ……やば。女にぶつかるとか……」

「構うもんか。こんな婆さん、ISも何も関係ねーだろ」

「それもそうか……。おい、ちゃんと前見て歩かないから転ぶんだぜ、婆さん」

「あいつら……!」

ぶつかったのに謝りもしない大学生ぐらいの男性二人を見た俊は怒りに行った。

「おい、待てよ!」

「あん？ 何だお前？」

「ISがどうか関係ないだろ！ 人を転ばせたんだから、一言謝ってけよ!」

「生意気なガキだな。余計な口出ししてんじゃ……で。偉そうな口きいてるけど、お前だって女の荷物持ちじゃねえか」

俊の手荷物を見て男性がバカにした。

「どうせ普段は女のいいなりになってんだろ？ そんなやつが説教かましてんじゃねえよ」

さっきから男性の態度にイライラしていたローラはついに切れた。

「黙れ！」

その怒鳴り声にその場に居合わせた人全員がビクついた。

「こいつは私のクラスメイトだ。ゴマすってるなどと揶揄されるいわれなどない」

「クラスメイト？　なるほど、すなわちこいつはお前の下僕——」

「黙れと言ったのが聞こえなかったのか……？」

男の言葉を遮るようにローラは呟いた。その威圧に負けた男性は一步後ずさった。

「さつきから黙って聞いていれば、ずいぶん軟弱な思考回路を持っているようだな、貴様ら」

「んだとっ……？」

「確かに今の時代、男性の肩身が狭いことが多いかもしれない。だからといって卑屈になってどうする。貴様らの生き方<sup>もの</sup>や志は、ISなんかで簡単に人に左右される物なのか？　私の知っている男性はそんなもので左右されない。そういう人間だからこそ、自然と人が集まるんだ。心のありようで己の境遇が決まる。うっぶんを他人にぶつけるなど言語道断だ！！」

「お、女のお前にそんなこと言われたく——」

パチパチパチ。と、突然その場に居合わせた人たちが拍手をした。

「チッ……行くぞ、入江！」

「ま、待つてよ高月！」

その場に居づらくなった二人は走ってその場を去った。

「おい、こら！」

「いいんだよ、坊や」

追いかけようとした俊を老婆が止めた。

「お譲ちゃんもありがとねえ」

「いえ、私は……黙っていられなかっただけです……」

IS学園に帰るためショッピングモール内を歩いていた二人。

「それにしても知らなかったな……。ローラに――」

「私に？」

「そんな知り合いが居たなんて」

俊の言葉にローラは溜息をもらした。

（ま、大体流れは読めていたけどな……）

「カッコ良かったな、ローラ。なんていうか、見直した」

「ふん、今頃気付いたのか？」

その言葉を聞いたローラは少し嬉しそうな顔をした。

「さあ、次の店に行くぞ！」

「えっ？ まだ行くの……？」

## Episode・66（後書き）

今回は今拓人先生作の『あいえすっ！』のネタを使いました

そして、次回は明音メインです  
今度こそ明音メインです！！

感想よろしくお願いします！！

## Episode・67

「写真撮影？」

『そ、写真撮影』

夜。動画投稿サイトで見忘れた深夜アニメを見ている最中、明音から電話が来た。

「なんの？」

『雑誌の』

「ふーん。で、なんで？」

『その雑誌の会社の編集部が俊にインタビューしたいんだって。ついでに写真も載せたいからぜひ頼むって』

「インタビューねえ……」

そいや、陸上の時に何度かしたつけ。写真は撮られなかったけど。で、どう？」

「別に良いぜ」

『ホントに！？』

「ああ。ホントだ。それで、いつ撮影なんだ？」

『明日』

「随分急だな」

でも、鳳とオルコットの所為で暫くバイトも休みだし、ちょうど良いか。

『ダメ？』

「いや、大丈夫だ」

『じゃあ、あとで撮影所の住所送っとくから。じゃーねー』

「じゃあな」

電話を切り、再びイヤホンを着着。

暫くするとメールの着信音が部屋に響き渡った。メール相手は明音だった。

そのメールには撮影所の住所と地図が付属されていた。

それを見ても分からなかった俺は、ネットで場所を検索する。撮影所は駅前に近いところだった。メールの一番下には明音から一文。

『十時に撮影所の前ね』

文末には可愛い絵文字が使われていた。

翌日の昼。俺は指定された時間の十分前には撮影所の周囲にいた。ケータイの地図で撮影所を確認。

「ここか……」

建物を見上げていると、中から明音が出てきた。

「ヤッホー」

服装はノースリーブのブラウスにショートデニム。ブラウスは第二ボタンまで開けており、その豊満な胸の谷間を強調していた。

「よっ」

軽く手を挙げて挨拶をした。

「ずいぶん早いね」

「ずいぶんって言うほどか？ 十分前行動は当たり前だろ」

「小学生みたい」

「うるせー……」

明音のあとについていった。エレベーターに乗り四階まで上がった。エレベーターを出た。

「桜井くん連れて来ましたー」

「お疲れ、明音」

明音を迎えてたのは紺色のサマースーツを着こなした女性だった。  
「紹介するね。マネージャーの藤河さん」

「はじめまして。藤河恭子です」

藤河さんはジャケットの内ポケットから名刺入れを取り出し、中から一枚名刺を出した。

俺はそれを両手で受け取った。

「櫻井俊です。今日はよろしくお願いします」

挨拶をしたあと名刺を財布の中に入れた。

「奥のテーブルに編集長が居るから」

藤河さんに案内された。

「どうも」

明音が軽く挨拶した。おいおい良いのか？

「どうも、編集長の飯田悠いいたにゆうかです」

「は、はじめまして。櫻井俊です」

「ふふ。硬くなってるわね」

「え、ええ。まあ……」

「飲み物持ってくるわ。それで落ち着きなさい」

「は、はあ……」

もうちょっと硬い人だと思ったがそうでもなさそうだ。

「はい、コーヒー。これ飲んで落ち着いて」

「あ、ありがとうございます」

缶コーヒーを受け取った俺はプルタブを開け口を付けて缶を傾けた。

「じゃあ、早速質問だけど……」

飯田さんはICレコーダーを起動してテーブルの上に置いた。  
やべえ。さらに緊張してきた。

「今まで買ったエロ本の数は？」

「ぶっ！」

一瞬むせた。

「何なんですかその質問は!？」

「思春期真っ盛りの健全な男子高校生なら一冊ぐらい買ってるでしょ」

「確かに買ったことあるけどそんな情報誰もいらねえだろ！」

「じゃあ、良い感じにほぐれてきたところで次ね」

さっきのは緊張をほぐすための嘘かよ……。まあ、確かに緊張はなくなったけど。

「読者からの質問ね。IS学園に入学して良かったことは？」

そんなの決まってるだろ。

「仲間外れにされなくて良かったです。ハブにされるかと思って半月ぐらいビビってたんで……」

「女に囲まれて毎日が幸せ、と」

「なに捏造してんですか!？」

「だって、面白くないし……」

「インタビュ―に面白さも何もないでしょ!」

「良いツツコミね。お笑い芸人にでもなるの?」

「なりませんから!」

そんなやり取りを終えたあと、再び飯田さんの質問にいくつか適当に答えた。

マジで疲れたからなんて答えたか覚えてねえや。

「じゃあ撮影に移るけど、今回の服装はシンプルにやりましょ。櫻井くん素材が良いから」

「なら、今の服装で良いんじゃないですか?」

因みに俺の服装は黒いポロシャツにジーンズ。いたってシンプルだと思うけど。

「いやねえ。スポンサーの服着て写真撮らないとコレだからさあ……」

そう言っただけ飯田さんは手首で首を切る動作をした。大人の世界って怖い。

「それに、櫻井くんのはシンプルと言うより地味だし」

「うっ……」

痛いところをつかれた。確かにそうだと思っていたけど……。

「やっぱり、ワンポイントあっても良いと思うのよねえ」

「ですよー」

明音もそれには賛成していた。そんなもんなのか？

「じゃあ隣の更衣室で、これに着替えてね」

紙袋を受け取った俺は更衣室に向かった。

中に入っていた服を取り出し、それに着替えた。

白をベースとしたフェイクタイ半袖シャツ。襟と袖部分とフェイクタイには黒い生地が縫い付けられていた。下はゆったりとしたデニムである。

「着替え終わりました」

「お、ずいぶん変わったわね。じゃあ次は化粧ね。その間に明音ちゃんの撮影済ませましょうか」

「はい」

明音がスタンバった。

俺はさっきのテーブルに座り、メイクさんにメイクをお願いした。

「薄田です。よろしく」

「よ、よろしくお願いします……」

薄田さんは後ろから俺の肩に手を置いた。

何故か悪寒が……。というか薄田さん、凄くオカマっぽい。

「じゃあ早速メイクしますね」

「は、はあ……」

せっせとメイクをしてくれる薄田さん。なんだろう。物凄くありがたいんだが、あまり関わりたくない。

「はい。終わりました」

「あ、ありがとうございます！」

さっさとその場を離れた。

これが人間の本能ってやつだろうか。これ以上あそこに居たらめんどくさいことになる気がする。

「もう終わったの？」

明音の撮影が終わったのか、声を掛けてきた。

「あ、ああ」

「凄いよね、薄田さんって」

「なんで？」

「だって、小さい頃はやんちゃだったのに突然美容師に目覚めたんだって」

「へえ……」

「それで中学卒業後、メイクの勉強しに海外まで留学したんだって」  
「そうなんだ」

「しかも私たちと四歳しか違わないんだよ。それであの技術。凄い  
わよねえ」

「だな」

人間って変わるんだな。悪ガキから美容師になるなんて。

「じゃあ櫻井くん。早速撮りましょうか」

「は、はい」

カメラの前に立ち、指示された通にポーズを決める。

「良いね良いね。君、モデル活動とかしたことあるの？」

「全くありませんよ」

カメラマンと話ながらも撮影は続く。

「はい、ご苦労さん。次は明音ちゃんと一緒に撮ろうか」

「わかりましたー」

明音は明るく返事をする。俺の隣に来た。

「よろしくね」

「こちらこそ」

カメラマンの指示に従い、再び撮影が始まった。

「お疲れー。良い写真が沢山撮れたよ」

「そうですか」

撮影って結構疲れるんだな。

「あ、その服持って帰っちゃって良いから」

「ありがとうございます」

「櫻井くん、素材が良くても服がダサかったらモテないからしっかり勉強するんだよ」

「は、はあ……」

「あと、これ。バイト料ね」

飯田さんが封筒を差し出してきた。

「そ、そんなのもらえませんか」

「良いから良いから。はい」

飯田さんは無理矢理封筒を俺に渡してきた。

「あ、それと……アドレス交換しましょ。また依頼したい時に連絡するから」

「分かりました」

ケータイを取り出し飯田さんと赤外線通信でアドレスを交換した。四月になってから女性のメアドが増えた気がするが、気にしないでおこつ。弘樹に殺される。

「明音はまだ仕事があるのか？」

「あるけど昼時だし、ご飯食べに行こうかなって」

ケータイで時間を確認すると一時を回ったところだった。

もうそんな時間か……。

「俺も腹減ったし、一緒に行くか？」

「え？ 良いの？」

「ああ。一人で食うより友達と一緒に食った方が楽しいじゃん」

「う、うん」

「じゃあ行くか」

「気をつけてね」

飯田さんは軽く手を振って見送ってくれた。

駅前のショッピングモールが近いからそこで食うか。

俺は撮影に使った服を着たまま紙袋を持って、明音は顔を隠すためにハットとサングラスを装着して外に出た。

## Episode・67（後書き）

続きは明日投稿する予定です

感想よろしく願いします！！

食べると言っても、実はそこまで腹が減っているわけでもない。今朝は遅めに食ったのが原因だろう。

「仕事前だから軽い方が良いか？」

「そうだね。仕事前に食べ過ぎるのは体に良くないし」

明音もそんなに食べないとのことなので、ショッピングモールの一階にある喫茶店『@クルーズ』で昼食をとることにした。

前来た時はパフェが高くてアイスコーヒーしか頼まなかったが今回はパフェを頼むわけでもないから別段困らない。

「お客様、@クルーズへようこそ」

中に入ると、早速従業員の執事が現れ、気品のあるお辞儀をした。従業員の髪は濃い金髪で、それを首の後ろで丁寧に束ねていた。

何処と無くシャルロットに似て――

「何名でしょう……か？」  
「……」

俺とシャルロット（？）の間にしばしの沈黙が訪れた。

「なにやってんの、お前？」

「二名様ですね。テーブル席の方へ――」

「話をそらすな」

しかしシャルロットは無視して俺と明音をテーブルに案内した。

「では、注文が決まりましたら何なりとお呼び出してください」

早口で言っさつと去るシャルロット。

テーブルに立て掛けてあるメニューを手にとり、中を確認した。アイスコーヒーとサンドイッチでいいか。いや、今回はパフェも頼むか。バイト料が入ったんだし。

「明音は？」

「ミルクティーとホットケーキ」

「オツケー。店員さん。その金髪の店員さん」

一瞬ビクついたシャルロットは俺たちの元に来た。

「何でしょうか、ご主人様？」

「注文なんですけど——って、ちょっとすみません」

そう言つてポケットからケータイを取り出た。

「はい。お、一夏か。ちょうど良かった。俺もお前に用があるんだよ。実はな、シャルロット似の美少年を見つけたんだけど見に来るか？」

「え……？」

「え、場所？ 場所は駅前の『@——』」

「わあああつ——！ ちょ、ちよつと待って！」

シャルロットは瞬時に俺のケータイを奪った。

「い、一夏は……一夏にだけは……」

今にも泣きそうなシャルロットは弱々しく首を横に振った。何だこの罪悪感？

「シャルロット、画面を良く見る」

「え……？」

言われた通りに俺のケータイのディスプレイを見るシャルロット。

「今の電話は嘘だ。からかつて悪かった」

「う、嘘だったんだ……良かった……」

嘘だと知ったシャルロットは安心したのか、今まで溜まっていた何かを吐き出すように息を吐いた。

「で、何でお前がそんな格好でバイトしてるんだ？」

「お店の人に頼まれて。それと、僕だけじゃないよ。ラウラも、ほら……」

シャルロットが指差す方向にメイド服を着たラウラが居た。

ちょうど男性客三名のテーブルで注文を取っているところだった。

「ねえ、君可愛いね。名前教えてよ」

「……………」

「あのさ、お店何時に終わるの？ 一緒に遊びに——」

ダンッ！ と、テーブルに垂直に叩き付けられたコップが大きな音と一緒に滴を散らかした。

「水だ。飲め」

ぞっとするほど冷たい声だった。

接客としてダメだろ、あれ。

「こ、個性的だね。もっと君のこと良く知りたくなっ——」

ラウラは台詞の途中で、しかもオーダーを取ることなくテーブルを離れた。

カウンターに着くなり何かを告げ、少しして出されたドリンクを持って行った。

「飲め」

さっきよりも多少優しめにカップをテーブルに置いたが、それでも弾んだカップからは中のコーヒーが遠慮無くこぼれた。

「え、えつと、コーヒーを頼んだ覚えは……」

「何だ。客でないのなら出て行け」

「そ、そうじゃなくて、他のメニューも見たいわけ……。た、例えば、コーヒーにしてもモカとかキリマンジャロとか——」

「はつ。貴様ら凡夫に違いが分かるとでも？」

言葉を遮るように、ラウラは全く笑っていない目で、その顔に嘲笑を浮かべた。

「いや、その……すみません……」

「飲んだら出て行け。邪魔だ」

「はい……」

「あれ、接客として大丈夫なのか？」

「う、うん。そうなんだけど、ね……」

シャルロットがある席に目線を送った。

「あ、あの子、超良い……」

「罵られたいつ、見下ろされたい、差別されたいいつ！」

どうやらDMな客が交じってるようだな。

「このように、喜んでるお客さんも居るから……」

「そうか……」

「で、注文は？」

「ああそうだった。俺はアイスコーヒーとサンドイッチ」

「明音は？」

「ミルクティーとホットケーキ。よろしくね」

「かしこまりました」

一瞬で使用人モードに切り替わったシャルロットはカウンターに向かった。

品はすぐに届き明音と食事＋雑談。

それから一時間弱過ぎた。

「明音、もう時間じゃないのか？」

「ホントだ。もう行かな——」

「全員、動くんじゃねえ！」

明音が立ちあがった瞬間、店のドアが蹴り破られた。その後、すぐに男三人が雪崩れ込んできた。

「きゃあああっ！？」

一瞬何が起こったのか理解できなかった店内の全員だったが、銃声により悲鳴が上がった。

「騒ぐんじゃねえ！ 静にしろ！」

男たちの格好はジャンパーにジーパン、そして覆面。手には銃。背中のバッグからは何枚か札が飛び出していた。

多分、町で百人に訊いたら百人が強盗だと言っだろう。

「全員ケータイをテーブルに出せ！ そして手を頭の後ろに回せ！早くしろ！」

俺を含めて店内にいた人全員は覆面男に従い、ケータイを出し、手を頭の後ろに回した。

「あー、犯人一味に告げる。君たちはすでに包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返し——」

警察グループが現れ、手早く道路封鎖とライオットシールドを構えた対銃撃装備の警官たちが包囲網を作っていた。

此処@クルーズは一階の入り口付近にある。だから店内から見える景色はショッピングモール内と駐車場の二つだ。だからショッピングモール内と駐車場には警察がわんさかと居た。

「……なんか、警察の対応も」

「……古いな……」

俺と明音は呟いた。

「ど、どうしましょう兄貴！ このままじゃ、俺たち全員――」

「うるたえるんじゃないっ！ 焦ることはねえ。こっちには人質が居るんだ。強引な真似は出来ねえさ」

リーダー格とおぼしき三人の中でひととき体格が良い男（以降デブと呼称）がそう告げると、逃げ腰だった他の二人が自身を取り戻したみたいな顔をした。

「へ、へへ、そうですね。俺たちには高い金払って手に入れたコイツがあるし」

ジャキッ！ とショットガンのポンプアクションを行い、威嚇射撃を天井に向かって行った。

「きゃあああっ――！」

蛍光灯が破裂し、俺の席の近くに居た女性がパニックになって耳をふさいで悲鳴を上げた。それを今度はデブがハンドガン撃つて黙らせた。

「大人しくしてな！ 俺たちの言うことを聞けば殺しはしねえよ。分かったか？」

顔面蒼白になった女性は何度も頷いて、再び手を頭の後ろに回した。「落ち着いてください。すぐに終わりますから」

男たちに聞こえないように女性の耳元で呟いた。  
すると女性は頷いた。

「おい、聞こえるか警官ども！ 人質を安全に解放したかったら車を用意しろ！ 勿論、追跡車や発信器なんかもつけるんじゃないぞ！」

威勢良くそう言って、警官隊に向かって発砲した。

ガラスが割れる音がしたから多分怪我人は居ないだろうが、野次馬がパニックになったに違いない。

「へへ、やつら大騒ぎしてますよ」

「平和な国ほど犯罪はしやすいって話、本当ッスね！」

「全くだ」

俺の視界にシャルロットが入っていないってことはどっかに隠れているんだな。

『シャルロット、聞こえるか？』

すぐにプライベート・チャネルでシャルロットと連絡をとった。

『どうしたの、プライベート・チャネルなんか使って？』

『リーダーみたいなやつなんだが、妙に体格良すぎないか？』

『そうだね。上半身があんなのに下半身がすらつとしてるし……』

もしかしたら他に武器を持っているのかも、予備として。と思う、ラウラ——って、嘘っ！？』

『ん？ どうしたんだ——って、はあっ！？』

「……………」

何故かラウラは突っ立っていた。何やってんだあいつ。

「何だ、お前。大人しくしろっていうのが聞こえなかったのか？」

案の定、すぐにデブがやってきた。

「おい、聞こえないのか！？ それとも日本語が通じないのか！？」

「まあまあ兄貴、良いじゃないッスか！ 時間はたっぷりあるんスから、この子に接客してもらいましようよ！」

「ああ？ 何言ってるんだ、お前」

「だって、ホラ！ すっげー可愛いッスよ！」

「お、俺も賛成っ。メイド喫茶って入ったことなくて……」

テヘへと嬉しそうな表情を浮かべる手下二人。デブは眉間にしわを寄せながらソファァーにどかっとな腰を下ろした。

「ふん。まあ良い。ちょうど喉が渴いていたところだ。おい、メニューを持ってこい」

ラウラはカウンターの中にすたすたと歩いて行った。そして、持

つてきたのは氷が満載された水だった。

「……なんだ、これは？」

「水だ」

「いや、あの、メニューを欲しいんすけど……」

「黙れ。飲め。——飲めるものならな」

ラウラは突然トレーをひっくり返す。当然、氷水が宙に舞うが、それらを回転するような動作で掴み、弾いた。

「いつてええっ！？ な、なっ、何しやがっ——」

氷の指弾。それをトリガーから離れていた人差し指に、突然の出来事に反応出来ずにいた瞼に、眉間に、喉に、一瞬で当てた。

そして犯人の怒号より早く、男の一人の懐へと膝蹴りを叩き込んだ。

「ッざけやがって！ このガキ！」

いち早く痛みから復帰したデブが、早速ハンドガンをぶっ放す。

発砲音を連続して響かせるがラウラには当たらなかった。

ソファアを、テーブルを、観葉植物を、ドリンクサーバーを、店内のあらゆるものを盾にして速いスピードで駆けていた。

被弾しないように俺を含めた店内の人全員が床に伏せた。

「あ、兄貴っ！？ こ、こいつッ——」

「うるたえるな！ ガキ一人、すぐに片付けて——」

「——一人じゃないんだよねえ、残念ながら」

マシンガンを切り替えていたデブの後ろに回り込んでいたシャルロット。その言葉には溜息が含まれていた。

「なっ！？ このっ——」

「あ、執事服で良かったかな。うん。思いっきり足上げても平気だし」

そんなことを口にしながら、シャルロットはデブの拳銃を手ごと蹴り上げた。

そのままの勢いでショットガンの男の肩に、今度は踵落としを叩き込んで無力化した。

ずいぶん嫌な音がしたな。その証拠にショットガンの男の腕はだらんと垂れていた。

「目標2、制圧完了。——ラウラ、そっちは？」

「問題ない。目標3、制圧完了」

手下二人が気絶したことを確認して、二人は頷いた。

最後の一人——リーダーことデブはさっき蹴られて指が折れたらしく、左手で予備のハンドガンを握って立ち上がった。

「ふっ、ふざけるなあっ！ お、俺がつ、こんなガキどもにつ……！」

その引き金が引かれる前にラウラが一直線に飛び出した。

身をひねって初弾を躲したシャルロットは、足元にあったトレーを勢い良く踏みつけた。

トレーはそのまま乗っていた『物体』をぽーんと空中に投げる。

ジャストのタイミングでそれはラウラの手に収まった。

黒く、鈍い光を放つ殺傷兵器。片手に収まる人工の殺意、そのハンドガンの銃口をデブの眉間に突き付ける。

「遅い。死ね」

「えっ。ラウラ、待つ——」

銃弾ではなくグリップが額に叩き込まれ、男は糸が切れた操り人形のように倒れ伏せた。

二人とも、息が合い過ぎだな。俺も飛び込もうと思ったけど、しなくて正解だった。

「全制圧、完了」

「……はあ。一瞬びつくりしたじゃない……」

「ああ言えば、素人ならトリガーにためらいが生まれるからな。より安全な制圧方法だ」

「いや、まあ、そうなんだけど」

「お前なら本当に撃ちかねなかったんだろ」

立ち上がった俺はラウラの声を掛けた。

「俊、居たのか？」

「居たよ。一時間ぐらい前から」

「お、終わった……？」

「助かったの、私たち……」

「い、一体何が……」

俺たちの会話を聞いて店内の人がのろのろと頭を上げ始める。

「お、俺たち助かったんだ！」

「やった！ あ、ありがとう！ メイドさんに執事さん、ありがとうございます！」

店内がわつと騒がしくなった。

その様子を見ていた警官隊が状況に決定的な変化があったと思ったのだらう、一気に詰めかけて来た。

「ふむ、日本の警察は優秀だな」

「ラウラ、まずいつてば！ 僕たちって代表候補生で専用機持ちなんだから、公になるのは避けないと！」

「へえ、そういう決まりなんだ……」

って、専用機持ちの俺も危なくね？

「では、このあたりで失敬するでしょう」

シャルロットとラウラが去ろうとした瞬間、事態は再び一変した。捕まってムシヨ暮らしになるくらいなら、いつそ全部吹き飛ばしてやらあつ！」

意識を失っているかと思っていたが、デブが蘇った。どうやら決まりが浅かったようだ。

立ち上がったデブは革ジャンを左右に広げた。

そこにあつたのは、プラスチック爆弾の腹巻だった。これの所為でデブに見えたのか。

「最後まで古いな、あんた……」

俺は気を失っている男二人の懷から拳銃を二丁取り出した。

「諦めが悪いな」

ふわつと、ラウラがスカートをなびかせるように右足を上げた。こちらからは見えないが、デブ——もといリーダーには見えたのだ

ろう。スカートの奥にある布地が。それに見とれている一瞬の隙に、ラウラは足を振り下ろした。

その踵はテーブルを勢い良く傾け、そこにあった拳銃が宙を舞い、それをシャルロットがラウラの背中を転がるように受け取る。そして、俺ら三人は銃を構え――

ダダダダッ！

「……チエック・メイト……」

高速五連射×3の弾丸は、的確に起動装置と爆薬の信管、そして導線だけを撃ち抜いた。拳銃なら先日、俺のISの武器、《百雷近・中距離モード》で練習したからこのぐらい造作ない。

「まだやる？」

「次はその腕を吹き飛ばす」

「やられたくなかったら降参した方が良いよ。この二人、めちゃくちゃ恐いから」

「す、すみつ、すみませんっ！ も、もうしまっ、もうしませんっ。い、命ばかりはお助けを……！」

土下座をして声を震わせながら敗北宣言をするリーダー。

これで終わりか。

「な……んてな……」

と思いきやリーダーが顔を上げた瞬間。

ガッシャーッ！！

突然店内にトラックが突っ込んできた。

「迎えに来ましたぜ！ 兄貴！」

「良くやった、お前の言うとおり、ことは全てシナリオ通りに進んだな」

「そんなこと言ってないで早く乗ってください！」

リーダーは手下二人を抱えてすぐに車に乗った。

「待てっ！」

「残念だなメイドさん。その銃に弾は入っていないぜ」

「なに？」

車を運転していた男の言う通り、銃には弾が入っていなかった。その証拠に、ラウラが何度も引き金を引いているが発砲されない。「あばよ！」

車に乗り込んだ犯罪者一味は捨て台詞を言っ去った。

「待て！」

「無茶だよラウラ。走って追いつけるわけが――」

「どっちでも良いから手伝ってくれ！」

そう言っ俺は駐車場に置いてあつたバイクに跨った。見ると鍵が刺しっぱなしだつた。盗まれたらどうすんだよ？

「運転出来るの？」

「入学式前に免許取つたから問題ない！」

全くの嘘である。俺の誕生日は十月九日だから免許が取れる年齢ではない。

ハンドルにヘルメットが掛けてあつたので俺はそのヘルメットを被つた。

「私が行こう」

「サンキュー」

隣のバイクのハンドルにもヘルメットが縛り付けてあつたので後ろに乗つたラウラにそのヘルメットと拳銃を渡した。

そして、全速力でトラックを追い掛けた。

「入江。お前のおかげで助かつた。」

「ありがとうございます。おい、高月。追っ手は来てないだろうな」

「勿論。パトカーのタイヤは全部パンクさせたからな」

そう言って高月は手に持っていたサイレンサー付きハンドガンを見せた。

「さて、次は何処に――」

突然タイヤがパンクする音がした。

「追っ手か、高月!？」

「いや! パトカーなんて一台も来てないぜ――って、来た!」

「パトカーがか?」

「いや。バイク一台が」

「はあ?」

そう言ってサイドミラーを見て後ろを確認する入江。

その目に映ったのは、バイクを運転する俊と後ろに乗っているラウラだった。

ラウラはバイクの後部座席で立ち上がり銃を二丁構えていた。

「ラウラ。ちよつと待ってくれ」

俊はトラックの横についた。

「凄い計画だな、あんたら」

「何言ってんだお前?」

入江に話し掛ける俊だが、その声は入江には届かなかった。当然俊も入江の声は聞こえてない。一方的に話しているだけだ。

「でも、これは計算外じゃなかったの?」

「えめえ、その銃何処で!？」

「使えない二人に予備の武器を持たせちゃ駄目だよ。次があつたら気を付けな」

そう言ってトラックの後ろにつく俊。パンクとなれば大事故になるので徐々にスピードを落とし、トラックとの距離を空けた。十分な距離が取れたと思ったラウラは残り三個になった右後輪のタイヤを全部パンクさせた。

「じゃあな――」

そう言って俊は元来た道に戻った。

「畜生! 此処までかよ!？」

入江は勢い良くハンドルを叩く。その時にクラクションが鳴り響く。そのトラックの周りには別のところから来たであろうパトカーが数台トラックを囲んでいた。

その後、大騒ぎ（特に俊の無免許運転のことで）にならないように俊はさっさと明音をさっきの撮影所に送った。

「あ、クレープ屋だ」

その撮影所の途中にある城址公園にバン車を改造した移動型店舗であるクレープ屋を見つけた。

「あそこのミックスベリーが美味しいって噂なんだよ」

「噂って……。食ったことないのかよ？」

「人気だから何時も売り切れてるらしいよ」

「へー。そんなに美味しいなら食ってみたいな」

「でしょ」

俊の手を引いて明音は中に入った。

（ま、おまじないが本命だけだね）

明音が思っているおまじないとは、そのクレープ屋のミックスベリーを食べると『幸せになれる』というものだ。

「すみませーん。ミックスベリー二つください」

「ごめんなさい。今日、ミックスベリーは終わっちゃったんですよ」

「え」

「悪いね」

「じゃあ代わりにイチゴとブルーベリーを一つずつください」

「お、あんたが全額払うのか？」

俊が代金を皿に乗せると店主が含み笑みを見せた。

「感心するならまけてくださいよ」

「まけたいところだが、リア充はお断りだ」

「それはひど過ぎませんか……」

俊と店主が会話をしている間にクレープは完成。俊はおつりと商品を受けとった。

「明音、どっちが良い？」

「ブルーベリー……」

「はいよ」

俊は左手に持つてるクレープを明音に渡す。二人はクレープ屋を離れ、近くのベンチに腰掛け、俊はクレープを頬張った。

「美味しいな、明音」

「……そうね」

ミックスベリーが食べられなかったことが心残りの明音。クレープを頬張った。

「どうだ？」

「……美味しい」

「お、そっちも美味しいのか？　なら交換しようぜ。ほれ」

「……ありがとう」

クレープを交換した二人は再び頬張る。

「此处で明音に問題だ」

「……なに？」

「イチゴは英語でなんと言っでしようか？」

「ストロベリーでしょ」

「なら俺が今食べたのは？」

「私のブルーベリー」

「二つの共通している言葉は？」

「……あ」

ストロ『ベリー』とブルー『ベリー』。

「メニユー見たけど、あそこにミックスベリーのミの字もなかった

からな。これじゃねえかと思ったんだ」

「そうだったんだ……」

ストロベリークレープを頬張る明音。俊はブルーベリークレープを明音の口元に寄せ、明音はそれを頬張った。

「どうだ？」

「美味しい」

さっきまでテンションが下がっていた明音だったが急にテンションが上がり、その言葉は弾んでいた。

「俊も食べる？」

「おう」

明音はにこやかな顔でストロベリークレープを俊の口元に寄せた。先にストロベリークレープを食べた俊はその後ブルーベリークレープを食べた。

「お、ホントに美味しいな」

「でしょ」

その後二人の食べ合わせが続き、はたから見ている人は皆『リア充は死ね』と思ったに違いない。

## Episode・68（後書き）

今回の話はコミケ後の設定で、その時の出来事で俊はラウラのことをファーストネームで呼ぶようになりました  
その話是何時か投稿しようかと考えています

今回で俊の誕生日が判明。これ、結構重要です

そいや、一夏と篤以外のキャラで誕生日って公表されてないよな……

次回はリリーメインです

感想よろしくお願いします！！

## Episode・69（前書き）

皆様のおかげでこの作品は50万PVを越えました！！

本当にありがとうございます！！

（はぁ……。何て言って誘いましょう？）

オーストラリアに帰国していたリリーは今日、日本に戻ってきた。その帰りに学園近くの商店街で行っていたくじ引きをしたところ見事一等を引き当てたのだ。

その景品はスパリゾート一日フリーパスのペアチケット。最近出来た場所で、世界中のお風呂が楽しめるようだ。男女混浴だが当然水着着用である。

（しゅ、俊くと……混浴……）

それを手に入れたリリー。誘う相手は当然俊だ。

その後にチケットを渡すためのシミュレーションを商店街から学園の寮に着いた今でもずっと考えていた。

「お、リリーじゃん」

「しゅ、俊くん!？」

一年生寮の廊下。そこでリリーはバツタリ俊と会ってしまった。

「そんなに驚いてどうしたんだ？」

「い、いえ、その……実は、お話が……」

「話？」

「えーと、その……」

戸惑うリリー。それを見て俊は少し首を傾けた。多分頭の上にクエスチョンマークが浮かんでいるに違いない。

（な、何か、何か話題を……）

戸惑ってしまい黙り込んでしまった。これじゃあシミュレーションの意味がない。

その間、俊は持っていたタオルで汗を拭った。

「あれ？ 俊くんは練習の帰りですか？」

それを見たリリーは率直な疑問を俊にぶつけた。

「ああ。だから早くシャワー浴びなくちゃな。此处で話すのもなん

だし、俺の部屋に来るか？」

「え？」

「廊下ってエアコン入ってないから暑いだろ。たがら部屋で涼みながら話そうぜ」

「そ、そうですね」

顔を赤らめるリリー。俊の後について行き、部屋に入った。

「今エアコン入れるからちょっと待ってるよ」

そう言っ俊はエアコンの電源を入れ、冷蔵庫を開けた。

「カルピスしかないけど良いか？」

「お、お構いなく」

入ったは良いが何もすることがないリリーはただおどおどとしていた。

「そこに立ってるのもなんだし、ベッドにでも座つとけよ」

「わ、分かりました……」

リリーは恐る恐るベッドに腰掛けた。

リリーが待つてゐる間俊はコップにカルピスを注いでいた。

（うわ……。汗で体がべとべとじゃん……）

注いでる間、俊は今一度自分の姿を確認。練習着は汗が含んでおり、それが肌に張り付いていていた。

「すまんリリー。シャワー浴びるから少しくつろいでくれ」

カルピスを注ぎ終え、コップを渡した俊はすぐにシャワールームに入った。

「あ、分かりまし……。って、ええっ!？」

あまりの衝撃発言に、リリーはコップを落としそうになった。

（しゃ、シャワーって……。それって、もしかしなくても……!）

戸惑うなかピンク色の妄想を膨らませるリリー。

（どどどどうしましょう。今日の下着は自信がないのに。で、でも、俊くんならそんなこと気にしませんよね）

どんどんエスカレートして行くリリーの妄想。ついには自分の両親に何て話そうというところまでいってしまった。

「あゝ、サッパリしたゝ」

シャワーを終え、普段着に着替えた俊はバスタオルで髪をわしゃわしゃと拭いていた。

「悪いなりりー。って、顔が真っ赤だけど大丈夫か？」

「い、いえ！ 私は大丈夫です！」

「まあ良いや。で、話ってなんだ？」

「あ、はい！ 子供の名前はどうしますか！？」

「……………へ？」

（ま、間違えた！ そうじゃなくて…………）

妄想と現実を混同してしまったりりー。その後どういう対処をすれば良いか分からずおどおどしてしまう。

「ぷっ………… ハハハハッ！ なんだよ、子供の名前って？ 一体なんの話だよ！」

俊は腹を抱えながら笑った。

「ひい…………。苦しい…………」

「す、すみません…………」

「べ、別に良いって」

笑い泣きした俊は目尻に溜まった涙を拭う。

「はあ…………。落ち着いた。て、りりー。手に持ってる紙切れはなんだ？」

「あ、はい！ 実は、商店街の福引でスパリゾートのペアチケットが当たったんですけど…………」

りりーは俊に二枚あるチケットの一枚を渡す。

「へゝ。凄いじゃん。誰かと行く予定はあるのか？」

「そのことなんですけど、その…………」

「どうした？」

俊の顔を見て赤くなるりりー。緊張はピークに達したが。ついに、意を決した。

「俊くん。私と一緒に行きませんか！？」

「え？ 俺となんかで良いのか？」

「はい！ 俊くんが良いんです……」

弱々しい口調だったため、最後は何て言ったか聞き取れなかった俊。

（明日ならバイトが休みだから暇だったはず……）

俊は手帳を開きスケジュールを確認した。

「明日暇だから一緒に行けるけど、大丈夫か？」

「だ、大丈夫です」

「よし。じゃあ明日行こうぜ」

「よ、よろしくお願いします！」

テンションが上がってしまったリリィ。嬉しさのあまり、きっと今夜は眠れないだろう。

**E p i s o d e ・ 6 9 ( 後 書 き )**

短めですみません

感想よろしく願います!!

## Episode・70

「あちい……」

電車とバスを乗り継いで一時間。俺とリリーは、先日福引で当たったというスパリゾートに向かって歩いていった。

「天気良すぎですね。今日」

「だよな……」

天気は雲一つない快晴。そんななか、太陽がじりじりと俺たちを照り付けていた。

陽光の熱と、アスファルトの熱が合わさっている所為かかなり暑い。

天気予報では最高気温は三十度とか言ってたけど体感気温はプラス十度くらいだ。

「あ、あれじゃないですか？」

リリーが少し小高い丘の上にある建物を指差す。

「おお！」

入口付近に着くと入口に『エンジョイ・リゾート』と掲示されていた。

二十階建てのホテルがどんとそびえ立っており、改装したばかりらしく、外見はかなり綺麗だった。

「夏なのに繁盛してるんだな」

さつきから俺たちの横をツアーバスが追い抜いていく。

「プールもありますからね」

「全部温泉ってわけじゃないんだな」

正面入口に入りチケットを出す。かなり広めに作られているロビーだが、夏休みということもあってか人で溢れていた。

「何処で待ち合わせする？」

「そうですね……。マップに書いてある『待ち合わせのヤシの木』にしましょう」

まんまだな。もうちょっと良い名前はなかったのか？

「オツケー。多分俺の方が早いだろうから先に待ってる」

口に出したら絶対に係員に殺されるだろうから心の中で名前のことをツツコんだ。

「すみません。なるべく早く向かいますから……」

「焦んなくて良いって。じゃ、また後で」

リリーと分かれて男性用更衣室に入る。

館内の見取り図で更衣室の広さを見たところ、男性用更衣室は女性用更衣室の半分ほどの広さしかない。通路が狭いからかなり困る。ロッカーに荷物を詰め、水着に着替える。

さつさと着替え終えた俺はスパエリアに入った。

「おい、あれ見ろよ」

「ん？ …… ああっ！ もしかして櫻井俊か！？」

「うわー、初めて見た。写メ撮るところ」

「へえ、テレビや雑誌で見るより良い男じゃない」

俺の存在に気づいた人たちが騒ぎはじめた。

先日、明音と一緒に載った雑誌の売り上げが結構良かったらしく、編集長の飯田さんから「また出てくれない、というか専属モデルになって」と言われたが、「専属モデルは断りますが、機会があればまた出させてください」と言っておいた。

しかし、有名人になるって嬉しいもんじゃないな……。学校でも女子から興味の対象として扱われてるから、外でもこれだと流石に疲れる。

俺はさつさとフードエリア隣にある『待ち合わせのヤシの木』に向かった。その間に無断で写真を撮られたが気にしない気にしない。すぐについて暫く待っていると、さつきとは別のざわめきが聞こえた。

「おお！？ なんだあの美少女！」

「芸能人かな？ それともモデル？」

「こ、声掛けてみようかな」

さらに騒ぎが広がる。

俺はちらつと騒ぎの中心を見ると、リリーが居た。

「お待たせしました」

「そんな待ってないから気にすんなよ」

早足でやって来るリリー。着ている水着は臨海学校と同じものだった。因みに、俺も臨海学校と同じ水着だ。

「なんだよ。櫻井俊の彼女かよー！」

「うー、櫻井くんに声掛けようと思ったのに……勝負にもならないよ」

「やっぱり良い男には良い女が付いてるもんなのか……」

俺とリリーが合流した所為か、更に騒がしくなった。

騒がしくなったが周りの人は俺たちに近づこうとはせず、一步距離を置いていた。

リリーと一緒にマツプを見た。どうやら温泉と遊園施設を組み合わせで、大きく分けて各種温泉エリア、プールエリア、フードエリアに分かれている。

フードエリアには特設ステージがあって、各種イベントを行っているらしい。

因みにそのステージは巨大な帆船の形をしていた。

「何処に行きましょうか？」

「そうだな……。先にプールで遊んで、後で温泉でのんびりと疲れでもとるっていうのはどうだ？」

「良いですね、それ。そうしましょう」

俺たちはプールエリアに向かい、スライダーを通り過ぎ――

「あっ」

ようとしたところで、何かに気づいたリリーが声を上げた。

「どうした？」

「俊くん。まずこれにしましょう！」

「え、ちよっ!？」

リリーに手を引かれ、スライダーの列に並んだ。一体何があった

んだ？

「すみません。ペア滑りってどうするんですか？」

すぐに順番が回ってきたらしく、リリーが係員のお姉さんに何か訊いていた。

「ペア滑りはですねー、こう、彼氏さんが彼女さんを後ろから抱っこする感じですねー」

ペア、滑り？

「俊くん。早くしてください」

「あ、ああ。なんか知らないけど分かった」

スライダーの入口にまずは俺が座る。

「彼女さんは脚の間に座ってですねー」

「こ、こうですか？」

リリーが俺の脚の間に腰を下ろした。って、なんだよこれ！？

普通ペア滑りって二つ穴が空いた浮輪を使ってやるもんだろ。

「それでですねー、彼氏さんは彼女さんを後ろからぎゅってするんです。ぎゅって。あ、お腹を抱く感じでー」

「は、はあ……」

色々と疑問があつたが俺は係員のお姉さんに言われるがままにリリーを後ろから抱きしめた。

「……………」

な、なんで黙るんだよ。俺だって恥ずかしいのに。

しかも、触れているのは肌と肌だから、女の子特有の柔らかさを体にかけてしまう。それに、体温まで伝わる密着だから、俺は変にドキドキしてしまった。

「最後にですねー、彼女さんは彼氏さんの腕に掴まってくださいねー。しっかりとですよー。途中でほどけちゃうと危ないですからー」

「は、はい！」

元気良く返事をしたリリーは俺の腕をぎゅっと掴む。

「えーと、これでもう行って良いんですか？」

「はい、どうぞー。行ってらっしゃーい」

とんつと背中を押された。

最初こそゆつくりとした滑走だったが、すぐに加速して速度が上がった。

水しぶきが顔にかかり目を細める。

「きゃっ……!？」

「す、すまん！」

つい反射的に腕に力がこもってしまい、リリーの腹を強く締めてしまった。

次はカーブらしく、遠心力で体が外側に引つ張られる。

またしても反射的に腕に力がこもり、同時にリリーの体勢が勢いに負けて傾いた。

——むにゅ。

「あ……」

「~~~~~!!」

腕が一瞬でほどけたのを慌てて戻すと、俺はリリーの胸にダイレクトに触れてしまった。

「す、すま——うわっぷ!？」

ざっぱーん。

どうやら終着点に到着したらしく、水中に突っ込んだ。

「ぷはっ！」

水面から顔を出すと、リリーが腕をクロスさせ胸を隠しながら俺をじーっと見た。

「……………」

「え、と……その。悪かった……」

「……俊くんのえっち」

「あ、あれは不可抗力だ！」

「でも……触りましたよね」

「う……」

そう言われたらどうしよもない。

しかし、柔らかかったな……。

.....。

反省。

すぐに上がり、リリーに手を差し出す。

「その……許してもらえないと思うけど、悪かった」

リリーは俺の手を掴み、上がった。

「あの……リリー？」

上がったは良いが、リリーは俺の手を離そうとしない。

「なんですか？」

「いや、どうして手を離さないんだ？」

「なんとなくです」

「さいですか……」

仕方なくリリーと手を繋いで歩くことに。

近くにあった売店でドリンクを買い休憩することにした。

『それでは本日のイベント、ベストカップル大会の参加者を募集します。一位の方には秋の紅葉狩りを楽しむ二泊三日の旅を——』

二人とも無言でドリンクを飲んでいると、場内アナウンスが響いた。

紅葉狩りか。行ったことないから楽しそうだな。

「俊くん！」

「急にどうしたんだ？」

「一緒に出ましよう！」

「はい？」

## Episode・70（後書き）

今期アニメは豊作が多いのでかなり嬉しいです

自分の今期一はやっぱり『Fate/Zero』で二番目は『僕は友達が少ない』です

それと、近々オリジナル小説を投稿する予定です

もう消去してしまいましたが、自分が初めて此処に投稿した駄作『能力者達の戦い』をリメイクしたやつです

前回は殺し合いでしたが今回は学園ものの予定です

感想よろしくお願いします！！

## Episode・71

『それでは、ベストカップル大会を開始します！　まずは二人三脚水上走りです！』

リリーの要望に応えた俺はベストカップル大会なんてものに出なくちゃならなかった。

優勝賞品は『紅葉狩りを楽しむ二泊三日の旅』。

リリーがどれだけ紅葉狩りが好きなんだよ。

最初の競技はアナウンスの通り二人三脚水上走り。プールにはそれぞれのコースにゴザが浮かべられてあり、この上を沈む前に走る競技みたいだ。

リリーはさつさと足を結ぶ。

「俊くん。絶対勝ちましょう！」

「お、おう！」

どうやらリリーは本気で紅葉狩りに行きたいようだ。ならば、それに応えなくちゃな。

『それでは各自スタート地点についてください！』

アナウンスに従いスタート地点につく。

『スタート！』

リリーに合わせ足を進め――

「全力でいきますよ！」

ようとしたがリリーは初っ端から容赦なく猛スピードでゴザの上を駆ける。

くそつ。普通の地面ならなんてこともないが、不安定なゴザだから走りづらい。

すぐにコツを掴んだらしいリリーは更にペースを上げる。

「ちょ、ちょっと待て！　もう少しペースを遅くしても――」

「1、2、1、2、1、2――」

ダメだ。全然聞いちゃいない。

途中で足を引つ掛けた俺は、リリーと共にプールにダイブ。

「早く上がりましょう！」

リリーと共に上がろうとするがゴザが不安定すぎて体を乗っけることが出来ず、そのまま抜かれてしまった。

『さてお次はラブラブfrisビー投げです！ 息の合ったカップル同士、長く続けた方が勝ちです！』

すぐに次の競技に移った。良かった。これなら安全だな。

「俊くん！」

リリーが全力でfrisビーを投げてきた、って、はやっ！ フリスビーってあんな速度で投げられるのか！？

「おわっ！」

なんとかfrisビーをキャッチした。手が尋常じゃないほど痛い。俺は普通に投げ、リリーにまで飛ばす。

「それじゃあ数が稼げないじゃないですか！」

リリーはさっきと同じくらいの速さでfrisビーを投げる。

これって長く投げられれば良いんじゃないの？

俺が投げ返すとキャッチと同時に投げるリリー。

「「あ……」」

しかしfrisビーは俺の居るところには飛ばずかなり逸れてしまった。

俺はその場からジャンプしてなんとかキャッチ。そのままプールにダイブした。

「はあ……はあ……はあ……」

あれ？ フリスビーってこんなに疲れる遊びだっけ？

「俊くん！ 早く次行きましょ！」

鬼か……こいつは……。

その後も競技は続き、『キャベツの千切り大会』とか『水口ケツト飛ばし大会』とかもはやペア競技じゃなくなっていた。

『さあ！ いよいよ大会競技もラストになりました！』

「やっとなんか……」

ほっとした俺は、はあっと吐いた。

『最後はカップルの幸せ度を競い合うかき氷早食いもとい、かき氷早あーん対決です!』

「……………」

安心するのはまだ早いみたいだな。かき氷早食いと聞いてから頭の危険信号が鳴り止まない。

『愛する彼女のあーんなら男たるもの何杯でもかき氷を食べられるはずです! さあ、参加者はあちらのテーブルに!』

「俊くん! 頑張ってください! 私も頑張りますから!」  
張り切ってるリリー。テーブルにはすでに十杯以上のかき氷の山がある。いつの間にか持ってきたんだよ!?

次の日俺は大丈夫だろうか?

『それでは、スタート!』

開始と同時に皿を押し付けるリリー。って、飲み込めってか!?  
『そのカップル。ちゃんとスプーンを使ってくださーい』  
司会のお姉さんが注意する。良かった。俺の寿命が少し伸びた気がする。

リリーは仕方なさそうにスプーンを取った。

俺が口を開けるとリリーは容赦なく氷を口に放り込む。

「むごっ!」

「もうちょつとペースを上げますね!」

え? まだ上げるんですか?

容赦なく口に氷が放り込まれ、もう頭が痛いとか口が冷たいとかの域を超えていた。というか、息が出来ないし腹ー冷えてきた……。  
もう……。無理。

「ど、何処行くんですか!?!」

便所に決まってるだろ!

俺は腹を押さえながら全速力で便所に向かった。

「死ぬかと思った……」

「うう……。すみません……」

大会の結果は当然負け。

俺とリリーは適当にぶらついてた。

「悪かったな。力になれなくて」

「いえ。私が焦りすぎたのが原因ですので……」

落ち込んだ顔をするリリー。

「そんな暗い時こそ温泉に入って嫌なことを忘れようぜ」

「そ、そうですね。そうしましょう」

リリーも賛成したので、俺たちは温泉エリアに向かった。

「お。ジェットバスがあんじゃん」

「ジェットバスですか」

「ああ。最初はそこにしようぜ」

俺は最初に目に入ったジェットバスに入った。檜木の丸太を半分に切って出来た枕に首を掛け、ジェットの中に体を入れる。大量の泡が体のありとあらゆるツボを刺激してくれるから気持ち良い。

「初めですけど、気持ち良いですね」

俺の隣でジェットバスに入っているリリーにも絶賛のようだ。

「だろ。あゝ……。いーきーかーえーるー……」

暫くジェットバスを堪能していると何処から来たか分からないが一枚の布切れが俺の元に漂ってきた。

「なんだ、これ？」

拾うと、一枚の水着だった。あれ？ これ、何処かで見たような……。

俺の記憶が正しければ確かリリーが付けてた水着に似てるな。

……まさか。

嫌な予感しかしくなり、俺は隣を見た。

そこでジェットバスを満喫しているリリー。しかし、その首にはさつきまであった紐がない。

「リリー……」

「なんですか？」

「お前、ちゃんと水着付けてるよな？」

「そんなの当たりま——」

言い切る前にリリーは俺が今持っている布切れを見て顔を赤くする。そして自分の上半身を触り、水着を確認した。

良かった。泡のおかげで胸が見えてないや。

「~~~~~!!」

「ち、違うんだ！ これは俺がたまたま拾っただけであってだな！」

「俊くんの……バカー——ッ!!」

俺はリリーの渾身の平手打ちを喰らい、意識を失った。

余談だが、リリーは帰りに一切口を聞いてくれなかった。

## Episode・71（後書き）

焦っていたからか、最後がなんかふに落ちない……

焦った理由は勿論、早く簪編を書きたいからです！

簪編で楯無さんとの仲をある程度良くさせるつもりです

乞うご期待！！

してるわけではないか……

感想よろしくお願いします！！

## Episode・72

八月後半。俺は両親の墓参りに行くための準備をしていた。その準備が完了したと同時に簪が部屋に来て、「データを参考にしたいから手伝って」と訊いてきたので、快く引き受けた。

ただいま寮に近い第一アリーナ近くの整備室で簪と二人きり。

簪は《百雷》のデータをもとに『打鉄式式』の《春雷》を組み上げていく。春雷は俺の百雷と同じく荷電粒子砲のため参考にはなるが簪の機体は倉持技研製。俺の機体はヘカトンケイル製。根本から違うから参考程度にしかならないらしい。

「俊は叔父さんたちのお墓参り行くの？」

組み上げながら簪が訊いてきた。

「明日からな」

でも一人なんだよな。それじゃあつまらないし……そうだ。

「お前も行くか？」

「え？ 良いの？」

「一人じゃつまらないし。それに、お前が来たらきつと親父たちも喜ぶだろうし」

「じゃ、じゃあ行こうかな……」

簪は顔を赤らめながら言った。何でそんな真っ赤になってるんだ？「明日だから急いで準備しないとな」

「じゃあ今からする」

「え？ 専用機作りは良いのか？」

「あとでも大丈夫」

簪はさっさと整備室を出た。

何なんだ一体？

どうやら専用機作りは終わりらしい。ま、データあげられたから良いか。

俺も寮に戻ることにした。

「おっじゃまっしまーす！」

夜、ベッドで横になっていると突然姉貴が入ってきた。結構久しぶりに聞いたな。

「何の用？」

「あれを受け取りに」

「あー。あれね」

机の引き出しからUSBメモリを取り出し姉貴に渡した。

「ほい。確か『織斑一夏の周りの調査』だっけ？」

「正解」

「一夏の周りの女子は調査したが一夏本人はどうするんだ？」

「本音ちゃんに任せたから大丈夫大丈夫」

「尾行とか出来たっけ、あいつ？」

「虚ちゃんにバックアップ頼んどいたから平気平気」

「ですよー」

本音が尾行なんて出来るわけないしな。最良の選択だろう。

「それにしても、何で一夏たちの調査をしたんだ？」

「二学期になったら本格的に彼に接近しようと思ってね。そのため  
の準備よ」

姉貴は俺の本棚からマンガを抜き出す。今度はラノベらしいが店で付けてもらったブックカバーの所為で表紙が見えなかった。

「接近ねえ。何でまたそんなことを……？」

「色々と考えがあるのよ」

ベッドに転がりラノベを読む姉貴。そうだ、姉貴も誘つか。

「姉貴」

「なに？」

「明日から二泊三日で実家に帰るんだけど、一緒に行かないか？」

「叔父さんたちのお墓参り？」

「そうだけど」

「ならいーよー」

ページをめくる姉貴。って、即答かよ！？

「じゃあ虚ちゃんたちも誘っておくから。集合場所は？」

「え、ああ。十時に東京駅で良いか？」

「分かったわ。じゃあ準備してくるわね」

そう言ってラノベを放り投げて部屋を出た。

「あ……」

簪が来るって伝えるの忘れた……。

翌日の九時四十五分。場所は東京駅。

俺と簪と本音は東京駅で姉貴と虚さんを待っていた。因みに、簪は姉貴が来ることを知らず、姉貴は簪が来ることを知らない。

二人に逃げられないよう先に券を買っておく。五人だから約五万。痛い出費だ。

「何で五枚も買ったの？」

券の多さに簪が疑問を抱く。

「それはね、かんちゃん。あとお姉ちゃんと楯な——」

「な、何でも無い何でも無い！」

大急ぎで本音の口を手で塞いだ。

「お待たせしました」

後から虚さんの声が聞こえた。振り返ると姉貴と虚さんが並んで歩いていた。

「「あ……」」

簪と姉貴が目を合わせた。

「……………」

簪は無言で帰ろうとしたが、俺は簪の腕を掴んだ。

「……離して」

「そう言ったって。券はもう買ったんだ。付き合ってもらっぞ」

簪が凄く嫌そうな顔で言ったが俺がそれを拒む。

凄く嫌な空気の中、俺らはJR新幹線Maxとき317号に乗った。

十時十二分発車であつちに着くのは約二時間。二時間どう堪えるかが問題だ。

案の定、車内は気まずい空気になった。

向かい合わせになっている六人席。俺は通路側に座り目の前には姉貴。その隣に虚さん。俺が座ってる側の真ん中に本音、窓側に簪が座っている。

車内のあちらこちらで和気あいあいと話し声が聞こえるがこのスペースだけは無言だった。

ただ一人を除いて。

「かんちゃ〜ん。トランプで遊ぼ〜よー」

「……本音。眠いから静にして」

そう。本音がその場の空気を和らげようとしているのだがそれが逆効果で簪の気分は更に悪くなる。

「ちよっとトイレ行つてきます」

俺は席を外し、その車両から離れた。

どうしたら良いもんかなあ……。

出入口にもたれ掛かり今後の行動を考える。

多分簪と姉貴と一緒に居ても状況は良くならない。むしろ悪化するだろう。

だったら俺が入るか。いや、それじゃあ何の解決にもならない。

姉貴は簪遠ざけていないが簪が姉貴を遠ざけてるんだ。

つまりこれは簪が姉貴に声を掛ければ少しは仲良くなるに違いない。

「何考えてるの？」

「どうしたら簪と姉貴が仲良くなるかを考えてるんだよ」

「そうなんだ」

俺は誰かの問いに答えた。……誰か？

声のした方に顔を向けると姉貴が居た。

「何時から居たんだよ？」

「俊くんがもたれ掛かった時から」

つまり最初からですか。

「ねえ。どうして私と簪ちゃんと一緒に誘ったの？ 私が居たら簪ちゃんずっと機嫌が悪いだろうに」

「仲良くなつてほしいんだよ、二人には」

俺が更識家と知り合ってから約十二年。俺は二人が仲良く話している姿を見たことがない。

だから――

「見てみたいんだよ。簪と姉貴が和気あいあいと話している姿を」

姉貴は押し黙ったままだった。

「姉貴だって簪と楽しく話したいだろ？」

「え、ええ。それは勿論……」

「なら決定だ」

俺は自販機に向かい缶コーヒーを買った。

「俺は簪と姉貴を仲良くさせる。絶対に」

ブルタブを開け、一気に飲み干した。

## Episode・72（後書き）

やっと簪編に突入しました！！

さて

どうやって簪と楯無さんを仲良くさせようか……

感想よろしくお願いします！！

## Episode・73

新潟駅に着き、十分ほど歩いて親父の実家に到着。

もとは親父の親父の家——爺ちゃんの家で爺ちゃんたちが亡くなつた後は別荘扱いしていた気がする。

外見は純和風でちょっと広い庭がある。

門をくぐり玄関の前に立ち、鍵を開け中に入る。

「うわぁ……」

案の定、家の中は埃だらけだった。

「掃除しなくちゃいけませんね」

「ですね」

一年前に来て以来だからな。念入りにやるか。

「今掃除用具を持ってきましたね」

荷物をその場に置き埃だらけの廊下を歩く。確か物置に掃除機があつたはず。あと雑巾とバケツも必要だな。

風呂場に行きバケツに水を注ぎ、雑巾を水に漬けて絞る。

すぐに廊下を綺麗にした。

「お待たせ」

「わざわざありがとうございます」

虚さんを先頭に四人が家に上がった。

家の構造は一階はキッチンとダイニングがセットになっており普通の部屋が三つに風呂場、洗面所兼脱衣所、お手洗い。二階は寝室が三つにお手洗い。まさかの家に二つ便所がある。

「此処以外まだ汚いから荷物は此処に置いとくか」

そう言うのと皆廊下に荷物を置いた。

「これだと、埃を掃うだけで結構掛かりますね」

「やっぱりそうですか……」

それ以外にも色々やるから終わるのは夕方か。

「なら、皆でちゃっちゃと終わらせますか」

「さーんせー」

本音が両腕を振り上げると長い袖が揺れ簪と姉貴の顔に直撃しそうになった。

「お前はその袖をどうにかしろ」

「ええゝ。これ好きなのに」

「掃除の邪魔だし汚れるだろ」

「というか夏なのに長袖で暑くないのか？」

掃除を始めて数時間。やっぱり悪い空気が漂っている。

一応簪も姉貴も参加してくれてるが二人とも近づこうとしない。うーん。どうしたら良いんだ？

ケータイを見るともう午後五時。

「虚さん。そろそろ晩飯作らないと間に合わないんじゃない……」

「え、もうそんな時間なんですか？」

キッチンで掃除していた虚さんは壁掛け時計を見て、やっとどのくらい時間が経っているか分かったようだ。

因みに俺は風呂場を掃除していた。問題なくボイラーが動いてたから良かった。

「確か冷蔵庫の中身はないんだよね……買いに行かなきゃ」

一応調味料等はあるが傷んでたりしたら危ないからな。それも買わなきゃな。

「近くに商店街がありましたよね？」

「あそこもうシャッター商店街と化してますからもう何処も開いてませんよ」

昔は結構繁盛していたがデパートが出来てから一気に衰退。ほとんどの店が閉店した。

今じゃそのデパートか朱鷺メッセ近くの店に行かなきゃ食材は手に入らない。

そうだ。簪と姉貴を誘って一緒に買い物に行くか。

「俺と簪と姉貴が近くのデパートにまで行って買い物してきますので、悪いんですけど虚さんたちは掃除を続けててください」

「わざわざすみません」

「いえいえ。こちらこそ掃除を押し付けるようなこと言ってますません」

いつも使っている財布を後ポケットに入れ二人を呼んだ。二人は何も言わず頷く。何か恐い……。

「それじゃあ行ってきまーす」

構わず二人を連れてデパートに行った。

一緒に買い物すれば仲は完全に戻らずとも少しは良くなるに違いない。

作戦は失敗。姉貴、マジで完璧すぎだろ……。

「あ、俊くん。その魚よりこっちの魚の方が生が良いからこっちにしないさ」「簪ちゃん。それは少なめね。じゃないと三日じゃ食べ切れないから」など指示していた姉貴。姉貴は瞬時に食品の鮮度を見分けてこの三日間で必要な食品、調味料の量を計算し無駄なく購入。凄い。凄すぎるぜ姉貴。

とにかく姉貴が一方的に話し掛けただけで簪は喋らなかった。

荷物を持たされる俺と簪。俺が二人の間に入り三列に並んで家に帰っている。

全く会話がない……。

「た、ただいま……」

「俊さん。どうしたんですか？」

家に戻ると虚さんが迎えてくれた。出ていった時と全く正反対の態度だったためか虚さんが心配そうに声を掛けてきた。

「非常に、疲れました……」

それだけを言っ買って買ってきたものをキッチンに置き、ダイニングに備え付けてあるイスに座りテーブルに頭をつける。

疲れた……早く寝たい……。

しばらくその体勢でいたので寝そうになったがそこは我慢。とりあえず風呂に入ってさっぱりするか。

荷物から着替えを持って脱衣所へ。確か脱衣所にバスタオルがあったから大丈夫だろう。

いざ、脱衣所へ！

ガチャ。

「……………」

そこに、Ｔシャツを脱いだ直後の姉貴が居た。

生地の色は水色でレースが付いたブラとショーツ。そんな姿の姉貴と目があってしまった。

何も言わず俺はゆっくりと後ずさり脱衣所から出た。

「……………はぁ」

溜息をついた後、脱衣所の鍵が閉まる音が聞こえた。最初からそうしてくれよ……。

「どうしたの？」

不意に声を掛けられ、軽く飛び上がった。

急いで振り返ると着替えを持った簪が居た。

「ななな何でもない！ 何でもない！」

すぐにキッチンに向かいイスに座って再び俯く。何で夏休みの間

だけでこんなに女子の素肌を見なくちゃいけないんだ……。

その後風呂から上がってきた姉貴に庭へ連れられた。

「俊くん。気分転換に稽古しましょ」

「えっ……ちよっ……まっ……!？」

問答無用の稽古が行われ、言うまでもなく俺が一方的にぼこられた。

「寝る場所はどうします？」

「寝る場所ですか？」

晩飯中。皆が箸を動かしてるなか、俺は体の所々に湿布を貼っていた。

相変わらず容赦ねーな姉貴。全身アザだらけになったうえに一時間くらい寝てた気がするぞ。まあ俺がノックをしなかったのが悪かったんだけどな。

そんなことを思っているながら虚さんの声に反応した。

「俺は一階の客間で寝ますよ」

「いや。それでは俊さんが——」

「俺のことは気にしなくていいですよ。それに、同じ階に男が居たら色々と面倒でしょ」

「それもそうだね」

本音が応えた。

「それもそうですね……」

「あ。布団が必要になると思いますからあとで持って行きますね」

「え。布団ですか？」

「ええ。ベッドが二つしかないんで」

「でしたら、お嬢様方がベッドですね」

「そうだね」

「じゃあ虚さんたちの部屋に布団運んできますね」

「え……。ちよつと……」

簪の言葉を無視して話を進めた。悪いな簪。これもお前と姉貴のためなんだ。

二階のベッドがある部屋。もとは俊の祖父母が使っていたベッドだ。

そこには簪と楯無の二人だけ。会話は無く沈黙だけがそこにはあった。

その沈黙を先に破ったのは簪だった。

「……おやすみ」

そう言つて簪はベッドに潜り込んだ。

その声には感情は無くただ言っただけだった。

楯無もその場の空気に耐えられずベッドに潜り込んだ。

しばらく時間が経つて目が覚めた簪はその場を離れた。  
完璧超人の楯無が嫌い——と言つより苦手な簪は、楯無と一緒に居ることだけで苦だった。

簪は一階に降り、客間で寝ている俊のもとに向かった。

音が立たないよう障子を開けて、中に入ると音を立てずに閉めた。そしてそのまま俊の横に寝た。

「んっ……」

違和感に気がついた俊は目を開けた。

（誰か来たのか……？）

俊は後ろ身ごろもを掴まれている感覚に気付き、後ろを向いた。

「なっ……！」

俊は簪を見た。

「な、何でお前が此処に！？ 姉貴と一緒にの部屋のはずじゃ——」

「ねえ。俊……」

俊の言葉を遮り簪は俊に問いかけた。

「な、何だよ？」

「何で、私と姉さんを近づけようとするの？」

「それは……」

「知ってるでしょ。私が姉さんを嫌っていることを」

「それは本心で言っているのか？」

「……………」

その言葉を聞いて簪は押し黙った。

「さっきの言葉が本心じゃないなら、我慢しろ。あと二日間だけなんだから」

俊は簪をほっというて再び眠りについた。

## Episode・73（後書き）

遅くなりましたがなんとか投稿できました

そいやこの五日間で起こったことを簡単にまとめると……

- 1・中間テスト開始
- 2・ノロウイルスにかかったか知らないが一日中吐き気が止まらなかった
- 3・いまさらながら瀬戸の花嫁にハマった
- 4・ネタが思い浮かばなかった
- 5・ISのイベントのBDを見て興奮していた（当日自分も参加しました。横顔が写ってました）
- 6・ビールサーバーのホースが破裂しビールが飛び散り部屋中がビール臭くなった

とまあこんな感じです

こんなかに遅くなった原因が含まれていますが、その九割が3、4、5です

そんな雑談はさておき……

感想よろしくお願いします！！

## Episode・74

ケータイにセットしておいたアラームが鳴り響き、目を覚ました。  
「うっ……」

眠い目を擦りながら俺はケータイを取りアラームを切るための暗証番号を入力して、アラームを切る。

ディスプレイに表示されてる時間を見ると午前五時半。何時も通りの時間だ。

起き上がる時に後ろ身ごろを掴まれているのに気づき後ろを向くと、簪が俺のパジャマを掴んで寝ていた。何で簪が此处で寝てるんだ？

……ああ。確かこいつが夜中に忍び込んで来たんだっけ？

簪を起こさないように手を離し、布団に寝かせた。

立ち上がり軽く伸びをしてから運動着に着替え、洗面所で顔と髪を洗った。

外に出て軽く準備運動をしたがまだ眠気があったので両頬を軽く叩いた。

「……よしっ！」

気合いを入れランニングを始めた。今回はISを使つての五キロランニングは出来ないから何時もより多く走るか。

『簪』

耳元に囁きかける声。その声の主は、簪が一番恐れている人の声

に近かった。

『あなたは何もしなくて良いの。私が全部してあげるから』  
甘い、甘い、猛毒の言葉。

それは簪の心の奥からじわりと広がり、やがてそこを満たしていく。

——絶望という、闇に。

『だから、あなたは——』

無能なままで、いなさい。

「っ——！」

最後の言葉を聞く前に簪は悪夢から覚めた。

「っ……、はっ……、は……、あ……」

肩で息をしていると、頬に冷たい雫が伝う。

「う……」

「ごしごしと目を擦り、涙を拭う。」

（あれ？ 何で、私……？）

簪は昨晚寝ていた部屋とは違うことに疑問に抱き、辺りを見渡す。部屋の隅に俊が持つてきたバッグを確認した。

（そいや、姉さんと寝るのが辛くて此処に来たんだけ？）

昨晩の行動を思い出し壁掛け時計を見ると時刻は五時四十五分。変な時間に目が覚めたなと思った。

自分の姿を確認すると寝汗——と言うより冷や汗でパジャマが肌に張り付いていた。

（シャワー浴びよ……）

簪は自室に戻り着替えを持って脱衣所に向かった。

ランニングを三十分ほどして家に戻ってきた。

「あー。疲れた……」

家に入り部屋に戻ると簪が居なかった。部屋に戻ったのか？

普段着を持って脱衣所に。今ならきつと皆寝てるから安心して入れる。

ガチャ。

どうやら先客が居たらしく、バスタオルで髪の毛を吹いていた。勿論全裸で。

「……………」

拭いてる最中俺の存在に気づき、俺をじーっと見る。

俺はすぐに脱衣所を出た。

そしてドアの前で正座をして額を床に付ける。  
暫くしてドアが開く音が聞こえた。

「すみませんでした！」

全力で謝った。

が、簪からの反応は全くなすたすたとその場を去る。

やべえ。完全に嫌われちまった……。数少ない女友達なのに。

後でまた謝ろう。それより、こんな汗だくじゃ見た目が悪い。早く入ろう。

（な、なんで俊が……）

簪は恥ずかしさのあまり話し掛けることはおろか俊の顔を見ることも出来なかった。

耳まで真っ赤にしてダイニングへ。とりあえず水でも飲んで落ち着こうという考えだ。

棚からコップを出し急いで水道水を注ぎ水を飲んだ。

「ずいぶん早いですね」

「っ——！」

簪は背後から声を掛けられたことにビックリして一瞬むせた。

「けほっ……、こほっ……。う、虚さん……」

「おはようございます」

「おはよ……。ねむ」

虚の後ろから本音が目を擦りながら現れた。

「どうしたんですか？」

「い、いえ。何でも……」

残りの水を飲み干した簪はコップを流しに置いた。

「すぐに朝食を用意しますから待っていてください」

「わーい」

本音はちょこんとイスに座った。

「本音、あんたも作るのよ」

「え」

「使用人として当然でしょ」

「うー……」

唸りながら立ち上がり虚の隣に立った。本音はアニメの着ぐるみみたいなパジャマを着ており袖がやけに長い。しかしそんなのお構い無しに作業を行っていた。

「おはよう」

「おはようございます。楯無お嬢様」

「お嬢様はやめてって言ったでしょ」

「失礼しました。ただいま朝食を作っていますので少々お待ちください」

「あー、さっぱりした」

風呂を終えた俊がバスタオルで髪を拭きながらダイニングに入ってきた。

「「あ……」」

目を合わせた俊と簪は同時に顔を赤らめた。

「二人とも、何かあったんですか？」

「「な、何にもありません！」」

息が合う二人。明らかに何かあったと言ってるようなものだったが、三人は追求しなかった。

「花火大会行こうぜ」

『花火大会？』

朝食後。俺がそんな提案をすると四人が同じ反応をした。

因みに、ため口になったのは虚さんが「遠慮せず普通に話して良いですよ、ご主人様」と言ってきたからだ。

どうもご主人様と言われるのが苦手な俺は虚さんには悪いなと思いつながらため口にした。

「近くで行われるんだよ。有名な花火大会が」

俺の言っている花火大会というのは『新潟まつり花火大会』。約一万発の花火が打ち上げられるここらじゃ有名な花火大会だ。

「せっかくだから行こうぜ」

「しかし俊さん。お墓参りの方は……？」

「帰る直前に行く。それに、墓参りだけじゃつまらないだろ」

「さーんせーい」

本音が両手を振り上げ、長い袖が隣に座っていた簪の顔に当たりそうになった。

「確か着物簪筥に婆ちゃんが使ってた浴衣が入っている気が……」

「勝手に使ってもよろしいんでしょうか？」

「せっかく婆ちゃんが残してくれたんだから使わないと勿体ないだろ」

席を立ち、一階の奥にある部屋に向かった。

「確か此処に……おお。あったあった」

簪筥をいくつか開けると、色とりどりの浴衣があった。あとはサイズが合うかな。

「わ。色んなのがある」

本音の顔が急に現れビビったが、声をあげる程ではなかった。

「じゃあ下駄探してくるから、好きな選んで良いぞ」

俺は部屋から出て玄関に向かった。その時にダイニングを通りす

ぎた時に簪の顔を見たが、浮かない顔をしていた。

## Episode・74（後書き）

やっと投稿出来た……。

面接練習とかいろいろあつて執筆時間がかかなり減った気がする……。

感想よろしく願いします!!

夕方。皆で花火大会に行こうと玄関で待っていたが簪がまだ来ていなかった。

「簪ー。早く行くぞー」

俺は大声で簪を呼んだが降りてくる気配が無い。

「具合でも悪いんでしょかね？」

「見に行こーか？」

布仏姉妹が呟く。いや、たぶん具合が悪いんじゃない。姉貴と一緒に行きたくないんだろう。

姉貴もそれを察したらしく、若干俯く。

「俺が見に行くから皆行つててくれ」

そう言つて俺は二階に上がり、簪と姉貴の部屋に向かった。

「簪ー。起きてるかー？」

部屋をノックするが返事はない。

「入るぞ」

勝手に入ると浴衣姿の簪がベッドで寝そべっていた。

「何やってんだ？ 一緒に花火大会行こうぜ」

空いているベッドに腰をおろし簪に話し掛ける。

言わなくても分かるほど嫌な顔をしていた。

「なあ。そんなに――」

姉貴が嫌いか、と言い切る前にふと思った。そう言ったら百パー

セントイエスと言っだろう。

「花火が嫌いか？」

「い、いや……。そこまで嫌いじゃない」

簪は少し驚いたように答えた。きっと簪は俺が姉貴の話をするのだと思っただろう。

不意を突かれ戸惑う簪。これならついてくるか。

「なら、早く見に行こうぜ」

簪に手を差し延べると、予想通り簪は俺の手を掴んだ。

簪と家から出て、花火大会の会場へ向かった。

会場に近づくにつれ浴衣姿の人が増えているのを見ると、やっぱり人気の花火大会なんだなと実感した。

「あ、櫻井俊だ！」

「うわっ。ホントだ！」

「写メ撮ろ写メ！」

「あ、握手してもらおうかな……」

「おい。女と手繋いでるぞ」

「あの娘、羨ましい……」

周りの人が急に騒ぎはじめた。まあ、もう慣れたから良いけど。

「あ、このお面……」

簪は出店の前に立ち止まり、何かを物欲しそうに見ていた。そのお面は以前簪と見に行ったヒーローショーに出て来たヒーローのお面だった。

「おじさん。これください」

「はいよ」

おじさんからお面を一つ買い取った。

「ほら」

「え。良いの？」

「良いに決まってるんだろ。それに、もう買っちゃったんだから受け取ってくれよ。頼む」

「じゃあ……」

受け取った簪はそれを頭に横掛けにした。

「似合ってるぞ」

「あ、ありがと……」

再び歩き、いろんな出店を回る。

かき氷屋で俺はメロン、簪はイチゴを頼み設置されてたベンチで一休みした。

「そういえばさ、簪」

「何？」

「何でそんなに姉貴を嫌ってるんだ？」

「別に嫌ってるわけじゃ……」

「じゃあ何で？」

「嫌いとかじゃないの。ただ、恐いの……」

簪はかき氷を食べるのを止め太ももの上に皿を置いた。

「何時また無能とか言われるか分からない。どうせ私は役立たず。

姉さんから見たら、いらぬ子……」

「そんなわけないだろ」

簪は俯いたままだった。構うもんか。このまま話を続ける。

「確かに姉貴はお前から見たら何でもそつなく物事をやり遂げちまってるよ。けどな、姉貴は別に何でも一人でやってきたわけじゃないし、苦手なものだってある。それはお前だって知ってるだろ」

確か、まだ俺が更識家に住んでた時に姉貴が俺に「マフラー編んであげる」って言ってたがあのマフラーはひど過ぎた。形がぐちゃぐちゃだしすぐほつれたし、通気性抜群で全然暖かくなかったし……。

あのマフラーの悪い点を上げたらきりが無い。

「別に姉貴はお前をいらぬ子だなんて思っちゃいねえよ。それだけは言い切れる。思ってるとしたら、可愛い妹、大切な妹ってだけだろ」

「そんなこと、思ってるわけが——」

「前にもラウラに言ったんだけどさ、下の子が居る人はきつとその子が自慢してくれるような人になろうと努力すると思うんだ。だから姉貴だって、簪が自慢してくれるような姉になろうと思って努力したと思うんだ。だから無能とかなんか考えてねえよ」

ほんと頭に手を乗せると押し黙った。

「一度だけで良い。勇気を振り絞って話し掛けてみる。それだけで見方が変わるかもしれないだろ」

そのまま頭を撫でると簪は頷いた。

「あ、あのさ……」

「何だ？」

手を退かすと簪が上目づかいで俺を見た。

「俊は……」

「ん？」

「俊は……私のこと、どう思ってるの？」

「何でそんなこと急に？」

「良いから、答えて……」

「どうって……、そりゃ……掛け替えない存在だと思ってる」

率直なことを言つと簪は顔を赤くした。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫……！」

顔を覗くと簪は横を向いた。

「早く行こうぜ。花火が上がっちゃうだろ」

手を差し出すと簪は俺の手を握る。俺が手を引っ張ると簪からの抵抗なくついて来てくれた。

「きやつ——！」

「お、おい」

転びそうになった簪を引っ張り自分の方に引き寄せた。

「大丈夫か？」

簪の足を見るが捻ったようではない。

あ、鼻緒が切れてる。やっぱり古かったか。

「手ぬぐいがあればなんとかなるんだけど……。しょうがないか

……」

しゃがんで簪に背中を向けた。

「ほれ」

「え……」

「おんぶだよ。それだと歩き辛いだろうし、皆と一緒に近くで花火見ようぜ」

「……うん」

簪が俺の首に抱き着いてきた。手には鼻緒が切れた下駄とそうでない下駄を持っていた。

「しっかり掴まってるよ」

「うん」

立ち上がり、皆のところに戻る。

簪から柑橘系に近い甘い匂いが漂っていた。ずいぶん良い匂いだな……。

「お、重くない？」

「大丈夫。むしろ軽いくらいだ」

そいや、皆のところに戻るとか言って場所知らないんだ。

「姉貴、今何処だ？」

ケータイで姉貴に連絡を取り場所を訊くと空に赤い花火が咲いた。

「あ、始まつちまつた」

『八千代橋に居るから、早くしなさい』

「了解」

昭和代橋から打ち上がる色とりどりの花火。姉貴たちは八千代橋で見てるということだったのでおぶってる簪と一緒に花火を見ながら皆の元に向かった。

「姉貴と会うことになるけど、大丈夫か？」

「頑張る……」

背中越しに伝わる簪の心拍が尋常じゃないほど早い。

よほど緊張してるんだろうな……。

(しゅ、俊が……。お、おんぶを……)

下駄の鼻緒が切れ俊におんぶしてもらってる簪。

恥ずかしさのあまり尋常じゃないほど心拍が早くなる。

「そんな緊張するなよ簪」

「え。な、何が？」

「リラックスリラックス。じゃないと姉貴の前じゃさらに緊張しまうぞ」

「……はあ」

簪は深い溜息をした。相変わらずの鈍感野郎。簪の気持ちなんて微塵も分かっていなかった。

そうこうしているうちに八千代橋の人込みの中に入った。本来なら車を通っているが今日は花火大会。見物客のために今は歩行者天国になっている。

相変わらずの人込みで楯無たちを見つけるのは困難だと思われていたが、楯無はすぐに二人を見つけた。

「遅かったわね」

「ああ。簪の下駄の鼻緒が切れちゃって」

そんな話をしていると簪は申し訳なさそうな顔をした。

「やっぱり古いのがいけなかったんだな。そいや、本音と虚さんは？」

「こっちこっち」

楯無のあとをついていく俊。人込みで見失わないように必死についていく。

この間に花火の三分の一が終わっていた。

まだ勇気が出せない簪。持っている下駄を強く握り締めた。

（大丈夫。リラックス、リラックス。俊が近くに居るんだから、大丈夫）

簪は深呼吸をして心を落ち着かせる。

「ね、姉さん……」

「な、何？ 簪ちゃん」

勇気を振り絞って話し掛けた簪にたいし、楯無は一瞬驚いてから

返事をした。

「質問があるんだけど、寝る前に訊いても良い？」

「ええ。勿論良いわよ」

（良くやった、簪！）

二人の会話を聞いていた俊は心の中でガッツポーズをした。

「かーんちゃーん」。しゅーくーん」

三人を見つけた本音が腕を振って迎える。長い袖が揺れ周りの見物客の顔に当たり、のほほんとした口調で謝った。

俊たちが到着し、五人は花火に注目した。

終了時間まで花火が打ち上がり、空には色とりどりの花が咲いた。

「お、射的屋発見」

花火が終わり、皆でやすらぎ堤の出店を回っていると射的屋を見つけた。看板には一回三百円の文字が。試しにやるか。

「簪、ちよつと降りてくれ」

しゃがむと簪は下駄を下に置いてから降りた。その場に立つことは出来るけど歩くのは困難だろう。終わったらまたおぶらなきゃな。そんなことを考えながら財布から百円玉を三枚取り出し射的屋のおじさんに渡した。

「おじさん。一回お願いします」

「はいよ、あと四千七百円な」

「高っ！？」

思わずツツコミ看板を再度確認。ちゃんと一回三百円の文字があった。数字も英数字で書かれていたのでどう考えても見間違っわけ

がない。

「リア充特別価格だ。どうだ。嬉しいだろ、坊主」

「これっぽっちも嬉しくねえよっ！ このぼったくりジジイ！」

「ちっ、しゃあねえな。ほらよ」

おじさんは渋々と銃とコルク六つを渡した。このジジイ、今舌打ちしなかったか？

舌打ちには触れず銃のレバーを引きコルクを入れた。

「何か欲しいのあるか？」

「じゃーね……。あれがいーな」

本音が目当ての物を指す。相変わらず長い袖で手が隠れてる……って、あんな長い袖の浴衣なんてあったっけ？

「いや。あれは無理だろ……」

それは『REGZA 42型テレビ ZG2』と彫られた鉄板だった。かなり魅力的な景品だが、鉄板の後ろには明らかに支えがありどうやっても倒せないようになってる。

試しに一発当てるがびくともしなかったか。続けて四発当てるがやはりびくともしない。

あっという間に残り一発になってしまった。

「あの支えさえなければ倒せるんだけどなあ……」

「おじさん。あの鉄板の支え外して」

急に姉貴が浴衣の襟元を広げ胸元をジジイに見せるようにした。って、色仕掛け！？ 流石にそれは無理だろ。

「しゃーねーな」

簡単に落ちちまった！

その証拠にジジイは姉貴の要求に応え鉄板の支えを外した。支えがなくなった鉄板の上を狙うと簡単に倒れた。

「本音、要るか？」

「要らな〜い」

「じゃあ何であれ選んだんだよ……？」

「ん〜。何と無く」

「また無責任な……」

どうすつかなあ……。

「おじさん。これ、宅配でお願いできませんか？」

「お断りだ」

このくそジジイ。聞く耳持たないってか？

「おじさん。速達でお願い」

「しゃーねーな」

……ダメだ、このジジイ。

というわけで姉貴のおかげでテレビは速達で俺の家に送られることになり、そのまま帰宅する。

さつき考えていた通り俺は再び簪をおぶっている。

自分から姉貴に声を掛けたのは大きな成長だが、此処から本当の勝負だぞ、簪。頑張れ。

そう心に思いながら俺は簪をおぶりながら家に向かった。

花火大会から帰ってきて寝間着に着換えた楯無と簪。ベッドに腰掛ける二人の間にはやはり沈黙があつたが行きの時ほど重苦しい空気ではなかった。

「で、簪ちゃん。相談って……？」

「う、『打鉄式』を見てほしいんだけど……」

そう言いながら簪は打鉄式式のコンソールを開く。楯無は簪の隣に座った。

「これは……。虚ちゃんに訊きましょう。三年主席なら分らないことはないでしょ」

楯無は立ち上がり部屋を出ようとした。

「姉さんでも分からないことがあるんだ……」

「そりゃ勿論。私だって完璧じゃないの。『ミステリアス・レイディ』だって私一人で組み立てたわけじゃないのよ」

楯無は部屋から出て虚を呼びに行った。

（俊の言った通りだ……）

何でも一人でやってきたわけじゃない。それは俊が言った通りだった。

楯無が虚と本音を連れて戻り、打鉄式式のコンソールを見ては話し合い今後の計画を立てた。

少しだけ楯無との距離が縮まった。それは虚と本音が見ても一目瞭然だった。

三日目の昼。俺たちは『櫻井家之墓』と彫られた墓石の前に立っていた。

俺の右手には水が入ったバケツにさっき買ってきた花が入っており、左手には線香とブラシが入ったビニール。帰る直前だったので荷物が大量だ。

一年ぶりのだから墓石も相当汚れていることを予想してブラシを持ってきたのは正解だったな。

旅行カバンを置いて虚さんにバケツを渡した。虚さんがお墓に水を掛け、俺はブラシで墓石を磨く。その間他の三人は線香の受け皿、花瓶を掃除してもらった。

作業はすぐに終わり買ってきた花を供え、線香に火を付け受け皿

に置いた。

俺は合掌して目を閉じる。

あれから約五年。お袋は病死。その一ヶ月以内に親父が事故死した。俺はもう両親の声をおぼろげにしか憶えてない。顔は写真があるので忘れないが、声質、口調、癖、そのようなものはほとんど憶えていない。

俺は目を開けると既に三人は済ませていたが姉貴がまだ合掌していた。

「姉貴？」

「な、何？」

声を掛けると姉貴がすぐに目を開けた。

「もう帰るぞ」

「え、ええ。分かったわ」

姉貴は急いで旅行カバンを持ち上げ俺の横についた。

何か思いつめているような顔だったが俺は追及しなかった。

この帰省の目標であった簪と姉貴の仲直り。完全ではないが、少しは距離が縮まったに違いない。

でも何時かは、二人の距離がさらに縮まり、仲良く話し合っている光景を見てみたい。

## Episode・75（後書き）

お久しぶりです

何時も通り英語Wの時間に居眠りをし、金縛りにあつた四月朔日徹です

長い間待たせてすみません

はたしてこんなので二人の距離が少し縮まって読者は納得いくのか心配です……

活動報告でもお知らせしましたが、50万PV記念の企画を発表します！！

今回は、人気キャラアンケートをやるうかと思っております！！  
投票方法は一人五人まで選んで、活動報告に書くか、ユーザーメッセージの方に送ってください。キャラに対するコメントなんかも書いてくだされば嬉しいです。

別に感想の方に書いても構いませんが、投票数がバレるとつまらないので見たらこちらで消す予定です。あらかじめご了承ください。  
対象のキャラは『IS もう一人の適格者』に出て来たキャラなら誰でもOKです。

期間は五巻の内容が終わるまでです。

理由は、そんなに長くないとそれなりに集まらないと考えているからです。

今回は俊の家に俊ラバーズが遊びに行く話です。

二話くらいだと思います。

たくさんのお票お待ちしております！！

## Episode・76（前書き）

人気投票お待ちしております!!

詳細は75話の後書きで

「……………」

ドキドキとしながら、標札を見つめる。

『櫻井』と書かれたそれを、何回も見返しながら深呼吸をした。

（大丈夫ですよ。今日はお家に居るって言っていましたし、俊くんは迷惑がたりしませんよね……多分）

リリーが居るのはIS学園一年生寮の廊下ではなく、俊（と瑞穂）が住んでるマンションである。『櫻井』の標札とその下にあるインターホンを見て十数分。

（えっと、まずは先日のことを謝らなくちゃいけませんね）

リリーが俊を誘ったあの時、ジェットバスに入った二人にある事件が起こった。

それは、何処からか漂流してきた水着を拾った俊はそれがリリーののだと思い、念のため本人に確認したところ見事的中。恥ずかしさのあまりリリーは俊の顔を叩き、意識を失わせてしまった。

あの時、悪いのは俊ではなく自分。

その時水着の紐が少し緩んでいたらしく、勢いよく噴出する泡によつて紐が解け、上の水着が取れてしまった。

あの時ちゃんと確認していれば俊をあんなめに遭わせることはなかったと思い込んでしまった。

（と、とにかく。まずはこのインターホンを押さなくちゃ始まりませんよね）

意を決したリリーはインターホンを押した。

ピーン……ポーン、と電子音が室内に鳴り響く音がドア越しに聞こえた。

廊下を走る音が聞こえドアが開いた。

「家まで来てどうしたんだ、リリー？」

「実は、俊くんに謝りたいことがあります……」

出てきた俊に一瞬驚いたリリーだったがすぐに話を切り出す。

「俺に？　というかお前、俺に謝るようなことしたっけ？」

「先日は――スパリゾートの時はどうもすみませんでした。私が悪いのに俊くんをぶってしまつて……」

「……あ。あの時のことか」

思い出した俊は頬を少し赤らめ、頭を掻く。

「いや。あの時は俺が悪かつたんだし、そんな謝らなくても……」

お互い沈黙。その空気を裂いたのは俊だった。

「それよりも上がれよ。外かなり暑かつただろ」

「え、良いんですか？」

「良いに決まつてんだろ。こんなところまで来てくれたんだから家に上げないと失礼だし」

「では、お言葉に甘えて」

俊が中に入るとそれにつられるようにリリーも中に入った。

「お、お邪魔します……」

俊はリリーをリビングまで案内した後キッチンへ。ちょうどアイステイーを飲もうとしていた俊は、煎れたばかりのアイステイーをリリーに渡した。

「はいよ」

「ど、どうも……」

「ガムシロかミルクは必要か？」

「そ、それじゃあガムシロを」

「了解」

俊はガムシロップを取りにキッチンまで戻る。

（菓子とかあれば良いんだけど……。あ、そいやこの前瑞穂からケーキもらつたんだっけ）

冷蔵庫を開けると箱が一つ入っていたので、その箱を取り出し流し台に置く。

ピーンポーン。

棚から皿を取り出していると再びインターホンの音が鳴り響く。

「ん？ 今度は誰だ？」

俊はカメラで玄関前を確認してすぐ玄関に向かった。

（此処が俊くんのお家ですか……）

ソファーに腰掛けたリリーは部屋を見渡す。まず目に入ったのがテレビ。台の上に設置されてるテレビは先日射的屋で手に入れたやつでその隣にはWiiが立てかけてある。テレビ台の中にはブルーレイレコーダーとPS3、その他ゲーム関係のものが入っている。

「何処置いておけば良い？」

「何時も通り、流し台にでも置いといてくれよ」

玄関から話し声が聞こえ、リリーは玄関の方を向いた。

「「あ……」」

偶然、リリーは瑞穂と目が合った。

「な、何でリリーが居んのよ!？」

「み、瑞穂こそ、何で俊くんの家に!？」

「わ、私は……俊にお昼ご飯を持ってきたのよ!」

そう言っつて瑞穂は手に持っていたタッパーをリリーに見せた。

「会っつて早々何喧嘩してんだよ……」

そう言いながら俊はケーキを乗せた皿を二つテーブルに置き、ガムシロップをリリーに手渡す。

「あ、瑞穂。それ俺が流し台に置いとくからそのへんに座っつてこれ食っつてろよ」

「分かつたわ。て、これ……」

「ああ。お前からもらったケーキだけど。二つしかないから二人で食っつてくれよ」

そう言いながら俊はタッパーを流し台に置き、フォークを持っつて来た。

「はあっ!？」

「どうした？ そんなふざけんなつて意味を込めた声出して」

「全くその通りよ! バカアツ!」

「うわっ! 急に暴れんなよ!」

「うつさい！ バカアツ！」

瑞穂は急に暴れはじめ俊に襲い掛かるが、俊は難無くそれを手で受け流す。

「と、とりあえず、ケーキでも食って落ち着け。な？」

瑞穂は暴れるのを止めたが俊は油断しなかったか。何故なら、瑞穂の目は死んでおらず、いまだに獲物を狩る猛獣の目をしていたからだ。

「お前のアイスティーも持つてくるからケーキでも食って待つてろよ。な」

そう言う俊はキッチンに向かった。

（女の子が居るのに平気で他の女の子を中に入れるだなんて。俊くんのバカ……）

（俊のために作ったんだから、あんたが食べなきゃ意味がないじゃない。バカ）

そんな二人の気持ちも知らない俊は瑞穂にアイスティーを渡してから床に座り、アイスティーのついでに持ってきたシュークリームの袋を開けた。

「何よそれ？」

シュークリームを一口かじった後瑞穂の問いに答えた。

「見れば分かるだろ。シュークリームだ」

「そんなの見れば分かるわよ。何でそんなの食べてるのかってことよ」

「いや、俺だけ何も食わずにいるってのもやだなって思ってた……」

「だったらこれ食べなさいよ！」

瑞穂は手元にあったチーズケーキを俊に押し付けた。

「いやいや。それじゃあお前のが無いじゃないか」

「そのシュークリーム食べるから良いわよ！」

「ちよつと食べちゃったけど良いのか？」

「別に構わないわよ」

「そうか。なら、ほら」

俊は食べかけのシュークリームを瑞穂の口元まで運んだ。

（え？ な、何で口元に……。はっ！？ もしかなくてもこれっちはいいーんってやつじゃ。だったらこれは、滅多にないチャンスよね）

瑞穂は恥ずかしそうに口を開いて、一口かじった。

（え？ そう食べるのか？）

シュークリームを瑞穂に渡すつもりだった俊は少し驚いた。というか、食べ物を口元に寄せたら誰だってそう思うだろう。

「お、美味しいわね……」

「美味しいって、近くのファミマで買ったやつだぞ。って、瑞穂。口元にクリームが付いてるぞ」

俊は瑞穂の上唇をなぞるように人差し指でクリームを拭き取り、指に付いたクリームをなめた。

瑞穂は顔を赤くして俯いた。

「どうした？ 熱でも出たのか？」

「うつさい。バカ……」

その言葉には覇気が無く俊は少し心配した。

「あの……」

「ん？」

リリーがやや控え気味に俊に声を掛けた。

「私も、俊くんのシュークリームが食べたいんですけど……」

「あ、ああ。別に良いぜ」

俊は瑞穂の時と同様、リリーの口元にシュークリームを近付けた。すると、リリーは小さい口を開け、シュークリームを食べた。

（え？ やっぱそう食べるんですか？）

俊は残り少なくなったシュークリームをさりげなく食べた。

（俊が、私の食べたシュークリームを……）

（しゅ、俊くんが、私の食べたシュークリームを……）

同じ理由で赤面した二人だが当然俊は全くそんなことに気付かず、風邪でも引いたのかって思いで二人を見ていた。

「俊くん。お礼として私のケーキをぜひ」

リリーはフォークで手元にあったケーキ——俊の好物であるチョコケーキを一口サイズに切り、俊の口に近付けた。

「あ、ありがとう……」

（この流れは、またなのか……？）

俊は臨海学校前にリリーと寄った喫茶店でのことを思い出した。

あの時同様、俊は口を開け、ケーキを食べた。

「俊！ 私のも食べなさいよ！」

当然、それを見ていた瑞穂もリリーと同じようにフォークでチーズケーキを一口サイズに切り、チーズケーキを俊の口に近付けた。

「お、おう……」

押され気味の俊は口を開けケーキを食べた。

「お。チーズケーキも美味しいな」

「でしょ。なんせ私の手作りだもん」

「え？ そうだったのか。以外にもお菓子とか作るんだなお前も」

「以外とはなによ以外とは！」

ピンポン。

「今日はやけにインターホンが鳴るな」

愚痴をこぼしながらも俊は玄関に向かった。

「何で皆して俺の家なんかに来たんだよ？」

結局何時ものメンバーがそろい、俊が先日帰省した時に買った笹団子を頬張りながら訊いてきた。

「予定が空いたから遊びに……」

「アメリカのお土産を渡しそびれたから、届けに来たのだ」

「私は当然、あんたにお昼ご飯持って来るためよ」

「私は、俊くんに謝罪を……」

「今日オフだったから来ちゃった」

それを聞くと俊は溜息を吐く。

「だからってなあ。連絡の一つくらい寄越せよ。部屋が散らかってたりしたらどうすんだよ？」

俊は笹を丸めゴミ箱にシユート。見事に外れたので立ち上がり笹を拾って落とすようにゴミ箱に入れた。

「何だ。エロ本でもあるのか？」

「ねえよ」

「どうだか……」

簀がぼそつと呟いたがそれは誰にも聞こえなかった。

「まあ別に良いけどさ。それよに、なんかして遊ぶか？ 何が良い？」

「ゲームなんかはどうだ？」

「ゲームねえ……。皆で遊べるとしたらエアライドかスマブラしかないけど良いか？」

「だったらスマブラやりましょ。そっちの方が楽しいし」

「それもそうだな。エアライドでシティトライアルでもやったら喧嘩になるしな」

そう言いながら俊はソフトを漁った。

「でも、エアライドも楽しいよね」

「だな。って、ディスクが違う」

スマブラのケースを見つけた俊だったが、その中身がトワプリだったことにはがっかりした俊は再びソフトを漁った。

「ふん。スマブラはアメリカでも人気があったから。私もそれなりにやっていたな」

「オーストラリアにもありましたよ。私は持っていなかったのだから友達の家でやっていましたよ」

「私も。64の時から俊とやってたから、それなりには……」

「やっと見つけた……」

俊はテレビの横に置いてあるWiiを起動させ、『マリオギャラクシー』の中に入っていた『スマブラX』のディスクを入れた。

「あ。キューブのコントローラーが足りないんだった」

俊はテレビ台の中を漁り、コントローラーが足りないことに気づいた。

「そつだろうと思って持ってきたわよ」

「ホントに用意が良いな、お前」

そう言いながら俊はWiiリモコンを動かしゲームを起動。電池の無駄になるのすぐにリモコンの電池を抜いた。

俊はWiiにゲームキューブのコントローラーを四つ接続する。

「まず誰からやる？」

「まず俊は抜けよね。あんた強すぎるし」

「そんな強くねえよ」

「そいや俊とやった時、勝った記憶があまりない」

「中学の時DXで三対一でも勝ってたじゃない」

「あれはまぐれだって。……まあ良いか」

幼馴染み二人の意見により俊は一回抜けることにした。

「私スマブラってやったことないんだよね」

「え、マジかよ？　じゃあ俺が明音に操作教えるからまずはお前ら四人で遊んでくれ」

俊は説明書を持って明音のそばに近寄る。

「で、どうやって遊ぶの？」

明音は更に俊に近づき体を密着させる。俊は別に何にも感じなかったが他四人がイライラし始めた。

「俊！」

「どうしたんだ瑞穂？　そんな怒ったような声出して」

「ルールは！？」

「そんな怒んなくて。何時も通りの良いだろ。時間無制限のスト

ツクは五。アイテムはスマッシュボールなしで頻度は普通」

俊に言われた通りに瑞穂はルールを設定。その後キャラ選択画面に移った。瑞穂はフォックス。簪はサムス。ローラはルカリオ。リリーはピットを選択した。

ステージ選択画面に移りランダムを選択し、適当にステージが選択され、ロードと表示された。

そして、大乱闘が始まる。

## Episode・76（後書き）

入試日当日に投稿するという現実逃避をした自分……  
はたして無事に合格するのだろうか……

感想よろしくお願いします！！

## Episode・77（前書き）

投稿が遅れて申し訳ございませんでしたm（|）m

遅れた理由は後書きの方で……

人気投票募集中です！

沢山の応募お待ちしております！

## Episode・77

「ハンマーゲット！ 喰らいなさい！ ローラ！」

「甘いな瑞穂！」

「あーっ！ 何でボムヘイ当てんのよ！」

叫んでる瑞穂とローラに対し、簪とリリーは静かにプレイしていた。というより集中していて話す暇がないようだ。

（スマブラでこんなになってんだから、エアライドなんてやらしたら乱闘パーティーが開かれてたに違いない）

俊は四人が遊んでいるのを見てそう思った。

「あ……」

真っ先に負けたのはリリーでそれに続くように簪も脱落。残りは瑞穂とローラの二人となった。

「はい」

「サンキュー」

俊は簪からコントローラーを受け取り、二人が終わるまで待っていた。同様に、明音もリリーからコントローラーを受け取り待っていた。

結果、瑞穂が二位でローラが一位だった。キャラ選択画面に移り、瑞穂とローラはさっきと同じキャラ。俊はマリオ、明音はピカチュウを選択した。

すぐに対戦が始まり、俊は初心者明音を狙うのは可哀相だと思っただけで狙わず、瑞穂を狙った。

「ちよっと！ 何で私を狙うのよ!？」

「いや、別に良いじゃん」

「くそっ！ このっ！」

「皆強すぎ！」

闘いの末、俊がストックを二残して勝利を決めた。

「あんた強すぎんのよっ！」

「んなこと言われても……。これ主要キャラじゃないんだが」

「俊！ リベンジだ！ 主要キャラで掛かって来い！」

さっきの結果が二位だったローラが俊に挑戦状を叩き付けた。

「ローラ。あんた、絶対に後悔するわよ……」

瑞穂が溜息交じりに言つて簪にコントローラーを渡した。

「本当に良いのか？」

「当然だ。私も主要キャラで勝負するからな！」

簪はさっきと同じキャラを選択。明音がリリーにコントローラーを渡してる間に俊はトゥーンリンク、ローラはリンクを選択した。

「……同じじゃん！？」「……」

二人はそんなツツコみをされてから勝負は始まった。

「な、なんなのだ！？ このバカげた強さは！？」

「そんなにか？」

余裕な顔をしながら俊はローラに対応していた。

「そこっ！」

「よっと」

簪が後ろから俊を襲うが俊はすぐにRを押してスティックを左に倒して躲しフックショットでサムスを掴み横に投げ飛ばした。

「悪いな、簪」

トゥーンリンクの下突きによりサムスは一気に落下。簪のストックが一つ減った。

その調子で俊は次々と敵を倒した。結果、さっきと同じ、俊がストックを二残して勝利を決めた。

「やってられるか！」

ローラがコントローラーを叩き付けようとしたが俊に止められた。「それはマジでやめてくれ！ 壊す気か！？」

「うるさい！ 俊がスマブラという神ゲーをクソゲーにしたのが悪いんだ！」

「俺の所為ですかっ！」

「言いがかりにも程があるわね……」

俊とローラのやり取りを見て四人が呆然としていた。

「て、もうこんな時間か」

ローラの暴走を押さえている最中、壁掛け時計をちらっと見た俊はもう十二時を過ぎてることによろやく気づいた。

「昼飯時だし、ピザでも頼むか」

「私がお昼ご飯持ってきたじゃない。何ピザなんて頼むのよ？」

「お前らだって食べるんだからあれじゃ足りないだろ」

「た、確かに……」

「じゃあ頼むから、何か食いたいのとかないか？」

俊は五人に訊くが、全員俊に任せると言った。

それを聞いた俊は電話機を取り、ピザ屋に電話した。

「あ、デリバリーは結構です。取りに行きますから」

「え、何でよ？」

「だってその方が安いだろ」

「まあそうですけど……」

「あんまし金使いたくないんだよ。じゃあ取りに行ってくる。瑞穂、家のことは任せた」

そう言い残した俊はピザ屋に向かった。

俊が居なくなったことにより五人はそわそわし始めた。

「俊の部屋見に行かない？」

暫しの沈黙を破ったのは明音だった。明音が発案した後、四人は心の中で軽く跳び上がった。

「きよ、興味があります……」

「確かに、面白そうだな」

「どうせエロいものでも隠してるんでしょ」

「気になる……」

五人は立ち上がり俊の部屋へ。先陣を切った瑞穂が俊の部屋のドアを開けた。

「案外普通ですね……」

俊の部屋はこれといって目立った物はなく普通の部屋だった。

「どうせベッドの下にエロい本が……ない」

瑞穂がベッドの下に手をつ突っ込むが何もなかった。あるのは埃のみ。

「この中はなんだろう？」

簪が押し入れのドアを開けるとかなりの量のアニメのDVDやグッズがあった。

「凄い……ね」

「多分、私の所為……」

「簪は俊に何したのよ？」

「この奥にある本は一体……」

ローラは三十ページ弱はある本を見つけたので手に取った。

「なんだこ……れ……」

中身を見てローラは顔を真っ赤にした。

そこにはR-18な描写が描かれていたマンガだった。

ローラはそれを無言で破った。

「さて、こっちの方には何があるんだろう」

何事もなかったかのようにローラは押し入れの中の物色を再開した。

「トロフィーも中にありますね」

「結構取ってるな」

「関東はあっても全国はないんだね」

トロフィーにかかっているのは関東優勝とか新人県大会優勝しかなかった。

「関東・全国予選では本戦で毎回良い記録が出せなかったのよ」

「やけに詳しいな」

「そりゃあ、毎回応援に行ってたもの。もちろん地区大会から」

ピンポン。インターホンが鳴り響き、瑞穂がなんの躊躇いもなく出た。

「やあ、俊。久し——って、茂木……だっけ？」

インターホンの主は俊の悪友である田嶋弘樹だった。

「だっけって何よ、田嶋。で、何しに来たのよ？」

「いやあ、俊が家に戻ってるってメールが来たからさ。久々に一緒に遊ぼう」

「誰が来たの？」

「客か？」

簪とローラが俊の部屋から顔を出すとそれに続くようにリリーと明音も顔を出した。

「か、と……」

俊の家から五人の女子が。弘樹はあり得ない物を見たような目で五人を凝視していた。

「って、アイドルの暁明音さんじゃないですか！ え！？ 何で！？」

「今日はオフだから俊の家に遊びに来たの。知ってくれて嬉しいわ、田嶋くん……だっけ？」

「あ、はいっ！ あの！ 握手良いですか！？」

「良いわよ」

明音が右手を差し出すと弘樹はその手をがっしり掴み腕を数回上下に振った。

「いやっほおおおっ！！」

その後、弘樹は奇声を上げながら全力疾走でその場を去った。

「結局。あいつは何しに来たんだ？」

ローラは奇怪なものを見るような目で弘樹の背中を見てい。

「あ、俊。お帰り」

「ただいま。そいや瑞穂。帰りに弘樹が見たこともないような笑顔で右手を擦りながら全力で階段を降りるのを見たんだが、何か知らないか？」

「私を知るわけないじゃない」

「だよな。じゃあ昼飯にするか」

そう言くと俊は部屋に入った。

ピザの蓋を開け、二切れ皿に乗つけた後、それを持って襖を開け、

中に入った。

「「あつ……」」

簪と瑞穂の二人は何かを思い出したような声を出した。

「どうしたの？」

「いや、ちよつと……」

「そいや、忘れてたわ……」

二人は同時に立ち上がり俊の後について行くように襖に向かった。簪が開けようと襖に手を掛ける寸前、襖が開いた。

「どうしたんだ？」

「いや、あの……」

「二人にお線香上げるの忘れてたから、今から上げようと思ったのよ」

「ああ、それか。別に帰りで良いよ」

「お線香？　なら、私たちも上げなきゃいけないよね」

「だから帰りで良いんだけど。ま、いつか」

そう言うとは俊は襖を全開にした。さっきまで居た部屋——洋室とは打って変わって和室。その部屋にはタンスと仏壇が置かれていた。ローラ、リリー、明音の三人は仏壇に置かれた写真に目が行った。写真には俊の母親——櫻井泉が赤ん坊の俊を抱き抱え、その隣に俊の父親——櫻井仁が立っていた。二人は俊の頬に自分たちの頬で俊を挟むようにくっついていた。二人の満面の笑み。この写真は、櫻井家の最初で最後の家族写真だ。

「幸せそうだな」

「本当ですね」

「だね」

三人はその写真を見た後、線香を上げた。

「それにしても、俊のご両親ってかなり若いね」

「確か俊の両親は大学を出てすぐに結婚したはず」

「出来ちゃった結婚だった？」

「良く覚えてないけどそうだったみたいだぜ」

「若気の至りってやつですね」

「でも、それで俊の両親が残した金はかなりあるのだろう。一体あんな大金を何処で……？」

「それは良く知らないんだよな。一体両親の職業が何だったのなんてあんま憶えてないし」

「両親が居なくなつて寂しかったんじゃないの？」

「ああ。昔簪の家で——」

「よし！ 俊が寂しいだろうから、今日は泊まるか」

「暮らして、つて、はあっ！？」

ローラの発言に俊が驚いた。

「いやっ。それはまず——」

「私も泊まるう……かな」

「簪さんっ！？」

「な、なら、私も泊まります！」

「わ、私だつて！」

「私も泊まるうかな。明日は午後から仕事だから」

「あの、皆さん。俺の話聞いて——」

「夕食はどうする？」

「私の家から材料持つてこようか」

「メニューにもよりますよね」

「私、料理苦手なんだけど……」

「大丈夫。私たちが教えるから」

「まず、か……？」

（ダメだ……。聞いちゃいない……）

俊の意に反して女子たちの話は続き、もつとくにでもなれという思いで俊は自室に戻った。

「あ。パジャマはどうしよう？」

「私の貸そうか？」

「瑞穂のパジャマでは私と明音が着られないだろ。特に胸の辺りがきつそうだしな」

「なんですって！」

「多分私もきついかと思えます……」

「私も、かな……。瑞穂って背が低いから」

「悪かったわねっ！」

女子では話が盛り上がっているが一方俊は……。

「こ、こぶいちさんの同人誌が……」

床に散りばめられた同人誌の残骸。それを見た俊は『o r z』  
↑  
こんな格好で今にも泣きそうな顔をしていた。

## Episode・77（後書き）

というわけで、ようやく四巻の内容が終わりました

最後はかなり投げやりだった臭がハンパなくすみません

さて、遅れた言い訳を……

ゼルダにはまっていましたすみません

おかげで右肩がかなり痛いです

発売して四日

自分は一周目をクリアしてただいま二周目を進行中です

データをコピーするのを忘れ一周目のデータに二周目のデータが上書きされてかなり鬱です

ラスボス結構苦労したのに…… orz

ですが、二周目を終えた後、もう一度一周目をやるつもりです

一つの試練が終わり、あとは期末試験

これをクリアすれば自分は三学期は遊び放題です

次回からは五巻の内容です

感想よろしくお願いします！！

## Episode・78（前書き）

人気投票募集中!!

たくさんのお応募お待ちしております!!

## Episode・78

二学期が始まり九月三日。今日、織斑先生は一、二組の実戦訓練を教えているので俺たち四組は小川先生によるIS理論について勉強している。

一ヶ月近く聞かなかったあの間延びの口調もひどく懐かしく感じた。

現在は四時間目。普通の男子高校生なら腹を空かせ、大変苦痛な時間だ。

……腹減った。

午前の授業が終了し、俺は学食に向かうと自然といつもの面子が揃っていた。

「これであたしの二連勝ね。ほれほれ、何か奢んなさいよ」  
「ぐっ……」

食券を買い、列に並んでいると鳳の意気揚々とした声と一夏の口惜しそうな声が聞こえた。

「はいよ」

食券をおばちゃんに渡すとすぐに出てきた。相変わらず美味そうな塩ラーメンだ。バターが程よく溶けており上にはコーンがたっぷり乗っている。

「席取ってるぞ」

その美味そうな塩ラーメンを受け取り、皆に一言言ってからその

場を離れた。

ちようど一夏たちの隣のテーブル席が空いていたのでそこを狙った。

「お、俊。久しぶり」

席を陣取ると一夏に声を掛けられたのでそつちを向く。

「そんな久しぶりか？」

「一ヶ月近く会ってなかったんだから久しぶりに決まってるだろ」

「そいやそうだったな。一夏と篠ノ之以外は夏休み中に会ってたからそんな久しぶりに感じられなかったな。」

「そいやそうだったな。で、何で一夏はそんな悔しそうな声を出してたんだ？」

「うつ……。そ、それは……」

「あたしに負けたからよね。一夏」

一夏の代わりに鳳がドヤ顔で答えた。

「へえ……。鳳に、か」

「な、何よ。その顔は？」

「別に。何でもねえよ」

自分でも分かるほどのドヤ顔をした後ラーメンを啜った。この味は、クセになっちまうな。

「どうした俊。鈴となんかして喧嘩して」

一番早く来たのはローラだった。ローラはそのまま俺の隣に座ると小さくガッツポーズをした。

「喧嘩なんかしてねえよ。ただ、リベンジならいつでも受けて立つって言ったのさ」

「リベンジってあんたねえ。上等じゃない！ その鼻、絶対へし折ってやるわ！」

鳳はテーブルを強く叩き付けながら立ち上がり俺を指差す。

「そいや、お前らのなかで鳳とラウラ以外戦ったことなかったな」

「なら、今度やる？」

「時間があつたら頼むわ。鳳だけじゃ自分がどのくらい強いのか分

からないし」

「ちよつと！ あたしじゃ物足りないってわけ！？」

シャルロットと実践訓練の約束をすると何故か鳳が怒った。訳の分からんやつだな。

「物足りないって……。そんなんじゃないよ。ただ、色んな人と戦えば訓練になるってことだ。何て言えば良いかなあ……。ほら、同じ相手とずっとやってたら戦闘方法を覚えちまうから攻略法が分かるってことだ」

「そんな分かるほどやってないじゃない！」

鳳は今にも何か投げてきそうな勢이었다。

「私も、リベンジならいつでも受けてたつぞ。俊」

ラウラが威風堂々たる姿で言った。

そいや戦ったやつで唯一ラウラに負けたんだっけ。

「上等だ。今度は負けねえ」

取り敢えず専用機持ちの連中と訓練する約束をした俺はラーメンを啜った。

「やべつ。そろそろ時間だ」

一夏の声が聞こえたので『閃迅』の待機状態である腕時計で時間を確認。確かに、実習だったらもうそろそろ食い終わらないと間に合わない時間だった。

「じゃあな、俊」

一夏たちはその場を去った。

食い終わった後、用をたしにトイレへ。教室に戻る途中、姉貴を発見したので声を掛けた。

「何やってんだ？」

「あ、俊くん。ちょうど良かった」

「俺に何か用なのか？」

「ええ。明日の放課後、生徒会室に来てね」

「何で？」

「用件はそれだけだから。じゃーねー」

そう言つと姉貴はその場を去つた。

時間を確認すると結構ぎりぎりだったので全速力で教室に戻つた。

「やっぱり無駄に広いもんだ……」

昼食を終え、アリーナのロッカールームで俺はISスーツに着替えていた。

俺と俊専用になつてゐるロッカールームは、ただただ静かで落ち着かない。

着替え終わると、白式のコンソールを呼び出して調整を始めた。  
うーん……。やっぱり雪羅に割いてゐるエネルギーが多過ぎるな。  
これ、もうちょっと抑えられないもんだろうか？

そんなことを考えていると、突然目の前が真っ暗になつた。――  
比喩ではなく、マジで。

「！？」

「だーれだ？」

え？ え？ えっ？ だ、誰だ？

背中から聞こえた声は同級生よりも大人びてゐる。そのくせ、楽しさが滲み出ているような笑みを言葉に含んでいて、悪戯を楽しむ子供のようにも聞こえる。

目を塞いでゐる指はなんだかささらとしていて、しかも少し冷たい。それがひどく心地好くて、俺は数秒間ぼーっとしてしまった。  
「はい、時間切れ」

そう言つて解放してくれる手の持ち主を確認しようと、俺は振り向く。

「……誰？」

知らない女子だった。……いや、それだと答えようがないだろう。さっきのやり取りは。

「んふふ」

目の前の女子——あ、リボンの色が二年だ——は困惑する俺を楽しそうな笑顔で眺めつつ、何処から取り出したのか一つの扇子を口元へと持つていく。

改めて見てみると、目の前の二年生は不思議な人だった。

全体的に余裕を感じさせる態度。しかし嫌味ではなく、どこか人を落着けるような雰囲気がある。けれどそれとは逆に浮かべた笑みは悪戯っぽく、違う意味で俺を落着けなくさせる。

つまり、何かされるんじゃないかという、可笑しな不安。向こう側が見えない不透明性。神秘的——と言うと、褒めすぎだろうか？

「あの、あなたは——」

「あつ」

俺の後ろに視線をずらす二年生。何だろうと思って俺も後ろに視線をやると——

「引っ掛かったなあ」

むにと頬を扇子で押される。

「……………」

えーと。

「それじゃあね。キミも急がないと、織斑先生に怒られるよ」

「え？」

嫌な予感がして壁の時計を見る。……既に授業開始から三分が過ぎていた。

「だあああつ！？ や、やばい！ まずい！」

もう一度元凶の人物を見ると、もうそこには誰も居なかった。

「……遅刻の言い訳は以上か？」

ヘルズ・デューチャー  
地獄の教師、織斑千冬。そこには慈悲の心など一片もない。

「いや、あの……あのですね？ だから、見知らぬ女生徒が――」

「ではその女子の名前を言ってみろ」

「だ、だから！ 初対面ですってば！」

「ほう。お前は初対面の女子との会話を優先して、授業に遅れたのか」

「ち、違っ――」

しかし、そこに俺の言葉が入り込む余地はない。

「デユノア、ラピッド・スイッチの実演をしる。的はその馬鹿者で構わん」

いや、俺が構うんですが！

「……………」

一抹の期待を胸にシャルへと視線を送る。

にこつ。極上の笑みが返ってきた。

そうだな、シャル！ そんな酷いことはしないよな！

「それじゃあ織斑先生、実演を始めます」

「おう」

シャルの笑みは慈愛の女神のそれではなく、無慈悲な天使のそれだった。

ふわりと空中へと進み出るシャル。その手に光の粒子が集まり、銃器を構成していく。

「あ、あの、シャル……ロット、さん？」

「何かな、織斑くん？」

額に血管マークが見える。な、何故！？ 何故にお怒りなのか、シャルさんは！

「始めるよ、リヴアイヴ」

「ま、待つ——ぎゃああああ！」  
バラバララッ！！

俺の言葉は銃弾に掻き消された。

## Episode・78（後書き）

そいや、四巻の内容を書いててふと気づいた

リリーのイメージキャラだが、

CLANNADの藤林涼よりも古河渚の方が合ってる気がするし

明音も、

アイマスの三浦あずさよりもそに子の方が良いかも……

まあそれは読者にお任せします

そいや、俊のイメージキャラですが、

生徒会の杉崎鍵だと自分は考えております

そんな雑談はさておき……

感想よろしくお願いします!!

## Episode・79（前書き）

人気投票募集中!!

たくさんのお応募お待ちしております!!

## Episode・79

夕飯時。簪と食堂に行くと、一夏が死にそうな顔で飯を食べているのを発見した。

「どうしたのかな？」

「さあ？」

料理が乗ったプレートを手についた俺らは一夏が居るテーブルに座った。以前の簪なら抵抗があったみたいだが今ではそうでもないらしい。

「どうしたんだ？ 今にも死にそうな顔をして」

「……………」

返事することなく飯を食い続ける。

「何があつたの？」

簪は近くに居たシャルロットに訊いた。

「初対面の女子との会話を優先して、授業に遅れたから織斑先生に怒られたんだって」

「それでそこまでなるか？」

「シ……が……い……」

一夏が突然呟き始める。本当に大丈夫か？ 精神科にでも連れてった方が良さのではと少し心配した。

耳を近付け声を良く聞いた。

「シャルが怖い……シャルが怖い……シャルが怖い……」

耳を離し、シャルロットに顔を向けた。

「なんかお前が恐いつてずっと呟いてるぞ、シャルロット」  
「な、何のことかな」

動揺しているということは、絶対に何かやったんだな。

「じゃ、じゃあ、僕そろそろ戻るね！」

シャルロットはすぐに食器を片付け、その場を後にした。  
「どうしよう？」

「部屋まで送るしかないだろ」  
もう箸で食い物を掴まずにただ往復してるだけだった。今度良いと評判の精神科を紹介してやろう。

翌日。SHRと一限の半分を使つての全校集会が行われた。  
内容は今月中旬頃にある学園祭についてらしい。  
さすが（もと）女子校。話を静かに聞くとということが出来ないらしい。

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」  
虚さんが静かに告げると、騒ぎ声が消えてった。

「やあ皆。おはよう」

姉貴が壇上で挨拶をしたあと誰かを見ていた。

「ふふっ」

すると突然、何かを見て笑みを浮かべた。目線の先には動揺していた一夏が居た。何かあったのか？

「さてさて、今年は色々と立て込んでちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識楯無。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」  
周りから熱っぽい溜息が。同性から愛されてるみたいだな。なんと不幸な……。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは」

扇子を取り出し横へとスライドさせると空間投影ディスプレイが浮かび上がった。

「名付けて、『各部対抗織斑一夏・櫻井俊争奪戦』！」

ディスプレイに俺と一夏の写真がデカデカと映し出された。

放課後。文化祭の出し物を決めるためにクラスの皆にアイデアを出してもらった。

「えっと……」

皆が出したアイデアを黒板に書いていた俺はそれを見直した。

出たアイデアは『櫻井俊のホストクラブ』、『櫻井俊とツイスター』、『櫻井俊とポツキー遊び』、『櫻井俊と王様ゲーム』と、全部俺が関わっていた。これ……誰得なんだ？

「却下」

『『ええええっ！？』『』『』

大ブーイングだった。

「当たり前だろ。誰が得するんだよ？」

「私は得するわね！」

「他のクラスから色々言われてるのよ」

「助けると思って！」

皆の言い分に対し、俺は溜息しか返せなかった。

因みに小川先生は居ない。理由は、眠いからだそうだ。あんなのが良く教師になれたな。

「無難にお化け屋敷にでもしないか？」

「えー。そんなのつまんなーい」

「それだったら櫻井くんのホストクラブの方が面白いじゃない」

「またもやブーイング。これだからクラス代表は嫌なんだ。」

「お化け屋敷か……」

ローラが考える人みたいなおポーズで何かを考えていた。

「皆。ちよつと聞いてくれ」

何か思い付いたらしいローラは、手招きをして皆を集めた。

「俊。お前は来るな」

俺も参加しようと思っただけが拒否された。マジか……。ついにハブられた。

「それ良いわね！」

「ローラ。貴女天才だわ！」

「き、決まったのか……？」

「『決まった！』『』』」

「そうか。じゃあ小川先生に報告しに行ってくる。皆帰っていいぞ」

俺は教室を出て職員室に向かった。

『ぶつ……ははは！ ボーデヴィツヒか！ それは意外だ。しかし……くつ、ははっ！ あいつがコスプレ喫茶？ よくまあ、そこまで変わったものだ』

職員室のドアを開けようと手を掛けた寸前、中から織斑先生の笑い声が聞こえた。

「失礼します」

何故織斑先生が笑っているのか興味があるが、さっさと小川先生に報告して生徒会室に行こう。

「小川先生。学園祭の出し物の報告に来ました」

「お疲れ……」

話し掛けると、眠そうな目を擦りながら起き上がった。

「それで、何に決まったのー？」

「無難なところで、お化け屋敷になりました」

「ホントに無難ねー。皆のことだから『櫻井俊のホストクラブ』とか、『櫻井俊とツイスター』とか、『櫻井俊とポッキー遊び』とか、『櫻井俊と王様ゲーム』とかになるんじゃないかと思ってたけど」

「全部却下しました」

「つまらない男ねー」

「当たり前じゃないですか。誰が得するんですか、あんなもん」

「私は得するかなー。あ、食べるー？」

小川先生は白い恋人を二つほど俺に渡しながらそんなことを言っ

ていた。あなたもあいつらと同じなんですね。

「あ、この申請書に必要な機材とか書いといてねー。一週間前には出すようにねー」

「めんどくさいですね」

「私だってめんどくさいわよー」

「教師がぶっちゃけないでください」

小川先生から紙を受け取りながらツッコむ。

「失礼しました」

俺は職員室から出て、そのまま生徒会に向かった。

## Episode・79（後書き）

スカイウォードソードの辛口モードがかなり辛い……

まさかのハートが出ないとかどんな縛りだよ……

感想よろしくお願いします!!

## Episode・80（前書き）

人気投票募集中!!

一人五票まで投票可能です

たくさんのお応募お待ちしております!!

生徒会室に向かう途中、簪と会った。

「今から整備か？」

簪はこくと頷いた。

「そうか。早く完成すると良いな」

「うん。で、俊は？」

「姉貴に呼ばれて生徒会室に向かうところだ」

「そう、なんだ……」

簪は俯き手をもじもじとさせていた。

「一緒に行くか？」

「う、うん……行く」

駄目元で訊たらOKをもらい、俺は少し驚いた。

先に進むと簪が早足で俺の横に付いていたので、俺は少しペースを遅くして簪に合わせた。

廊下で倒れている生徒が居たり、窓ガラスが割れていたりして気になったが無視しよう。

生徒会室に向かう間、簪との会話がなかったが別に俺は嫌じゃなかった。小さい頃一緒に住んでいたからだろう。別に会話しなくてもなにか話題を出さなくちゃという気分にならなかったし、むしろその方が何故か落ち着いていた。

「どりゃああああっ！」

そんな静寂を破るような叫び声が真上から聞こえた。

まさかの天井を壊して出てきた女生徒。のリボンの色が二年だった。

なんなくそれを避けた俺らは着地後の先輩を凝視した。何かの稽古か？

「大人しく更識簪を渡しなさい！」

そう言う先輩は何処から取り出したのか分からないが、トンフ

アーを装備して簪に襲い掛かる。

「ごめんなさい」

一言言ってから先輩の攻撃を躲し、掌低打ちで顎を攻撃をして脳を揺らした。脳震盪になった先輩が倒れそうになったので支え、廊下のすみに寝かせた。

何でこの先輩は簪を狙ったんだ？

疑問に思っていると、今度は近くのドアが思いつ切り蹴り破られる音がした。

「もらったあああつ！」

こん棒を装備している三年生の先輩が簪に奇襲してきたが、俺は慌てず対処する。

さっきの先輩が使っていたトンファーを借りて初撃を受け流す。そのまま懐に入り腹を肘鉄。

女子相手に容赦ないと思うが、やらなきゃこっちが危ない。

もう一人の先輩が簪に襲い掛かる。何で簪ばかり……。だいた

い読めてきたが、そんなことは絶対にさせない。

「ごめんなさい」  
すぐに相手の腕を掴み、背負い投げをした。その後頸動脈を軽く叩いた。

「大丈夫か？」

「う、うん。私は、平気」

「それなら良かった。じゃあ早く行こうぜ」

おそらくこの先輩方は、簪を人質に姉貴を生徒会長の座から降ろす気だったんだろう。

理由としては今回の学園祭の景品である俺と一夏を手に入れるためだろう。自身が生徒会長となり、景品をキャンセル。そして自分の部活に入部させるという作戦だったに違いない。

ま、簪を人質にとられたぐらいで心が揺らぐ姉貴じゃないと思うけどな。

簪はこう見えても日本の代表候補生で専用機持ち。ある程度の護

身術だつて出来るからな。

一応、次の襲撃が来ないか気を張っていたが、それから何事もなく生徒会室前に到着。

ドアをノックする寸前、簪は俺の制服の袖を掴んできた。やっぱりまだ恐いのだろうか。

でもこれは簪が決めたことだ。以前なら行かないと言っていたが今回は行くといった。これは小さいように見えて大きな一歩に違いない。

簪の目を見た後、ドアをノックする。

「どうぞ」

姉貴の声が返ってきたのでドアを開くと、姉貴と虚さんに本音。それに一夏が居て――

「つて、一夏！？」

何でこいつが生徒会室に居るんだ？

「何で俊が此処に！？」

一夏も俺と同じことを思っていたらしい。思いつ切り立ち上がり俺を指差しながら叫んだ。

「いや。俺は姉――会長に呼ばれたから来たんだが。一夏は」

「俺も先輩に呼ばれたんだが……」

何を企んでいるんだ、姉貴。

「俊くん。私のことは会長じゃなくて、いつもみたいに『お姉ちゃん』って呼んで良いのよ」

「そう呼んだことなんて一度もねえよっ！」

会った途端からかいやがって。誤解されたらどうするんだよ。

「もしかして、姉弟？ あれ？ でも名字が違うよな……」

「ちげえよ。はあ……こう誤解されるから人前では会長って呼んでるんじゃないか」

「人前じゃなかったら『お姉ちゃん』と呼んでいるのか……？」

やべえ……。一夏がドン引きしてる。否定しないと。

「ち、違う！ 普段から会長のことは『姉貴』と呼んでるぞ」

「それも誤解されると思うぞ」

「私も、そう思う……」

俺の後ろに隠れてた簪がひょこつと顔を出して言った。お前も思うのか……。

「あら、簪ちゃんも来たの？」

「ああ。俺が誘ったけど、別に問題ないよな」

「ええ、もちろん。むしろ大歓迎よ」

俺と簪は適当にイスに腰掛ける。

「で。本当はどういう関係なんだ？」

「まあ、幼馴染みたいなものだ。親父同士が仲良くてよく更識家——簪と会長の実家に遊びに行ってたからな。その時に本音と虚さとも知り合ったから、この二人とも幼馴染みだ」

「じゃあ、何で俊は先輩のことを姉貴って呼んでるんだ？ 幼馴染みなら、呼ぶとしても下の名前だろ？」

「まあ……癖で……」

適当に答える。これ以上追求されたくないな……。

「さて、俊くんが来たから話すわね」

それを察してくれたのか知らないが姉貴が話を変えてくれた。ナイスフォロー！

「二人が部活動に入らないことで色々と苦情が寄せられていてね。生徒会は二人をどこかに入部させないとまずいことになったちゃったのよ」

「学園祭の投票決戦ですか……」

「本人の許可なしでだけどな……」

女子は俺たち男子には部活に入りたいのだろうが、俺たちからしたらいい迷惑だ。女子ばかりの部活なんだから運動部だったら着替える場所もシャワー室も無いんだぞ。

「それと、二人には一つ協力してほしいの」

「協力？ 何すればいいんだよ？」

「二人には学園祭では模擬戦をやってほしいのよ」

「模擬戦？」

「せっかく男の子が二人も居るんだから模擬戦やったって良いじゃない」

ようは気まぐれか。

「というわけで一夏くん。私が特別に鍛えてあげましょう。ISも、生身もね」

「どういうわけなんですか。遠慮します。というか俊の方はいんですか？」

「だって一夏くんの方が断然弱いし。今の状態で俊くんと戦ったら一分かからずに負けるほど弱いよ」

そこまで俺と一夏に差なんてあるのか、とツツコむ前に一夏が口を開いた。

「じゃあ勝負しましょう。俺が負けたら従います」

「うん、いいよ」

畏にかかりやがったな……一夏。どうなっても知らねえぞ。

「えーと……これは？」

「うん、袴だよ」

「知ってますよ、それくらいー！」

道場で白の胴着に紺の袴に着替えた一夏と楯無。俺はそれを観戦していた。

簪は、黛先輩を待たせちゃ悪いとのことですのですぐに整備室に向かった。本音と虚さんは仕事があるとのこと。つまり、この場には三人しか居ない。

「さて、勝負の方法だけど、私を床に倒せたらキミの勝ち」  
「え？」

「逆にキミが続行不可能になったら私の勝ちね。それで良いかな？」  
「え、いや、ちょっと、それは……」

「一夏、会長が不利だと思わないほうがいいぞ。どうせお前が負けるから」

「……………」

俺の安い挑発に乗った一夏は構えを取った。

「行きますよ」

「いつでも」

基本的に忠実なすり足で移動して姉貴の腕を取るが、一夏は一瞬にして畳に投げ落とされた。

息を吐いた瞬間、姉貴の指が一夏の頸動脈をなぞるように触れていた。

「う……………」

「まずは一回」

その気になれば一夏を殺傷することも可能だということを見せた姉貴は一夏から離れた。

これで姉貴がかなり強いと悟ったに違いない。

今度はむやみやたらと手を出すわけにもいかなかったのか、状況は膠着してしまった。

「……………」

「ん？ 来ないの？ それじゃあ私から——行くよ」

「しまっ——」

急接近した姉貴は一夏の肘、肩、腹を軽く打たく。すると、一夏の間接が反射的に強張り、両肺に双掌打が叩き込まれた。

「がっ、はっ……………！」

「足元ご注意」

一夏は背中から思いつ切り畳に倒された。

しかも、投げ飛ばす際に指で数カ所間接を突いたので多分麻痺っ

てるに違いない。

「これで二回。まだやる？」

襟元一つ乱さず、姉貴は優しい笑みを一夏に向けた。

「まだまだ、やれますよ……！」

「ん。頑張る男の子って素敵よ」

「それはどうも……」

足元がふらついている一夏だがなんとか立ち上がり深く、二度呼吸をした。

やっと本気になったか。

それは一夏の目を見ればすぐに分かることだった。

「む。本気だね」

「……………」

二人は必殺を狙った細く鋭い緊張感が張り詰めた。

「！」

今までとは違う早さで攻めた一夏。それに対し姉貴は半歩下がった。その足が着地する前に一夏は姉貴の腕を取るが、姉貴は一夏を畳へと叩き込んだ。

「がはっ！」

またもむせ返ったが、一夏は姉貴の足首を掴んだ。

「あら」

「今度こそ、もらったあっ！」

足首を力任せに真上へと投げ、空中でひっくり返った姉貴の胴を取った。

「甘い」

姉貴は右腕を畳に突き出し、それを軸にくるりと回って一夏の捕縛を振り切った。

「なあっ！？」

「攻め方は良かったんだけどね」

カポエラキックを喰らった一夏は強引に腕と脚で着地し、すぐさま飛び出した。

「でやあああつ!!」

一夏はさらに加速し、殴り掛かるような勢いで姉貴に掴み掛かった一夏は――

「あつ……」

「きゃん」

姉貴の胴着を思いつ切り開いた。

馬鹿野郎! Tシャツぐらい着とけよ!

そんな姉貴の丰满な胸を包み込むブラを見てしまった俺はすぐに目を逸らした。

「一夏くんのえっち」

「なあつ!?!」

一夏は空中コンボを体験した。可哀相に。

「おねーさんの下着姿は高いわよ」

「て、ええっ!?!」

空中コンボを終えた姉貴。今度は俺に襲い掛かってきた。やられる前にスライディングの要領で、姉貴の足の間を潜って回避した。

「何で俺まで!?!」

「私の下着姿をみたからよ」

「見てねえよ!」

立ち上がるといきなり攻撃をしかけてきた。バックステップで姉貴の蹴りを避けた後、しゃがんで姉貴のパンチを避けた。

「私の何の装飾もない純白のブラを見たわよね?」

「違うだろ。高級そうなシルクのレース下着だったろ。というか、見られたくなかったんならTシャツぐらい着ろよ!」

「やっぱり見たのね」

「し、しまった!」

「もう遅いわよ」

やだ。一夏のように空中コンボなんて味わいたくない!

姉貴の連打が始まった。一撃でも喰らえばさっきのようになるだ

る。俺は姉貴の連打を必死に手で受け流す。

「あら。ずいぶん腕を上げたわね」

「それはどうもっ！」

連打が治まったかと思いきや右から蹴りが来たので片手で姉貴の左足を掴んだ。

姉貴は残っている右足を軸に、反時計回りに回った。その際、姉貴の左足が離れ、そのまま左の踵が俺の左わき腹に直撃した。

「でも、まだ甘いわね」

「はい……。そうですね……」

俺はその場に倒れ、左わき腹を押さえながら姉貴と会話をした。手加減してくれたのだろうか、すぐに立ち上がることが出来た。けど、かなり左わき腹が痛い……。

「一夏はどうする？ 保健室に運ぶか？」

「そうしましょうか。じゃあ、運んで」

「容赦ないっすね……」

そう言いながらも、伸びている一夏を背負い保健室まで運んだ。保健室までの間、女子が俺を見るなりキヤーッと叫んでいたが、それは無視して姉貴について行った。

## Episode・80（後書き）

というわけで、今期末テスト二日目です  
今日合わせてまだ三日もあります  
全九科目あってあと六科目です

正直だるい……

感想よろしくお願いします!!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0133v/>

---

IS もう一人の適格者

2011年12月7日03時10分発行